カ神明ノ感アツテ、心中ノ所願カナフベキヤ、ヨクヨクワキマヘ侍ルベシト、神道ノ人ノ語ラレ侍リキ、〇中略マタ日神月神ヲ祭ルニ佛法ヲ用ル事、神明ヲケガシ奉リ、アナドリ踈ニスル事ナリ、神事ノ前ニハ佛法ノ詞サヘ忌事ナリ、延喜式齋宮ノ忌詞ニアリ、ヨクヨク思ヒハンベルベシト語ラレキ、是儒ノ沙汰、マタ唯一ノ神道ノ上ノ事ナリ、兩部習合ノ上ニハ、僧ヲ請ジ讀經スルモマタ理ニカナフベキモノナリ、其例數多アリ、引ニ不及、今神者儒者ノ説ヲ聞シマヽニ書シルシ侍リ、日月ヲ待ント欲スル者、能々理ヲ知キハメテ行ベシ、道理ニ當ラザル時ナンゾ福ヲ得ンヤ、猶日月待ノ義式、幷ニ呪文ナド書シ物ヲ見侍ドモ、此ニ略シテ大概ヲ記ス、用ユル者尋見、マタ先達ニ問聞ベキモノ也、

〔神道名目類聚抄五祭祀〕日待、〔日天拜ト云〕　日待ハ、前夜ヨリ潔齋シ、明旦ノ日出ヲ待テ拜ス、〔月天拜ト云〕月待ハ、早朝ヨリ潔齋シテ、月ノ出ルヲ待テ拜ス、故ニ此名アリ、拜スル法別ニ習アリ、

〔桃源遺事〕月待日待は、輕きものゝわきて仕なしき事也、殊更世俗の月待日待といふは、盲女座頭をよび、遊興を催し、あるひは博奕なを仕るよし、非禮至極に思召候に付、月なち日なち無用に致すべし、強て念じ度存候はゞ外に念じやう有べき事と被仰候、

〔廣益俗説辨四神祇〕日待月待庚申待の説

俗間に僧徒巫覡をして、日待月待庚申待をなすもの有、巫覡云、神道にも日待あり、天照大神をいふ、庚申は猿田彦大神のつかさどれる日なり、なつりてのるといひ、月待は素戔烏尊を祈るといふ、庚申は猿田彦大神のつかさどれる日なり、なつりて夜ふさゞれば、福祿を得ると云、

今按るに各非なり

〔百物語上〕日待の夜、色々の興ありてのち、火なはしをはじめて、ひの字をかしらにつけて、ひたものいひなはしけるが、其座の中に成あがりたる田夫一人ありけるに、火なはしといふこと、なにかとがてんせず、されど共これほどのことをさらぬかと人に思はれむも口をしくまじりぬ、たび〳〵つまりけるが、ある人ひよどりといふ、次にひばりといふ、彼人鳥の名と心得て、ふくろうといはれしに、座中ぞつとわらひければ、なつくすみになりていふやうは、おの〳〵はみな鳥の名を出して、われらたま〳〵いひしをかくわらふよといひければ、なほおかしくて笑ひあへり、

〔町人嚢四〕或人のいへるは、日待月待をする事町人に多し、畢竟心を誠にせんとの事也、家内を清め、食事を改め、衣服を改め、心を改めて神明を祭り奉るもの也、庶人なをの身として、神明を家内にて祭るといへば、畏れ至極なる故に、日月によそへ奉りて拜み奉る也、神明は我國の至尊なれば、町人百姓等の祭るといふ事は、非禮なる道理成ゆゑ、神明を祭るといはずして、月待日待といふもの也、日月はいやしき不淨にもやどり給ふことわり有故に、月待日待といひて、神祭るとはいはざる也、日月は天の神明にて、神明は地の日月なれば、いづれも同じ道理なれ共、日月といふと、神明といふとは、今日人心のうへにおいて、少差別あり、天をば天子ならでは祭給ふ事なけれ共、天道に祈り、天を拜む事なをは庶人も憚りなきものなれば、祭ると拜むとは別也、〇中略何れにしても、本心の誠をたて、惡心を降伏し、もろ〳〵の災禍を祓ひ清めんとの事なれば、誠をおしたて、神明日月をば拜むべしと也、〇中略又いへるは、月待日待に、大酒小歌三味線にて遊びて夜を明す人あり、御月様御日様をおのれが大鼓もちにするものかと大笑ひせられ侍りぬ、

〔我おもしろ上〕廿六夜の月の出を見ると見ざるとの二首

柿のたねの形にをがまれ玉ひけりあなげもつかず八ッしぶの月

客よつてねむいめをして月も見ずこや三損のむだといふらむ

〔改正月令博物筌正月〕日待月待　廿三夜、廿六夜、毎月此事をなす人も有と、別して此月祭りをする事なり〇中略江戸にては廿三日、廿六日、高輪鐵炮洲にて、諸人群集して月を拜す、是俗人は是

非なし、君子是に不習、

〔紫の一本上〕正月廿六日、七月廿六日の夜、月の曙方に出させ給ふ時、海中より龍燈あがるを、この御門〇四安前の臺にて拜んとて、右の夜は貴賤男女群り集て念佛を申、題目をとなへ、經を讀みおもひおもひに夜をあかす、老婆かゝの目のわるさが、月の出る時ねむき目をすり〳〵見るゆへ、光りちらめき眼花のとぶも、あれ龍燈こそあがれとてかしらをあげ手を合せ、なも〳〵と夜をあかす、

〔東都歲事記一春上〕正月廿六日、昔は此夜田安の臺鐵炮洲高輪等に諸人群集して月の出を拜するよし、天和以來享保頃迄の書に記せり、今は七月のみなり、

〔東都歲事記三秋〕七月廿六日、廿六夜待（高きに登り、又は海川の邊酒樓等に於て月の出を待つ、左に記せる地は、分て群集する事夥しく、皆より眼へり、）芝高輪品川（此兩所を今夜盛親の第一とす、江府の貴賤朝日より約し置て、品川高輪の海亭に宴を儲け、歌舞吹彈の業を催すするが故、都下の歌妓幇間女伶の屬群をなしてこの地に集ふ、或は船をうかべて飲宴するも勘からず、して、弦歌水陸に喧し、）築地海手、深川洲崎、湯島天滿宮境内、飯田町九段坂、日暮里諏訪社邊、目白不動尊境内、（西南に向て月を看るに便りあしければ、此邊の群ば集へり、）

天和二年編輯の紫のひともと田安御門外をいへる件に、正月七月の廿六日の曉此所にて月の出を拜しけるよしいへり、今は七月のみにして正月廿六夜は寒氣にたへざるが故拜するものもなし、信心にあらざる事思ふべし、

〔毛吹草三付合〕筆　月日代待

〔日次紀事一正月〕每月每神社會日、其身有故障、則倩山伏行人令詣其社、是謂代參、或日待、月待、庚申待之類、亦稱代待、故到其時、則代參代待者、高聲呼街衢、則入人家、而請米錢、

〔人倫訓蒙圖彙七〕庚申代待　庚申は日讀の名によつて名づく、實は青面金剛と申奉る、むかし攝州天王寺にはじめて天降給ふ、其緣起今にあり、此ゆゑに他所に庚申の尊體を安置する事ならず、

〔三養雜記四〕月待日待代待

辨才天を己巳に祭を巳待といひ、鷲大明神に十一月酉日にまうづるを酉待といひ、或は月待日待庚申待廿六夜待などの待は俟の義にあらず、まちはまつりの約語にして、祭祀の義なり、安齋漫筆に、月待日待の待は祭なり、ツリの反チとなるにてあきらかなり、子待は子祭、巳待は巳祭なりといへり、さて淨瑠璃節の文句に、月まち日まち日まちの例にて、代祭といふことにて、代參代垢離などの意なり、むかしは今の代神樂のごとく、町々を勸進に來しなり、されば二見眞砂といふ伊勢音頭のうたひものゝ中に、代待といふ音頭あり、その文句に、

町々をすゝめて通る代まちは、おいそがしさの身にかはる、先三日月の代まちは、弓鎌のなり鉈屑、ゑびすのまつる鉤に、かけ奉る立願は、おの〳〵士農工商の、末繁昌のきねんする、

とあるにてもおもふべし、紫一本にも、山伏は錫杖ふつて、代僧代參とよべばなど見え、人倫訓蒙圖彙にも、庚申代待あり、いづれも代まちは、祈念する人に代て祭よしの稱なり、代神樂といふものも、もと右にいへる代待の類にて、神樂を奏すべき人にかはりて奏するよしがもとなり、獅子舞ハ田樂などのこゝろにや、されば今も一萬度の祓をばかならずもつならひなり、大神樂とかくはあたらず、代字を用ゆべし、

〔俳諧歲時記十一月雜の町詣酉日　鷄（トリ）大明神の社は、武州葛飾郡花又村にあり、江戸より三里（トリ）毎年十一月酉の日市たつ、酉の日三ツあれば、三日ともに市なり、上の酉を專らとす、江戸近在より諸人群集して甚にぎはへり、是當社神事の遺意か、土産に芋がしらを賣るなり、參詣の人必これを買ふて家に歸る、

〔我おもしろ上〕霜月酉の日の聟入を賀して

よい聟をとりの町。中御最員におや子いもせのともにひやくまで

〔嬉遊笑覽七祭會〕日待、〇中略安齋漫筆に、月待日待の待は祭なり、つりの反ちとなるにてあきらかなり、〇中略鷲大明神に十一月酉日に詣るを、酉の。待と云ふも、同例にて酉の祭なり、

〔葦の假庵〕鳥の町。

十一月酉の日には、鳥の町とて、鷲大明神の社にまうづることゝなれり、そは武運を守り給ふ御社也とて、つきて武士の參詣いと多かり、そも〳〵其社の御神は、天穗日命其御子天鳥舟命を祭れり、天穗日命は土師連の遠つ祖也、土師を後世略してハジといへり、波之を和之とよみ誤りて鷲とし、天鳥船命の鳥に附會して、鳥の町といへるなるべし、さて鷲は其田鳥にあらず、食用にあらず、其羽矢羽の最上なる故に、武門の守りとといひ出したるなるべし、

〔東都歲事記四冬〕十一月酉の日、酉のまち（トリ）の祭、又酉の市ともいふ、二の酉三の酉ともに參詣あり、兩所ともに開運の守護神なりといふ、

葛西花又村鷲大明神社別當正覺院、世俗大とりといふ、參詣のもの鷄を納む、祭り終りて淺草寺觀世音の堂前に放つ、境内にて竹把粟餅米麩を售ふ、江戸より三里あり、

下谷田圃鷲大明神社別當長國寺、世俗しん鳥といふ、今日開帳あり、近來參詣群集する事夥し、當酉と同體の鷲大明神あり、

〔江戸名所圖會十七〕正一位鷲大明神社　花亦村にあり

當社に毎歲十一月酉の日祭あり、世に酉のまちと云、まちは祭の略語なり、此日近鄉の農民家雞を奉納す、翌日納る所の家雞を、ことゞく淺草寺觀音の堂前に放つを舊例とす、

〔鎌屑譚〕佛說辨才天經、凡有三部、其說有少異、といふ若欲供養此神者、白月一日より十五日に至るべし、若白月をもてせざる人は、毎月巳亥の日を用ふべしといへり、按に四月初の巳の日、天子御園祭を行はせ給ひ、十月上の亥の日、家の兒の節會を行ひ給へり、されば巳亥の日を用ふるも、亦

これに據れる成るべし、

〔三養雜記四〕月待日待代待

辨才天を己巳に祭を巳待といひ、〇略下

〔東都歲事記一春〕正月己巳待年中辨天參　下谷忍が岡別當生地院、今夜本堂籠人群をなす、　增上寺山内芙蓉洲　本所一ツ目總錄持　深川永代寺　同冬木庭中　洲崎吉祥寺　本所石原辨天小路德水辨天

淺草寺内多福辨天寶藏院老女辨天　淺草池の妙音寺開帳　下谷龍泉寺町月潮寺開帳

牛込おたん南藏院　三田寺町佛乘院旭辨天開帳　橋場福壽院大般若　小石川傳通院寺中昌林院

〔俳諧歲時記正月〕初卯　攝州住吉へ初卯の日詣ることなり、今日社内に於て、參詣の人に神符を授く、これを卯の札といふ、江戸にても、此日本所の妙義へ參詣す、今日受る所の紙符を竹串に插み、諸人これを頭髮につらぬきて家に歸る、

〔東都歲事記一春〕正月卯日毎月龜戸妙義祭天滿宮の境内にあり、毎月卯の日を緣日とす、正月は初卯詣と號し參詣多く、南は兩國より蔀下水通、北は淺草大川橋より柳嶋の大手通りに滿つ、又二の卯三の卯も是に同じ、詣人神符を受て髻に挾みかへる、餅或は土を以て團子とし、五彩に色どり、大なる柳につけ、蘭玉と號け售ふ、又天保二卯年より卯杖卯槌を鬻く、

初卯

初午

〔世諺問答〕二月

問て云

此月の馬。の日。いなりにまゐるは、何のいはれにか侍らん、

答弘法大師東寺の門前にて、稻おひたる老翁に、二月の午の日あひ給ひて、則東寺の鎭守に勸請申されたりしかば、此寺はんぢやうせしより、此日をもて緣日とや申べからむ、

〔毛吹草五卷〕初午。

初午の馬子はいなりの社人哉

作者不知

〔年中重寶記 一〕二月の事

初午日稻荷まつり、初午日に稻荷に參詣する事は、元正帝の御宇に、當社影向し給ふとき、二月初の午日なるゆゑ、この日諸人參詣す、

〔永代重寶記 四〕二月初午（いなり まねり）

〔滑稽雜談 三 二月〕初午詣（上ノ巳午）　和俗二月初午日を以て祭る事諸國に侍る也、帝都に於て稻荷神社を以て第一とす、今世一日前の巳の日を以祈れる、是巳と身と通ず、身の福を得といへり、〇中略當世殊に農工の人參詣して、穀果の種を求めて是を種殖の瑞となせり、いにしへは此山の土を以てかへり、工人の用になしへて是をたふとむ事侍りしや、此餘風によりて當代土を以て玩器の類、或は人形鳥獸の類を造りて此會に賣れり、俗につぼ〳〵てんほなといひて、參詣の男女是を求む、是土を取て瑞とする證也、一說、此五座の內に土祖神なします故なりといへり、〇中略或曰、むかしほ此日詣る人、杉の葉を手ごとに折て家にかへりしと也、今も社家より守に杉葉をそへて出す也、由緣可尋、

〔續江戶砂子 二月〕初午の日、諸所の稻荷の社、或は屋敷町屋の鎭守の宮に、五采の幟をたて、奉幣し神樂を奏す、とりわけ江府は稻荷の社多き所にて、參詣群集の人涌がごとし、神田紺屋町邊の宮造りは、宮鳥井を兼日より貯へ、午前とて年中第一の產とす、初午の十日計前より宮鳥井をひさぐ事市をなせり、

〔一話一言 四十三〕新吉原九郎助稻荷奉納一卷

翅中　初午や紋に染ても薄もみぢ
湖泉　紫やはつ午山の鎰わらび
湖連　見よけふのむかし乙女が花衣

何江　はつ午に嫁も姑もたつた河
十町　初午は亭主の好に赤の飯
少長　はつ午や先菖蒲の緣むすび
三升　初午や疑ながらいわし雲
納子　はつ午や錢に糞する鷄の聲
路考　初午や草にも寶珠蕗の薹
仙魚　ささらぎや行基菩薩の稻荷山
烏久　湯の花の柳へ散て雫かな
秀扇　菜畑や花に曇らば狐いろ
超波　はつ午やうたがひながら神の事
湖十　初午や大黑舞の飛鳥河

元文十巳春二月

〔鋸屑譚〕每年二月午の日、初午と稱し、稻荷社にまうづ、蓋初鎭座の日なり、〇中略關東人、此日馬頭觀音にまうづ、初午をもて馬頭の義とするにや、嘗て紀伊國熊野に行きしに此日にあへり、土人觀音に群參す、その頭髮に插むものを見ればみな賢木（サカキ）なり、これをひとりの老媼に問へば賢樹なり、安く榮ゆるの義を取るゆゑに、古より此儀ありといふ、然則諺觀音者、後世浮屠氏之所假托可知矣、

〔俳諧歲時記 二月〕初午　武江にてもこの日、王子、妻戀、三圍、眞崎等の社參詣多し、近年王子稻荷最群集す、西ヶ原より先、田の畝にて百穀の種物を賣る、參詣の諸人、歸路紙製の狐を買て土產とす、又茶の木稻荷の氏子今日茶を喫せず、その外にも茶を禁ずる家あり、武家市中とも鎭守の稻荷

を祀り、燈燭をかゝげ鼓吹して舞ふ、近くは雲間の霹靂のごとく、遠は蒼海の波濤に似たり、江戸の繁榮實に耳目を驚すに堪たり、初午やわたりの乳母は星月夜　沾德

本妙寺詣上ノ午　江州三上山の邊に舊迹あり、今も二月初午詣あり、〇中略堂の前に三十三間の矢場あり、初午の日今に至りて弓矢を莊嚴とし、里民も弓矢を商ふ、參詣の人これを買て奉納す、この本尊平日は秘佛にして、初午の日、或は三十三年を開帳の期とす、當時初午當日の外は、北佐久良南佐久良兩村の百姓四十人ばかり講を結びて、一村より六人づゝ各十二人を年頭とし萬事を支配す、本尊南村に在ときは北村より封を付、北村に在ときは南村より封を付て、互に尊敬の意を示となり、初午の日節分の豆と、十二銅を捧て、諸人祈願すといふ、

〔茅窻漫錄中〕初午幷稻荷

毎年二月初午の日、貴賤一統にもて囃し、初午稻荷風俗となれり、〇中略いつの比より何者のいひ出だしゝか、野狐を稻荷の神使と稱し、初午の日は、天下一統貴賤押しなべて、家々に持囃し、赤小豆飯油煮等の供物、種々とゝのへ、町家士民の中にても、其格式定例ある家は、居宅の內に鎭守の小祠稻荷を勸請し、正一位大明神の幟を立てゝ、往來群聚いはむかたなし、

〔我おもしろ上〕初午の翌日に

はつ午の大鼓にあらで鳴る耳のおとろふる身もはやしとぞ思ふ

初午

初午のをろつくなかに商ひの道はぬからぬあめのふりうり

名所初午

いほ崎に人も大鼓もをろつくは田中の神〇三圓稻荷のはつ午ぞこれ

〔我おもしろ下〕稻荷奉納玉の畫の額

抑狩野家の玉を見れば、綠竹の色なるあり、こや孔雀石の玉と思はれ、赤きは大津の赤玉にして、白きは御膳白玉とも見るが中に、黃なる玉のなきは、狐の毛色にさし合なれば、こなたの目玉のくらければ目利に及がたし、いづれ初午の奉納なれば、共にこんこん玄きの光りを添ふなるべし、もし酉の町の驚大明神に奉納あらば、たうの芋ともいはん歟、

〔烈公行實〕天保元年庚寅、年三十一歲、春正月、〇中略公久爲三公子、稔聞上下放縱、貨賂公行、群飮沈酗風俗大壞、狀故首革驕奢淫佚之弊、崇尙儉素、戒飾甚至、乃定淫聲慢聲之禁、尋禁門松初午端午等禮俗之過侈、

〔三養雜記乙〕初午稻荷詣　地口

二月初午の日、稻荷詣すること、〇中略ふりにし世よりありことにこそ、猶諸書に見えたるとゝかつ初午の日を用ゆるよしなど、すべて賀正より追儺まで時令のことゞも、予かつて歲時要略にくはしく記したれば、こゝにもらしつゝさて江戸にて稻荷祭には、地口行燈をつらねともすならはしなり、この地口といふは、土地の口あひといふことにて、たとへば地張きせる、地本繪冊子、地酒などの類いづれもこの地といへるは、江戶をさしていふ詞なり、さてその行燈にかけるを繪地口として繪を專にして、まうづる人のあゆみながらよみて、わかるをむねとするなり、

〔二千年袖鑑中〕二月

上の午の日、初午と稱して、江府中稻荷の宮に幟を立、神樂を奏し、參詣群集す、江戶はよこくにかはり、市中にも銘々屋敷の鎭守に稻荷を勸請して、所として此神を祭らざるはなし、此故に神田紺屋町邊の市店は、年中鳥居宮など造りてひさぐ、中にも當月初午前には買人引もきらず、思ふ唐の社日の祭禮とおなじ、故に異國にも社日には土地の神を祭る、稻荷も五穀の神也、和漢地は

萬里を隔つといへども、其趣は同じく、家々醉人を扶得て歸る、今日の夕暮賑々敷目出たし、

〔東都歲事記一下〕二月初午　江戸中稻荷祭、前日より賑へり、江府は家ごとに屋敷毎に鎭守勸請の社ありて、市中にも一町に三五社勸請せざる事なし、寺社の境内に安置する所は、神樂を奏し、幣帛を捧げ、修驗祈禱宣を請て法樂す、又男兒祠前に集りて終夜鼓吹す、千社參りと號して稻荷千社へ詣るもの、小き紙に己が名所を記したる札をはりて歸るしるしとす、此族殊に多し、何れも中人以下の態なり、神田紺屋町の邊は常に小宮鳥居を造りて商ふ、故に俗宮町といふ、此月分にては其雄になるを擧る、而已實に萬が一なり、東都稻荷の社は前に云ふ如くあまたなれば、こゝには

月ノ子ノ日ヲ取テ、大黒天神ヲ祭ナリ、

〔鋸屑譚〕日蓮上人三面大黒天の讃文云、甲子の日毎に、生黒豆百粒をもて祭るべし、是秘中の秘なりとぞ、佛說大黒天神經、南海寄歸傳等無此說、其像坐して金嚢をとり、小牀に卻き踞り、一脚地に垂ると、その盛をもて神使とする事、大己貴命の故事に起りて、舊事紀に見えたり、則甲子の日を用ふる固有據、今世祭る所の像も亦日本の風儀に非ず、梵天像也、

〔俳諧歲時記十一月〕子祭 子燈心 大黒天の火燒なり、十一月の子の日に、來年十一月まで家に用る所の燈心を貯ふなり、これを子燈心といふ、俗傳なり、

〔東都歲事記一春上〕正月甲子日 毎月 大國神祭 神田社地 小石川傳通院寺中福聚院開帳あり、參詣群集す、

東叡山護國院 本所龜澤町大黒院開帳 麻布一本松大法寺同 淺草寺中長壽院出世大黒 下谷ざふ店蓮光寺開帳 牛込原町經王寺同 駒込追分東横町大恩寺 日暮里經王寺 青山仙壽院

同立法寺 今日俗家にも此神を祭り、二なた大根、小豆飯黒豆等を供す、街に燈心を商ふ、

〔大江俊章記〕寶曆六年十一月十二日、到東寺拜大黒、今日子日也、子年子月子日此大黒開帳、予甲子年、依母命參詣、今日有所思參詣、

〔淺草庵雜文〕甲子祭 祭文 慶應二年正月高野氏需

掛卷母畏支八雲立出雲國、八百米杵築大宮爾國造畢坐之、青人草乃宇幾瀨爾墮氐、安都加比儛乎救賜比助給布、少名彦那大神乃幸魂奇魂、齋鎭奉留二柱乃大神乃大御像廼、宇豆乃大御前爾姓名恐々母申佐久、朝夕母常爾拜奉理禱奉氐、恩賴蒙奉留悅申奉就中氐、初春廼今日乃甲子之吉日乎生日乃足日止定奉氐、大祭仕奉留廣前爾、山物海物、御酒波琵能腹滿双、大御饌粢餠種々物、橫山如積置足之氐、稱辭竟奉良久白、如是獻宇豆乃幣帛乎安美氐具良乃足美氐具良比大御神達乃御心平久安久氣聞召氐、妻子氐族出入人等奴諸爾至万氐、彌

益々喪無事无久、禍言口安波世受、萬災發良受、千萬乃福泉乃涌出事乃如久、命長支波八百日行濱乃眞砂乃算盡佐禮奴事之如久、家業榮爾昌延、家內穩爾睦之久、令在賜止閉止申事乎、諸聞食世止豬自物膝折伏、鶏自物頸根衝奴支氐、恐美惶美母白須、

〔日次記事一正月〕初十日 十日惠美須 大坂地下人、詣今宮惠美須社、是稱十日惠美須、

〔雍州府志二神社〕惠美須宮 在建仁寺門前、凡稱惠美須者、是蛭兒命也、命住西宮海邊、故以釣漁爲樂、故斯社多在海濱、漁人專崇之、漁人數日擧網不得魚、則必祈斯神、若得魚之願成、則裁縫衣服、使著惠美須像、又謂惠美須者福神也、凡農工商共祭之、商賈特崇之、每年十月二十日家々祭之、此宮祭亦此日也、〇略中凡倭俗、惠美須大黒天爲一雙、民家戶々作小像、安置棚頭祭之、是謂惠美須棚、凡自外所入家內之金銀絹帛、幷酒粢肴核之類、先供斯棚、言又祈得之也、故與福神惠美須、併祭之者乎、

〔滑稽雜談二正月〕夷參り 十日 今世每年正月十日、西宮の夷へ參詣する事、都鄙群をなせり、是を十日夷ともいへり、此會の後、此社の神人、此殿の像を札に板して諸國へ弘む、商家の輩是を信じて請收る也、歲首に若夷とて賣ありくも此義より起る歟、此會をさしてゑびす祭共、ゑびす參り共、十日夷ともいへり、十月廿日に祭るを、廿日夷或はゑびす講と稱す、京都にある旅夷祭は、九月廿日也、總而蛭子と夷と同異の兩說、其道の識者に依て、口傳を受べき也、

〔雜波鑑六〕夷祭 十月廿日

是其所と定めたる社なし、夷三郎殿は、商人をまもらせ給ふ御神とて、上下の諸商人面々の家にして內祭す、夷棚ある家には、色々の御供を備ふ、

〔俳諧歲時記正月〕夷祭 十日 商家もこの日大に宴を設け、客をむかへて饗應す、江戶にてはこの月廿日、商家戶々夷祭をなし、大に醵會すくはしくは十月の條下に注す、

〔俳諧歲時記十月〕夷講 廿日 この月廿日、或は家例によりて日定らず、商買の徒、西宮大神宮を祭

十日惠美須
二十日惠美須

る、此神商買を護り給ふゆゑ也、この日蛭子の像に、神饌神酒等供す、亦かならず鯛を供する也、又別に酒宴を設けて、年中出入する所の花主、或は懇意の人を招きて饗應す、これを誓文拂といふ、又蛭子の像前において賓主相混じ、盃盤器物に至るまで、假りに價を定む、或は千兩、或は萬兩、賣る者諾すときは必拍掌す、これを夷講の賣買といふ、一時酒興の戲也

〔改正月令博物筌 正月〕十日　夷祭、十日夷とも、西宮今宮、

〔改正月令博物筌十月〕廿日　惠比須講　誓文拂、此日商家一統にいはひ日として戎を祭り、酒宴を催して客をもてなす、中にも呉服店は格別にぎはしくする事也、商人つねづね欺賣の罪を拂ふとて、誓文拂ともいふ、京にては官者社に詣で、是を誓文がへしの社といふ、大坂にては今宮の戎へ參詣多し、

〔東都歲事記一春〕正月十九日、今夜大傳馬町壹丁目二丁目通旅籠町の往還に愛比壽講の市立つ、商家愛比壽講の設けて、魚類菜蔬、愛比壽大黒の像小宮諸器物等を售ふ、廿日商家愛比壽講愛比壽大黒二神を安し、調魚の鮮きを挖けて是を祭り、万陪の利益貨殖を祈る、終夜親戚知己をまで價を千兩万兩などい定めて宴飲す、又蛭子の像前に於て、盃盤器物にいたるまで假に商買の學をなせり、

〔東都歲事記四冬〕十月十九日、今夜大傳馬町壹丁目二丁目通旅籠町に商家夷講の市立つ、正月十九日の如し　廿日、商家愛比壽講、正月廿日の如し

〔倭訓栞前編二十六〕ふいがは　鞴祭は十一月八日、鍛冶の祭る所也、三條宗近が故事に依て稻荷を祭る、されど今の圖像は不正甚し、

〔毛吹草三付合〕祭　（ふいごは）鞴

〔日次紀事十一月〕稻荷社火燒　新御供社家松本氏調進、相傳鍛工三條小鍛冶宗近、鑄刀劒時、稻荷神出現而搗鐵槌以助鍛錬力云爾、宗近錬刀之石盤、今在東山知恩院山門下、銀匠鍛工等、凡設臺盞、

吹革祭

者悉祭之、或謂臺盞祭、知恩寺鎭守元賀茂明神也、三十九世滿靈和尙、加稻荷八幡、故今日有稻荷明神之火燒、

〔日本行脚文集二〕鍛冶祖三寶荒神贊

臺盞祭神酒も鑽おろしかな

〔年中重寶記四〕十一月の事

八日　稻荷の庭燎、俗に韋囊まつりと號して、鍛冶、金細工人別していはふ、

〔永代重寶記四〕十一月八日革囊祭

〔古今神學類編百歲事〕十月

此月ノ諸神事、大抵皆迎陽所爲耳、或ハ諸社ニ十一月御火燒ト稱スルモ是心也、稻荷祭ヲ鍛冶ノスルヲ鞴祭ト云、是ハ傳テ云、三條小鍛冶ト云者、稻荷ニ祈リテ妙巧ヲ求ム、則其山ニシテ、埴土ヲ取テ刀ヲ作リシヨリノ事也、

〔滑稽雜談二十一月〕吹革祭八日　今世において、金銀銅鐵の工匠の徒、尤吹革を專用する者、每歲今日吹革祭、又稻荷の御火燒と稱して、吹革に神供をそなへ、酒飯魚鳥を料理して、家族是を祝ひ、又本社へ參詣多し、社家者の幸なれば、今又金工の守神の旨を述ぶ、又本社へ參詣多し、

〔年中行事故實考〕十一月八日　御火燒といふ、稻荷大明神を祭る、鍛冶家にて鞴祭りといふ、神酒餠菓なんど備へ、終にはこれを撤らして小兒等にあたふ、京師にて古より有けるにや、庭火を燒て神酒なんど備へし圖、古土佐家の繪にかきたるあり、

〔續江戸砂子十一月〕八日吹革祭　鍛冶、鑄物師、飾、白金細工、すべて吹革をつかふ職人、此日稻荷の神を祭る、俗にほたけと云、此夜子共あまた鍛冶が軒にあつまり、ほたけ〳〵とはやせり、橘、蜜柑をなげて子供にあたふ、

〔牛馬問三〕鍛冶十一月八日稻荷を祭事は、むかし三條小鍛冶宗近劒を造るに、いなり山の埴を取て刀をやくに最すぐれたりし故、此埴を取の神恩を謝する爲此神を祭、時々稻荷山へ詣でたりし其遺風なり、俗說のごとく、狐の合槌にて刀を造し事、たえて無稽の妄言なり、

〔俳諧歲時記十一月〕吹革祭八日　祭る所知恩寺の鎭守元賀茂明神なり、或人云、三十九世滿靈和尙、稻荷八幡を加ふ、故に稻荷の火燒といふなり、十一月の八日、鍛冶鑄治石工の徒、すべて吹革をとり扱ふ家にはこの神を祭る、江戶にては八日の未明に、市中の小兒その家の前に群集して、鍛冶やのびんぼうと呼ぶ、主人卽ち二階より數百の密柑を投つ、群童各爭ふてこれを拾ふ、是を鍛冶家の吹革祭といふ、その鍛冶にあらざるものも、吹革ゐるの家はみなこのことゐり、小兒相呼ぶこと前の如し、蓋そのびんぼうといふものは、かづけ物の多からざるを罵るものにやゐらむ、その徒每年この戲を以家例とす、

〔改正月令博物筌十一月二〕八日吹革祭　橐籥とも書、鍛工稻荷を祭る、此事三條小鍛冶より始る、昔後鳥羽院大刀刀をうたせ給ふ事を好なせたまひて、時の名工どもを禁裏へめされ、十二月にわかちて、其月々の番かぢをさだめさせ給へり、其時いなり山の土を取りて用ひたる故、彼鍛冶ども度々往來して、いなり山の神を拜せしより、つひにいなりを祭る事となれり、

〔二千年袖鑑中〕十一月

八日　鞴祭、此日鍛冶、鑄物師、其外吹革を遣ふ職人、稻荷を祭、

〔東都歲事記四冬〕十一月八日、鞴祭、稻荷を祭るの行事なり、世に火燒といふ、鍛冶、鑄物師、師師、白銀細工、其余吹革を遣ふ職人の家にて是をまつる、今日早旦に二階の窓より往還へ密柑を投ろ、餅みかん吹革まつりやつかみ取　下風

〔多度大神宮略緣起〕すべて銅鐵の器物を用て諸物をつくる諸職人、ことに鍛冶鑄物仕等は、天目一箇大神の御惠に一日も漏べからざれば、とりわきても齋祭べきなり、然るを鞴祭とて、故もなき遊嗣をまつるもあり、さきく、此の大神をおきて他に鍛冶の御祖神はあらざるをや、然れば今も忌部氏にて、禁裏の官人なるなにがしの家にて、諸國の鍛冶仕の鍛冶なせらるゝは、この神代の故實に因てなるべし、

〔柳營秘鑑追加八〕日光御宮眞之御上棟之次第

上棟眞行草有、眞は大工棟梁五位之衣冠、行は大紋或は布衣、草は素袍著用也、其餘長上下半上下著用、眞之御上棟、於關東は寬永十一甲戌年、日光御宮御造替之節、幷明曆年中江戶御城御類燒後、御普請出來之節、都而二度也

寬延三庚午年、御宮御修復被仰出、〇中略

寶曆三丁酉年御出來也、〇中略此時御上棟之式は、眞の御上棟可仕旨被仰出也、

御上棟ニ付、御宮御拜殿正面に玉女壇と て、八尺四方の壇を取立、幷御棟棚迫、高貳間に三間四方の假棟棚出來、四方堅迫、御宮御本社御濱緣之四隅に飾もの備物をいたし、誠に善美盡したる事也、御拜殿西の御間に、御門主御著座、東の御次に堀田相模守、幷御手傳松平阿波守著座、御庭上において大工方のもの御斧始、御上棟之式相勤也、

御上棟ニ付、御納戶其外より請取物左之通、但大工棟梁出之書面也

覺

一色純子六拾五丈是ハ御棟の水行、三布にて十六間分、四方堅、二布にて御緣四方張廻し、二十六間分、札之覆、

一色板之物拾七丈八尺是ハ右之御裏地也、

一金襴三丈七尺是ハ御幣九本、砂金袋九ツ、幷御棟札之下行之幕ニ用

一奉書紙壹束五帖是ハ御幣紙七本分

一色

斤半上同

一麻苧九抱上同

一射綿九抱右同

一色奉書紙七束上同

一紅糸四斤半御幣九本分

一白糸四拾枚

一兩面金紙五拾枚

一兩面銀紙五

一末廣九本上同

一蠟燭三拾目二百挺

一五位衣冠貳人前緋之袍、淺黃拔中啓冠共、但

一雨面紅紙五拾枚此三品御幣貳本分

一布衣九人前小結小立烏帽子壹人、淺黃袴四人、黃拾七人、

一白丁拾人前

紐付、

一布衣九人前かな色四人、はな色五人、

一素袍三拾三人前黃拾五人、萌黃拾七人、

一金水引貳百抱

一瓶子壹對高さ二尺御紋付口覆金銀

一淺黃帷子四拾二人前

一

白帷子二人前

花形糸尤飾　一瓶子加九對　一長持三掉　一半櫃三掉　一金剛草履
五拾足　一丸鋺九面（高さ三尺）（御附幣）右同　一銚子七對　一青銅貳百貫文　一同貳貫文（是ハ金銀箔置、金袋へ入、）　一神酒二樽　一土
器百枚　一三方拾八膳　一白米壹斗　一箱肴九ヶ所分（昆布一箱、搗栗一箱、岩茸
飾餅入　一鏡餅八備（三ツ重）　一飾餅千　一御幕串（彩色金箔）　一弓二張　一槌盤七（金銀彩色盡し）　一金
剛柱八寸角　一玉女塲八尺四方　一御釿初御材木三間（尺角）　一御棟棚（高九尺三間四方）　一供物臺九
ツ　一長柄銚子八　一鏡餅臺八　一掛錢臺二　一御幣臺五　一細引五拾筋　一水繩二百房
一丸提燈三拾組　一晒淺黄幕（長十間、三對、）　一地布拾匹　一糸立九拾枚　一筵三百　一薄縁三百
枚　一手水桶二　一柄杓五本　一草履百足

以上

御上棟之式

寶暦三（酉）年五月廿五日、御上棟ニ付、總奉行堀田相模守を始諸役人、辰の上刻御別當大樂院（江參會）、夫々の裝束を著、巳之下刻御宮（江）伺公、此時堀田相模守松平阿波守直垂を著用、御拜殿東之方
西に向著座、御勘定奉行日光奉行兩御目付何れも大紋著之、東之方御切目縁上御本社に向著座、御
大工頭（大紋）西之方御切目縁上東に向伺公、御疊奉行漆奉行御勘定下奉行何れも素袍著、東之方
御張出御本社に向伺公、御腎師（十德）目代（素袍）西之方御張出御本社ニ向伺公、各著座相調、其後御
門主御出仕、御拜殿西之方東に御向御著座、此外御作事方小役人、幷御繪師（祐清、玉樂、梅軒、）總奉行用人、御
手傳方、書上之役人、御白洲或は御唐門内御玉垣際へ相詰、御別當大樂院御殿守居禪智院坊官家
司は、御門主御著座之間、御次より御張出之方に並居、諸棟梁御用達之者共、國名之分は布衣、其餘
は素袍下帷子共被下置、御白洲東之方（江）相詰、
右著座相調候節、大工方大棟梁（辻内豊後、大谷甲斐、）衣冠幷數輩之番匠共、御殿地埋御門より仁王御門通御

拜殿階下迄行列參向、其外諸棟梁行列之跡に付、棟之槌四方堅之番匠（布衣）御唐門（江）入、右に付御
棟札持番匠、御唐門前（江）來候節、御大工頭（大柳八左衛門）御濱廊下（江）出向、行列揃候を見屆直に御正面漆
階段を上り、西之方御切目縁著座、夫より引續御棟札持幷玉女役（布衣）振幣持兩人（布衣）御拜殿（江）
上り玉女塲へ入、此時庭上にて大棟梁御釿初之式有之、御棟棚四方堅之番匠は、御本社四隅御棟
棚において御上棟之式有之、其外式書之通相濟、御大工頭御切目縁中程迄被出、御目付出向、御規
式相濟候旨總奉行（江）申上有之、西之方御切目縁（江）御目付歸座、直に總奉行御拜殿中程（江）著座、一
色周防守、御大工頭に差添、御切目縁へ被出、其時拜領物白銀廿枚被仰付候旨申渡有之、御大工頭
御濱縁へ退、御殿番（高木善九郎）銀臺引之、右相濟御門主御退參、引續總奉行御手傳以下退散、御假
殿へ參上各拜禮有之、總奉行御手傳御勘定奉行日光奉行兩御目付神酒頂戴、其餘は神酒頂戴無
之、右相濟て御門主御歸坊、總奉行御手傳退去、（下略）

○按ズルニ、此餘家屋ヲ新築スルニ當リテ皆此ニ省略セリ、

〔釿始上棟之次第〕御棟祭役人之次第

先隨身役二人、御棟祭ル方之軒、左右軒ニ向キ、牀机に坐ス、（中略）○
裝束（隨身狩衣幷冠頁掛有之、又ハ青襖著、青帶之、弓手之肩脫、弓矢持、尻籠大刀帶之、）
次御棟祭役人三人、御棟三ヶ所御幣之前ニ坐ス、
御散米出役人三人、御棟祭役人ニ一人宛相副、執行如常、
御銚子同加役人共六人、御棟祭役人ニ二人宛相副、執行如常、
聲掛役人一人、御棟中央之御幣之前ニ參拜シテ、少退キ坐ス、（略）○（中）
奉幣役人三人、御棟祭軒下地ニ荒ゴモ敷、上ニテ執行之、（略）○（中）

奉幣出シ三人、同役人ニ一人宛相副、奉幣役人ニ左ノ方ヨリ渡之、○略中
已上

同祭諸大事次第

先鳥居之大事　次一揖　各口傳

著座一揖　安座二拜　同

護身神法　拍手小大十室印　同○略中

聲掛役人之事

御棟祭之神酒調而、聲掛役人裝束ニ襷掛、聲掛之定座ニ行、大扇開キ、同地紙トカナメトノ相、カナメ之方左之手一束ニ持、左之脇ノ下ニ付ケ、善之網右之肩ニ乘セ、同右之手ニテ上ヨリニギリ、左ノ手高ク持上ゲ、隨分高聲ニ曰ク、

善哉棟丁　陽哉棟丁　榮棟丁　合三聲

此文字一字宛長ク高聲ニ云之、棟ト云文字ニ大扇之打付、御棟之三ヶ所、幷御柱本、御槌、何モ聲一同ニ合セ申事第一專也、能々兼而云合置可申、御槌調、善之網、肩ヨリヲロシ、大扇ヲタヽミテ襷オロシ退下、

但　陰哉棟　陽哉棟　榮棟　又如此二流ニ有之由○略下

〔匠家故實錄中〕上棟之例式

凡上棟の式は、造營成就の佳節にして、是第一の大禮式なり、最諸事叮嚀を盡し、嚴密に調ゆべきなり、殊殿造神社佛閣、或大家等の上棟の節は、先吉辰を撰んで、棟を上るの造作を成し置、續て吉辰を撰んで、上棟の神祭及び槌の式を行ふべし、又小家造建の節は、當る吉辰の早朝に棟を上て、同日に神祭、槌の式等を調る事あり、全體是本意の事なり、併其節の勝手に任せ、都合宜きに隨ふべし、勿論式禮の當日而已吉辰を撰み、前日に吉辰凶辰を撰ずして棟を上置事は不可なり、尤雨日とも吉辰續く日並ならば用ゆべし、右上棟の式、祭禮本式作法中略式、略式の調格、各場所の節付等、左の圖の通なり、○略圖

例なりと雖、略々式にては一所に於て兼祭るとも可なり、勿論其造營の大小、主方の分限に隨ひて、相應の式禮を用ゆべきなり、

上棟祭神

天御中主尊　大日靈貴　月弓尊

右三神屋上祭壇の中央に立る、大幣三本を璽とす、

岡象女命　青帝龍王　赤帝龍王　黃帝龍王　白帝龍王　黑帝龍王

右六神同左右六本の幣を璽とす、以上九神屋上の祭壇に於て祭るなり、

面足尊　惶根尊　手置帆負命　彦狹知命　天目一箇命　思兼命　太玉命　天兒屋命　聖德皇太子

右九神柱根に祭壇を設る所の、九本立の幣を璽として祭るなり、又別に榊立に榊を一本立て、木綿紙を掛て是を璽とし、所の產地神を祭るべし、且又榊立に榊を數本立て、木綿紙を數多掛たるを置て、天神地祇を拜するなり、

天星玉女神　色星玉女神　多願玉女神

右三神は、柱根神壇の前の左の方に一壇を構へ、三本立の幣に各鏡を掛て璽とし祭るなり、又其前に榊立に榊を一本立て、木綿幣を掛たるを置て、猿田彦神を拜すべし、是則方神の祭壇にて、所謂玉女棚なり、又式に用ゆる槌七本或五本又は三本臺に立て、此壇の前に飾るべし、但此壇は其月の玉女の方に向ふて拜する勝手に設構ふべきなり、且又此壇の後に神供棚を構ふべきなり、

天星玉女之所在

正月乙の方　二月甲の方
五月甲の方　六月甲の方
九月辛の方　十月坤の方
三月乙の方　四月丁の方
七月坤の方　八月壬の方
十一月壬の方　十二月庚の方

右は本式禮祭壇の設格なり

本式供物

鏡餠五重（一重三ツ宛なり、尤各中の一ツハ黃色、）　陰形餠（かたもち）（小判形の熨斗餠なり、尤三ツ一器に盛る、）　九曜餠（丸餠九ツなり、器中に輪に並ぶるなり、）　月形餠わたり六寸に、厚さ五歩ばかりなる餠、十二枚を一かさねとす、或閏月ある歲ならバ、十三枚を一重とす、）　洗米　榧搗栗　花燒鹽　飴　五穀（各土器に盛る）　鰹節十二本（あみて）　鳥一番（山鳥或雉子等）　抱鰒

右は白木三方にて饌ふるなり

生鯛大一掛（同小口掛、或貝類を添ふる）　昆布、青海苔、抱鰒、斗、葉付大根、同、蕪、小菜、

右は白木の脚付平臺にて饌ふるなり

清酒平樽五面（白木の手付平樽なり）

右は厚板にて作れる脚付臺に陶て饌ふるなり

以上供物、屋上と柱根の兩神壇同前に可饌之なり、尤叮嚀を盡す節は、柱根の神壇の方、鏡餠九重、御酒樽九面、可饌之、又は屋上の神壇狹き時は、供物の器數を略し減じて、二器分三器分を一器に盛り饌ふる事あり、或又右供物一通一壇の分を以て略し、上下の兩神壇へ分ちて饌ふる事妨もあり、時宜に隨ふて調ふべきなり、勿論都て供物類、前日に悉く調へ置て、當日早朝に神供棚へ竝べ揃ゆべきなり、

木綿綱之事

木綿綱は則白木綿なり、上の端は屋上の神座の眞中の幣串の根本にて棟に結び付、下の端は柱根神壇の前の方に、八角造の小柱を立て結び付るなり、

破魔弓破魔矢之作格

弓矢の作樣左の圖の如し、（略）圖　尤節數を陽數七箇所に卷たる弓に流鏑矢をはめて、屋上神壇の右にて鏃を少下て丑寅隅へ向て立る、節數を陰數八箇所に卷たる弓には、鷹股矢をはめて、同左の方にて鏃を少し上て、未申隅へ向て立るなり、（弓長サ一丈二尺八寸、太サ一寸八歩、節數一張ハ七箇、一張ハ八箇ニ卷ベシ、勝軍木或檜又ハ竹ニテモ作ル、弦ハ左撚ノ苧ヲ用ユ、○中略）

扇子車作格

檜にて串を作り、末に扇子三本を圓になして付る、白扇或朝日を畫たる扇を用ゆ、串に荒苧三すがひ宛を掛る、或五色の絹を掛る事も有るなり、尤三本屋上の御座案の後に立るなり、或略々の節は一本用ゆるも可なり、（○略）

棟槌作格

槌の首、木口幅三寸五分、同長さ一尺五寸、八角に造る、七本或五本、玉女壇の前に飾る、但し略々の節は三本を用ゆ、

同式禮

匠長（大工頭領）　玉女棚の前席へ著座、一揖二拜、祓司（祓司或六人著座）著座、祓司（祓司內二人）の拜各拍手、最要祓二返三種祓八返、次に匠長、土地清淨、祭壇清淨、御食物清淨、六根清淨と唱へ散米す、次に勸請式再拜、祓司も各拜、

右の式濟て、各柱根祭壇の前へ移る、

柱根祭壇の前席へ匠長著座、一揖二拜、脇司一人或二人、祓司六人、各左右に著座、拜各拍手、中臣祓二返、三種祓八返、散米、次に勸請式再拜、次に役者二人供物を運び、祓司二人請取て饌ふ、尤匠長拜

席に有ながら、立て兩手にて供物を饌ふる如く爲すべし、但し兩壇とも供物を饌ふる趣同斷に拍手、神供、祝詞、再拜、次に脇司大幣を取て渡す 匠長奉幣脇司取て元へ直す 請再拜、脇司祓司各拜、

右の式濟て、各屋上の祭壇前へ移る、但し茲にて匠長休息所に入、暫時息を休る事もあり、屋上の祭壇前へ匠長及び各著座被及び神拜式、都て柱根廣前の式禮と相變る事なし、最此廣前にて奉幣の式相濟たる刻、普請主方の長者に、三箇所の神壇を遙拜すべきなり、尤玉女壇より柱根の神座、屋上の神座と、順に拜すべきなり、次に匠長祝詞を申す、

上棟祝詞

謹美謹美惶禮美惶禮氏美申寸、掛廉久毘幾神代乃昔古、工匠乃道乃祖神等、造宮乃業乃規矩乎開發給反留神業乃御敎世々仁傳利、且中古匠家乃業事滿具利手與利、蒼生乃末胤乃己等賀如幾工匠者迄毛、意乃儘仁梁高久柱太幾志御屋乎營美造留事登爲波禮留國道乃御寶是與利廣大奈留業事波非賛、御國乃人人普久此祖神乃御惠幸乎蒙利奉禮利、故今度此地仁何某賀住家乎、或何建物、營造留仁今日乃吉辰乎得底、棟乎高宇爲武登寸留、是仁依利天柱根乃所仁御座乎設底、祖神等乎祭利敬比奉利手、且方神乃御壇乎設底、三玉女神乎敬比祭利奉利、道開神乎拜美奉利天、營造事吉祥乎祈利奉利、屋上此御座仁波、中乃御座仁、天御中主尊、大日靈貴、月弓尊、左右乃御座仁、罔象女命、五帝龍王神、九波志乃神等乎敬比祭利奉利天、當日上棟成就、並以後乃作事吉祥家屋永久安穩榮昌乎祈禱奉留、畏幾乃靈威乎以、萬事乎安護仁惠美福比守利給返止謹美惶禮美惶氏申寸、于時何何年何月何日、工匠何某謹白、

右唱へ終て、三箇の祭壇の御神等を念じ奉り、再拜一揖す、脇司祓司各拜、然して廣前を退き、各屋上より下り、匠長は木綿網柱の本に至る、脇司重槌役者は玉女壇の前に至る、四人の槌役の者工匠弟子方勤之同役に控ゆるなり、次に棟槌の式なり、

先役者一人、玉女壇の前なる槌を取て、重槌役を初として、都合五人に渡之、各請取て柄を右に持、左の手を槌頭に添て戴き、足場に登り、圖の如く並ぶ略○圖 重槌役は匠長或四手取に眼を附て待べし、餘の四人は重槌役の手元に眼を附て待べし、其刻匠長立出て、屋上の神座に向ひ一揖する、四手取なら八、右の手に四手を持ながら、次に左右の手にて木綿網を持て戴くべし、

千木すぐに鰹木すぐにうつ槌もとゞぶく常磐堅磐ぞ

右の古歌を二度吟じて、扨四手或扇子を開きて額に翳して、千歳樂萬歳樂登と呼びて、重槌役の方へ知せて、四手或扇を擧る時、槌役者各應答と呼びて、槌を打べきなり、納の一は土金と徽音に唱へて、棟と續けて後張に聲を張て呼ぶべし、槌役者應答と呼びて、槌を打ことは同斷なり、槌打する事の數左の如し、

一の槌 七ッ 千歳樂萬歳樂登と呼び、應答へて六ッ打、
納の一ッを土金登と呼び、應答へて打、

二の槌 五ッ 千歳樂萬歳樂登と呼び、應答へて四ッ打、
納の一ッを土金登と呼び、應答へて打、

三の槌 三ッ 千歳樂萬歳樂登と呼び、應答へて二ッ打、
納の一ッを土金登と呼び、應答へて打、

右の數に打納むべきなり、尤匠長自ら四手を取ときは勿論、或別に四手取役者をもつて勤之むるときは、傍の盤座にありて、納の槌の土金を俱に徽音に唱へて、謹んで棟に土金德を加持し止むる意あるべきなり、三の槌を打納て、匠長屋上の神御座に向ひ、謹で神等の御號を稱へ奉り、再拜して退くべし、槌役者は各槌を戴いて元の役者に渡す、役者請取て玉女壇の前へ直すべきなり、茲にて各暫時休息するとも可なり、

但四手は串を檜にて作り、八角に削る、串の太さ長さ心に隨すべし 四手の垂幣は奉書紙か杉原紙にて三垂に裁る、尤數多垂を串の頭の切目に狹みて、其所を荒苧にて結ぶべし、

次に匠長、玉女壇の前場に至て再拜し、柱根祭壇の廣前に著座、脇司及び祓司二人同著座、殘る四

箭祭

人の被司二人、屋上の祭壇の廣前に著座し、二人は玉女壇の廣前に著座す、三箇所各拜拍手、一切成就被七返、御禮の再拜、次に匠長、謹底御食物乃御器ヲ下志申ス と唱へて拍手拜、二箇所の廣前にも共にこれを聞て拍手拜、三壇共に中程に陶たる供物一器宛下る、次に匠長、此廣前より三祭壇の御座を神送し奉る、屋上の壇玉女壇にても、被司木綿幣榊を捧げ、警蹕を唱ふべし、然して各二拜一揖して退座すべきなり、尤滿座祝酒の式ある事、木造初の節と同斷なり、祝儀の餅結青銅等は、前刻より屋上の拜前の傍に陶置て、式禮成就、滿座の後披露すべきなり下〇略

〔倭訓栞前編三十四〕やぐち　武將の狩に矢口祭あり、晴の時に於て必ず山神を祭らるゝ故實也、矢口餅といふ事も、東鑑に見えて箭祭餅ともいへり、

〔吾妻鏡十三〕建久四年五月十六日辛巳、富士野御狩之間、將軍〇頼朝源家督若君〇頼家始令射鹿給〇中略此後被止、今日御狩詑、屬晩於其所被祭山神矢口等、江間殿〇北條義時令獻餅給、此餅三色也、折敷二枚、九置之、以黒色餅三置左方、以赤色三置中、以白色居右方、其長八寸、廣三寸、厚一寸也、以上三枚折敷如此被調進之、狩野介進勢子餅、將軍家幷若公敷御行騰於篠上令坐給、上總介江間殿三浦介以下多以參候、此中介獲鹿給之時、候而在御眼路之輩中、可然射手三人被召出之、賜矢口餅、所謂一口工藤庄司景光、二口愛甲三郎季隆、三口曾我太郎祐信等也、梶原源太左衛門尉景季、工藤左衛門尉祐經、海野小太郎幸氏、爲餅陪膳持參御前、相並而置之、先景光依召參進蹲居、取白餅置中、取赤置右方、其後三色各一取重之（黒上、赤中、白下）置于座左臥木之上、是供山神云々、次又如元三色重之、三口食之（始中、次左、右廉、次廉）發矢聲、太微音也、次召季隆候、法同于景光、次餅置樣任本體不改之、次召出祐信、仰云、一二口殊射手賜之、三口事可爲何樣哉者、祐信不能申是非、則食三口、其所作如以前式、於三口者、將軍可被聞召之趣、一且定答申歟、就其禮有與之樣、可有御計之旨依思食儲被仰含之處、無左右令自由之條、頗無念之由被仰云々、次三人皆賜鞍馬御直垂等、三人又獻馬弓野矢行騰沓等於若公、次列座衆預盃酒、悉垂醉云云、次召蹈馬勢子輩、各賜十字、被勵列卒云云、九月十一日甲戌、江間殿嫡男童形（北條泰時）此間在江間、昨日參著、去十七日卯剋、於伊豆國射獲小鹿一頭、則令相具之今日參入、嚴閣備箭祭餅、被申子細之間、將軍家出御于西侍之上、上總介伊豆守以下數輩列候、先供十字、將軍家召小山左衛門尉朝政、一口朝政賜蹲居御前、三度食之、初口發叫聲、第二三度不然、次召三浦十郎左衛門尉義連賜二口、三度食之發聲、三口事頗有思食煩之氣、小時召諏方祝盛澄殊遲參、然而賜三口、三度食之不發聲、凡含十字之體、及三口之禮、各所傳用皆有差別、珍重珍重由蒙御感仰、其後勘盃數獻云云、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年七月廿五日庚子、北條左親衛潛赴藍澤、今日始獲鹿、即祭箭口、餅一口三浦泰村、二口小山長村、三口下河邊行光云云、

〔甲陽軍鑑七〕矢びらきにならざる物の事

猫庭鳥にて候、其外の物をする物也、其鳥を上に作りおさて、肴に主人被遣候時、矢こたへと申物をして、くふなり、

〔安多武久路七〕矢開之事

或人の云、東鑑に建久四年、將軍家の若君始て鹿を射させ給ふ時、山口の神矢口等を祭らるゝ、其後同年江間殿の嫡男始て小鹿を射給ふ時、矢口を祭られし事も有、又嘉禎三年北條左親衛始て鹿を射給ふ時、矢口を祭られ給ふ也、此義は少童始て鹿を射給ふ時の事にて、大人の事にはあらざる哉と問給ふ、壽俊答て云、此儀むかしより有し事なるべし、舊記には所見なけれども、すでに其式ありし事なればこそ、建久四年に將軍家其禮式を思召出し給ひてなつらせ給ふ成べし、但し此事少童のみともおもはれず、大人とても始て弓矢を以て獲ものせし時は、矢開とて祝ふ義也、左かし其獲ものによりてなつらざるとの物有由、小笠原殿の聞書のうちにもみえ

たり、其禮式は東鑑にみえし式と同じやうなれども、段々末の代になりては、矢目のまつりやう、又は其獲ものによりて、料理の式、庖丁の式、まな板等に至るまで禮の定め有、其定めは室町殿の御定めにや、古記書記聞書等には所見なし、享保年中、營中にても矢開の式有し事は、皆人の見聞せし事なればゑるすにおよばず、

〔矢開法式〕矢開と云事は、少年の人、狩の時始て鹿其外生類を射たる時、其手がらを披露し祝ふ故、矢開と云也、其時餅を山の神幷弓矢神に手向奉り、武運を祈る故、矢口の祭とも云也、又餅を家の子郎等にも與へて祝ふ事也、狩にかぎらずして、庭なぞにて鳥を射たりとも、狩に准じて祝ふ事也、」矢開にせざる鳥の事、鶉鶯此二ッ也、又兎をも用ざる也、昔より是等をば用ざる事に定りたる也、またすべて鳥、鳶、鳩、梟、木兎、鶺鴒、鶏、木鼠、むさゝび、鷲、鷹、是等は射間敷鳥也、然る間是らをば射たりとも、矢開をせぬ也、

矢開の役人の事

餅喰役人三人　一の口、二の口、三の口と云て、三人也、此内一の口の人は、餅を神に手向る役也、三人共に射手の覺ある人參勤する也、公方樣御矢開の時は、畠山殿此役を勤らる、餅喰樣は、當家の義を用らる、當家とは小笠原家の事也、

同介添三人　餅大にて、壹人にてもてば、くひにくき故、介添に持せて、喰人も手を添て喰也、家の子の勤る役也、

同宮仕人五人　是は餅の宮仕人也、五人の内貳人は、主人御父子の宮仕也、三人は喰手三人の宮仕也、是も家の子の勤る役也、

大刀持出役三人　是は喰手に給る大刀を持出る役人也、是も家の子勤之、

庖丁人一人　是は射たる鹿にても何にても、御前にて庖丁する役也、矢開の庖丁、故實をば得たる人勤之、

右役人の内、庖丁人の外は、何れも射手にてなき者は無用にて候、其人なき時は通ひ人なぞは是非に不及、喰手三人は、必射手の覺なき人は無用たるべし

裝束の事、公方樣若君御矢開の時は御裝束をぬさる、餅喰役人も、宮仕人其外庖丁人も、白小袖白直垂に大かたびらを重ねて著し、白革の足袋をはく、ゑぼしかけをする也、腰刀は鞘まきをさすべし、

矢開祝の次第、射手（此度始て生類を射たる少人なり）同父座敷に出給ふ時、喰手三人、一の口、二の口、三の口、段々に出て、御禮申て下座に著座する也、其時宮仕人餅を持出て、中座してつくばひて、上座の體を伺ふ時、射手父の差圖を請、下座の方に筋かひにらるゝ也、下座に向ふ事は、喰手に向ひ合ふべき爲なり、其時一の口の喰手、座を立て上座のさいの外に射手に筋かひに向て、ひざを組安座する也、安座する事は、狩の時に野山にて、行騰を敷て安座したる體をうつしたる物也、又常には主人の前にて、ひざを組安座するは無禮なれ共、此矢開の時は安座する事定法なす故、無禮にはあらざる也、（略）（中）

右の如く三色の餅を臺の眞中に重ね置て、兩手をひざの上に納めて、心中に武運長久を祈念すべし、如此臺の眞中に餅を置事、山の神幷弓矢神に手向奉て祭る像なり、（略）（中）

矢開の時庖丁方故實

ある說に、先一番に鹿雀なぞの庖丁有て、夫を祝ひて後、餅を喰するといへり、此說はわろし、先一番に餅を出し、餅を以て神を祭る事第一の事なり、されば矢口の祭とは云也、次に其射たる物を庖丁して賞翫するなり、矢口の祭共、矢開とも、押なべていへり、餅を以て神を祭るは矢口の祭也、其射たる物を庖丁して賞翫するは矢開なり、此兩樣一時に行ふ故、矢口の祭とも、

矢開とも、押なべて云事に成たるなり、○中略

矢開略儀の事

矢開は幼き人始て鳥獸を射たる時のみにも限らず、成長壯年の人也とも、始て狩に出て、始て鹿にても何にても射たる時は、必矢開をする也、幼き人に限りたる事と思ふべからず、幼少の人庭前などにて鳥などを射たるも、狩に准じて矢開をする也、矢口の祭、矢開などゝ云事は、狩より起りたる事なり、狩とは鹿狩の事也、古へは狩に色々の作法故實等は今は絶て知人なし、其書もみえず、狩の詞は、少々多賀豐後守高忠の記に見えたり、

雷公祭

〔西宮記十九裏書〕延喜四年十二月十九日、此日使左衛門督藤原朝臣令祭雷公○北野、此祭本意訪大臣○藤原時平曰、此故太政大臣昭宣公、元慶中爲年穀祈雷公、有感應、因每年秋必祭之、仁和中不祭、寬平初年頻不祭、彼時奏元慶祭雷公故事、太上法皇○宇多因之臨時令諸司祭有驗、自爾以來祭之不絕、今因之爲豐年可祭、又不可以季多祭之、此度事俄爾、故因循年來之例、

〔侍中群要七〕御祭等事

雷公

仰上卿行之

〔吾妻鏡四十六〕建長八年○康元元年七月廿六日甲寅、度々變異等事、可被行御祈禱旨可計之由、爲和泉前司行方清左衛門尉満定等奉行被仰諸道、仍陰陽師等群參、前陰陽權大允晴茂朝臣、可被行雷公祭由申之、天文博士爲親朝臣申云、此祭公家之外、不聞被行之例、去寬喜三年、依前武州禪室之仰、亡父泰貞行風伯祭、翌日風休止、任其例可被行此祭歟云云、晴茂朝臣重申云、如諸國受領行之例、進覽親職自筆狀、行方披露之處、難被決斷之間、被問右京權大夫茂範朝臣、參河守敎隆等、茂範朝臣申云、去寬喜三年被與行彼祭之時、被尋安賀兩家之處、安家者不覺悟之由申之、陰陽頭賀茂在親朝臣以後、晴憲朝臣勤仕之例奉仕之、其外例不存知之云云、敎隆眞人申云、凡人勤仕之例更以無所見云云、依之不可被行之由被定之云云、

〔延喜式四時祭〕二月祭

鳴雷神祭一座十一月准此、坐大和國添上郡、

絁二疋、絲二絢、綿二屯、五色薄絁各六尺、倭文四尺、調布二端、庸布二段、木綿麻各一斤、鍬四口、白米五斗、糯米二斗、大豆小豆各一斗、酒二斗、稻四束、鰒堅魚雜腊各二斤、鮭五隻、雜鮨二斗、海藻二斤、雜海菜二斤、鹽二斗、菓直錢多少隨時、明櫃二合、折櫃四合、高案一脚、缶二口、堝四口、片盤廿口、匏四柄、槲一俵、席四枚、食薦六枚、輦籠一口、已上料、庸布二段、木綿麻各一斤、鍬四口、白米五斗、海藻六斤、雜海菜六斤、鹽四升、坩二口、坏五口、席二枚、輦籠一脚、已上祓料、祝詞當色袍一領、料紺絁三丈七尺、裏料綠帛三丈五尺、

右差中臣一人供祭

〔延喜式四時祭〕霹靂神祭三座坐山城國愛宕郡神樂岡西北○本條上恐脫四月祭三字、

五色絁各六尺、絹一疋三丈、絲一絢、八兩、綿一屯六兩、倭文六尺、調布一端二丈、庸布三段、木綿麻各大三斤、鍬六口、當色一具、布六端、餝物雜菜直、酒三斗、白米四斗五升、糯米一斗五升、大豆小豆各七升五合、鮭三隻、鮨一斗五升、鰒堅魚腊各三斤、鹽七升五合、海藻雜海菜各三斤、坏十五口、缶三口、堝三口、明櫃二合、折櫃三合、匏三柄、庸薦各三枚、食薦四枚、柏六十把、輦籠一腰、稻三束、

右官預前祭申辨官請備、令卜部一人吉日祭之、十一月亦同、

〔延喜式臨時祭〕霹靂神祭

絹二匹、五色薄絁各六尺、倭文六尺、庸布二段、木綿八兩、麻四斤、鍬二口、鰒四斤、堅魚六斤、腊四斤、鹽四升、海藻八斤、雜海菜廿斤、米二斗、酒四斗、稻四束、缶瓮各二口、坏六口、水戸二口、鷄二翼、匏二柄、槲廿把、

食鷹二枚、與籠一脚、潔衣布一端、已上祭料、木綿麻各四斤、庸布四段、鍬四口、鹿皮四張、大刀四口、弓四張、矢八隻、米四斗、酒六斗、稻四束、鰒堅魚各六斤、腊六斤、海藻滑海藻雜海菜各廿斤、鹽四升、瓮坏各四口、匏四柄、食鷹二枚、已上解除料

右荒魂和魂各中分、並煮熟而祭、若新有二疹疐一者、依件祭移二弃山野一、

〔日本書紀二十天武　九〕四年四月癸未、遣二小紫美濃王小錦下佐伯連廣足一、祠二風神于龍田立野一、遣二小錦中問人蓋大山中曾禰連韓犬一、祭二大忌神於廣瀨河曲一、五年四月辛丑、祭二龍田風神廣瀨大忌神一、七月壬午、祭二龍田風神廣瀨大忌神一、

〔令義解二神祇〕孟夏風神祭、謂亦廣瀨龍田二祭也、欲レ令二沙風不レ吹、稼穡滋登、故有二此祭一、　孟秋風神祭

○按ズルニ、風神祭ハ廣瀨龍田神社篇ニ詳ナリ、又次ニ載セタル風伯祭ハ、風神祭トハ少シク異ナルモノナレドモ、其類ヲ以テ此ニ附載ス、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年六月十五日、戊剋於二由比浦鳥居前一被レ行二風伯祭一、前大膳亮泰貞朝臣奉二仕之一、祭文者、法橋圓全奉レ仰草レ之、是於二關東一雖レ無二其例一、自二去月中旬比一南風頻吹、日夜不レ休止一、爲二彼御祈一、武州〇北條泰時令申給之、將軍家〇藤原賴經御使、色部進平內云云武州御使、神山彌三郎義茂也、今年於二京都一被レ行二此御祭一之由有二其聞一、在親朝臣勤行云云、十七日、今日風靜、去夜風伯祭効驗之由有二其沙汰一、泰貞朝臣賜二御劒等一云云、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〇寛元元年七月十六日辛卯、戌剋泰貞朝臣依レ仰於二由比浦一勤二風伯祭一、春日部大和前司獻二祭料一、宮內左衞門尉公景爲二御使一、

〔吾妻鏡四十七〕康元二年〇正嘉元年七月十三日乙丑、入夜雨降、於二前濱鳥居邊一、任二寬喜例一被レ行二風伯祭一、天文博士爲親朝臣東帶奉レ仕之、御使足立左衞門大夫布衣祭文草給料廣範、清書左大臣法印嚴慧是爲二天下豐稔御祈禱一也、

鎭祭

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年六月十九日乙卯、於二濱鳥居邊一、天文博士爲親朝臣奉レ仕二風伯祭一、御使安藝右近大夫重親、今度依二御氣色一被レ用二舊祭文一云云、

〔延喜式三臨時祭〕鎭竈鳴祭

絹一匹、絲一絇、五色薄絁各四尺、綿一屯、布一端、庸布二段、倭文二尺、木綿麻各一斤、鍬二口、米酒各一斗、稻二束、鰒六斤、堅魚十一斤十兩、腊四斤六兩、海藻六斤、鹽三斗、瓮一口、坏二口、槲六把、匏二柄、食薦二枚、

鎭水神祭

五色薄絁各二尺、倭文二尺、木綿八兩、麻二斤、鍬四米、口四升、酒八升、稻四束、鰒堅魚各二斤、腊一斤十二兩、鹽二升、槲四把、缶二口、坏四口、裹葉薦二枚、布二端、庸布二段、

鎭御在所祭

絹五匹、五色薄絁各五丈、五色帛各五丈、倭文五丈、布六端、木綿麻各五兩、鍬十口、米酒各五斗、鰒卅六斤、堅魚六十九斤十二兩、烏賊十八斤、腊十三斤二兩、海藻卅斤、雜海菜卅斤、鹽三斗、瓮坏各五口、匏五柄、槲十把、輿籠二脚、席五枚、食薦五枚、簀五枚、

鎭土公祭

絹一丈、五色薄絁各四尺、倭文四尺、木綿一斤、麻一斤、鍬二口、布一端、庸布二段、米五升、酒五升、鰒堅魚各三斤、海藻三斤、腊二斤、鹽二升、瓮一口、坏四口、匏一柄、槲十把、食薦一枚、

鎭新宮地祭

金銀各五兩、銅鐵各五十斤、水玉五十枚、絹五匹、五色帛各五匹、倭文五尺、常布五端、庸布廿五段、木綿麻各五十斤、大刀五口、弓五張、矢五隻、鍬六口、鐮一口、鎌二丁、鹿皮五張、黃蘗五十斤、米五石、清酒五缶、各受三稻二百五十束、鰒五斤、堅魚五籠、別受十一斤、腊五籠、別受四斤六兩、海藻五籠、別受六斤、雜海菜五籠、別受六斤、鹽五

籠、別受二缶一斗一缶横瓮各五口、坏廿五口、匏五柄、槲五十把、薦十枚、絹衣二領、布衣一領、皂縵頭巾二枚、馬五匹、

〔續日本紀二文武〕大寶二年三月己卯、鎮二大安殿大祓一、

〔續日本紀四元明〕和銅元年十二月癸巳、鎮二祭平城宮地一、

〔續日本紀十七聖武〕天平二十年十二月甲寅、遣使鎮二祭佐保山陵一、度僧尼各一千、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年閏十月辛亥、令二太宰府鎮一祭管内諸國山岡崩壞之處一、

井祭

〔延喜式三臨時祭〕御井祭

絹一匹、五色薄絁各四尺、絲一絢、綿一屯、倭文二尺、木綿八兩、麻一斤、布一端、庸布一段、鍬二口、米酒各二斤、稻四束、赤小豆二合、東餅一斤、堅魚二斤、腊四斤、海藻三斤、鹽三升、韮二口、盌二口、坏二口、匏二柄、裏葉薦一枚、槲四把、輿籠一脚、食薦二枚、明衣料調布二丈、夫二人、

〔吾妻鏡脱漏〕元仁二年〇嘉祿元年十二月十七日癸卯、入夜於二新御所一御祭被レ爲レ行、〇中略井靈信賢、

産井祭

〔延喜式三臨時祭〕産井祭

絹一匹、五色薄絁各四尺、絲一絢、綿一屯、倭文二尺、布一端、木綿五兩、麻一斤、鍬二口、米酒各二斗、稻四束、赤小豆二合、東餅一斤、堅魚二斤、腊四斤、海藻三斤、鹽三升、盌坏各二口、韮二口、匏二柄、槲四把、裏葉薦一枚、庸布一段、明衣料調布二丈、輦籠一腰、夫二人、

御川水祭

〔延喜式一四時祭中宮亦同准レ此〕御川水祭

五色帛各二丈五尺、絁二丈五尺、綿五屯、倭文二尺、絲五絢、木綿麻各五斤、紙一百張、布五端、錢八十文、鍬五口、酒二斗、米糒各五斗、大豆小豆各一斗、糯米三斗、稻五束、鮭五隻、鰒堅魚各六斤、腊四斤六兩、鮭五隻、海藻八斤、鹽三斗、明櫃二合、坏五十口、食薦五枚、席薦各二枚、折櫃五合、輦籠一脚、槲一俵、匏五柄、

右〇中略御川水祭座摩巫各行事

○按ズルニ、本書本條ノ上ニ四月祭ノ四字ヲ脱ス、

高山祭
海若祭

〔延喜式三臨時祭〕御川水祭

絹四丈五尺、五色薄絁各六尺、布二端、倭文二尺、綿五屯、絲五兩、木綿麻各五斤、紙一百張、錢八百文、鍬五口、米酒糟各五斗、稻五束、大小豆各二升、糯米三斗、鰒堅魚各六斤、腊四斤六兩、鮭五隻、海藻八斤、鹽五升、明櫃二合、折櫃五合、坏五十口、匏五柄、槲一俵、輿籠一脚、席薦各二枚、食薦五枚、

〔侍中群要七高山御祭、於二大和國吉野山一祭、往還間、國司供給、給二所藤、海若御祭、於二攝津國難波海一祭、往還供給、國々勤レ之、

〔三代實錄十清和〕貞觀八年七月二日甲辰、大二祓於建禮門前一、發二遣高山祭使一、從四位下行大學頭潔世王、外從五位下行音博士清内宿禰雄行等、

〔本朝世紀〕正暦五年五月十六日丁卯、近來公家被レ勤二海若祭一、名山祭等、是又爲レ消二御疫癘一攘二病患一也、

〔小右記〕長和四年四月廿七日、高山海若等祭事、依二光榮上奏一所レ被レ行也、

山神祭

〔日本山海名物圖會〕山神祭

山の神は、山口に所をえらびて社を勸請す、神はおの〳〵の願ひによりて定りたることなしといへども、つねの日は、京大坂より芝居見せ物などを取よせ、いとにぎやかにいはひまつることなり、近邊の在々村々より、參詣の男女くんじゆすれば、物うり諸藝おほくあつまりて、其にぎはひ諸社の大神事にことならず、神前にてかならず神事すまふ有、近邊のすまふ取どもおほくあつまりてにぎやかなり、祭は九月九日なり、

〔俳諧歳時記十一月〕山の神祭　山林もちたる畿内の民、この月山の神を祭る、是火燒祭なり、山の神の社の邊の樹上、幣をきりかけ、神供をそなへ、燎火をたくなり、

〔改正月令博物筌十一月〕山神祭　所々山林にある事なり、木の上に四手を切りかけ、火を焚祭るをいふ、これも庭燎の餘風なるべし、

〔冠辭考六發〕とぶさたて　ふなぎゝる

田祭

万葉卷三に、譬喩歌二十五首の中、造筑紫觀世音寺別當沙彌滿誓が歌、
七に、家持越中國にて、旋頭歌、登夫佐多底船木伎流等伊布能登乃島山今日見者許太知之氣思物伊久代神備曾、こは宮材船材なぜを山に入て採とき、其切たる木の末を折て同じ株の邊に立て、山神を祭るをとぶさ立るといふなるべし、其ゆゑは延喜式に、大殿祭皇御孫之命乃御殿乎、今奥山乃大峽小峽爾立留木乎、齋部能齋斧乎以伐採氏、本末乎波山神爾祭氏、中間乎持出來氏云々、今も遠江の土人の大木を切ては其くひぜに同じ木の抄を折て立る事あり、右に本末を山神に祭といふ、卽此ぞとくして手向るならん、古き事は田舍に遺れる也、

〔令義解六儀制〕凡春時祭田之日、集鄉之老者、一行鄉飲酒禮、（謂鄉飲酒之禮、六十者坐、五十者立侍、所以明尊長也、六十者三豆、七十者四豆、八十者五豆、九十者六豆、所以明養老也、卽令鄉黨之人親自執禮於國郡司者、唯知其監檢也、）使人知尊長養老之道、（其酒肴等物、出公廨供、）

〔令集解二十八儀制〕釋云、唐令云、縣禘祭月集（○月集恐當作日集鄉三字）之老者、一行鄉飲酒禮、六十以上坐堂、五十以上立侍堂下、使人知尊長養老之禮、皆用酒脯、物出公廨、案祭田與禘雖名不同、原其所尊、但是先嘗、故一事以上准此施行耳、禮記、天子大禘八、伊耆氏始爲禘禘者索也、歲十二月而合聚萬物而索饗之也、禘祭田之日、謂國郡鄉里每村在社神、人夫集聚祭、若放新年祭歟也、行鄉飲酒禮、謂令其鄉家備設也、一云、每村社置神人、名稱社首、村內之人、緣公私事、往來他國、令輸神幣、或每家量狀取預造設酒、祭田之日、設備飲食、並人別設食、男女悉集、告國家法令、知訖卽以齒居坐、以子弟等充膳部、備給飲食、春秋二時祭也、此稱尊長養老之道也、穴云、集鄉之老者、謂不必謂一鄉也、假一郡之內隨便宜、往々有五六處耳、問案本令五十六十兩色生文、於此何、答文稱鄉飲酒禮、然則依禮習耳、但唐以六十爲老、於此令以六十一爲老耳、問於此令五十者若爲、答合勘禮、假言合五十人養六十以上、今五十以上人養六十以上人之道耳、跡云、祭田、謂每鄉村立社、人人聚集祭此、國郡加檢挍耳、朱云、

祭田未知何月可祭、若猶春時可祭耳、不見明文也、集鄉之老者、謂量便宜集耳、不見遠近並其數也、

〔禮記鄉飲酒義四十五〕鄉飲酒之禮、六十者坐、五十者立侍、以聽政役、所以明尊長也、六十者三豆、七十者四豆、八十者五豆、九十者六豆、所以明養老也、民知尊長養老、而后成教成教而后國可安也、

〔唐六典三十京兆河南太原諸縣〕每歲季冬之月、行鄉飲酒之禮、六十以上坐堂上、五十以下立侍于堂下、使人知尊卑長幼之節、

〔禮記註疏二十六郊特牲〕天子大蜡八、所祭有八神、（蜡八仕詐反、蜡祭有八神、）先嗇一、（先嗇三、郵表畷四、貓虎五、坊六、水庸七、昆蟲八、）司嗇二、（農一、）伊耆氏始爲蜡、（伊耆氏古天子號也、書巨夷反、或云、卽帝堯是也、）蜡也者索也、（謂求索也、）歲十二月合聚萬物而索饗之也、歲十二月、周之正數、謂建亥之月也、饗者祭其神也、萬物有功加於民者、神使爲之也、祭之以報焉、造者配之也、蜡之祭也、主先嗇而祭司嗇也、（先嗇若神農者、司嗇后稷是也、祭百種以報嗇也、嗇所樹藝之功使盡饗之、○中略）農及郵表畷、禽獸仁之至、義之盡也、（農田畯也、郵表畷、謂田畯所以督約百姓於井間之處也、詩云、爲下國畷郵、禽獸服、不氏所教擾猛獸也、古之君子、使之必報之迎貓爲其食田鼠也、迎虎爲其食田豕也、迎而祭之也、迎其神也、祭坊與水庸事也、水庸溝也、）

〔慈恵大僧正傳〕大僧正諱良源、俗姓木津氏、近江國淺井郡人也、○中略年始九歲、遊戲田中、于時國老有越州司馬雲貞行、祭田之日、成鄉飲酒之禮、家族群集、○下略

〔日本歲時記六十一月〕予が鄉國（○筑前）の農民、此月の初の丑の日、田神を祭るとて、酒食をそなへ、そのひもろぎをわかちて、男女あつまりて飲宴し、人に逐る事あり、是いつの比よりかはじまりけん、いざまらず、賤の男賤の女は、たゞ田の神とのみいひて、何れの神靈を祭るといふ事を志らず、予おもふに未耨をつくりて、始て耕作の事を教へ給ひしは神農氏なれば、今祭る所の田神も神農氏をいふなるべしされば神農は人身牛首といへば、丑の日に祭るにや、丑と牛と相通して用る

故なり、此月に此祭をする事は、農事終たる時なれば、その恩德を報ずる意なるべし、○中略此事予が鄕國のみにて、他所にはその事なきとかや、

遣外國使祭

〔延喜式三臨時祭〕遣蕃國使[一]時祭使還之日准此

五色薄絁各三匹四丈八尺、絁四匹、倭文二端、木綿十五斤、麻十五斤、布十六端、明衣料庸布六段、鰒堅魚各十連、鮭廿隻、腊十籠、海藻二籠、鮨二斗四升二合、鹽二升四合二勺、缶四口、瓶五口、坏二百口、槲二俵、白米二斗、飯二石、酒一石副[二]菜菎蒻[一]等、葉薦廿枚、

右擬[レ]發[二]使者[一]、總祭[二]天神地祇於郊野[一]、祭庭當國司掃[レ]脩其地[一]、又所司葺苫幷設[二]座席[一]、所[レ]須雜物神祇官申[レ]官請[一]、其酒肴等所司各儲會集祭所、神祇官率[二]神部等[一]並著[二]行祭事[一]、大使自陳[二]祝詞[一]、神部奠[二]幣訖[一]、大使已下各供[二]私幣[一]奠[二]神座[一]、神部執[レ]

〔續日本紀七元正〕養老元年二月壬申朔、遣唐使祠[二]神祇於蓋山之南[一]、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年二月戊子、遣唐使拜[二]天神地祇於春日山下[一]、去年風波不調、不得渡海、使人亦復頻以相替、至是副使小野朝臣石根、重修[二]祭禮[一]也、

〔延喜式三臨時祭〕遣[二]唐使船[一]木靈幷山神祭

五色玉二百八十丸、金作鈴四口、鏡四面、絲一絇、絁一匹六尺、綿一屯、五色薄絁各一丈四尺、倭文三尺、木綿一斤八兩、白米一斗四升、稻六束、酒一斗四升、鹽八升、鰒堅魚各六斤、海藻滑海藻海松雜海菜各八斤、已上用[二]酒盞六口、坏四口、匏三柄、柏廿六把、棚二前、已上常國物正稅[一]

使一人中臣氏

〔延喜式三臨時祭〕開[二]遣唐船居[一]祭住吉社

幣料絹四丈、五色薄絁各四尺、絲四絇、綿四屯、木綿八兩、麻一斤四兩、

右神祇官差使向社祭之

外國使送迎祭

〔延喜式八祕記〕遣唐使時奉幣

皇御孫尊乃御命以氐住吉爾辭竟奉留皇神等乃前爾申賜久、大唐留使遣佐牟爲爾、依[二]船居無[一]氐播磨國與理船乘止爲氐使者遣佐牟止所念行間爾、皇神命以氐船居波吾作牟止敎悟給比支、敎悟給比那我良船居作給部波、悅已備喜志美禮代乃幣帛乎官位姓名爾令捧賚氐進奉久止申、

〔延喜式三臨時祭〕唐客入京路次神祭

幣帛絁五尺、絲一絇、綿一屯、五色薄絁各一尺、木綿二兩、麻三兩、裹料薦四枚、已上幣前別所[レ]充差使二人讖內各一人並中臣、

蕃客送堺神祭

五色薄絁各四尺、倭文二尺、木綿麻各二斤、庸布四段、鍬四口、牛皮熊皮鹿皮猪皮各二張、酒二斗、米四升、鰒堅魚各二斤、海藻四斤、腊八斤、鹽四升、稻十二束、水盞二口、坏四口、匏二柄、薦二枚、蓴四圍、槲八把、已上祭料木綿四兩、麻一斤、酒六升、米四升、鰒堅魚各一斤、雜海菜二斤、腊一斤、鹽一升、水盞坏各二口、匏一柄、食薦二枚、槲十把、葦籠一口、杓一枝、夫二人已上祓料

右蕃客入朝迎畿內堺祭却送神、其客徒等比[レ]至[二]京城[一]給[二]被麻[一]令除乃入、

障神祭

五色薄絁各一丈二尺、倭文一丈二尺、木綿麻各十二斤、庸布八段、熊皮牛皮鹿皮猪皮各四張、鍬十六口、米酒各四斗、稻十六束、鰒堅魚海藻各八斤、腊鹽各二斗、水盞四口、坏八口、匏四柄、槲十二把、薦四枚、五色薄絁以下四所等分

右客等入京前二日、京城四隅爲[二]障神祭[一]、

〔古史傳二十四〕古の式に、外國人の參れる時と罷れる後とに、道饗祭とて久那斗之塞神を祭り給ふことは、參れる時の道饗祭は、外國人につきて來らむ蕃神を掃ひ、罷れる後の道饗祭は外

御靈會

國人の歸れる跡に、彼につき來つる蕃神の殘り留まりなむ事をおぼしての御祭なるは、此時の由緣によりて行ひたまふ神世よりの御式なるべく思ひ合さるればなり、

〔三代實錄清和七〕貞觀五年五月廿日壬午、於二神泉苑一修二御靈會一、勅遣二左近衞中將從四位下藤原朝臣基經一、右近衞權中將從四位下兼行內藏頭藤原朝臣常行等一、監二會事一、王公卿士赴集共觀、靈座六前設施几筵、盛陳花果、恭敬薰修、延二律師慧達一爲二講師一、演二說金光明經一部、般若心經六卷一、命二雅樂寮伶人一作樂、以二帝近侍兒童一、及良家稚子爲二舞人一、大唐高麗更出而舞、雜伎散樂競盡二其能一、此日宣旨開二苑四門一、聽二都邑人出入縱觀一、所謂御靈者、崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人、伊豫親王母、○吉子及觀察使○此間恐有二脫字一橘逸勢、文室宮田麻呂等是也、並坐二事被一レ誅、冤魂成レ厲、近代以來、疫病繁發、死亡甚衆、天下以爲此災御靈之所レ生也、始自二京畿一、爰及二外國一、每レ至二夏天秋節一、修二御靈會一、往往不レ斷、或禮佛說レ經、或歌且舞、今里閭之子靚粧馳射、脅力之士、袒裼相撲、騎射呈レ藝、走馬爭レ勝、倡優嫚戲、遞相誇競、聚而觀者莫レ不二填咽一、遐邇因循、漸成二風俗一、今茲春初咳逆成レ疫、百姓多斃、朝廷爲レ祈、至是乃修二此會一、以賽二宿禱一也、

〔諸社根元記上〕八所御靈

吉備大臣　崇道天皇光仁帝御子早良親王　伊豫親王崇道天皇御子

藤原夫人　藤大夫廣繼　橘大夫逸勢　文大夫宮田麿　火雷天神

清和天皇貞觀五年五月廿日壬午、於二神泉苑一修二御靈會一、○中略右勸請年紀不レ分明、

下御靈社者、八所內分氏神泉苑仁祭申也、

〔樵談治要〕神をうやまふべき事

八所御靈と申は、むかし謀叛をおこして、その心ざしをとげず、あるひは又何事にても、うらみをふくめる人の靈をまつられたる社なり、

〔雍州府志二神社〕下御靈社　在二京極大炊御門北一、斯社始在二近衞通新町一、上御靈在二京極西出雲寺之北一、上下御靈社、每年七月十八日御出、八月十八日有レ祭、神輿一基遊行、八所御靈所謂吉備靈、崇道天皇、伊豫親王、藤大夫橘逸勢、文屋宮田丸、藤原廣嗣、火雷神是也、世謂二火雷神一爲二菅神靈一者大誤也、傳言、御靈八所內、上四所桓武天皇時勸二請之一、下四所仁明天皇時勸二請之一云云、

〔神社覈錄三京中〕八所御靈宮上下二社

立入經德公、京師八所御靈第一吉備聖靈とは、吉備內親王なり、天平元年縊死し給ふ、今世吉備大臣と云甚誤なり、凡此八所皆怨靈を和め給ふに吉備公何の怨あるや、且崇道天皇の上に、人臣を位せんやと云れたる、皆卓見なるべし、續日本紀天平元年二月癸酉、令二長屋王自盡一、其室吉備內親王、子無罪、宜二准例一、送葬、但停二鼓吹一、中略長屋王者依二犯伏誅一、雖二准罪人一、莫二醜其葬一、中略吉備內親王、日並知皇子尊之皇女也、と見ゆ、されば序次も正しくて疑なきに似たり、

〔三代實錄清和十一〕貞觀七年六月十四日癸亥、是日禁二京畿七道諸人一、寄二事御靈會一、私聚二徒衆一、走馬騎射、小兒聚戲、不レ在二制限一、

〔明月記〕建永元年八月廿一日、今日稱二御靈一有二辻祭一、上邊雜雜人日來結構、去十八日式日、依二仰延引一、今日可レ渡二御棧敷云云一、出御以前、左右中辨左少辨相共參棧敷殿、俄而入御之後、出二南小門外一見之、中御門西洞院北行施種種風情、兩方祭渡之、各神輿渡二時許渡了、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年八月十八日庚申、終日雨降、八所御靈祭延引云云、十九日辛酉、雨休止、然而時々又時雨灑○中略今日御靈祭也、將軍家○藤原經於今出川殿一御見物間、渡物結構異例云云、

〔親長卿記〕明應七年八月十八日、御靈祭今日再興、但先々七月十八日御出御旅所、三十箇日御座、今月今日有二御歸一、但御旅所爲二野中一、先々在家亦也有二恐怖一、今日未刻許御出於二御旅所一、有二御神樂一、暫酉刻許有二御歸座一、杵平祭許無之十本許供奉、御輿前引二神馬一、如何無先規神主步行供奉畢、

〔日次紀事三月〕十八日上下御靈會　午後神輿二社出中御靈離宮、幸鉾八本、祭鉾八本、凡建鉾於床上、以棒二本四人荷之者謂幸鉾、是神寶內特尊崇之、又有膂力人、建鉾於帶間、以兩手捧持之而行、是謂祭鉾、則稱祭鉾、又一人竿頭捧道祖神假面、先神輿、此假面鼻長大、是俗稱王鼻、別當幷氏子等從行〇中略自京師所司所出之與力同心幷供奉雜色前驅〇中略自御旅所出京極西歷今出川下烏丸、自長者町歷室町入本社、下御靈神輿亦同時出拜殿、鉾五本、別當氏子幷雜色供奉如上、御靈之行列、神幸出京極、自椹町西歷東洞院西行、出水下室町、過二條上油小路下立賣東行、下東洞院歷椹町、自京極入本社、

紫野今宮祭

〔公事根源五月〕紫野今宮祭

これは疫病の神なり、正暦五年、長保二年天下さづかならざりし時、この神社をまつらる、藤原長能二首を詠じて奉りけるとかや、その歌後拾遺に侍るとぞ、

〔後拾遺和歌集二十神祇〕世中さはがしく侍ける時、さとのとね、宣旨にてまつりつかうまつるべきを、歌ふたつなんいるべきといひければ、よみ侍ける、

藤原長能

九日

白妙のとよみてぐらをとりもちていはひぞ初る紫の野に

今よりはゐらぶる心なしますな花の都にやしろさだめつ

この歌或人云、世中さはがしう侍けれども、ふな岡のきたに、今みやといふ神をいはひて、おはやけも神馬たてまつりたまふとなんいひつたへたる、

〔神祇官年中行事五月〕九日紫野今宮祭

幣物供神物等爲本官也、史生等之沙汰調獻也、幣供神物、本官史生持參也、

〔日本紀略九條〕正暦五年六月廿七日丁未、爲疫神修御靈會、木工寮修理職造神輿二基、安置北野船岡上、屈僧令行仁王經之講說、城中之人、招伶人奏音樂、都人士女賚持幣帛、不知幾千萬人、禮了送難波海、此非朝議、起自巷說、

〔日本紀略一條〕長保三年五月九日庚辰、於紫野祭疫神、號御靈會、依天下疾疫也、是日以前神殿三宇瑞垣等、木工寮修理職所造也、又御輿內匠寮造之、京中上下多以集會此社、號之今宮、

〔日本紀略一條〕寬弘二年五月九日丙辰、紫野御靈會也、東西二京條坊、十列細男已有其數、日者雨下、今日向晴、神明之驗也、三年五月九日庚戌、於紫野有祭疫神事、長保年中所始行也、世號之今宮祭、

五年五月九日戊辰、紫野御靈會、諸司諸衙調神供東遊走馬十列等參向、

〔百練抄後深草〕正元元年五月九日壬子、紫野今宮祭也、自院廳被騎獻馬長、此事中絕年尙、今年被興行、依疫疾御祈也、

〔諸社根元記下〕紫野今宮

延文四年四月社解云、當社大明神者、永承七年五月十九日、依神託被崇敬、加之每年五月五日祭禮之時、所被獻內藏寮幣也云云、

〔康富記〕應永八年五月九日丁酉、今日紫野今宮祭也、近衛西洞院獄門內構旅所侍所所司代又所司代長松奉行也、此所新儀也、先先神行之時、獄門外ニテ糟神供進之也、口獄門邊御旅所之由申之歟之間、如此門內構之條更無先規、隨而大判事章忠幷明宣等相付之處、獄門內旅所事、不存之由兩人共返答之、尤彼獄內者、四人樓舍之間、穢所爭可構之哉、不審不審、今年洛中地口ニテ、神輿造替也、凡此神疫神也、仍一條院御宇長保年中、於洛外紫野祭之也、勅宣歟之間、年中行事付之也、

〔百練抄近衛〕八壽元年四月、近日京中兒女、備風流調鼓笛、參紫野社、世號之夜須禮、有勅禁止、

〔倭訓栞中編二十七〕やすらい　今宮祭のやすらい花といふは〇中略やすらかなる意なりと四季物語に見えたり、鎭花祭の義に同じ、寂蓮自筆の歌、今宮神家に有、初めにやすらきたるやすらひ

紫野今宮夜須禮祭

しやと見えたり、

〔日次紀事一三月〕初十日安樂花（ヤスライハナ）　今日安樂花神事、辰刻許上賀茂南上野村土民、著烏帽子素袍、或又爲異體之粧、而各先聚一村之摠堂、倭俗村里中造一草堂、常使僧守之、有事則民人聚斯堂而謀之、是稱摠堂、自是先詣光念寺北上御壺社、各異口同音唱安樂花、大鼓幷横笛助其節、然後往大源庵北社下御靈社、各作踊躍、而後歸上野村摠堂、自是於第一庄屋前躍、畢各歸家、○中略又上賀茂梅辻岡本河上三箇村土民、詣今宮、各作踊躍如上野村、訖後各歸賀茂、則於社務及每社其之家作踊躍、到處其家主脫肩衣而與之、是爲期而務踊躍、是纏頭之徵意乎、傳言春時多疫癘行、今宮疫神也、故作踊躍勸神靈以祭之者也、或說是花鎭祭、而惜落花所無風雨者也、故唱安樂花云、

〔都名所圖會六〕今宮の社は紫野にあり、疫の神也、○中略彌生十日には、夜須禮祭つりとて、加茂上野の里人、烏帽子素襖やうのものを著、大刀をかたげ、笛を吹鉦鼓をならし、此社をめぐりて、やすらひ花よと囃しける、一說に、春陽の節はかならず疫の神分散して人を惱すなれば、當社をなだめ玄づめて、おそりを催すとなり、

〔夜須禮花〕やすらい花は、田樂の類なるべし、その始まるはじめは、近衛院の久壽二年四月、京中の兒女風流を盡し、鼓笛をならして、紫野社に參りしより事おこれり、（百練抄）その時勅有て禁止せられしかど、五六十年をへて、順德院の御宇に再びはじまり、（やすらひ花繪詞西行上人歌）三月十日ごとに絕ずして、上野村及び上賀茂川上梅辻岡本三ヶ村より、今宮の祭禮とて行ふ事になれり、（日次紀事、滯稽雜談には四加茂村上野村川上村と云ふ）其うたふ歌は、大嘗會の田歌のうちをとりてうたふなり、（橘窓自語）寂蓮法師筆の田歌の殘缺せるが今宮に在て、その日には社前にかくるといへり、（朝野雜記東海平維章）

朝野雜記

やすらぎたるやすらや

○此間數字虫損

はなやさきたるや

やすらいはなや

やすらいはなや

急

や、とみくさのはなや

や、とみをせばやなへ

や、とみをせばみくらのやまに

や、わなるまでいのちをこはゞ

や、ちよにちよやへや

や、このとのをやまへ

や、いはひてやまへ

や、いはしめてちよふる神の

や、みよとのにせんや

や、さけなへこなや

や、さけなへこなや

返

やさかうをたひに、とりたつなりや、たとりたつなりや、やよにきて、よひにきてねなましかは、やとりたゝましや、たとりたゝましや、いまおもひいでゝ、おならそはで、ねなましものを、いまおもひいでゝ、おならそたこひしや、

右之書今宮神主所藏、寂蓮法師眞跡也、三月十日掛二之社前一、氏人歌之舞踏、弘賢曰、是檜窓自語所レ謂みれば、美濃田歌の過半缺たるなり、殘缺なり、全本にあはせ

〔公事根源四月〕新日吉祭　卅日

永曆元年十月十六日、後白川院日吉の御體を東山の新宮にうつし申さるゝ、これを新日吉といふ、應保二年四月卅日始て祭あり、

〔百練抄七ノ二條〕永曆元年十月十六日、奉レ移二日吉御體於東山新宮一、同上皇〇後白河御願也、

〔雍州府志二神社〕愛宕郡

新日吉社　在二阿彌陀峯麓一

〔山槐記〕治承二年五月九日壬寅、今日新日吉小五月云云、法皇〇後白河自今熊野有二御幸一、右少將時家朝臣來語云、競馬有二五番一、一番左、左府生秦經文、右、右府生下毛野敦佐、二番左、右府生秦兼宗、勝、右、右番長中臣近武、三番左、右府生秦兼仲、右、右番長中臣重種、四番左、番長秦□□勝、右、五番左、右番長中臣□□秦兼澄勝、殿上人纏頭衣、或生、或練云云、多者練取云云、

〔明月記〕建永二年四月廿八日、公景來云、今朝未明向二新日吉一、各習禮、不レ可レ爲二人被一見由有レ仰、仍未明向也、今年小五月、下北面、左御隨身、右競馬御所近習西面、乘流鏑北面五位、可レ立二的由一有二仰事一、的立ハ流鏑也、然而爲レ嚴進有二此仰一、件裝束爲二刷欲一著二紅衣一、而其下可レ著二單衣一乎、予云、雖二夏著一衣、定事也、五月中旬隔著衣之比也著衣者可レ重二生單衣一歟、但於二此役一武士所從水干裝束也、單頗幽玄歟、惟重可レ宜哉、可レ問二有職人一歟、五月九日、今日新日吉小五月、貴賤競見、車馬馳奔、清貧不レ具、病氣窮屈、旁無レ興、小男令レ參二入道大臣殿御棧敷一、殊被二恣仰一、日吉以前參　秉燭以後歸來、當日事宗行行之、兼日頭辨競馬行事例二人也、刑部卿返事、念人ニハ依二所勞一不レ參、於二或人棧敷見物一、先流鏑、乍二七人一中二的中央一、すこしもかたよせず射わりて候き、裝束以下事は不レ及レ委記、競馬一番左信久、右兼澄、持、信久甚近儲追拔候しを、被レ取て馬二が中に兼澄一寢、信久とかくせためられしかどもはたらかで末までねいりて候き、先被レ召二右兩口三領一、左も同前二番信廣、久清同前を、久

追事外にいたしてめて淺猿く見候しほどに例の追付て、取組て融了、先召二左兩口一、衣同前三、番景賴久、久武兩度勝と見候しかども、持に侍定、四番助朝兼直、長乘無レ興、被レ追入、五番宣季、賴次、右其隔に追をくれて不便候き、左兩口三領、六番長繼、武守、右遠追一鞭之後、口引てわざとすると見候き、左片口二領、七番重列、行弘追勝、一領二番猶面白候き、其外無レ興、

〔百練抄十二ノ二〕建曆二年五月九日、新日吉小五月會、上皇〇後鳥羽御幸、

〔百練抄十四ノ四條〕天福元年五月九日癸丑、新日吉社小五月會也、先是有二豫議一、今月御忌月也、競馬事可レ有二憚哉一、御脫屣〇後堀河之後無二神社御幸一、初臨幸之條如何、被レ問二諸卿一云云、御忌月有二朝覲行幸一、至孝之禮與二敬神之儀一、可レ被二准據一、又非二御物詣之儀一、御見物之兩條、不レ可レ憚之由、人々被二申、仍有二御幸一、競馬已下如レ例、

〔葉黃記〕寶治元年五月九日辛酉、昨日雨降、巳剋以後天晴、今日新日吉社小五月會也、上皇可レ有二臨幸一、此社後白川院御建立、此神事每年御願也、承久三年以後、天福後堀川院有二臨幸一、其後又絕了、雖レ無二御幸一如レ形行之、然而不レ及二流鏑競馬一也、我君（後嵯峨）去年遂二此儀一、今日幸二社壇一、繼二絕跡一被レ行レ之、依レ雨及レ延否之沙汰、臨期快晴、神感之至ナリ、別有二御點一予可レ參之由殊有二勅定一、本自欲レ早參之間、辰一點自二御所一有レ召、蘊忠內奉仍倒レ衣先上二垂尻一、左右有二子細一、被二改仰一之、殿近衛眞武、子武廉爲レ番、自レ殿再三被二申止一、武、武廉聊有二恨氣一、後聞レ之云云、予以二御敎書一仰二兩將一了、又御幸間事等有レ被二仰合一事等、不レ能二委記一、漸臨出御之期、予前行參二社頭一、網代車略、角卷、令二牛童遣一之也、人々所爲不レ同、勾勘白襖狩衣、生裏分組、雖二少年一有レ所レ存之上、且就レ官表二此姿一也、右方念人依レ有レ催參仕、便速車、召二具共侍一、又用二意纏一入レ袋之持照二袴方一、御所西階、此階天福始被レ作之云云、暫徘徊二御弘庇邊一、勾勘著二松屋座一、殿上人左右相分催之人々多以參仕、先之攝政殿左府以下多參集、小時臨幸、御狩衣、八葉御車、中將爲氏、基具、顯方、腐友、景以下五六人、置供奉、大宮大納言爲二御車寄一、敷二上人寄之立一、屛風三品、又殿參二御車一、事大、弐內々奉行、前々或祇候、行事院司、殿上人纏頭衣、或生、或練云云、多者練取云云、

〔明月記〕建永二年四月廿八日、公景來云、今朝未明向二新日吉一、各習禮、不レ可レ爲二人被一見由有レ仰、仍未明向也、今年小五月、下北面、左御隨身、右競馬御所近習西面乘流鏑北面五位、可レ立二的由一有二仰事一、的立ハ流鏑也、然而爲レ嚴進有二此仰一、件裝束爲二刷欲一著二紅衣一、而其下可レ著二單衣一乎、予云、雖二夏著一衣、定事也、五月中旬隔著衣之比也著衣者可レ重二生單衣一歟、但於二此役一武士所從水干裝束也、單頗幽玄歟、惟重可レ宜哉、可レ問二有職人一歟、五月九日、今日新日吉小五月、貴賤競見、車馬馳奔、清貧不レ具、病氣窮屈、旁無レ興、小男令レ參二入道大臣殿御棧敷一、殊被二恣仰一、日吉以前參　秉燭以後歸來、當日事宗行行之、兼日頭辨競馬行事例二人也、刑部卿返事、念人ニハ依二所勞一不參、於二或人棧敷見物一、先流鏑、乍二七人一中二的中央一、すこしもかたよせず射わりて候き、裝束以下事は不レ及レ委記、競馬一番左信久、右兼澄、持、信久甚近儲追拔候しを、被レ取て馬二が中に兼澄一寢、信久とかくせためられしかどもはたらかで末までねいりて候き、先被レ召二右兩口三領一、左も同前二番信廣、久清同前を、久

之公卿早可著座之由有仰仍觸左府（此間左府殿徘徊弘庇邊、攝政祇候簾中歟）次第著御前座、左大臣（西面、前內大臣、平禮衣、東、堀河大納言（具、東、實、中宮大夫、隆親、平禮衣香帷、中院大納言（通忠、事始之後參著西上、花山院大納言（定雅、大宮大納言（公相、權大納言（實雄、土御門大納言（顯定、吉田中納言（爲經、土御門中納言（顯親、別當（通成、平禮衣、東、菜子東可著東座之、昨日內々以仰事次有勅定、仍各存知之、）久我三位中將（雅光、土御門三位中將（顯方、著西座而此一身不然如何、大貳（惟忠、西已公卿等左少辨兼相兼之、兩府雖有催稱所勞不參、頭中將雅家朝臣（東帶、著西座公卿末、資子座無所之間、著弘庇北面例、今度任舊、御共殿上人出東簀子邊見物、上北面輩以忠以良等朝臣以下六七人參會於西立蔀邊、見物、下北面輩列居御所東方（立蔀柴垣東棧敷東面西上、御隨身主典代廳官等、當松屋末候埒邊、御所西砌敷紫端帖二枚、爲奉行將座、當松屋前副持立大鼓鉦鼓、其後敷紫端帖二枚、御所東南立假屋、爲進物所、檢非違使左大夫尉盛長左尉藤信繼等、候馬場上下守護之、盛長候埒北門西邊、信繼候馬場末埒北、各烏帽子白襖、此外武士等警固、凡見物之上下狼籍、前相國相模守重時朝臣於棧敷見物云云、奉行院司左少辨時繼東帶持笏進居砌下奏事具由著奉行將行事召行事將、下給競馬番文、二通（書高檀紙、左右各一通、今朝出御所、內々能書之、○中略）番文左大臣給之、披見之後先給左、行事將中將家定朝臣下給之、進砌次給右、行事中將定平朝臣（御供渡、此事前召範忠、今書之、後烏羽院御時、父清範候）前最前有之、今日遲遲歟、此間卿相北向居直廻御馬、（乘尻等引之、入中門、即引出之、御厩舍人居飼引之）歟、神輿出御中門、（社司所司等著廊砌座、）供神饌、（有傳供）里神樂、（兒數人、巫女座、）此間道張舞（王舞是也、可爲臨時之由前內府依有下知也、）師子舞田樂舞本新兩座、施曲渡馬場、次有流鏑事、承久以往北面西面輩騎之、天福武士騎之、今度同被仰遣關東相模守重時期臣、（射手逸見四郎的立、）小笠原（射手的立、）出雲前司（射手的立、）隱岐次郎左衛門（射手的立、）但馬次郎左衛門（射手的立、）小早河美作前司（射手的立、）等也、依關東下知騎之、射手先上馬向神輿次立一番、（持一的參進立之、次有作法、）打歸乘替馬射之、二番無笠之作法、又的立不持弓、三四五六番同前、七番射手作法如一番也、七番皆以射中之誠不異養由歟、凡此輩自身云郎等、採錦繡或金銀、法度之外

也、此後時繼歸著念人座、左右行事將著座、左右乘尻渡御前、（番次、先左七人、次右七人、以上御馬、今度經垣中、先居飼御厩舍人前行、）此間前兵衛佐行家朝臣（平禮簿色織襖狩衣白帷簿色奴袴、）進立大鼓下、（著沓立疊上、先令鼓官爲之、）少納言基時進居鉦鼓下、

一番（左、院右府生秦滋躬、右、左府生秦弘員、）

兼躬儲弘員追取之、共越埒、於埒外共落馬、先召兼躬自埒南上、御馬參上、左衛門佐季範侍從公仲、取馬口繩頭三領、（內藏頭隆行、右馬頭盛宗、少將爲教等朝臣、）次召弘員、（依爲右、經垣北自西參進、）纏頭一領、（中務大輔爲繼朝臣○中略）

七番（左、右番長下毛野武清、右、攝政左近衛下毛野武廉、）

武廉其身有瑕瑾輩聊有申旨、然而猶入乘尻、而申御馬障之上依夜景被略畢、

卽還御　神樂又入御

諸國所課（奉行兩將催之）

左

水干　袴　合袴　酒肴（伊與）

右

水干　袴　合袴　酒肴（讃岐）

御厩舍人裝束（自身出立）

居飼裝束（同、但自御厩少給、用途友景沙汰之、○中略）

雜事等、後日奉行主典代重俊注進之、仍注加畢、

柱松事　社家沙汰解怠畢

新日吉小五月會事

一御所修理並舖設事（春日部庄役　社家沙汰）

一念人松屋事七間、社家立之、今度以幔覆之
一切立松事
一召松葉所所
　稻荷社五十把　清水寺五十把　太秦同
一所所借物
　幔
　　殿下御所十帖　前太政大臣家十帖　鴨社十帖
　疊
　　法勝寺七帖　尊勝寺十帖　最勝寺五帖　今熊野四帖
　　陵王裝束一具　甲一　鉦鼓一面
　　以上道張料
一自御所被渡物
　御屏風二帖　御几帳三帖　御打敷一枚　御樋臺
　　右社家仰細工所令修理
一大鼓鉦鼓事
一埒事
　左右衞門府送柴　左右兵衞府結之
一御馬駈事
　四月廿六日

一番賀茂氏人重通鵜毛　一番御厩一、鵜毛、
同廿八日　一番若狹鵜毛　一番左衞門尉爲元鹿毛　一番御厩小鹿
當日不引之　儲番左衞門尉景綱糟毛　一番御厩七、川原毛、
一番友景進鴾烏　一番伊與白雲
一番河波鹿毛駁　一番丹後九駁
一番河合禰宜祐俊黑

此外賀茂競馬番、一番被召渡之、

一掃除敷砂事社家沙汰
一人夫事鳥羽殿、今度置前三箇日、被召進十人、
一弘筵事召國國
一伊豫二枚　讃岐一枚　備前一枚
一日隱事年預別當
一長櫃事別納所
一御神事社家沙汰
　神輿　御幣　祝師　八女　師子　道張　神寶　田樂二座本座裝束社家沙汰、新座裝束廳儲、　神馬唐鞍在社家
　　鑓裝束廳借渡之
一乘尻裝束左右奉行將催之
　左方
　　水干
　　河內一領　飛驒二領　陸奥一領　因幡二領　阿波一領　對馬一領
　　袴
　　伊豆二腰　下總一腰　近江二腰　上野一腰　出雲一腰　日向一腰
　合袴

常陸一腰　信濃二腰　加賀二腰　丹後一腰　大隅一腰
酒肴
伊豫
右
水干
下野一領　出羽一領　相模一領　武藏一領　筑前一領　肥後一領　紀伊一領
袴
備後一腰　安房一腰　薩摩一腰　美作一腰　上總三腰
合袴
若狹一腰　越前一腰　參川一腰　尾張二腰　石見一腰　伊賀一腰
酒肴
讃岐
一流鏑
一番　相模守重時朝臣
　射手　逸見四郎源義利
　的立　櫻井左衞門尉滋野宗平
二番　小笠原太郎入道長經
　射手　同余一太郎源清經
　的立　土持左衞門太郎田部秀綱
三番　波多野出雲前司宣政
　射手　千次郎左衞門尉藤原盛忠
　的立　波多野藤左衞門尉藤原廣能
四番　佐佐木隱岐次郎左衞門尉泰清
　射手　子息新左衞門尉源義重
　的立　樋口左衞門尉藤原忠繼
五番　太田二郎左衞門尉政正
　射手　子息太郎大江政綱
　的立　得田左衞門尉藤原盛助
六番　小早河美作前司
　射手　子息四郎平政景
　的立　高橋新左衞門尉大宅時光
七番　長井左衞門大夫泰重
　射手　菅生左衞門次郎小野高泰
　的立　新河右衞門尉藤原高重

一御棧敷供御事社家用意候造二供御所一

〔仁部記〕建長八年五月九日己亥、午後甚雨、新日吉小五月會、御幸〇後嵯峨如レ例、雖二甚雨一事已始之間、流鏑競馬等猶有レ之、奉行院司邦經朝臣、競馬次將左方中將公直朝臣、右方同公蔭朝臣等也、而公蔭朝臣去夜遭二父喪一、亞相禪門日來所勞云云、長病之間猶奉行之處、去夜俄遂以、服籠居之間、其替中將忠繼朝臣俄奉行、旦本自念人領狀內也、內裏女房兩三依レ召參御棧敷云云、予不二出仕一、雖レ有二其催一、隨身碌碌、身全無指要一歟、仍祇候內裏、

〔雍州府志二神社〕褐速神社　在二猪熊三條南一、昔刑部省在二斯邊一、斷獄以行二死罪一、故爲二刑死人一建二斯社一、修二祭祀一而薦レ之、每年八月有二神事一、謂二死杖祭一或又謂二活速祭一、一說千本引接寺並壬生地藏寺每春所レ修之念佛會、元是爲二刑死人一所二執行一也、

〔諸國年中行事一月〕中午　京千本焰魔堂念佛、千本通りの北蓮臺寺の南に有、光明山引接寺と號す、寺領七石七斗、新義の眞言宗也、當寺に普賢象の櫻の名木あり、每春花の盛りには枝を切て所司の廳に獻上す、卽ち米三石餘を給ふ、是を資料として花鎭の融通踊躍念佛を初めさまざまの狂言をなす、是は古へ刑部省に活速祭とて獄屋の罪死せる者どもをとぶらはれしそ

死杖祭
活速祭

太秦牛祭

の遺法也、文永の比如輪上人始めて執行はる、日よりの日ばかり十日が間なり、

〔倭訓栞前編四宇〕うしなつり　山城太秦桂宮院の中に祭る所の大辟神社は秦氏の祖先なり、九月十二日祭の前夜、牛の一頭に多く繩をつけ、承仕ごときの僧に紙の烏帽子をきせ、紙の假面をし顏を覆ひ、繩もて腹を卷て、彼牛に乘て、所の民これを牽て祠を廻る也、是は列異傳にいふ、秦文公の立られたる陳寶祠の事に據たる成べし、垂仁紀比賣語曾社神の事並按ずべし、

〔廣隆寺來由記〕大酒大明神者、秦始皇之祖神也、仲哀天皇御宇、功滿王來朝而奉迎之、神異不爲不多矣、以故朱雀院御宇授從三位、同御宇天慶四年辛丑五月十五日授正三位、後冷泉院御宇天喜三年乙未十一月廿日授正二位、同御宇治曆四年戊申四月廿五日授正一位、宣旨在寺庫、

〔大日本史神祇八〕大酒神社

按史記注云、秦文公嘗伐南山大梓、有一青牛、自斷中出、走入豐水、其後牛出水中、乃使騎被髮擊之、牛畏之入不出、因立怒特祠於武都、圖大牛上生樹云、牛祭或傳其故事也、

〔日次紀事三九月〕十二日太秦廣隆寺牛祭　於上宮王院庭修之、寺僧各集會、相傳慈覺大師歸朝日、祈順風於麻多羅神、歸山後勸請此神於叡山麓赤山、太秦亦有此社、故寺中今夜神事、亦祭麻多羅神者也、寺中行者著紙衣乘牛、出上宮王院前、高聲讀誦祭文、悉懺悔之詞、古寺僧交勤之、然其事以戲謔近世使行者修之、法會終後門前有相撲、

〔都名所圖會四〕九月十二日太秦牛祭

聖德太子はじめて執行ひたまひ、祭文は弘法大師の作り給ふとなんいひ傳へ侍る、

每歲九月十二日夜戌の剋に、牛祭の神事あり、當寺の僧侶五人、五大尊の形に表し、異狀の面をかけ、風流の冠を著し、大刀を佩、壹人は幣を捧て牛に乘、四人は前後を圍、從者は松明をふり立、行列巍巍として、本堂の傍より後へ巡り、又西のかたより祖師堂の前なる壇上に登り、祭文を讀、此文

法古代の諺を以て述る、甚奇にして諸人耳を驚さずといふ事なし、

〔太秦牛祭畫卷〕謹請再拜、謹啓須維南贍部州大日本國應永九年無射十二乃天、朝日乃豐登里、夕日乃豐降里坐須中仁、銀仁花榮、金仁實結、天門開支開介天、地戶和合之留多今夜、當寺乃當僧四番大衆等、誠乎二花乃嶺與里高之、志乎五葉乃底與里深之天、恒例不闕乃勤止之摩吒羅神乎敬祭之奉留事安里、神明乎祭留波、超福乃計古止、靈鬼乎敬布波除災乃基也、上波梵天帝釋四大天王、日月五星、廿八宿、七曜九曜、三辰九禽、下波炎魔王界、五道乃大神、泰山府君、天左宇司命司祿、別天波當所鎭守三十八所、五所護法飛來天神、部類眷屬、總天波日本國中乃大小乃神祇、田中仁波安良禰土毛稻積、片山仁波安良禰土毛榎本椙本木加良之藤乃森、嵯峨乃奥奈留一擧打禮波、天鑒加天宇左以辻辻乃道祖神、家家乃大黑天神乃袋持仁至留迄、驚之言而白久、夫以婆、性乎乾坤乃氣仁受介、德乎陰陽乃間仁保知、信乎專仁之佛仁仕月、愼乎致之天神乎敬比、天尊地卑乃禮乎知里、是非得失乃科乎辨留、是偏仁神明乃廣恩也、因玆單微乃幣帛乎捧天、敬天以天摩吒羅神仁奉上須、豈神乃恩乎蒙良左留邊介牟哉、因玆四番大衆等、一心乃懇切乎抽天天、十列乃儀式乎學比、萬人乃逸興乎催須乎以天、自耳神明乃法樂仁備月、諸衆乃感嘆乎成乎以天、暗仁神乃納受乎知牟止也、然留間柊槌頭仁木冠乎戴支、久波比良足仁舊鼻高乎絡付縅牛仁荷鞍乎置支、痩馬仁鈴乎付天馳毛有里、踊毛有里、或波鞍爪仁大間乎詰天仁加美、或波荷鞍仁尻瘡乎摺剝天悲毛有里、企波誠仁十列乃風流仁似太里雖止毛、體波唯百鬼夜行仁異奈良須、如此等乃振舞乎以天、摩吒羅神乎敬祭之奉留事、偏仁天下安穩、寺家泰平乃爲也、因之長久遠久拂比退久部支者安里、先三面乃僧坊乃中仁忍入天、物取留世古盜人女、奇怪須和以布和以也小童止毛、木木乃奈里物取禮止天、明障子打壞留骨奈左法師、頭毛危波覺留、扨波安多腹頓病、風欬嗽、疔瘡、癰瘡、鬧風、殊仁尻瘡、蟲瘡、膿瘡、安布美瘡、冬仁向尸留大脈（カヽリ）拜仁、脾（ヒヽ）咳病、鼻多里、癌心地癲狂（ブヘリ）、擇食、傳死病、加之鐘樓法華堂乃加波津留美、讒言仲人鬪諍合乃中間言、貧苦男乃入多介里、無能女乃隣行（トナリアルキ）、又波堂塔乃檜皮喫貫大

筑摩祭

烏小烏女、聖教破留大鼠小鼠女、田乃畔穿土豹、如此異類異形不道無懺乃奴原仁於天波、長久遠久根乃國底乃國迄拂退久戸支者也、

右九月十二日太秦廣隆寺牛祭祭文也

惠心院源心〇心恐信誤僧都

應永九年九月十二夕日書之

この祭文のはじめに應永九年とあるは、祭文をつくりし時をいへるにあらず、年年の神わざに、そのをり〳〵の年號をかきくはへたりとおぼしければ、應永につくりしものとおもひ誤る事なかれ、またこのゝちへにのする應永九年は、書寫せし時をゝるせしなるべし、

平由豆流誌

〔八雲御抄三下〕つくまの神近江神也、彼祭なべたてまつる也、

〔八雲御抄四由緒言〕つくまのなべ是近江つくまの明神祭に、男のかずになべな土にてつくりたてまつるといへり、

〔倭訓栞前編十六〕つくまのまつり　文德實錄に、近江國筑摩神と見ゆ、今ちくまといへり、坂田郡筑摩莊は、大膳職御食津神を祭れり、西宮記には內膳筑摩御厨とも見ゆ、扶桑略記に廢筑摩御厨と見えたるは後三條院の時也、

〔伊勢物語下〕むかし男、女のまだよへずとおぼえたるが、人の御もとに、ゝのびてものきこえて後ほどへて、

あふみなるつくまのまつりとくせなむつれなき人のなべのかずみむ　〇又見拾遺和歌集

〔和歌色葉集〕同物語〇伊勢物語に

あふみなるつくまの祭とくせなんつれなき人のなべのかずみん

あふみつくまといふところにおはする神なり、かの神のまつりに、御誓としてかのところの女のをとこしたるかずに、土鍋をつくりてたてまつる也、其かずをはぢてたてまつる女は、其年のものゝあしければ、大きなるなべをつくりて、其中にちいさきをいるゝとかや、はや〳〵せよといふなり、或說に云、かの所の女、男のかずあまりおほくして、みぐるしかりければ、大なるなべをつくりて、其中に小鍋をかずのまゝにつくりあつめて入て、ふたをしてたてまつりたりければ、神の御前にてのとを申時その鍋われて、かずことゞくみえける、なほ神のちかひのおそろしきにいひつたへたりと云云、

〔神社啓蒙六〕筑摩神社　在近江國坂田郡也、所祭之神註左、

御食津神

按、筑摩庄大膳職御厨之地也、運送色目載在延喜式等、故以當職所祭之神祠此地歟、蓋此神依掌稻食而里女爲婚、則祭祀必戴釜鍋奉神矣、不幸於少壯之間爲孀也、則不得已而改嫁焉再嫁者用二枚三嫁者用三枚、候神幸之後也、中世做業平之花詞、里婦嚮笑饗重數枚爲艷態之故也、固可盧胡也哉、

〔諸國里人談一〕筑摩祭

近江國湖のひがし、坂田郡の濱邊旦妻（アサツマ）といふ名所の南十餘町を過て、筑摩の庄あり、此村の明神の祭は、四月午の日なり、その村の女をとこに會たる、その男の數はゞ土鍋を作りて、板にとりならべ、いたゞきて、まつりの庭は神輿の殿につゞきて、わたる也、もし男に會たる數をかくす時は、たちまち神罪をかふふるとかや、是すなはち罪障懺悔せしめ給へる此神の方便なりとぞ、むかし淫婦ありて、おまたの男をせし事をはぢて、大きなる鍋ひとつをいたゞき、をとこの數はゞ小鍋をつくりて、大鍋に入子にして、人目をかくせしかば、神慮にそむきてころびしに、おはくの小鍋くづれいでゝ恥みたりけるとぞ、中ごろは常の鍋をいたゞきてわたりしが、それも絶はてゝ、神

まつりもなきがごとしといへり、所の人はちくさまといふ也、ちとつは五音相通也、八雲御抄には

つくさまとあり、

〔諸國會年中行事大成三上四月〕八日筑摩祭　近江國坂田郡にあり、祭神御食津神、

當社の祭式、往古は四月朔日にして、雜和集にいへる如く、村婦各其男に逢たる數に應じて、土の鍋を戴き、祭祀に供奉せしとなり、今は今日十二三歳ばかりの少女、各下髪に狩衣緋の袴の如きものを著し、紙をもつて造りし鍋を戴き、手に鍋取を提る者十二三人筑摩の里より出て、四五町ばかりなる本社に詣て、未の刻ばかり神輿渡御の供奉をなす、此時村中壯客、遙物を裝て其後に從ふ、是を見むため遊人群をなし、或は湖上に數百の舟を泛べ、船中よりこれを見る、是亦一時の壯觀なり、

〔後拾遺和歌集十雜二〕御わがものゝなべをもちて侍けるを、大ばん所より人のこひ侍ければ、つかはすとてなべにかきつけはべりける、

藤原顯綱朝臣

おぼつかなつくさの神のためならばいくつかなべのかずはいるべき

〔清輔朝臣集〕寄社戀

夜とゝもになみだをのみもわかすかなつくさのなべにいらぬ物ゆゑ

〔散木弃歌集六神祇〕いろなる人のきたしき人人をかぞへけるに、そのかずにもいらざりしこそおもはずなりしかと、人のいひけるをきゝて、

いかにせんつくさの神もうづもれてつみせんなべの數ならぬ身を

〔八雲御抄四由緒言〕うさかのつえ（是は越中國うさかの明神祭日、榊木して女の男のかずに、誦宜脱字）をうつ事也、彼祭をばおりだちの祭といふ、

鵜坂祭

〔神名帳考證越中〕鵜坂神社　今在二鵜坂村一

〔倭訓栞中編三字〕うさかのつえ　越中國婦負郡卯坂明神の故事也、近江筑摩の祭の如し、其祭日に神人祝詞を宣る時、一郷の女子に其年あへる男の數をいはせ、杖をもて女の尻を打といふ、其杖は賢木のえもと也、よてえもとだちの祭といふ、俗には尻打の祭といふ、

〔和漢三才圖會六十越中〕鵜坂川　同森有二社號一鵜坂明神一祭禮神主用二榊枝一打二婦女一、但多少隨二所一レ觸男夫之數一、猶二江州筑摩祭被鍋之類一、

〔散木弃歌集六神祇〕春宮大夫公實の許にて、戀の心を、

いかにせんうさかのもりにみはすとも君がえもとのかずならぬ身を

〔神社啓蒙六〕和布苅神社　在二長門國下關赤目一、所レ祭之神一座、于今除夜夜半、必俟二海潮之退一而苅二海底之和布一奠二神也一、故有二此名一、

彦火火出見尊瓊瓊杵之子

和布苅垂跡之神未考之、今隨二林氏之神社考一云、按每歲除夜、夜半必俟二潮滿之退一而神官一人秉レ炬火一、苅二海底之和布一奠二神也一、非二言依一神官之入一レ海而潮之退也、

〔神道名目類聚抄五祀〕和布苅神事、長門國赤目關波夜度毛社ニアリ　十二月晦日ノ夜丑ノ刻、潮ノ退ヲ待テ、神官海底ノ海布ヲ苅テ、明ル元朝神前ニ備進、故ニ俗ニ和布苅ノ神社ト號ス、長州ノ人曰、和布苅ノ神事、當國龜山八幡宮ニモアリ、社モ海邊ナリト、波夜度毛社ト相向テ、其間海上二里許アリ、互ニ社頭相見ユ、龜山ノ社モ和布苅同日ナリ、猶委コトハ龜山ノ方ニアリトゾ、

〔諸國里人談一神祇〕和布苅

豐前國門司關早鞆明神の宮前は海なり、これに石の階あり、常に二十階ほどは水中に見えて、その先はえらず、毎年十二月晦日の子過丑の剋の間に、社人宮殿の寶劒を胸にあて、石階をくだ

和布苅神事

りて海中に入、その時潮左右へ颯とひらけり、海底の和布を一鎌かりて歸る也、もし誤て二鎌かれば、潮に溺るゝの難あり、此時は社頭民家の燈火、海上掛り船の火、ことゞくこれを消しその剋限の前半時ばかり、浪大きに立て海わらし、海底に入らんずるとおもふころ、をばらく浪をづまりて、又前のごとく半時が程は海あるゝ也、元朝件の和布を神前に備ふ、又帝都へも奉なり、これを和布苅の神事といふ、當社は龍神の屬にして、神功皇后三韓退治の時、干珠滿珠を持來りて船を守護し玉ふ也、その頃皇后孕らせ給ふなれば、軍の中に降誕あらばいかゞならんとわづらはせ給ふに、此神和布を獻じすゝめ給ふに、三とせを經て征伐し給ひ、歸朝の時、筑前の箱崎にて御降誕ありけり、應神天皇是也、

此和布を食する者は萬病を治す、疫癘は立所に愈可貴、

淺草三社柏板祭

〔紫の一本下〕祭禮　淺草觀音寺内三社權現の祭、三月十八日也、是も隔年行はるゝ、此三社權現の祭りは、花園院の御宇正和元年、神託によつて始る也、

〔東都歲事記一春下〕三月十七日淺草三社權現祭禮　今明日執行、世俗誤て觀音祭といふ、諸國に名たかし、花園院正和元年神託に依て始りしとぞ、今日本社にて、一山衆徒法樂修行あり、神輿三基を本堂に遷坐なし奉り、向拜の元に舞臺を儲け、未刻に田樂あり、前駈鎗十筋、次に柏板（ビンザヽラ）三人、大鼓二人、笛一人、大大鼓獅子頭二ッ、列をなして本坊より出、本堂の西を廻り、三社の前より本堂の前に補理ひたる舞臺に登り、初めに男獅子、次に女獅子、次に雌雄の獅子頭一度に舞ひ、夫より田樂のをどり終りて、雷神門を出で、山の宿に終る、此神事に出るもの、何れも舊家なり、六月十五日に同じ、世に柏板（ビンザヽラ）のまつりともいふ、

〔東都歲事記二夏下〕六月十五日淺草三社權現祭禮　今日未刻田樂踊あり、五人の舞人烏帽子直垂を著し、色色の面を被り騎馬にて先に立、次に神事舞大夫の頭田村何がし、烏帽子狩衣にて幣を持

付添、次に田樂の舞人柏板持三人、笛吹一人、大鼓打二人、いづれも絹笠を冠る、次に大大鼓等列をなし、本坊より出、本堂の前に構へたる舞臺に登り、柏板踊あり、事終りて騎馬の者馬より下り、三平二滿女の面をかむりたるもの舞をなし、その外かはるゞ〳〵舞て、末に三人大刀を拔持て舞ふ事あり、この馬は舊例にて三河嶋より出す、田樂の舞人囃し等に出るもの各舊家にて、そのかみ觀世音出現の時、蓁を結びて安置せし十人の草刈童の末なりといふ、この神事は鎌倉の右大將再興なし〳〵しと云傳ふ、

王子神社柏板祭

〔江戸名所記七〕金輪寺　豐嶋郡王子村禪夷山金輪寺東光院の社は、若一王子の宮なり、これ熊野權現の別當たり、元龜元年に熊野を此所にくわんじやうあり、中興東照權現ふかく御歸依ありて、社領二百石を御寄附ありけり、それよりこのかた代々の御朱印あり、寛永十一年きのえ戌、將軍家家光公御さいこうなし〳〵けり、このとき儒官羅浮氏道春、宮社の緣起をつくりて社頭にをさめられたり、〇中略七月十三日に祭禮あり、見物の貴賤はなはだ多し、〇又見二江月鹿子一

〔江戸砂子三〕王子王子神社　毎年七月十三日祭禮あり、寺中の十二坊より、おどり出也、是熊野祭禮にうたひまひて祭るといふ遺風なるべし、

〔東都歲事記三秋七〕七月十三日王子權現祭禮　別當金輪寺、寺中十二坊より、田樂踊り十二番を出す、俗にびんざゝらの祭と云、古しへは若一王子の典藥踊と云しよし、江戸砂子に云り、太田南畝子の武江披沙に、典藥にあらず典樂なりと、左もあるべきか、參詣の輩神前に小さき鎗を納め、先に餘人の納る所の鎗と取かへて家に收め、火災盜難除の守とす、翌年此鎗に一本を添て奉納す、故に又やりまつりともいふ、十二日未の刻に、おどりのならしあり、當日は午の刻なり、當日は群集多きが故委しく見る事あたはず、踊の古雅なるを見んとならば、この日に詣づべし、今日掛るとこ

ろの躍りの番付は、赤井得水の筆なり、その式は次に記せる田樂の記に讓る、踊の名目左の如し、

一番中門口　二番道行腰笹　三番行逢腰笹　四番背摺腰笹　五番中居腰笹　六番三拍子腰笹　七番默禮腰笹　八番捻三度　九番中立腰笹　十番搗笹腰笹　十一番笹流　十二番子魔歸　以上

醉竹老人王子田樂記にいふ、氏子どもさはやかに出立たる十餘人、色どりたる竹の鎗を持、どよめき渡りて拜殿の御前に來り、南北にわたりて、いやみたゝかふさまは、神軍の餘波なるべし、ては竹鎗うちおきていぬるを、物見の人どよみわたりてとる、いとらうがはし、とばかりありて、物の具したる法師、破竹を杖にして御先おふに、水干に大口きたる兒二人、素袍烏帽子きたるおまた具して、御寺の大德、金襴の袈裟に襟たてし衣はなやかにさうぞきてねり出たまへるいとたうとし、社頭にやをらのぼり、御神にぬかづきて、椽上に坐し給ふがほど、白張著て立傘もたる者、御寺より走り來りて、社頭に向ひ、いみじくけいめいし、また御寺に入る事あまたたび、これなむ七度半の使とて、神軍のまねびなりとぞ、其後物の具したる法師二人、一人は白幣に、一人は半月に薄のさし物し、いかめしき劍大刀七ふり、おの〳〵左右におびて（長刀を持）さもことやうに出立たる跡より、ささの兒のさうぞくに瓔珞だつかづきものゝ作り花さし笹（ササラ）手に持たる舞人八人、拜殿にねりのぼりつゝ舞ふ樣、いとこだいなり、はやし物は笛大鼓のみにて耳なれぬ拍子とり、おの〳〵いりちがひをどるめり、（中略）中に七十ばかりの翁、おぼそうの老人には似ず、いようねこなるが、あまたゝびめでかたぶき、涙をさへおとすに見る人いと興ある翁かな、かゝるものめでする眼に、大江戸の二つのまちなるわざおきて見せましかば、いかにほれまどひぬべしとあざむを、きゝもえらぬさましたるが餘りに心にくければ、さしよりておのれらも田樂てふもの、けふなひはじめて見はべる、いとこだいなるものにぞ翁は度度見給ひつらめといへば、ほゝゑみて、往昔もろこしのかしこき帝さへ、古樂をきゝては眠らん事を思ふとの給ひしなれば、いまやうにのみ耳なれし大江戸人、見どころなくおぼされんはことわりなり、翁はよの儀羊をしむなり、都には猶神樂催馬樂東遊曲などいふもさらにて、今宮の神事にもやすらひ花なども、慈鎭の家集にもあなるがいまに殘り、南都春日の祭にも、田樂いまにものしはべれど、關のこなたにはたえて昔の面影もなし、只この御祭のみ昔しを殘し侍れば、年々まねりて、はや七十年餘りになりぬといふ、（中略）舞踏もことはてゝ、先のいかめしき警固法師、かづきものとりすつれば、舞人もおの〳〵かざしの花とりすつるに、もの見の諸人、れいのどよめきわたりてなろびとるほど、大德も舞人も逃るやうにして、御寺に入給へば、潮のわきかへるがごと、數千の人々つれ出るにまぎれて、翁もいづちいにけんかしらず、なほとひてまし、とおもふことわれどかひなし、

淫祀 淫祠 附入

祭祀ニハ法ニ於テ祭ルコトヲ得ザルモノアリ、當ニ祭ルベカラザルモノアリ、之ヲ祭ルハ皆淫祀ナリ、此篇ニハ當時之ヲ禁ジ之ヲ論ジテ以テ淫祀ト爲シヽ者ノミヲ擧ゲ、可否ヲ其間ニ措カズ、淫祠ノ如キモ亦然リ、

淫祀

〔日本書紀二十皇極四〕三年七月、東國不盡河邊人大生部多、勸レ祭レ虫於村里之人一曰、此者常世神也、祭レ此神一者致レ富與レ壽、巫覡等遂詐託レ於レ神語曰、祭レ常世虫一者、貧人致レ富、老人還レ少、由レ是加勸捨レ民家財寶一、陳レ酒菓六畜於路側一而使呼曰、新富入來、都鄙之人、取常世虫一置於清座一、歌儛求レ福、棄レ捨珍財一、都無所レ益、損費極甚、於レ是葛野秦造河勝、惡レ民所レ惑、打レ大生部多一、其巫覡等恐休レ其勸祭一、時人便作レ歌曰、禹都麻佐波柯微騰母柯微騰、枳擧曳倶屢、騰擧預能柯微乎、宇智岐多麻須母、

〔禮記曲禮〕凡祭有レ其廢レ之、莫レ敢擧也、有レ其擧一之、莫レ敢廢也、非レ其所レ祭而祭レ之、名曰レ淫祀一、淫祀無レ福、

〔日本靈異記中〕依レ漢神祟殺レ牛而祭又修レ放生善一以現得レ善惡報緣第五

攝津國東生郡撫凹村有レ一富家長公一、姓名未レ詳也、聖武太上天皇之世、彼家長依レ漢神祟一而禱レ之、祀限レ于七年一、每年殺レ祀之一以一牛一、合殺レ七頭一、七年祭畢、〇又見二今昔物語一

〔續日本紀十聖武〕天平二年九月庚辰、詔曰、〇中略又安藝周防國人等妄說レ禍福一、多集レ人衆一、妖レ祠死レ魂一、云有レ所レ祈、〇中略如此之徒深違レ憲法一、若更因循、爲レ害滋甚一、自レ今以後、更勿レ使レ然、

〔類聚三代格十二〕禁斷京中街路祭祀事

勅、比來無知百姓、構レ合巫覡一、妄崇レ淫祀一、翦レ狗之設、符書之類、百方作レ怪、塡レ溢街路一、託レ事求レ福、還涉レ厭魅一、非唯不レ畏レ朝憲一、誠亦長養レ妖妄一、自今以後、宜レ嚴禁斷一、如有レ違犯一者、五位已上錄名奏聞、六位已下所司科決、但有レ患禱祀者、宜レ於レ京外一祓除、

毀淫祠

寶龜十一年十二月十四日〇又見二禮日本紀一

〔續日本紀四桓武〕延曆十年九月甲戌、斷二伊勢、尾張、近江、美濃、若狹、越前、紀伊等國百姓、殺レ牛用レ祭一、漢神、〇見二政事要略一

〔類聚三代格十二〕太政官符

應レ禁二制殺一レ牛用レ祭二漢神一事

右被二右大臣宣一稱、奉レ勅如聞諸國百姓、殺レ牛用レ祭、宜レ嚴加二禁制一、莫レ令レ爲レ然、若有二違犯一、科レ爲二殺牛罪一、

延曆十年九月十六日

〔日本紀略桓武〕延曆廿年四月己亥、令二越前國一禁斷屠レ牛祭レ神、〇又見二類聚國史一

〔類聚三代格十二〕太政官符

應レ禁二斷兩京巫覡一事

右被二右大臣宣一稱、奉レ勅、巫覡之徒好託二禍福一、庶民之愚仰信二妖言一、淫祀斯繁、厭咒亦多、積習成レ俗、虧レ損淳風一、宜下自二今已後一、一切禁斷、若深崇此術、猶不レ懲革一、事覺之日、移二配遠國一、所司知之不レ糺、隣保匿而相容、並准二法科一レ罪、

大同二年九月廿八日〇又見二政事要略一

〔延喜式四十彈正〕凡喪葬盛飾奢僭及淫祀之類、左右京職若不レ禁者彈之、

〔百練抄七近衛〕仁平三年九月近日所々立二社壇一、家々行二漢禮一、停止之由宣下、

〔百練抄五白河〕應德二年七月自レ朔日一、東西二京諸條、每レ辻造立寶倉、鳥居打レ額、其銘福德神或長福神或白朱社云々、洛中上下群集、盃酌無レ算、可レ被二却之一之由被レ仰二檢非違使一、爲二淫祀有レ格制一之故也、

〔芳烈祠堂記〕故國主〇備前從四位下左少將源朝臣、小字新太郎、〇中略毀二封内之淫祠萬餘區一、轉而爲二正祠七十餘社一、以禁二止妖妄一、而使レ民不レ惑二於左道一矣、其功豈在二梁公〇狄仁傑之下一乎、

論淫祀淫祠

〔唐書百十五列傳〕狄仁傑、〇中略入拜冬官侍郎持節江南巡撫使、吳楚俗多淫祠、仁傑一禁止、凡毀千七百房、止留夏禹吳太伯季札伍員四祠而已、

〔消閑雜記〕一とせ備州の大守邪神淫祠のほこらをこぼちて、其跡を田地とし家とし、名正しからぬ社を一つに寄て、よせ宮と名づく、其うち彌陀藥師を體としたるもあり、狐狸やうのものを體としたるもあり、延喜式神名帳にのせたる、來由正しき神社のみ改め、神職を置き、其所をにぎはしめ給ふ、

〔桃源遺事〕寛文五年、御領の内〇水戸淫祠、三千八十八除かせ給ふ、

〔千歳の松〕此頃〇寛文七年より會津神社御改め被二思召一立二友松勘十郎木村忠右衛門服部安休仰付一られ新社は取毀たれ、一祠に集めて相殿となされ、清潔の地を見立、正祀相定められ、淫祠は被二相廢一候、神社の跡畠地可レ成分は切開被二仰付一候、其年貢は社倉に納置候樣被二仰付一、永く神社修覆料に御備被レ成、社迹の木は神社用材、外は賣木被二仰付一、是亦修覆料に被二成置一候、總而御領中御藏入の村々までも、不レ殘御改め有レ之、大小の神社千八百餘座に被二相定一、免除地に仰付られ、其境内の歩數まで、一郡一村切に相記され、神社總錄と題し、數年を經て、思召の通全く致二成就一、其中にも來歷正しく子細ある古社の額、二百六十餘社は、會津神社志といへる書を御えらみのせられ候、世移るにまたがひ、いはれある神社も頽轉し、淫祠は增す習の所、後世までも其患無レ之候、

〔烈公行實〕天保十四年癸卯、〇中略初義公〇光圀川以二國内多一淫祀一僧徒不レ律、故明二禮教一定二法制一、沙汰澄清、風俗一變、至是淫祀復盛、僧徒多放縱無賴、公〇德川齊昭乃命二寺社奉行一、申二明舊章一、修二神祠之荒廢一、賞二僧徒之善者一、諭二破戒者一歸レ民、其尤甚者、謫罰之、

〔日本歳時記二正月〕此月元日より晦日に至まで、世俗に歳德神とて祭る事あり、〇中略晴明が簠簋内傳には、年德神とは娑竭羅龍王のむすめ、牛頭天王の妻婆利塞女の事をいふよし見えたり、是は

なはだ虚誕妖妄の說なり、世俗これらの邪說を信ずべからず、そのうへ淫祀は禍する事なければ、祭りてかならず益なし、志あらん人は流俗にまたがはずして可也、

〔廣益俗說辨四神祇〕神明、鳥となり、蛇となり、空中をかけり、形をあらはし給ふ說、

俗間書に、神明、あるひは鳥となり、蛇となりて、人にまみえ給ひ、又は空中をかけり、眼前にかたちをあらはし給ふとあり、

今按るに、神明、鳥となり、蟲となりてあらばれ給ふ事非なり、〇中略但し祈るといふに品あり、〇中略神社にまうでゝ、己が情慾をとげんことをのべてねがひのごとくなし給はゞ燈明を奉らん、繪馬を掛んなどいのるたぐひあり、若人ありてこれらの祈にくみする神もありといはば、淫祠にして邪神なるべし、

〔鹽尻二編一〕筑前國香椎宮、毎年正月七日、かたへの人をとらへて鬼と稱してもてはやし侍るを、里のうちゆすりて是を見る、終りには是をひきゐて、武内大臣の社の前にからめ置侍りぬ、是異賊降伏のよそほひとかや、一說に追儺の遺法なりともいふ、また同國那珂郡住吉の社にも、正月七日鬼平の祭りとて、人を捕へて鬼とし、是を追ひうちて、終りには石の柱にまたがり付置事侍りしに、今はたえて石柱ばかり社前の右の方に有となり、其外西國には此風俗多かりしが、今は斷絶し侍るとぞ、按ずるに、寧波府志に天妃宮をまつるに人を以てす、昔日我朝の人とらはれて難にあひけるよし見え侍る、南方はむかしより巫風盛なりけり、我國にも傳へて淫祀をなし侍るを、時代久しくなりぬれば、本朝の故事なりと思ふ人多かる、

〔鹽尻二編九〕京師京極の西、今出川の北に、齋神（サイノカミ）と云祠あり、これを出雲路幸神と云、猿田彦大神にして、延曆年中所レ祀といへり、舊記に見えたるかと問人有、卽曰、愛宕郡の一地邑名にして、古しへ京極に出雲寺下出雲寺とて二院あり、齋の神は扶桑略記に、朱雀院の時始て俗に祭れるごとく

記せば後世の淫祀にして、桓武の時祭りしといふは非なり、式に所錄の出雲井於神社を齋の神と混じ誤れり、出雲寺に祭りしは天慶二年の事なり、出雲路と書も後世の事、齋を幸と記して、猿田彦の神といふは附會の說なり、今國々にさいくう神といへるも大かた此淫祀ならん、天慶以後所々に祠を立し事、古書に見えたり、

〔鹽尻二編十三〕今の時も猶淫祀は間々多し、去し貞享二年の夏、遠江の國秋葉山の三尺坊を祀り、路をへて京にいたらんとせしが、官命ありて邪神を坂の下より追ひかへし、其主者同謀の者を罰したまひしにぞ、人少しは眼もひらきぬ、其間男女のまぎひ、たからをすてける事かぎりなかりし、予も東武下向の道、池鯉鮒の驛にて見侍りしが、あさましくうたてく覺えし、あゝ愚俗其鬼にあらざるを祭るのみか、三尺坊の七面のなんどむかしあらざる邪神を崇敬して、我宗社の神明ある事をわすれ、たからを費し、道にそむき侍ること、なげくにあまりあるものなり、

賢按廿年目程に一度づゝは必ある事と見えたり、此後享保の比、下總國安馬大杉大明神とて、江戸中專ら流行し、是も官命ありて停止せらるゝと也、嗚呼愚俗の惑ひ甚しき事にや、

〔鹽尻二編十五〕癸未○元祿十六年於濃州惠名郡神野村より鍬神祭とて、村々驛を傳へて上州高崎まで至りし、有司あやしみて送りかへし、我府の吏について正されける、九月廿六日吏人をして、此祭往古よりありや、勢州より出るといふなる鍬神の事本據もありて、いづれの時より祭れるなんぞ尋られし、予曰、俗に傳ふる所は、大神宮二月御田の神事の鍬也とて、師職の者近世近き國々の民に遣し送るを、私田の內各持て廻り祝ひのゝち、村より村に傳へ、はては其終る所の神社へ納め置事とぞ、根本鍬を神異にして祭る事とかや、又伊勢の神人等諸國へ是を送るといふ事もなし、然るに近世神人謀利の爲に、鍬の形しける木を所々の村民におくる、土民は愚かにして何の辨へもなく、かくすれば目出度事なりとて、所々神のごとく崇むとかや、彼諸社の大麻宮は被

の卷數なるを、庶人直に被のぬさ宮を神とし崇むがごとくなり、祭禮は鍬を神として尊ぶ其類成べし、凡採營神田鉏鍬柄者、毎年二月先祭山口及木本然後採之、と延喜の大神宮式にあり、雜例集に、二月一日內宮鎏山の神事、御田種蒔耕作也、上亥日外宮鎏山伊賀利神事といへり鎏山は內宮儀式帳に所謂湯鎏の事なり、山口木本の神を祭といへども、鍬を祭る事なし、今世道理もなき淫祀多し、我海部郡○尾張の津島、六月十五日青葦を束て川に流す事あり、是六月祓の具の類にして、流離うせ侍るを事とする物なるを、川下の民ひたすら取上、かりの舍を作りこめおき、後には牛頭天王なりとて、祠なんど立しも有り、彼鍬形も元來神田を耕し初し鍬なり、是を納れば田穀豐饒なりなんといひて初穗をとる故、民愚に信じ田圃祭場のまじなひごとて、田はた此の邊持廻り、大鼓を擊、笛を吹なんどし、或は戲藝を張て遊具とするもあり、桑樹の鍬形したる物に四手を付、亦たんざくなんどむすびそへて、神のごとく持ありく、それより猶あやまりて鍬神の名さへ出來りて、民の費を爲事にはなり侍るにぎり侍らざるとこたへし、

〔經濟錄祭祀〕凡天地山川社稷五祀ノ類ヲ神トイフハ、通名ナリ、人ノ死シタル神靈ヲ鬼トイフハ、己ガ祭ルベキ鬼神ト、祭ルマジキ鬼神トヲ能ク分別スルコト禮法ノ肝要也、祭ルベキ鬼神トイフハ、聖人ノ定置キタマヘル分ナリ、天子ハ天下ノ主ナレバ、天下ニ有ラユル鬼神ハ皆祭リタマフベキ也、然レドモ其祭リタマフベキ分ヲ定テ是ヲ祀典トイフ、諸侯ヨリ下ハ、天子ヨリ命ゼラレテ祭ルベキ鬼神ニ制限アリ、是ヲ命祀トイフ、命祀ノ外ハ祭ラズ小キ在處ニテモ、其處ニ在シ人功勞アリ仁德アリテ、後ノ人此恩澤ヲ被ルコト有レバ、上ヨリ許シテ祠ヲ造リ廟ヲ立テ、其靈鬼ヲ祭ラシムル事アリ、是又命祀ノ類ナリ、此等ノ外ニ祭ルベキ道理モナキ鬼神ヲ妄ニ祭ル、

是ヲ淫祀トイフ、禮記ニ淫祀無福ト云リ、人民ハ愚ナル者ニテ、少モ怪キ事アレバ、何ノ故モナキ神ヲ尊敬シテ祭ル事アリ、左樣ノ淫祀ヲバ時々ニ上ヨリ抑ヘテ其祠ヲ破却シ其祭ヲ停止スル、是政務ノ一ツナリ、唐ノ代ニ狄仁傑、民ノ淫祀ヲ禁ジテ三百餘所ノ祠ヲ毀チケルトイフハ英雄ノ所爲ナリ、日本ハ昔ヨリ淫祀ノ禁ナキ故ニ、民間ハイフニ及バズ、士大夫以上ニモ淫祀トイフコトヲ知ラズシテ、謂レモ无キ神ヲ祭ルコト甚多シ、其中ニ伊勢八幡ノ如キハ天子ノ祭リタマフ神ニテ、諸侯以下ノ祭ル所ニ非ズ、是ヲ庶人ノ不淨ナル家ニテ祭ルハ、貴キ神ヲ瀆スナリ、春日ハ藤原氏ノ祖神也、藤原氏ニアラズバ祭ルベカラズ、天滿宮ハ菅丞相ノ廟ナリ、菅原氏ニアラズバ祭ルベカラズ、此等ノ類ヲ祭ルハ皆淫祀ナリ、又コレヲ竈祀トモイフ、○中略又狐ヲ稻荷ト崇メ、蛇ヲバ宇賀神ト名ヅケテ祭ル類ハ、淫祀ノ中ニ人ヨリ貴キ者ハナシ、然ルニ狐ヲ尊ビ蛇ヲ敬フハ、譬ヘバ人君ノ奴僕ヲ尊ブガ如シ、逆ナル事ナリ、至愚トイフベシ、異國ニハ俗間ニ北斗ノ星ヲ祭ル法アリ、然レドモ天ノ星ハ下民ノ祭ルベキ神ニアラザル故ニ、上ヨリコレヲ禁ジテ祭ラシメズ、總ジテ一切ノ淫祀ヲ禁ズルコト甚嚴ナリ、犯ス者ハ刑ニ處ス、其法歷代ノ律ニ見エタリ、凡民間ノ淫祀ヲバ上ヨリ嚴ニ禁ズルヲ善キ政トス、近世ニハ水戸ノ義公○德川光圀○中略今ノ世ハ在々處々ノ小祠、或ハ都下ノ市中ニ在ル稻荷ノ祠ナド、數ニモ足ラヌホドノ賤キ神ヲ正一位ニ叙シ、白河吉田ノ兩家ヨリ宣旨ヲ申シ下シテ、巫祝ノ輩ニ與フル事甚多シ、サレバ處々ノ神廟ニ正一位ノ額ヲ掛ザルハ稀ナリ、是大ニ謂レナキ事ニテ、吾國ノ古禮ニ違ヘル也、縱淫祀ニアラザル正シキ神ナリトモ三品以上ノ爵ヲバ輒ク賜ハルマジキ義ナリ、況ヤ狐ヲ祭リ蛇ヲ祭ル類ノ淫祀ニ正一位ヲ賜ハルベキヤ、

○按ズルニ、本文ニ日本ハ昔ヨリ淫祀ノ禁ナキ故ニ云々ト云ヘルハ誤ナリ、上文禁淫祀條參看スベシ、

〔草茅危言四〕淫祠之事

古ヨリ華域ニテ賢君良臣ノ淫祠ヲ毀チ捨ラレタル例多シ、其マヽニサシ置バ平民ヲ害スル故ナリ、○中略我邦ニテモ神ノ代ニ素戔ノ八岐蛇ヲ斬セラレシハ、河伯ヲ娶ルノ類ナランヲ、談者其事ヲ神異ニスルノミ、山田春城駿河介トナリ、一神祀ノ巫祝妖言ヲナシテ國守吏民ヲ溺惑セシヲ嚴ニ禁絕シ、妖言永ク絕タルコト文德實錄ニ見エタリ、王室ノ衰ヘヨリ、巫祝家ノ說追々盛ニナリ、樣々ノイン祠天下ニ滿タリ、佛モ亦一種ノ神也、此二ツヲ合セテハ一向數限リモナシ、其中ニテ何ノ由緒モナク瑣細煩猥ナル分ハ、追々焚毀ヲ行ヒ、或ハ遷徙合併シテモ格別數ヲ減ジ、社人ラシキ者ハ農ニ歸シ、其社地ノ廣キハ、スグニ就テ耕サシムベシ、又由緒ハキツト有リテモ、社人ノ風儀惡ク、サマ〳〵妖妄ノ說ヲ造リ設ケ、平民ノ大害ト成タルアリ、是ハ正祠ヲ轉ジテ淫祠トシタル也、其一ヲ擧テ云ハヾ、江州山王祭是也、此神事ニ妄說ヲ設テ、神輿ハ人ノ血ヲ見ザレバ渡ラズトテ、社人樣々猥籍ヲナシ、見物ノ人ニ爭鬪ヲ催シ、必ズ人ヲ斫コトヽス往年官ヨリ嚴諭ヲ受テ、其後神事ニ供スル社人ノ分、手ニ末廣扇ヲ放スコトヲ禁ゼラレテ刀劒ヲ弄スルコト頗ル止タレドモ、今以テ末廣扇ヲ手ニクヽリ付テ、落サヌ樣ニシテ兵ヲ弄スル者アリ、是又神事七日前ヨリ、山王社地ノ民湖上ニ泛ミ、旅人往來ノ船ヲ取卷キ、金子ヲ子ダリ取、其船子トナレ合過分ノ金子ヲ出サヽバ船ヲスベテ動カサズ、又街道ニモ出張テ行人ヲ擾住シ、無法ヲ云カケ、金子ヲ取ル也、官ヨリ是ハ禁止モナキガ憎ムベキノ甚者也、山王ハ正祠ナレドモ、氏地ノ者ノ凶暴故、江州ノ山王許大淫祠ト成タリ、若禁令アリシ上改メズバ、社頭共ニ焚毀有ベキ者也、他所ニモ此類多シトキク、出雲ノ大社ノ龍燈、備中ノ吉備津ノ宮ノ釜鳴ナド、鬼神ノ威令ニ托シテ、巫覡輩ノ愚民ヲ欺キ錢ヲ求ルノ術トス、其外讃岐ノ金毘羅、大和ノ大峰ナド、種々ノ靈怪ヲ唱ヘ、又ハ稻荷不

動地藏ヲ祀リ、吉凶ヲ問ヒ、病ヲ祈リ、因テ醫者方角ヲサシ示シ、或ハ醫藥ヲヤメテ死ニ至ラシメ、蛭子大黒ヲ祀テ强欲姦利ノ根據トシ、觀音ヲ產婆ノ代リトシ、狐狸ノ妄談、天狗ノ虛誕、聊ノ辻神辻佛ニ種々ノ靈驗ヲ猥ニ云ヒ觸シ、佛神ノ夢想ニ託シテ、妄藥粗劑ヲ賣弘メ、男女ノ相生、人相劒相家相ノ類、邪說橫流シ、愚民ヲ眩惑矯誣スルノ術ニ非ザルハナシ、斯ル怪妄、世界頑鈍シテ風俗誠ニ歎シ、憫ムベキノ甚キ者也、請フ速ニ淘汰ヲ加ヘ、嚴禁ヲ施シ、將來ヲ懲シタキ者也、王制ニモ、鬼神時日卜筮ヲカリテ衆ヲ惑ハス者ハ、殺シテ赦スコトナシト見エタリ、等閑ニ捨置ベキ者ニハ非ズ、

〔草茅危言摘議〕淫祠之事

竹山云古ヨリ華域ニテ賢君良臣ノ淫祠ヲ毀チ捨タル例多シ之條

按ズルニ竹山淫祠ノ說尤也、且王道昌ンナレバ、妖邪隙ヲ窺コト能ハズ、此淫祠ノ起ハ道ノ正シカラズ衰ヘタルニ因ルノミ、然シ淫祠ハ多ク佛氏ノ說ヨリ僧侶ノ手ニナリシコト古ヨリ少カラズ、然ドモ竹山、日吉山王ヲ大淫祠ト云ハ如何、此神事ニ暴ヲナスハ、中古戰亂ノトキ、山僧ヤヽモスレバ神輿ヲ假リ、暴虐ヲナシ、源平ノ世ニハ、朝紳武將モ困ルコトナリシ、足利尊氏ノ頃ニハ、少シ人ノ心モ開ケシニヤ、御輿振ノコト一向頓著セザリシカバ、此事ツヒニ止タリ、然レドモ古ノ遺意アリテ、右ノ如ク荒々シキ神事ヲナストミエ、併コレハ神事ノ風アシキト云ハ可也、是ニ依テ淫祠トハ云ハレマジ、淫祠トハ其鬼ニ非ズシテ祀ノ類ニテ、祠ルマジキ鬼神ヲ祀ルコトヲ淫祠トス、所謂稻荷金毘羅抔ト名目ヲ立、妖言ヲナシ、狐狸抔憑リテ吉凶ヲ說示ス抔ノ者、皆愚夫愚婦ヲ欺ク者ハ嚴科ニ處セラレタキコトナリ、然ルトキハ民心自ラ正シク朴ニシテ、風敎ノ化ニ於テ大ニ益アランカ、

〔橘窓自語下〕大社の祠官の位階昇進さへ近世なれば、諸國の社家はおほく無位なりしを、此頃は

吉田の執奏をもて、おらぬ淫祠の社人までも、初爵する事となりたり、なげくべきことなり、

〔淫祀論〕此度淫祀御詮儀ニ付、古來之例御尋被仰付候事、謹て奉得其旨候、只今殊更に申候も踈義ニ御座候得共、日本は神國にて、神祇御崇敬の事甚だ嚴重に御座候、○略ともかくも諸國に淫祀夥しく相成しは、往古にては最澄空海の邪謀より始り、今の世にては兼倶兼右の奸計より起り申候、方に今世改革の御政道、すみやかに淫祀を破却被仰付、式內以下有故の正社御再興被爲在、民に斯響を御示し被成候、乍然淫祀とても、既に數百年打續き祭祀を致し候事故、下民は愚なるものにて、恐怖を懷き可申候間、おらはに神體を勸請せし處の本社へ御歸し被成、社壇には淨火を以て燒拂ひ、其灰を土中に埋め、一月か又一年ばかりの間、其處に汚穢をちらさしめずして、後に田畑にも被成候はゞ、自分の土と混じ可申奉存候、○略されば淫祀にも皆神靈は御座あるべければ、神體は必本社へ御返し可被成候、

〔鬼神新論〕問ふ、上の條々に云れしにて、誰もく、神祇を敬ひ祭るべき理は、大抵に通えたれども、今の俗に、家ごとに宮を設けて、天皇の宗廟たる、天照大御神を齋ひ拜む事は僻事なり、これ謂ゆる淫祀と云ふものにて、禮記に、非其所祭而祭之名曰淫祀、淫祀無福といひ、左傳にも、鬼神非其族類不歆其祭と云ひ、孔子も、非其鬼祭之諂也、また敬鬼神而遠之可謂智矣、また未能事人焉能事鬼とも云れば、決めて否事なりと云ふ人あり、此は○平田篤胤いかに、予云ふ、此事は赤縣學者流の常いふ事なるが、何にも彼徒より見たらむには、然思はるゝ事なるべけれども、いまだ事の義を深く知ざる物なり、然るはなづ、天照大御神の大宮を、赤縣に謂ゆる宗廟と云ものゝ如く思ふは甚く違へり、彼國にて、宗廟といふ物は、王にまれ諸侯にまれ、己が遠祖を祭る所を云ひて、其は我のみ祀れども他よりは祭る事ならぬ制なり、然るから、其祭るまじきを祭るなどをば、淫祀とは云るなり、此は誠に然も有べき事なりかし、天照大御神の宮所は今さら申すも更なれども、人々仰ぎ瞻

雜載

奉る、日大神の御神靈を齋ひ祭り給へるにて神宮なり、然るを赤縣州の王ぜもの、死靈を祭りたる所と等く稱し奉るは、いとも可畏く、餘りに物ぢらぬ儒者ぜもの云ひごとなり、唯似よりたる事は、天皇の御大祖に坐ます事のみなり、此は掛卷も可畏けれぜも、天皇の御遠祖に坐す、邇々藝命と稱し奉るは、日大神の大御孫に坐ませて、皇國へ天降ませる、故なり、此は古事記また日本紀、古語拾遺なぜに、委く見えたるが如し、此事をも、赤縣學者流は、彼國の祖宗を天に配すなどかく赤縣州の宗廟また社稷なぜ云ふものとは、異なる事にて、神宮なれば、諸人の拜み奉るとも、更に咎むべき事に非ず、よし、赤縣に云ふ、宗廟と、ひとしき宮なれども、赤縣の制なき事ならむには、然もあらやもと、古には、私に幣物を獻ることは、禁じ給へれぜ、こは大神宮儀式帳、延喜式などに見えたり、大宮へ參詣る事は禁ぜられたる事なし、但今世の如く、家々に祀り奉る事は、源平の亂より打續き、世中亂れて、樂しいふ事をえて、佛經を誦し、其祈禱の卷數を記して、諸國の旦家へ配りけるより、殊に此大御神の事なりけるが、此もすなはち神の御慮なるべし、猶この事は、外に委く記せる物あり、

神は、掛卷もいとも畏く、甚も妙なる由緣なし坐て、世に有とある人の限り、敬ひ拜み奉らでは、得ぬらぬ業なるが上に、生とし生るもの、今の現に、此大御神の御德を蒙らぬ物の無ければ、家ごとに祀り奉りて、其大御德を忘れ奉らぬは、いと厚き事にて、眞に道に稱ひたる所爲と云ふべし、赤縣人の如く、日には大陽の精なぞ云ひて、上もなく尊き神に坐ますことを知らや、其大御德を思はぬとは、宋に年を同くしても語るべからず、赤縣にては、紅夷なぞ云ひて陋むる、淤國陀人また蝦夷の國の人までも、能く日神の可畏く尊く坐ます事なりかし然れば、其心ふらひしてぞ、有らまほしけれ、

〔類聚三代格四〕太政官符

應以高雄寺爲定額幷定得度經業等事

右正五位下行河內守和氣朝臣眞綱等上表偁、昔景雲年中僧道鏡、辱僭法王之號、遂懷窺覦之心、逼邪幣於群臣、行權譎於俊黨、爰八幡大神、痛天嗣之傾弱、憂狼奴之將興、〇中略乃入御夢請使者、有勅喚臣等故考從三位行民部卿清麿面宣御夢之事、仍以天位讓道鏡之事、令言大神、清麿奉詔旨、向宇佐神宮、于時大神託宣、夫神有大小、好惡不同、善神惡神、淫祀貪神、受邪幣、我爲紹隆皇緒、扶濟國家、寫造一切經及佛、〇中略除凶逆於一旦、固社稷於萬代、汝承此言莫有遺失、〇下略

〔文德實錄十〕天安二年六月己酉、大學助從五位下山田連春城卒、〇略中二年壽〇仁正月遙爲駿河介、三年春三月自請之任、傍吏百姓嫌其清察、時部下駿河郡有自伊豆新移神、名阿氣大神、國司申官建新社以祭祀、而禰宜祝等增以奇異之事、註誤國司庶人、春城到任、登時考訊、糺其訛僞、自此以後、妖言永絕、歲時祭祀而已、〇下略

〔諸神記中〕一姉小路猪熊　橘逸勢神

平治元、九、二、此祭上皇〇後白河營其事給、世人以淫祀焉、

〔百練抄七條〕平治元年九月二日、橘逸勢祭、上皇有御結構、飾以金銀錦繡、天下之壯觀也、捧持面形爲風流、人以傾之、

神祇部三十二

祓禊

名稱　六六一
祓禊起原　六六二
祓所神　六六四
天罪國罪之別　六六六
以祓罰人　六六七
事前祓禊　六七七
事後祓禊　六八〇
由祓　六八六
每日御祓　六八七
每月祓　六八八
七瀨祓　同
幕府七瀨祓　六九二
河臨祓　六九三
三月上巳祓　同

中巳祓　六九六
萬度祓　同
千度祓　六九七
百度祓　六九九
八十座祓　同
四十座祓　同
七度祓　同
神雛祓　同
祓禊之弊　同
祓具（撫物　人形　翡翠　菅　麻　笹　解繩　馬）　七〇〇
鹽水鹽湯　七〇一
垢離掻　七一七
雜載　七一八
　七二〇

神祇部三十二

祓禊

祓ハハラヘト云ヒ、後世或ハ轉ジテハラヒト云フ、穢ヲ去リ淨ニ就キ、惡ヲ除キ善ニ遷リ、災厄ヲ拂ヒ吉祥ヲ求ムルノ義ニシテ、字或ハ解除、又ハ祓除ヲ用キル、禊ハミソギト云フ、身體ヲ洗滌スルノ義ニシテ、亦凶穢ヲ除キ、吉祥ヲ求ムルニ外ナラズ、故ニ或ハ禊ヲ稱シテ祓トモ爲ス、蓋シ祓ニハ自ラ爲スト人ニ科セラルヽトアリ、伊弉諾尊ノ黃泉ノ汙濁ニ觸レテ、衣服冠帶ヲ脫去シ給ヒシニシテ、素戔嗚尊ノ鬚ヲ剪ラレ、爪ヲ拔カレ給ヒシハ、自ラ爲スモノニシテ人ニ科セラルヽモノナリ、是各、祓ノ權輿ナリ、而シテ伊弉諾尊ノ祓ノ後ニ海潮ニ入リテ御身ヲ滌ギ給ヒシハ卽チ禊ナリ、後世ノ禊ハ水邊ニ之クニ止マレドモ、實ニ此禊ヲ以テ濫觴トス、

祓禊ニハ事前ニ行フモノト、事後ニ行フモノトアリ、事前ニ行フモノトハ、祭祀、奉幣、祈禱、參詣等ノ事アルニ臨ミテ、豫メ行フモノニシテ、事後ニ行フモノトハ、多クハ除服ノ爲ニシ、其他燒亡、震雷、疾病、死穢等ノ後ニ行フモノナリ、

上古、祓ヲ以テ人ニ科スルハ、殆ド贖罪ノ如キモノニテ、普通ノ罪ヲモ罰セシガ、後ニハ神事ノ罪穢ニノミ之ヲ用キ、桓武天皇ノ朝ニハ、特ニ其制ヲ立テ、大上中下ノ四等ニ分チテ、物ヲ出サシメタリ、是ヨリ以前ハ、善祓惡祓アリテ二重ニ之ヲ科セシガ、此時省キテ一ト爲セリ、

蓋シ惡祓トハ惡ヲ去ルヲ云ヒ、善祓トハ善ニ遷ルヲ云フナラン、是ヨリ以來、常ニ此法ニ依リ、神職等ヲ罰セリ、

祓禊ハ、上ニ擧ゲタルガ如ク、神代ニ興リシモノナレド、大寶令ノ大祓ノ文ニモ、東西文部ガ漢文ノ咒文ヲ讀ミ、横刀ヲ進ルコトヲ載セタレバ、陰陽家ノ說ヲ混ジタルモ甚ダ久シキコトナリ、加フルニ佛家ノ說ヲモ雜ヘ、自ラ爲スノ祓禊ハ漸ク其本意ヲ失フニ至レリ、是ニ於テカ七瀨祓、河臨祓、上巳祓、中巳祓、神雜祓、及ビ百度祓、千度祓、萬度祓、若クハ七座、四十座、八十座祓等ノ稱起ル、

七瀨祓ハ毎月之ヲ行フ、其處三所アリ、難波、農太、河俣、太島、橘小嶋、佐久那谷、辛崎、之ヲ大七瀨ト云フ、河合、耳敏川、松崎、石影、東瀧、西瀧、大井川、之ヲ靈所七瀨ト云ヒ、川合、一條、土御門、近衞、中御門、大炊御門、二條末、之ヲ加茂川七瀨ト云フ、後堀河天皇貞應三年鎌倉幕府ニ於テモ、亦始メテ靈所七瀨ノ祓ヲ行ヒ、由比濱、金洗澤池、固瀨川、六連、柚河、杜戸、江島龍穴ヲ以テ之ニ充ツ、上巳祓、中巳祓ハ、三月ノ上巳中巳ニ、河ニ臨ミテ之ヲ行フナリ、三月上巳ノ日、祓除スル由、既ニ漢書ニ見エタレバ、彼國ノ風俗ヲ移シタルモノナルベシ、百度祓、千度祓等ハ、陰陽師ノ輩僧尼ノ佛前ニテ誦經スルニ倣ヒテ始メタル事ニテ、神前ニテ中臣祓詞ヲ千度讀ムヲバ千度祓ト云ヒ、百度讀ムヲバ百度祓トモ百座祓トモ稱スルナリ、此等ノ類ハ、祓ト稱スレドモ、祈禱ヲ以テ主トスルモノナリ、

祓ハ物ヲ出シテ之ヲ贖フモノニテ、其物ニ數種アリ、人形ハ其人ノ身ニ代フルモノニテ、之ヲ以テ身體ヲ撫デ、災厄ヲ之ニ託シテ河海ニ流シ棄ツルナリ、故ニ撫物トモ云フ、菅ト麻トハ上世ヨリ用キシガ、中世ヨリ麻ノミヲ用キル事ト爲レリ、稻及ビ散米ハ天孫降臨ノ時ノ故事ニ起リ、茅輪ハ素戔嗚尊ノ敎ニ基ヅク、而シテ茅輪ヲ又菅貫ト稱シテ、之ヲ潛リ越ユルハ何ノ時ニ起リシカヲ審ニセズ、解繩ハ大祓詞ニ、天津菅曾ヲ八針ニ取リ割クトアル言ニ據リテ、後世造リ出デシナルベシ、鹽水若クハ鹽湯ヲ灑ギ、又垢離掻等ノコトハ伊弉諾尊ノ身滌ノ遺意カ、猶ホ此篇ハ大祓觸穢等ノ篇ヲ參看スベシ、

〔日本靈異記〕秡波邇

〔日本靈異記攷證〕中秡波邇波下脫ニ字、鏡集祓訓ハラヘ、神代紀云ニ祓具此云ニ波羅閉都母能ニ、

〔類聚名義抄〕解除ハラヘ、ハラフ、拂廢二音、蒲末、二反、除ノ災求福也、祓ハラヘ、ハラフ、拂廢二音、蒲歩、三角〔同七示〕禊俗禊字ハヲヘ秡俗祓字ハラヘ　ヌサ

〔伊呂波字類抄〕祓ハラヘ、人事〔同酔宇〕祓ハラヘス

〔八雲御抄〕祓　みそぎ

〔書言字考節用集〕祓ハラヒ〔同神祇〕祓禊ハラヒキヨム　祓ミソギ〔同潔身〕

〔新撰字鏡〕解奏波ノ眞戸祭ノ誤　解除祓ミソギ

〔段注說文解字一上〕祓除惡祭也从示犮聲、敷勿切、十五部、

〔祝詞考中〕祓ちふ事は、古事記に、伊邪那伎命の黃泉に到まして、穢給へるを清め給はむとて、筑紫國の橘の小門にして、大御身に著なき玉へる物をぬぎ捨給ふをいふ、穢を拂ひやらふよし也、次に海潮に浸て、大御身を滌給ふ、是を身滌といふ、身の穢をあらひそゝぐよし也、このふたつぞ祓みそぎのもとなる、又須佐能男命、惡事轉、あるによりて、贖物をせめ出させ奉りて、祓つ物として逐給へり、上の御自物を捨給ひ、他より責てものを出さするも、事の意ひとしければ、この二大御神の御わざを合せて、祓みそぎの法として、人の代にも行へり、その伊邪那伎命は、祓身滌をしなして、遂に貴き大御神たちを生給ひ、須佐能男命は、贖物を出し、御身を逐はれなして

後ぞ、清き神み心と成給ひつ、此御わざの大なる功ある事を知るべし、

〔倭訓栞前編二十四〕はらひ　神代紀に解除、又祓をよめり、廣韻に音拂と見ゆ、毛詩に祓を弗にも作る、されば、ふつの音なるを祓と通用ゐて、ばつの音とせり、訓は拂ふを名目にいふなり、神代紀に見えたる伊弉諾尊、素戔嗚尊、二大神の御わざを合せもて、祓除身滌の法として、人の世にも行へり、はらへといふ時は、令祓の義、はせ反へなり、されば人に祓はしむるなり、

祓禊起源

〔古事記傳六〕波良比と云と、波良閉と云と、後には混て一に心得めれど、本は別あり、波良比は自ラ爲ヲ云、波良閉は令祓の約たる言なり○中略　伊勢物語を切て閉にて、人に令ルを云、罪咎ある人に負する祓なぞ是なり、これ人に祓はするなり　書紀に祓具、此云波羅閉都母能とある、これ須佐能男命に負せてせしむる祓具なればなり、萬葉十七に、敷等能里等其等、伊比波良倍とよめるは人に負する祓にはあらねど、人に誂て令爲る祓なるべし　伊勢物語に、おむやうじ、かむなき呂て、戀せじと云、祓具してなむ行ける、と云る類なるべし、

○按ズルニ、古事記傳ニハ、祓ヲハラヘト云フハ、人ヲシテ祓セシムルコトナレバ、自ラ祓スルヒテ、ハラヒト云ハズ、傳ニ引ケル萬葉集ナル敷登能里等其等、伊比波良倍伊勢物語ノハラヘノ具ナド皆然リ、且ツ此ハ傳ノ說ノ如ク、人ニ爲シムルコトヽハ聞エズ、況ヤ祓具ハ物ノ名ナリ、物ノ名ハ自ラ爲ルト、人ニ爲シムルトニ由リテ、唱呼ヲ異ニスルコトナキヲヤ、サテ祓ヲハラヘト云フハ、祓物ヲ出シテ之ヲシテ我身ニ代リテ罪穢ヲ掃除セシムル意カ、

〔古事記上〕伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米上志許米岐此九字以音穢國而在祁理此二字以音故吾者爲御身之禊而到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐此三字以音原而禊祓也、故於投棄御杖所成神名、衝立船戸神、次於投棄御帶所成神名、道之長乳齒神、次於投棄御嚢所成神名、時量師神、次於投棄御衣所成神名、和豆良比能宇斯能神此神名以音、次於投棄御褌所成神名、道俣神、次於投棄御冠所成神名、飽咋之宇斯能神自宇以下三字以音、次於投棄左御手之手纏所成神名、奥疎神、訓奥云沖疎云闕、下效此、訓下效此、次奥津那藝佐毘古神自那以下五字以音、下效此、次奥津甲斐辨羅神自甲以下四字以音、下效此、次邊津那藝佐毘古神、次邊甲斐辨羅神、次邊津甲斐辨羅神、

右件自船戸神以下、邊津甲斐辨羅神以前、十二神者、因脫著身之物所生神也、

於是詔之、上瀨者瀨速、下瀨者瀨弱、而初於中瀨隨○墮或作墮迦豆伎而滌時所成坐神名、八十禍津日神、次大禍津日神、此二神者、所到其穢繁國之時、因汚垢而所成之神者也、次爲直其禍而所成神名、神直毘神、毘字以音、次大直毘神、次伊豆能賣神、并三神也、伊以下四字以音、次於水底滌時所成神名、底津綿上津見神、次底筒之男命、於中滌時所成神名、中津綿上津見神、次中筒之男命、於水上滌時所成神名、上津綿上津見神、訓上云宇閇、次上筒之男命、○略中於是洗左御目時所成神名、天照大御神、次洗右御目時所成神名、月讀命、次洗御鼻時所成神名、建速須佐之男命、須佐二字以音

〔古事記傳六〕禊祓は美曾岐波羅比給伎と二字共に用語に訓べし○略注　美曾岐は身滌なり、下文に迦豆伎而滌とあるを始めて、書紀に當滌去吾身之濁穢、また將盪滌身之所汚、また欲盪除其穢惡などみえ、萬葉に潔身身祓などもあるを以知べし、○略注　今も除服などに海川邊に出て清水邊に出てするに限て云り、古書皆然り、禊字も其意なり、波良比は水邊にてするをも、然らぬをも廣くいふ名なり、

〔古事記上〕於是八百萬神共議、而於速須佐之男命、負千位置戸、亦切鬚及手足爪、令拔而神夜良比夜良比岐、

〔日本書紀一神代〕諸神歸罪過於素戔嗚尊、而科之以千座置戸、遂促徵矣、至使拔鬚以贖其罪、亦曰、拔其

祓所神

手足之爪(ツメ)瀆之(○又見二古語拾遺一)

〔日本書紀一神代〕一書曰、于時霖也、素戔嗚尊結束青草、以爲二笠蓑一而乞二宿於衆神一、衆神曰、汝是躬行濁惡、而見二逐譴一者、如何乞二宿於我一、遂同距之、是以風雨雖レ甚不レ得二留休一而辛苦降矣、自レ爾以來、世諱二著笠蓑一以入レ他人屋内一、又諱二負束草一以入レ他人家内一、有レ犯レ此者、必償二解除一、此太古之遺法也、

〔延喜式八祓詞〕六月晦大祓

高山之末短山之末(與レ理)佐久那太理(留)落多支(都)速川(能)瀬坐(須)瀬織津比咩(止)云神、大海原(留)持出(奈、武、)如此持出往(波)、荒鹽之鹽(乃)八百道(乃)八鹽道之鹽(乃)八百會(留)坐(須)、速開都比咩(止)云神、持歌呑(氐)(牟)、如此久歌呑(氐波)氣吹戸坐(須)、氣吹戸主(止)云神、根國底之國(留)氣吹放(氐)(牟)、如此久氣吹放(氐波)、根國底之國(留)坐速佐須良比咩(登)云神、持佐須良比失(氐牟)、

〔大祓詞後釋下〕瀬織津比咩(止)云神(○略○中)此神すなはち禍津日神なり、倭姫命世記に、荒祭宮一座、皇大神荒魂、伊弉那伎大神所生神、名八十枉津日神也、一名瀬織津比咩神是也といへり、此書は後人の集めなせる書にて、凡ては信がたき事のみ多けれども、古書によれりとおぼしき事も又多し、今こゝに引る說も、さらに後世人の思ひよるなどきこととなれば、必古傳說有しことゝ聞えて、禍津日神を瀬織津姫と申すは、かのはじめて中つ瀬に降かづき給ふ時に生坐る故にて、こゝによくかなへり、さてこゝは祓物に負せて流しやりたる罪穢を、先受取給ふ神なれば、かの中瀬に下て、よみの國の穢を先滌ぎはじめ給へるによく當れり、速開都比咩(止)云神(○略○中)こはかの御禊段に生坐る、伊豆能賣神也、その伊豆(イヅ)は阿伎豆(アキヅ)の切(ツヅ)まりたる御名にて、卽かの速秋津日子神、速秋津日女神と同神也、秋は借字にて明(アキ)つの意にて、明とは御禊によりて清らかに清まりたるよしの御名也、氣吹戸主(止)云神、此神は倭姫命世記に、多賀宮一座、豐受荒魂也、伊弉那伎神所生神、名伊吹主、亦名曰二神直日大直日神一と見えたり、多賀宮は、伊勢外宮の別宮高宮也、是を豐受荒魂といへるは心得ねど、伊吹戸主を、直毘神也といへるは、後世人はさらに思ひよるまじ、

〔古史徵二下一〕御鎭座傳記に、多賀宮一座とある下に、伊弉諾尊、到二筑紫日向小戸橘之檍原一而祓除之時、洗二左眼一因以生二神多賀宮是也一、亦洗二鼻一因以生二神號一速佐須良比賣神一、與二素戔嗚尊一合力坐給也(○略○中)荒魂和魂多賀宮(すなはち荒祭宮を申せり)の生坐る後に、御鼻を洗ひて速佐須良比賣神(すなはち伊豆氣吹戸主(すなはち禍神なり)直日神なり)の生坐し、須佐之男命と力を合せて坐給とあるは、實の旨に符ひて、決めて後人の言出まじき說にて、古事記書紀なる傳の謬をさへに、正し明らむべきいとも妙なる傳なりかし、其は大祓詞に、(○中略)瀬織津比咩(すなはち禍津日神なり)速開津比咩(すなはち伊豆能賣神なり)共に此御禊の時に生坐る神等にて、罪汚を祓ひ給ふ功のよく此の傳に符るを、速佐須良比咩ばかりは、古事記書紀ともに此の傳になき神なるは、傳漏たること疑なきものなり、

〔宇治拾遺物語十二〕内記上人寂心といふ人ありけり、道心堅固の人なり、堂を造り塔をたつる、最上の善根なりとて勸進せられけり、材木をば播磨國に行てとられけり、こゝに法師陰陽師紙冠をきて祓するを見つけて、あはてゝ馬よりおりて、はしりよりてなにわざし給御房ぞとゝへば、祓(はらへ)し候なりといふ、なにしに紙冠をばきたるぞとゝへば、祓戸の神達は法しをば忌給へば、祓するほどきたればらくして侍なりといふに、上人こゑをあげて大になきて、陰陽師に取かゝれば、陰陽師心えず仰天して、祓をきさして、これはいかにといふ、祓せさする人もおきれてゐたり、上人冠をとりて引やぶりて、なくことかぎりなし、いかにきたりて御房は佛弟子となりて、祓戸の神達にくみ給といひて、如來の忌事をやぶりて、きたばしも無間地獄の業をばつくり給ぞ、誠にかなしきことなり、たゞ寂心をころせといひて、とりつきてなくことおびたゞし、陰陽師のいはく、おはせらるゝ事尤道理なり、世の過がたければ、さりとてはとて、かくのごとく仕なり、きからずはなに

わざをしてかは妻子をばやしなひ、わがいのちをも續侍らむ、道心なければ上人にもならず、法師のかたちに侍れゞ、俗人のごとくなれば、後世のことといかゞとかなしく侍れゞ、よのならひにて侍れば、かやうに侍なりといふ、

〔紫式部集〕やよひの一日、かはらに出たるに、法師のかみをかうふりにてはかせたちをるをにくみて、

はらへゞの神のかざりのみてぐらにうたてもまがふみゝはさみかな

天罪國罪之別

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓

四方之國中登大倭日高見之國乎安國止定奉氏、下津磐根爾宮柱太敷立、高天原爾千木高知氏、皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氏、天之御蔭日之御蔭止隱坐氏、安國止平久所知食武國中爾成出武天之益人等我過犯家牟雜雜罪事波、天津罪止、畔放、溝埋、樋放、頻蒔、串刺、生剝、逆剝、屎戸、許許太久乃罪乎、天津罪止法別氣氏、國津罪止八、生膚斷、死膚斷、白人、胡久美、己母犯罪、己子犯罪、母與子犯罪、子與母犯罪、畜犯罪、昆虫乃災、高津神乃災、高津鳥災、畜仆志、蠱物爲罪、許許太久乃罪出武、

〔祝詞考中〕天津罪止波、此七つの罪、須佐能男命の犯給ひしをもて、今國人の犯せるも、その罪の類をば天つ罪といふ、國津罪止波、下つ國人の犯せるを別いふのみ、

〔大祓詞後釋上〕天つ罪國つ罪と別ることは、實は一にて、差別あるまじきことなれゞも、かの須佐之男命に祓を負せたるぞ、祓の起にてあれば、かの神のそのかみ天にて犯し給ひし類の罪をば、此國にても天つ罪と名けて別云也、

〔古語拾遺〕逮于神武天皇東征之年、略中令天種子命天兒屋命之孫解除天罪國罪事所謂天罪者上既設訖、國罪者國中人民所犯之罪、其事具在中臣祓詞、

〔皇大神宮儀式帳〕纏向珠城宮御宇活目天皇仁垂御世爾、倭姫内親王遠爲御杖代齋奉支、略中被法定給支、天都罪止所始志罪波、敷蒔、畔放、溝埋、樋放、串刺、生剝、逆剝、屎戸、許々太久乃罪乎、天都罪止告分天、國都罪止、生秦斷、死膚斷、母犯罪、己子犯罪、畜犯罪、白人、古久彌、川入、火燒罪乎、國都罪止定給氏、犯過人爾種々乃令祓物出天、祓清止定給支、

以祓罰人

〔源順集〕六月はらひ

夏草にはらひかくれゞ久堅のあまつつみとは露やけぬらん

〔日本書紀一神代〕一書曰、略中已而科罪於素戔嗚尊而責其祓具、是以有手端吉棄物、足端凶棄物、略中以此解除、竟遂以神逐之理逐之、略中手端吉棄、此云多那須衢能余之岐羅咩母能、

〔釋日本紀七述義〕手端吉棄物、足端凶棄物、

私記曰、手足吉凶物、其義如何、答、師説、凡解除之道、必有兩種、吉凶是也、吉解者、是招禱吉事也、凶解者、卽除却凶事、兼招吉事也、吉解是貴、故用手爪、凶解亦賤、故用足爪也、解除之道闕一不可也、故兼用吉凶二解也、

〔大祓執中抄上〕祓具を善惡の二つにわけたるは、いかなるゆゑぞといふに、日本紀の私記に、凡解除之道、必有兩種、吉凶是也、吉解者、是招禱吉事也、凶解者、卽除却凶事、兼招吉事、中略解除之道闕一不可也、故兼用吉凶二解也、とあるが如く、罪穢ある人に、公より科せて、その罪穢を除かしめ給ふが惡祓なり、惡祓をはりて後吉事を招禱せんが爲に、また科するが善祓なり、河海に臨みて水滌を修することは、この善祓に屬くなり、

（るに、善を吉とかけるなり、）

〔日本書紀神一代〕一書曰、略中諸神○中卽科素戔嗚尊千座置戸之解除、以手爪爲吉爪棄物、以足爪爲凶爪棄物、乃使天兒屋命掌其解除之大諄辭而宣之焉、世人愼收己爪者、此其緣也、

（身滌のことを、善祓とのみもいふ、建久年中行事記に、惡祓勤仕、次吉祓勤仕、御麻奉とあり、このゆゑに、）

〔日本書紀十二履中〕五年十月甲子、葬皇妃、既而天皇悔不治神祟而亡皇妃、更求其咎、或曰、車持君行於筑

紫國而悉校車持部兼取充神者、必是罪矣、天皇則喚車持君、以推問之、事既實焉、因以數之曰、爾雖車持君、縱檢校天子之百姓、罪一也、既分寄于神祇、車持部兼奪取之、罪二也、則負惡解除善解除而出於長渚崎、令祓禊、既而詔之曰、自今以後、不得掌筑紫之車持部、乃悉收以更分之、奉於三神、

〔日本書紀十雄略〕十三年三月、狹穗彦玄孫齒田根命、窺窃采女山邊小嶋子、天皇聞以齒田根命、収付於物部目大連、而使責讓、齒田根命以馬八匹大刀八口、祓除罪過、既而歌曰、耶麼能謎能、故思麼古喩衞爾比登涅羅賦、宇麼能耶都擬播、鳴思稽短謀那斯、目大連聞而奏之、

〔永昌記〕天仁三年〇天永元年三月十八日丙辰、卯刻參內、依公家春日御奉幣也、略中辰刻上卿新藤中納言參著仗座、〇中宗能勘申可祓清社頭日時、勘云、可祓清舂日時者、日近例必無別日時、然而今度令勘之、近永承二年、賀茂禰宜成實刃傷之日、祓清社頭、有件日時、凡別祓有否、神祇官申旨、頗不分明、罪人於社頭行之、別祓不可有者、然而今度之例有別祓、本條所述善惡、祓如此事而已、祭物社司可出、今度罪人信經出之者、頗違例歟、官不成宣旨、只遣日時於神祇祐致元許、事了上卿退出、

〔類聚三代格〕太政官符

定准犯科祓事

一大祓料物廿八種承前惡祓料物准此重輸、今除二一祓一下條亦同、

馬一匹　大刀二口　弓二張　矢二具、以十隻二爲一具、已上三種、並不限新舊、

刀子六枚　木綿六斤　麻六斤　庸布六段　鍬六口

鹿皮六張　猪皮六張　酒六斗　米六斗　稻六束

鰒六斤、　堅魚六斤　雜腊六斤　鹽六升　海藻六斤

滑海藻六斤　食薦六枚　薦六領　坏六口

柏十五把枚手六十枚料　匏四柄　楮四枚長各一丈　席一領

右關意大嘗祭事、及同齋月內、吊喪問病、判署刑殺文書、決罰食肉、預穢惡之事者、宜科大祓、所輸雜物具如前件、官人有犯、兼解見任、

一上祓料物廿六種

大刀一口　弓一張　矢一具　刀子二枚、　木綿三斤

麻三斤　庸布三段　鍬三口　鹿皮三張　酒三斗

米三斗　稻三束、　鰒三斤　堅魚三斤　雜腊三斤

鹽三升　海藻三斤　滑海藻三斤　食薦三枚　薦三領

坏四口　盤四口　柏十把枚手卅枚料　匏二柄　楮三枚長各一丈

席一領

右關意新嘗祭、鎮魂祭、神嘗祭、祈年祭、月次祭、神衣祭等事、殿伊勢大神宮禰宜內人、及穢御膳物、並新嘗等諸祭齋日、犯吊喪問疾等六色禁忌者、宜科上祓、輸物如右、

一中祓料物廿二種

刀子一枚　木綿一斤　麻一斤　庸布一段　鍬一口

鹿皮一張　酒一斗　米一斗　稻一束　鰒一斤

堅魚一斤　雜腊一斤　鹽一升　海藻一斤　滑海藻一斤

食薦二枚　薦二領　坏四口　盤四口　匏一柄

柏五把枚手廿枚料　楮二枚長各一丈

右關意大忌祭、風神祭、鎮花祭、三枝祭、鎮火祭、相嘗祭、道饗祭、平野祭、園韓神祭、春日等祭事、殿物忌戶座御火炬、幷物忌女、及觸穢惡事預御膳所、幷忌火等祭齋日、殿祝禰宜及預祭事神戶人、犯弔喪問病等六色禁忌者、宜科中祓、輸物如右、

一下祓料物廿二種

刀子一枚　　木綿六兩　　麻六兩
鹿皮一張　　酒四升　　米四升
堅魚六兩　　雜腊六兩　　鹽四合
食薦一枚　　薦一領　　坏二口
柏五把（枚手廿枚料）　　楮二枚（長各一丈）
右關忌諸祭祀事、及齋日殿祝禰宜幷預祭神戸人、犯諸禁忌者、宜科下祓、輸物如右、
以前被右大臣宣偁、承前神事有犯、科祓贖罪、善惡二祓重科一人條例已繁、輸物亦多、事傷苛細、深損黎元、仍今改張立例如件、其殿傷若重者、祓淨之外、依法科罪、齋外鬪打者、依律科決、不在祓限、又祝禰宜等與人鬪打、及有他犯事、須科決者、先解其任、即決罰神戸百姓有犯失者、行齋之外、決罪如法、今具奏狀奏聞、奉勅依請、

延暦廿年五月十四日（又見神祇令集解）

〔延喜式五齋宮〕凡雜色人已上與人殿鬪者、科上祓、
凡寮官諸司、及宮中男女修佛事、私奸密婚者、科中祓、
〔大神宮諸雜事記〕神龜六年正月十日、御饌物依例於豐受神宮調備、從彼賚參於大神宮之間、宇浦田山之迫道、死男爲鳥犬被喰、肉骨分散途中、然而忽依無遁去之道、件御饌物乎賚徹、天合期供進已了、爰同年二月十三日、天皇（聖武）俄御藥、仍令卜食、神祇官陰陽寮勘申、巽方大神依死觸不淨之咎所祟給也者、即下賜宣旨於國司、大神宮被捜糺之處、件浦田坂死人之條依實注申、隨則同三月十三日、依右大臣宣奉勅下勅使、且被謝遣件不淨之由、且彼日御饌賚參豐受宮大物忌父止補神主川麻呂、御炊内人神主弘美、及物忌子等進忌狀、科大祓、解却見任了、
天平三年六月十六日御祭仁、二見郷長石部島足參入神宮、而煩霍亂、退出之間於神宮近邊倒死亡了、而聞天皇（聖武）御所物怪頻也、即神祇官幷陰陽寮等勘申云、巽方大神之御當有死穢事歟、仍所祟給也者、即皇太子（此時無太子恐誤）俄不豫大坐歟、仍勅使令祈申於二宮、給且下賜宣旨大神宮被尋糺死穢之事、爰島足頓滅事乎禰宜等注申、仍宮司上奏之、因之度會郡大領神主乙丸、少領新家連公人丸等依宣奉勅下勅使、且被謝遣件不淨之由、且彼日御饌賚參豐受宮大物忌父止補神主野守、豐受神宮禰宜神主安丸等（和科）大祓、大神宮禰宜神主安丸等（和科）中祓、（天）差勅使令祈申於大神宮已了、
天平勝寶六年六月廿六日夜、豐受宮御稻御倉之放棟（天）、盜取御稻十八束畢、仍番直内人等、付跡尋求之處、彼御炊内人神主元繼之私宅搜出（多利）、件元繼者、繼橋郷美乃々村住人也、即元繼夫婦相共捐進於司廳、仍宮司略問之處、無同類、被迫飢渴、元繼一人盜取之由辨申（世利）、仍且令進過狀、且申上本宮、隨即上奏、被下宣旨、元繼科大祓、解任職、番直内人五人（波）科中祓、至于貢御稻（波）、宮司以他稻祓清令進替既畢、
寶龜元年十二月廿一日、瀧原宮御裝束色目如本數替進既了、事發以去年九月廿六日、宮司進神祇官解狀偁、皇大神宮禰宜解狀偁、別宮瀧原宮當月御祭使當宮大内人神主世增解狀偁、彼宮物忌父石部千妙申文云、昇殿次奉拜見御所御體幷御裝束等濕損御也者、檢故實、正宮別宮如是非常濕損之時、公家被奉替例多者、任本數、彼新替進件御裝束矣者、而神祇官勘申云、物忌父千妙陳狀云、當宮祭使隨身大神宮禰宜之封奉納幣物之後、付封御鑰櫃之例也、仍内人物忌等御祭昇殿之日從供奉拜見御殿内之外、敢無奉開也者、所陳申尤不當也、何者大風霖雨之時致其恐觸案内於大神宮神主、申請神宮使、相共可開封也、而不致其用意、忝奉濕損御裝束物等、既千妙之怠也者、千妙無方陳申進怠狀、即科大祓解任了、四年十月十三日、志摩守目代三河介伴良雄與彼國書生總判官代酒見文正、伊雜神戸檢田程爲狩（志）天、伊雜宮之近邊射伏猪鹿已了、爰宮人等雖加制止、專不承諾、仍内人等訴申於本宮、隨則大神宮申上宮司、依宮司解神祇官奏聞於公家、即被下官使、召對伴良雄等離宮院、各

科。大祓。又國司科。中祓。清已了、

〔古事談五　神社佛事〕延曆十年八月五日、子刻有盜人、燒大神宮正殿一宇、財殿二宇、御門瑞垣等、〇中略同廿三日、〇中略渡會郡司斷。大祓。外宮司禰宜等斷。上祓。不解、

〔大神宮諸雜事記〕弘仁四年九月十六日、豐受宮大內人神主眞房妻、參詣於彼宮御祭天、祇候玉垣下之間、件女乍坐產生畢、卽赤子搔入紬天退出也、仍宮司註具之由上奏早畢、因之以同月廿九日、被祈申件非常產穢〇穢原本作觸、今從一本改之由、勅使王散位從五位下節職王、中臣正五位下行主稅頭大中臣朝臣淵魚、忌部等也、件眞房夫妻共科大祓。解見任已畢、自今以後、姙胎女不參入於鳥居內也、卽起請被下宣旨又了、

〔類聚國史十神祇九〕弘仁七年六月丙辰、伊勢大神宮司官卜之有祟、科大祓。解在報賽〇在報賽三字恐衍見任、

〔大神宮諸雜事記〕天長三年七月十三日、宮司菅生道成科。大祓。解任、事發以去六月十一日、豐受大神宮朝御饌汚穢已畢、依過怠狀、大物忌父子、宮司幷三人、各科。大祓。解任也、但禰宜科。上祓。被清供奉、而問宮司以同日遭父喪畢、六年九月、大神宮御遷宮、同年五月三日參宮勅使王散位從五位下信忠王、中臣正六位上大中臣朝臣定實忌部也、而件勅使參宮奉幣之間、俄雷電鳴響、天地共震、雨下如沃、卽一時之間洪水洗岸、於爰自同六月五日、天皇和〇淳御藥切々也、仍本官〇神祇官幷陰陽寮勘申云、巽方大神依不淨事祟歟、卽日天皇御示現、告汚穢事條々、示給倍利、仍夢想之告恐御天、被下宣旨尋糺之處、前日勅使中臣定實加離宮宿坊仁、隨身駄落胎事隱也、度會郡司驛專當等進上其由文已了、因之國宮司等副件申文上奏了、但王信忠中臣定實等付官使歟、追下離宮院、以同年七月十九日、信忠科。上祓。定實科。大祓。被令謝遣、且以同日勅使參宮、被祈申汗穢之由了、

〔豐受大神宮禰宜補任次第〕禰宜外從五位下神主土主在任十三年

右神主〇略〇中仁壽二年男童死穢內依供奉神事、任八月十九日宣旨科。大祓。解任、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年八月十一日己未、內膳典膳正七位下雀部朝臣祖道、隱匿司中人死之穢、仍科。上祓。

〔類聚大補任宇多〕寬平九年丁巳、少司正六位上本眞、十二月著任、在任四年、前司本扶弟牢雄、八月依神事違例之告、大祓。解任替、

〔大神宮諸雜事記〕承平七年三月七日、依神事違例糺正之間、大司時用無陳遁方、仍被停止時用之釐務二ヶ年、以同八年十二月、件宮司科。大祓。解任既了、

〔類聚符宣抄〕太政官符伊勢國幷大神宮司內印

應科被大神宮御厨案主神戶預等事

坐豐受神宮祟給、御厨案主秦茂興修三寶事、同案主新家恒明、同眞行等、依過穢神事、遣使科。上祓。可令被清奉仕事、

同宮鈴鹿郡神戶預等、依過穢神事祟給、科。下祓。令被清奉仕事、

使中臣權大祐正六位大中臣朝臣理明

卜部散位外從五位下直宮禰保實

右得神祇官今月十日解偁、被太政官去六月十日符偁、彼官今日解偁、依例供奉御體御卜、所祟奏聞既訖、仍錄事狀申送、如件者、官宜承知依件行之者、彼色々人々爲令被清、差件等人、宛使申送者、國宜承知依件行之、符到奉行、

左少辨

應和二年八月廿二日

位右少史

驛鈴二口一口四剋一口三剋

〔日本紀略四村上〕應和二年八月廿八日癸丑、神祇官勘申大神宮新宮心柱違例立之、判官禰宜內人等

罪文、仰依定申令祓、

〔日本紀略十一條〕寛弘五年十月一日戊子、平座見參、今日宇佐八幡宮禰宜成子、乘車參織部司南門、訴申彼宮司邦利、以無實、科祓事、

〔朝野群載六神祇官〕奏龜卜　御體御卜

神祇官謹奏

天皇我御體御卜爾、率卜部等、天、太兆爾卜供奉留　狀奏、○略中　坐伊勢國大神宮御領、伊賀神戸領、參河本神戸、同荒神戸領等、同宮御領服織殿神部等、依過穢神事、祟給、遣使科上祓、可令祓清奉仕事、又坐若狹國若狹比古神、常神、又坐越前國氣比神、劒神、志比前神、口神、投井手神、又坐加賀國白山神、氣多神、又坐能登國氣多神、伊須須流支比古神也、坐越中國鵜坂神、氣多神、白鳥神、三宅神、又坐越後國大社神、伊夜比古神、河野神、氣多神、物部神、又坐佐渡國大目神、度津神、引田部神、飯持神、又坐丹波國籠神、須岐神、物部神、又坐因幡國高野神、大江神、又坐伯耆國倭文神、大神山神、國坂神、又坐出雲國杵築神、河上神、又坐阿波國天河別神、大麻神、口部神、白鳥神、亦坐讃岐國大麻神、樒梨神、大水神、田村神、亦坐伊豫國村山神、大山積神、野間神社司等、依過穢神事、祟給、遣使科中祓、可令祓清奉仕事、○略中　以前太兆卜供奉留　御體御卜如件、謹以申聞、謹奏、

永暦四年六月十日　　宮主正六位上行口少祐卜部宿禰兼宗

中臣從五位下行大祐大中臣朝臣惟維

〔宮主秘事口傳〕差文書樣、　如此長官加署也、無請印也、

神祇官

差進　御體御卜祓使事

坐伊勢國大神宮一禰宜、豐受宮二禰宜、同宮等御領、河曲神戸司、伊賀本神戸司、遠江新神戸司等、依過穢神事、祟給、遣使科中祓、可令祓清奉仕、差件等人充使、可被發遣狀、差進如件、

正六位上行少史齋部宿禰

正六位上行權大祐大中臣朝臣

從二位行伯

神祇官

差進　御體御卜祓使事

坐伊賀國烏坂神、坐伊勢國鴨神、坐尾張國河曲神、坐參河國稻荷神、坐遠江國於侶神、坐駿河國御稻神、坐伊豆國部多神、坐甲斐國笠屋神、坐相模國阿夫利神、坐武藏國椋神、坐安房國天比理神、坐上總國姉埼神、坐下總國蛟蜊神、坐常陸國藤内神社司等、依過穢神事、祟給、遣使科中祓、可令祓清奉仕事、

使中臣正六位上大中臣朝臣

卜部正六位上卜部宿禰

神部　貳人

右依官宣、御體御卜祟給、過穢神事、人等、科上祓、爲令祓清奉仕、差件等人充使、可被發遣狀、差進如件、

年號　月十日

正六位上行權大祐大中臣朝臣

從二位行伯

神祇官

差進　御體御卜祓使事

坐伊賀國烏坂神、坐伊勢國鴨神、坐尾張國河曲神、坐參河國稻荷神、坐遠江國於侶神、坐駿河國御稻神、坐伊豆國部多神、坐甲斐國笠屋神、坐相模國阿夫利神、坐武藏國椋神、坐安房國天比理神、坐上總國姉埼神、坐下總國蛟蜊神、坐常陸國藤内神社司等、依過穢神事、祟給、遣使科中祓、可令祓清奉仕事、

使中臣正六位上大中臣朝臣

卜部正六位上卜部宿禰

神部　貳人

右依官宣、御體御卜祟給、　同前差進如件

年號　月十日

從二位行伯

神祇官

正六位上行權少祐齋部宿禰

差進　御體御卜祓使事

坐二近江國一飯道神、坐二美濃國一多伎神、坐二信濃國一粟野神、坐二上野國一賀茂神、坐二下野國三和神一、坐二陸奥國一月山神社司等、依レ過二穢神事一祟給、遣レ使科中祓一可レ令二清奉仕一事、

使中臣正六位上大中臣朝臣
卜部正六位上卜部宿禰
神部　貳人

右依二官宣一、御體御卜ニ祟給　同前之狀、差進如レ件、

正六位上行權少祐齋部宿禰

年號　月十日

從二位行伯

神祇官

差進　御體御卜祓使事

坐二若狹國若狹比古神一、坐二越前國織田神一、坐二加賀國一出水神、坐二能登國一相見神、坐二越中國一高瀨神、坐二越後國三嶋神一、坐二佐渡國一渡津神社司等、依レ過二穢神事一祟給、遣レ使科中祓一可レ令二清奉仕一事、

使中臣正六位上大中臣朝臣
卜部正六位上卜部宿禰
神部　貳人

右依二官宣一、御體御卜ニ祟給　同前之狀、差進如レ件、

正六位上行權少祐齋部宿禰

年號　月十日

從二位行伯

六位史、請二取此差文一、書成宣旨一者也、宣旨案略レ之、十二月者、他道也、年々見二符案一、

事前祓禊

○按ズルニ、本文粗ニ朝野群載ニ同ジ、恐クハ其書式ヲ示サンガ爲ニ出シタルモノナランカ、

〔仲資王記〕建久五年九月十一日戊戌、裏書云、十一日伊勢齋宮寮頭資賴朝臣、幷國司代信貞、史大夫五位口口等、科レ祓下レ宣旨、史生季俊所二持來一也、是者正月元日大神宮口口口納二置彼寮一之故云々

〔皇大神宮儀式帳〕一皇大神御形新宮遷奉時儀式行事

以二十六日一、〇九月御裝束物等祓清レ氏、驛使王一人、神祇官副已上一人、忌部一人、大神宮司、共令レ參二入外院太玉串所一、然先禰宜內人、幷人垣可二仕奉一男女等、以二戊時一悉皆大宮以西川原大祓清、卽給二明衣一畢、

一年中行事幷月記事

六月例

以二十六日一、從二宮西川原一退出之、御巫內人乎志氏、卽禰宜內人物忌等之後家之雜罪事、令二申一明解除幷清大祓畢、

九月例

神嘗祭供奉行事

以二十五日一、〇中略禰宜內人等悉進集、自二宮西川原一、大贄乃清乃大祓仕奉、幣帛殿爾進納畢、卽供二奉御饌一、以二同日夜亥時一、御巫內人乎第二門爾令レ侍氏、御琴給レ氏請二天照坐大神乃神敎一氏、卽所レ敎雜罪事乎自二禰宜館一始、內人物忌四人館別解除清畢、卽禰宜內人物忌等、皆悉自二宮方一川原集侍氏、先向二神宮一、人別罪事乎明申畢、卽向二川一御巫內人解除告刀申畢、皆悉率正殿院參入、掃清奉畢卽罷出之、

〔神宮雜例集二〕年中行事

三月晦日祓事　於二離宮院一行也、宮司內宮禰宜參勤也、〇來月神御衣祭解除也、又見二二宮年中行事一

〔皇大神宮年中行事六月〕十五日朝、正員禰宜一同各神拜之後、乘馬祝部等引率、爲二奉仕一荒蠣御贄等、參二阿原木神崎一、先於二岡村河原一在レ祓、件役當鄉刀禰之中堪能者一人之勤也、仍所レ被二相具一也、〇中略抑件

祓者、彼荒蠕御贊奉仕之間、供奉人不淨事疑所ニ祓清一也、

〔貞信公記〕承平元年正月十七日、神寶造始、卽經ニ日御願一也、令下神祇行ニ祓事一非ニ大祓一、

〔小右記〕治安三年六月二日甲午、今日發ニ遣鹿島香取使一、〇略中使經孝幷辛櫃二合、先遣ニ河原祓所一、未時出ニ河頭一、

〔經信卿記〕承曆五年正月九日丁酉、今日依レ爲ニ吉日一欲ニ參ニ平野一、吉方北野、賀茂、幷鞍馬、招ニ陰陽師實行一令レ讀中臣祓一、

〔中右記〕寬治六年三月廿三日丙午、依レ例有ニ石清水臨時祭一、〇略中巳刻出御、內藏寮奉ニ御贖物一、藏人大輔通輔傳取供レ之、左近中將源國信朝臣候ニ陪膳一、頭中將仲實童服、頭辨季仲今日使、仍他人勤ニ仕此事一也、次使及宮主自ニ同小門一參入著ニ座宮主代官參入宮主北、使南、次舞人自ニ西中門一率ニ御馬一參入、列立南池水邊、御祓了宮主退出、次牽ニ出御馬一、次撤ニ贖物一、次藏人兵部大輔通輔獻ニ御笏一、次使起ニ座就一レ机、邊レ撎笏捧ニ御幣一而立、三脚之上ニ在ニ北之一裹三裹一內、〇略中頃之來仰云、來十日爲ニ幣帛使一可レ參ニ伊勢一者、

〔兵範記〕仁安元年十一月八日戊申、平野祭也、依ニ分配早旦行水一、著ニ尋常裝束一、丸帶鞆修レ祓參ニ社頭一、九日己酉、梅宮祭也、〇略中早旦行水解除參ニ社頭一、

〔治承元年公卿勅使記〕八月十三日庚辰、申時許、藏人左少辨兼光書狀云、來月十日、可レ被レ發ニ遣伊勢公卿勅使一候乎、可レ令ニ參勤給一候者、依ニ天氣言上如件一云云、返事云、來月十日、爲ニ勅使一可レ參ニ向伊勢一之由謹承候了、恐々謹言、則家門立レ札、其銘曰、

自今日至ニ來月十日一、僧尼重輕服、幷不淨之輩不レ可レ參入、治承元年八月十三日

廿九日丙申、川原祓所幷路次自ニ繕進所一向ニ川原一之間、掃除之事、令ニ行國仰一檢非違使基廣一、自ニ二日一至ニ十日一、每日可レ令ニ巡檢一之由同仰了、又陰陽權助濟憲、可レ奉ニ仕祓之旨一同仰之、

九月二日戊申、洗レ髮沐浴、著ニ束帶一參ニ內〇略中頃之來仰云、來十日爲ニ幣帛使一可レ參ニ伊勢一之由謹承候了、恐々謹言、則家門立レ札、其銘曰、

束帶一了奉ニ遙拜一、則入ニ齋所一、〇春日宮小路內藏頭敦任朝臣直廬也、相府于時亥剋許歟、則又沐浴著ニ衣冠一、一兩日修理目代定最奉仕也、此一兩沙汰也、於ニ庭中一解除之、次又奉ニ遙拜一了、解脫、抑門立引ニ注連一、又庭中立レ札、三日己酉、辰時沐浴之後、著ニ衣冠一出ニ二條川原一、〇網代車、前驅布衣、解除濟憲勤レ之了、奉ニ遙拜一歸ニ齋所一、入夜又沐浴、於ニ庭中一解除之次奉ニ遙拜一、十日丙辰、今日可レ進發之日也、尤依レ有ニ其恐一、神祇權少副定隆許、可レ祈禱之由示遣了、是今日副使也、巳剋左府〇藤原經宗參內給之由聞レ之、仍沐浴〇卯剋許先洗レ髮了之後、著ニ束帶一無文帶、蒔繪大刀、出ニ二條川原一、〇前驅六人解除了、給ニ陰陽師祿一、〇被物一重、前驅取レ之、此次奉ニ遙拜一了、參內著ニ殿上一、〇略中予於ニ北門外一給ニ宣命於中臣一、退出、自ニ郁芳門一歸ニ精進屋一、〇略中其路自ニ富小路南行一、至ニ大炊御門東折一、自ニ京極南行一、至ニ二條東折一、經ニ川原一入ニ押小路末一、經ニ金剛勝院西大路南行一、自ニ姉小路末東折一、至ニ祓戶一、修レ祓、神祇官奉レ仕之了、〇向ニ京方一修レ之、予以下次第列居、就路、亥剋許著ニ勢多驛家一、〇中食事了沐浴著ニ衣冠一、於ニ東庭一解除、向レ巽遙拜了付レ寢、抑於ニ祓戶一著ニ改藁深沓一、騎乘替馬、出衣押ニ入股裁一了、

十一日丁巳、寅剋差食了、沐浴之後於ニ東庭一解除、神馬神寶同レ之、〇略中至ニ野洲河一解除、神寶神馬併會レ之、祓了就レ路、十二日戊午、朝饌之後、沐浴解除、幷遙拜等了、卯剋許就レ路、於ニ外白川一解除、神寶神馬等整ニ立之一、十三日己未、寅剋差食了、沐浴了則著ニ衣冠一、天漸欲レ曙之間、於ニ庭中一解除、十四日庚申、辰刻就レ路、至ニ多氣河一、〇略中次於ニ松樹下一修レ祓、大神宮司儲ニ祓物一、幷座等、〇略中午剋終著ニ離宮一、〇略中入夜沐浴了、於ニ東庭一解除、十五日辛酉、宮司雜事稱有ニ懈怠一、神祇官等遲參度々加催之後適參上、仍於ニ東庭一切懸外ニ修レ祓、神祇官等列レ之、〇略中至ニ宮川一、〇略中於ニ東岸一修レ祓、〇略中至ニ第二鳥居一、〇豐受宮下、大內人二人著ニ衣冠一、一人奉ニ大麻一立レ予取レ之意氣、一人又持ニ鹽湯一、入ニ土器一以ニ榊葉一灑レ之三度、〇略中參內宮、於ニ一鳥居外下一馬解、劒參入、向ニ御裳濯川一修レ祓、〇神寶使等列レ之了於ニ二鳥居下一、鹽湯大麻如ニ外宮一、

〔外宮嘉祿三年山口祭記〕六月廿二日己巳、午時造宮使神祇權大副從四位下大中臣朝臣隆通、祭主息爲ニ拜賀一始參宮、目代侍十餘人、如ニ木爲共祇承一、官掌二人、宗胤神主文光大麻、鹽湯獻レ之、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年四月廿一日庚午、將軍家〇宗尊親王二所〇伊豆箱根御精進始、御濱出爲ニ浴潮御一也、

爲御水干御騎馬也、廿三日壬申、御濱出如一昨、是中御潮也、

〔八幡社參記〕康正二年三月廿七日丙申、今日參詣石清水八幡宮、○略 中自去廿四日晚始神事、吉田前預兼名卿令立神事札、今日辰一剋、著香小直衣、文桐丸萌黃、和文松立涌濤色、藤丸浮織物指貫上袴也、出座公卿座、右中將教國朝臣持劒相從、其先聖護院准后 祕傳中山大納言中被加持、次土御門三位有季卿淨衣重衣入中門廊北妻戶來座前、奉仕身固了、退出之後、聊經程有季卿乘輿之故也、起座出當間、經中門廊內、出車寄戶乘輿、祕案中門廊西簀子坐定之後、兼名卿布衣上袴出北方腋戶、自輿左方指出祓、予○足利義政以左片手取之、如拂懸息了返授之、兼名退入之後、力者等進寄舁立輿、出西四足門、○略 中巳剋下著善法寺透清法印也寄輿於寢殿南面下輿入簾中、先式次差饌三獻、此後行水、次著淨衣、絹、蘇芳和文桐唐草、出座寢殿南面階間內也祕案簾也次土御門三位有季卿著淺沓入東扉中門、著八足下座圓座也、顏向乾方、○中略 次三條大納言○公綱經南簀子、跪當間簀子、益光持來贖物、跪大納言座下、大納言取之、昇長押居予前、退居本所、益光退入、次有季卿祓詞、畢持大麻持寄砌下、大納言降階乍立取之、歸昇持來、予取之如拂懸息、打置柳筥上以上向南方、

〔儀式、十〕將軍進節刀儀

其將軍入京之時、去京一驛、先遣軍曹申事由、仰大藏幄於便河邊、遣神祇官祓禊、久給戰場多故、次遣使郊勞無功不須、

〔本朝世紀〕天慶四年八月七日甲午、山陽南海兩道追捕使右近衛少將小野好古朝臣、今日入京、先是自山崎津申上云、去年征東大將軍藤原忠文朝臣入京時、公家遣神祇官等、相迎使河邊行解除事、此般好古入京日、若准彼例、可有解除歟云云、右大辨藤原在衡朝臣、以此由執申太政大臣家、○藤原忠平仰令大外記三統公忠宿禰勘申先年道々追捕使等歸洛時例者、公忠申云、大將軍者、依法條已有解除事、至于追捕使、無解除例云々、在衡朝臣以此由申太政大臣家、仰云、然者不可有解除之由可仰遣者、

〔禁秘御抄、下〕解除

年中行事障子東、御屏風二帖立廻 檜部有鎌子 其中敷小席二枚、其上敷綠端半疊一帖 青端也 御座左方立燈臺供御燈、在打敷 先出御以前供錫紵、無文御冠、卷纓 藏人盛柳筥、居土高坏、尋常御冠也、御衣御袴如恒、不著直衣、往代先著常直衣、頭一人女藏人二人相從、一人持唐匣筥、蓋入御櫛、一人加宇加伊、次頭取錫紵令著御、布御帶只一結、次御冠、次入御、女藏人取常御冠入、次御冠幷錫紵給藏人所、上古或錫紵布也、青鈍直衣也、而郁芳門院御事時彼例、可有解除歟云云、右大辨藤原在衡朝臣、以此由執申太政大臣家、○藤原忠平仰令大外記三統公忠宿禰勘申先年道々追捕使等歸洛時例者、公忠申云、大將軍者、依法條已有解除事、至于追捕使、無解除例云々、在衡朝臣以此由申太政大臣家、仰云、然者不可有解除之由可仰遣者、

〔本朝世紀〕天慶四年八月七日甲午、山陽南海兩道追捕使右近衛少將小野好古朝臣、今日入京、先是自山崎津申上云、去年征東大將軍藤原忠文朝臣入京時、公家遣神祇官等、相迎使河邊行解除事、此般好古入京日、若准彼例、可有解除歟、仍云云、右大辨藤原在衡朝臣、以此由執申太政大臣家、○藤原忠平仰令大外記三統公忠宿禰勘申先年道々追捕使等歸洛時例者、公忠申云、大將軍者、依法條已有解除事、至于追捕使、無解除例云々、在衡朝臣以此由申太政大臣家、仰云、然者不可有解除之由可仰遣者、

〔禁秘御抄、下〕解除

年中行事障子東、御屏風二帖立廻 檜部有鎌子 其中敷小席二枚、其上敷綠端半疊一帖 青端也 御座左方立燈臺供御燈、在打敷 先出御以前供錫紵、無文御冠、卷纓 藏人盛柳筥、居土高坏、尋常御冠也、御衣御袴如恒、不著直衣、往代先著常直衣、頭一人女藏人二人相從、一人持唐匣筥、蓋入御櫛、一人加宇加伊、次頭取錫紵令著御、布御帶只一結、次御冠、次入御、女藏人取常御冠入、次御冠幷錫紵給藏人所、上古或錫紵布也、青鈍直衣也、而郁芳門院御事時彼例、可有解除歟云云、右大辨藤原在衡朝臣、以此由執申太政大臣家、○藤原忠平仰令大外記三統公忠宿禰勘申先年道々追捕使等歸洛時例者、公忠申云、大將軍者、依法條已有解除事、至于追捕使、無解除例云々、在衡朝臣以此由申太政大臣家、仰云、然者不可有解除之由可仰遣者、

〔禁秘御抄、下〕解除

年中行事障子東、御屏風二帖立廻 檜部有鎌子 其中敷小席二枚、其上敷綠端半疊一帖 青端也 御座左方立燈臺供御燈、在打敷 先出御以前供錫紵、無文御冠、卷纓 藏人盛柳筥、居土高坏、尋常御冠也、御衣御袴如恒、不著直衣、往代先著常直衣、頭一人女藏人二人相從、一人持唐匣筥、蓋入御櫛、一人加宇加伊、次頭取錫紵令著御、布御帶只一結、次御冠、次入御、女藏人取常御冠入、次御冠幷錫紵給藏人所、上古或錫紵布也、青鈍直衣也、而郁芳門院御事時彼例、可有解除歟云云、右大辨藤原在衡朝臣、以此由執申太政大臣家、○藤原忠平仰令大外記三統公忠宿禰勘申先年道々追捕使等歸洛時例者、公忠申云、大將軍者、依法條已有解除事、至于追捕使、無解除例云々、在衡朝臣以此由申太政大臣家、仰云、然者不可有解除之由可仰遣者、

次件御裝束皆具、宮主賜之、

向吉方之河原令切流之由也、眞實者自上古無此儀也、宮主隨身之退出、

大麻返渡内藏寮史生

〔類聚國史百七十三災異〕天長三年正月壬申、緣左兵衛府失火事、祓除於南庭、

〔日本紀略淳和〕天長七年七月癸巳、玄暉門外中重掖令祓霹靂事、

〔類聚國史十一神祇〕天長七年十二月甲子、請僧五口奉讀金剛般若經、兼令神祇官解除、謝物怪也、

〔日本紀略五冷泉〕康保四年六月十六日、酉剋天皇除御素服、依遺詔不被行大祓事、但内藏寮進祓物於御前、宮司有御解除事、

〔蜻蛉日記上〕あるべきことどもをはりてかへる、やがてふくぬぐに、にびいろのものどもわふぎなでばらへなどするほどに、

ふぢごろもながすなみだのかはみづはきしにもさするものにぞありける

〔源氏物語二十乙女〕年かはりて、宮の御はてもすぎぬれば、世の中色あらたまりて、ころもがへのほどなどもいとめかしきを、なしてまつり〇茂加のころは、おほかたのそらのけしき心ちよげなるに、前齋院はつれづれとながめ給、〇略中大殿より、みそぎの日は、いかにのどかにおぼさるらんとぶらひきこえさせ給へり、けふは、

かけきやは川瀬の波も立かへり君がみそぎのふぢのやつれを、むらさきのかみたてぶみすくよかに、藤の花につけたまへり、をりのあはれなれば、御かへりあり、

ふぢ衣きしは昨日と思ふまにけふはみそぎのせにかはるよを

〔源氏物語二十乙女〕按察大納言左衛門督うへの五節には良清、今はあふみのかみにて左中辨なん奉りける、みなとゞめさせ給て、宮づかへすべくおぼせ事ことなる年なれば、娘をおの〳〵奉り給ふ、殿の舞姫は、惟光朝臣のうのかみにて左京大夫かけたる娘、かたちなどいとをかしげなる聞えあるをめす、〇略中やがてみなとゞめさせ給ひて、宮づかへすべき御氣色ありけれど、此たびはまかでさせて、近江のはからさきのはらへ、つのかみのはなにはと、いとみてまかでぬ、

〔河海抄九乙女〕五節前後の齋に皆祓をする也、何のはらへも、河邊海邊にて禊をする本儀也、辛崎難波七瀨の隨一也、仍近江攝津國司奉る舞姫、此所禊尤有便宜乎、舞姫は五節はてゝ、曉天退出の時祓をする也、上古はからさきなにはまでも下向しけるが、近代は内野にて、陰陽寮まゐりまうけて勤仕之、

〔大神宮諸雜事記二〕康平六年五月廿六日、齋内親王御宇〇字一本作兄修學院阿闍梨入滅了、然而齋宮齋院祖父母、及兄弟乃忌服不御坐之例也、以日易月之前例、所謂服五月五日、服三月三日、服一月一日、是承前之例也、仍其間御匣殿御坐天、内膳炊部司等乃御膳物不供天、只進物所與リ御飯御菜等進了、但本服五月也、仍五箇日所下坐也、同六月、祭使神祇少祐輔長參下、齋内親王參宮了、但去晦日御禊、以今月十日奉仕天令供奉給也、依以日易月之例也、

〔左經記〕寛仁元年七月四日庚子、參入覽日時文等、〇中略被仰云、明日於齋院、可令行解謝祓者、是院司等依觸二長官爲正祭也、予仰旨神祇官宣旨也

長元九年五月廿一日戊戌、戌四點除御錫紵、〇後朱雀即召藏人下給件御冠、令候所者其後晝御座東間、掃部寮鋪小筵二枚、其上供半疊、同間當庭中鋪菅圓座一爲宮主座、其前鋪小筵、居錫紵、入御筥、居高杯一天皇著御座、供贖物、次宮主供大麻、返給之後著座、御禊畢入御、其後藏人召内藏官人、令持件錫紵、宮主相具赴鴨河令流失云云、

〔中右記〕大治四年七月廿七日癸卯、今夜院〇鳥羽有御錫紵除御之事、陰陽頭家榮御祓云云、及十三ヶ日除御口一年之儀也、以日易月、十三ヶ月之儀者、

〔吉田家日次記〕應永九年五月廿八日庚戌、戌刻兼富兼勝等著服、其儀如先日、但日次事不及尋陰陽師、予相計之除衰日了、以巫女祓、密々沙汰了、

〔春日權神主師淳記〕明應六年八月十四日、里へ出ル中ヤマノ道ニ、蓮花院小者ヲ殺害シテ置之、十八日、先日中山死人所ニ注連曳之、（其處ニハ神主常住ニ令下知、主典注連曳之歟、竹枯木枝ナンド引廻リ）九月廿七日、去月十五日朝見付之、當山之里へ出ル路死人穢、卅箇日過之間、任先例可有清祓候由、披露寺門之處、今日祭物任例三貫三百文下知之、仍支配狀事、任例權神主ヨリ認遣了、

支配社頭山路死人穢清祓用途事

合三貫三百文之內七十五文酒直三升代

定錢三貫二百廿二文

半分一貫六百十一文（除二常住一人分六十一文）

錢一貫五百四十七文

神主　七百七十二文

又半分一貫六百十一文（除二常住一人分六十一文）

定錢一貫五百四十七文

權神主　二百十一文

新權神主　百八十二文

次預　百五十五文

辰市權預　百三十文

新々預　八十八文

右任例支配如件

新權預　同

加任預　同

神宮預　同

今西權預　同

今西新預　同

正預內

明應六年九月廿七日

〔萬松院殿穴太記〕比叡辻の御所にて御除服の事有、消息宣下にて、大內記中原枝賢朝臣宣旨を持て下向す、酉の刻ばかりに寶泉寺の屏重門の外に屏風を立、火を燈して、刑部卿有春卿參りて、御衣を吉服に改めて、中臣祓を修して祓ひ奉りて、御素服をば有春卿取て出たり、

〔忠利宿禰記〕承應三年十一月十六日壬寅、昨日內裏觸穢限也、今日內侍所撤注連、今日未刻、於內侍所被行清祓、自吉田被奉仕之云云、

〔基量卿記〕延寶四年十二月廿七日、今朝寅刻より法皇（後水尾）御所出火、（略）中內侍所火急之間、暫時庭上へ奉降御云云、卽御動座之間、來春早々清祓三箇夜神樂等可有御沙汰云云、

〔重房宿禰記〕延寶五年七月十日乙酉、後聞今夜主上（靈元）除御錫紵、吉田侍從卜部兼連朝臣奉仕清祓云云、

〔章弘宿禰記〕寶永七年正月廿二日、四條御局御葬送也、廿四日、今日戌刻（略）中御祓、

〔續史愚抄（中御門）〕正德二年十月廿四日甲戌、關東穢延及于宮中、（去二十日、故內大臣家宣出棺由有注進、）因天下觸穢、十一月二十日庚子、有觸穢終清祓、（昨穢限也、於內侍所庭如恒歟、）侍從二位（兼敬）奉仕、奉行藏人左少辨兼綦、

享保五年四月六日壬寅、依觸穢終於內侍所庭有清祓、奉行藏人左少辨兼綦、今度於法皇御所無其儀者、

〔知音卿記〕寶曆十二年七月廿一日、今日或人告云、主上（桃園）○今曉寅刻崩御云々、廿八日、自今日天下觸穢云々、九月廿三日、今日清祓有之、（觸穢限也、）

〔續史愚抄（後櫻町）〕寶曆十二年九月八日丁卯、戌刻主上脫錫紵著御、諒闇（刻限有御祓）○（略）中素服公卿殿上人女房等有除服宣下、廿二日辛巳、穢限也、今夜子刻宮中改火已下同、廿三日壬午、於內侍所西庭有清祓（觸穢後也）權大副二位（兼雄）奉仕、奉行藏人右少辨光房、

由祓

〔公卿補任光格〕寛政六年七月十二日、内裏觸穢、去六日、依二典仁親王薨一也、八月四日、錫紵除御、奉行胤定朝臣、同日御禊、陪膳胤定朝臣、廿二日、觸穢訖清祓、奉行如レ元、

〔公卿補任仁孝〕文政四年六月九日、今上親王薨去、〔號砂御所〕十六日、内裏觸穢、七月廿一日、觸穢終清祓、奉行隆光、

天保十一年十二月廿八日、皇太子〇孝明御除服御禊、奉行亮光政朝臣、十二年正月六日、同夜御禊、陪膳愛長朝臣、二十日、觸穢畢清祓、奉行藏人權右中辨俊克、

〔實久卿記〕弘化三年三月十八日癸酉、戌刻許脱二御御錫紵一〇孝明著二御御心喪服一〔御引直衣〕此後有二御禊之事一、宮主良祥朝臣奉仕了、四月四日己丑、今日觸穢明、今曉家内一同沐浴了、今朝内裏清祓、宮主良祥朝臣奉仕、七月三日丙戌、今夜戌刻故女院〇光格后新清和院御入棺也、自二今日一天下觸穢也、八月廿三日丙子、昨日觸穢了也、今曉家内一同改火沐浴了、今朝内裏清祓良祥朝臣奉仕、

〔素性法師集〕みづのをの御門〇清和のかくれ給へるを、白河にかへさのはらへし侍しに、

人すまず荒たるやどとさてみれば今ぞ木葉は錦也ける

〔散木弃歌集六悲歎〕わざのことはてゝかへりけるに、すいたのゆのむかひに有ければ、たちよりて

あみんとはなけれども、わしなをすゝぎけるついでによめる、

かなしさの涙もともにわきかへりゆゝしき事をあみてこそくれ

服ぬぎ侍る日よめる

みそぎしてころもをとこそ思ひしか涙をさへもながしつるかな

〔魏志倭人〕其死有レ棺無レ槨、封土作レ冢、始死停喪十餘日、〇中略既葬舉レ家詣二水中一澡浴、以如二練沐一、

〔晉書九十七倭人〕死有レ棺無レ槨、封土爲レ冢、初喪哭泣不食肉、既葬舉レ家入レ水澡浴、自潔以除二不祥一、

〔左經記〕長元元年二月一日丙寅、參二關白殿一申云、明日大原野祭也、官使不レ被レ立之由、可レ有二御祓一歟、仰云、

毎日御祓

重服人行二由祓一云々、不レ可レ有二御祓之由仰一歟、爲レ信了、

〔台記〕久安三年九月十七日戊寅、傳聞、去十一日夜、外祖母尼公入滅、仍於二河原一行二由祓一、〔春日若宮祭也〕

〔玉海〕安元三年〇治承元年二月一日辛未、依二諒闇一不レ奉レ幣、

嘉承三年二月同御記、祭當日有二由祓一、倩案二事理一、無二奉幣由祓一、須レ有二當日歟一、仍隨二彼三年例一、今日不レ行二由祓一、然而尚神事也、是又先例也、二日壬申、遣二職事一人於河原一修二由祓一、陰陽師漏刻博士憲成、十月廿九日乙未、今日神事也、服假之後除服、依レ不レ行二由祓一、然而神齋如レ例、此事依二不審一、尋二申關白之處一、報狀如レ此、

除服以前不レ候二由祓一候事也、除服以後雖二日數內一、可レ被レ修候也、神事之條如レ常可レ候也、尤可レ被二忌服一者歟、謹言、

關白在判

或人云、同服之人不忌云々、仍問申之處、被答旨如レ此、依レ之今日雖レ非レ祭、當日恒例發遣幣帛之日也、仍神事也、但行二由祓之時一、明日給云也、然而又今日除服以前不レ修二由祓一、

〔百練抄十五後嵯峨〕寛元元年二月一日戊申、春日祭、中宮〇藤原姞子依二御著帶一無二御奉幣一、被レ行二由御祓一、

〔勘仲記〕建治二年十一月六日丙申、今日春日祭、殿下依二御輕服一無二御奉幣一於二河原一由御祓許也、

弘安元年十一月十一日己未、明日春日祭、依二御輕服一不レ被レ發二遣十列一由御祓云々、

〔禁秘御抄上〕毎日御祓事

主上著二御御衣一、入夜藏人給レ之、於二高遣戸一傳二所衆一、〔藏人跪、所衆乍レ立也、〕返上之時藏人奉レ之、

〔禁秘御抄下〕御祓

毎日祓、御衣許毎日御身上引懸、

毎月祓

〔日中行事〕日ごとのせうこんの御まつり、今はさだまれる事也、日下蔀の藏人、臺盤所にて御撫物申出して、衞士をして陰陽師がもとにつかはす、

〔成氏年中行事〕同晦日〇正月毎月ノ御撫物ノ御使、以闥被定ノ人數ヲ番張ニ書テ被押也、夜ニ入テ御使直垂ニテ參、御人形ノ入タル箱ヲ上蔀樣持テ御出アル時、公方樣御撫物ヲ給、其後大御所樣同御方へ參、皆々給テ、若黨ニアヅケ輿ニ入テ我ヨリ先ニ舁セテ、陰陽頭之方へ罷出、撫物ヲ被官人ニ取出サセテ、座ニ置時出合テ受取祈禱被申、其間ハ陰陽頭或ハ子息或兄弟等マカリ出テ、酒三獻種々モテナシ有之、正月ハ互ニ祝アリ、祈念過テ、御撫物持テ被出ヲ受取持參ノ時、上蔀樣御受取アッテ、其後御使ハ歸テ令歸宅也、

七瀨祓

〔公事根源正月〕七瀨御祓

是は毎月の事なり、七瀨とは、川合、一條、土御門、近衞、中御門、大炊御門、二條のすゑ、これを七瀨とは申なり、陰陽師人形を奉る、主上御いきをかけ、御身をなでゝ返し給へば、殿上の侍臣この所々の川原にむかふ、かへりまゐれば、主上御撫物をめすまねせらるゝ、その外さしたる事なし、後冷泉院の御時は、隔月に靈所七瀨の御祓をおこなはる、その所々は、耳敏川、河合、東瀧、松崎、石影、西瀧、大井川なぞなり、

〔河海抄九乙女〕七瀨所々

難波　農太　河俣攝津　大島　橘小島山城　佐久那谷　辛崎近江

又洛中七瀨者

河合　一條　土御門　近衞　中御門　大炊御門　二條末也

〔藻鹽草十四形〕祓

七瀨祓於洛中、河合、一條、土御門、近衞、中御門、大炊御門、二條、於洛外難波農太、河漢橋津大嶋、橘小嶋、山城櫻谷、辛崎、近江

〔簾中抄下〕七瀨祓

かは井　みゝとがは　まつがさき　いはかげ　東のたき　にしの瀧　大井川

これは靈所とするなり、つねには賀茂川のなゝせにてあり、

〔拾芥抄下本靈所〕靈所

川合　耳敏川朱雀門前、二條南列稱、二　東瀧北白河瀧　松崎　石影西園寺東北野北　西瀧仁和寺鳴瀧　大井河鳴瀧居住土一町許、

〔禁秘御抄上〕毎月事

一日　內侍爲御使參七瀨御祓、陰陽師進人形、入二折櫃一有レ蓋、書二女房名一、其處々井名、上著之尤無謂、但近代女房不レ食物之間、清淨臺盤歟、雖然不レ可レ然、席ヲ上ニ可レ敷、如供御白地不案內人置之、以外事也、次主上懸御氣、撫身返入折櫃、置臺盤所西御簾下、侍臣各取之向河原、代厄祭具之、歸參之後主上著御衣、

〔禁秘御抄下〕御祓

尋常如七瀨御祓上巳等、內侍進撫物、上蔀傳之、撫御身給、使歸參之後著御直衣マヽアリ、一切祓如此、〇中略保安或記、七瀨御祓使用四位五位、殊時叙二四位五位一少將歟、是代始也、

〔日中行事〕七瀨の御はらへ、日ついでをえらびて、下蔀の藏人申さたす、五位の中七人を使にさしてもよほす、近衞司けんさくの輩なぞは、あながちつとめず、臺盤所の臺盤の上に席をしきて、ばんはわたくし物なる故なり其上に陰陽師まゐらせたる人形の櫃を置く、女房人形に衣をきす、櫃に入て紙ひねりをゆはす、上蔀の女房是をまゐらせて御身を撫づれば、御衣筥に入て御ひとへ具して、うちつゝみにつゝみて、臺盤所のにしむきさよより同時に出すあり、

〔應和三年御記〕七月廿一日、藏人式部丞藤原雅材、供御祓物、以明日令天文博士保憲、赴難波湖及七

瀨三元河臨禊、

〔權記〕寛弘四年十一月廿日癸未、卯時誕生女兒、二時許不胞落、仍結著切之、種々立願祈誓、午時許自吉平朝臣示送云、如此事、七瀨祓有感應、則光榮朝臣以下七人許送消息、以申刻令祓、送消息後、未刻平安遂了、

〔中右記〕寛治八年〇嘉保元年十一月十八日、今夜有七瀨御祓幷四界御祭等、

〔顯時卿記〕久安五年八月七日、改院號〇門院美福御裝束晝御座、如元令渡北寢殿、今日於中御門末河原被行御祓、陰陽頭宜榮朝臣奉仕之、使判官代清章（著衣冠）所勤仕也、御撫物自臺盤所方下給、是院號之後、初度御祈也、治曆以後度々記、不載御祈事、只近代之例、待賢門院御時、被行御祓如此（陰陽師家榮朝臣、使殿上人五位顯保、殿上始之日可被始也、）

〔明月記〕治承四年六月廿七日、依昨日催參閑院、院七瀨御祓、御撫物入長櫃一合、自新都渡之於此御所奉行藏人經泰取分之授使、使侍從成家、中務季信、侍從伊輔、下官判官代信政五人也、向近衞末歸參閑院付藏人、

〔玉海〕建久二年五月廿九日丙子、今日每月七瀨御祓云云、

〔明月記〕寛喜三年二月廿日丁丑、巳時計參殿、御東殿云々、昨日定修所送之申文、付新少將進入、仰云、沙汰之時可奏聞、只今渡御云々、卽入御、參御前、心閑見參、七瀨御祓、（七ヶ日連事云々）自公家被行、（皇子御祈）使承曆諸大夫、（每日七人）康和（殿上五位）用承曆者、治承亦諸大夫也、用康和者、元永亦殿上人也、雖然猶可用殿上人之由被定仰、廿四日辛巳、午時許參殿、自東殿還御、七瀨御祓自昨日始、昨日七人催出、知宗、親高、定具、（兵衞佐）宗氏、忠兼、（侍從）經氏、隔日可參之由雖催、或三度或二度、當時領狀、猶被催云々、今日兵衞佐公貞、侍從實尙等領狀云々、

貞永二年二月廿九日癸酉、侍從勤七瀨御祓使云々、

〔勘仲記〕建治二年九月廿八日己未、參內裏、依七瀨御祓當番也、於此使者、大略每月闕如、去比有嚴密御沙汰、然而今日使三人出來之由、奉行藏人清顯讀之、其事靡盬、何可有子細乎、如當時者、似朝威之輕忽、予以一身兼行大炊御門幷二條末瀨、內侍出御撫物、參臺盤所給之、給小舍人次向二條河原大炊御門、被付行代厄御祭、以衞士差遣此瀨、御祓畢衞士歸來、次參內、取御撫物進入畢、予經有顯家三人勤仕之、各兼行兩三所云々、陵夷可謂不便歟、十一月廿五日乙卯、今宮〇啓仁親王御祈始七瀨御祓、被行之、御祓使七人、同時可被發遣云々、予入御點人數之間、不願難治所營參也、及申斜使々參入、院司申皆參之由、御撫物自寢殿西面被出之、各參進給之、於中門廉外給廳官、廳官給釜殿、一人持口口行發遣、予用新事、營具雜色兩三人也、

二條　藏人宮內少輔信輔

大炊御門　予依爲初度、不被付行代厄御祭、且先例、

中御門　勘ヶ由次官仲兼（勘ヶ）

近衞　左衞門權佐雅藤（勘ヶ）召具火長

土御門　藏人右衞門權佐爲方（勘ヶ）已下同前

一條　春宮權大進俊光

川合　新少納言親忠

弘安元年十一月廿七日乙亥、參內、依七瀨御祓當番也、予向二條陰陽師在有奉仕之、深更退出、

〔建內記〕嘉吉三年三月八日甲子、來十四日七瀨御祓事、自是之由示了、十四日庚午、七瀨御祓構試、仍請文自是之由示了、

未刻參內、（東帶、雜色少召具、著侍如例、依近近一歩儀、）使可爲七人之處近年只一人兼七瀨云云、又不及參向於禁中相待御撫物之返進云云、各近例也、藏人將監源政仲（一云、藏人定仲、令與奪云云、）重服者也、無憚哉如何、參候申沙汰云云、清御手水

可ㇾ汲ㇾ水之處、釜殿幷臺所ヒツカヒ仕丁等悉他行、經ㇾ數刻ㇾ云云、次被ㇾ出ㇾ御撫物於臺盤所妻戸前、成房取ㇾ之、内侍自ㇾ簾中ㇾ被ㇾ出之、成房跪ㇾ簾外ㇾ取ㇾ之、自ㇾ弘蓋内ㇾ取ㇾ出折櫃、入ㇾ形入ㇾ之、其上置ㇾ弘蓋、（裏御弘也、）授ㇾ小使（御倉小舎人著ㇾ朝衣ㇾ立ㇾ沓脱之下）小使令ㇾ持ㇾ衛士、向ㇾ陰陽師等ㇾ

七瀬分各々可ㇾ有ㇾ七合之處、回ヶ處之分被ㇾ納ㇾ一弘蓋、仍折櫃一合ニ弘蓋ヲ上ニ置テ出ㇾ之、三合ヲバ別ニ授ㇾ小使、臨期之意巧云云可ㇾ然、今三合分ハ葛蓋手箱等云云、可ㇾ云ニ末代一哉、抑取ㇾ出折櫃ㇾ當ㇾ弘蓋下ㇾ授ㇾ小使ㇾ事當家例也、愚案人形ニハ被ㇾ附ㇾ不祥ㇾ了、依ㇾ爲ㇾ不ㇾ副ㇾ御衣御鏡等ㇾ歟、是愚推也、人形七合之外一合先被ㇾ出ㇾ之、是ハ各別ニ陰陽師一人進之云云、如ㇾ有ㇾ重卿臨時之儀ㇾ歟剩事也、然者可ㇾ被ㇾ副ㇾ御衣ㇾ者歟、無ㇾ其儀ㇾ云云、

成房不ㇾ及ㇾ參向（近例也）於ㇾ禁中ㇾ相待之、經ㇾ數刻ㇾ之後、小使衛士歸參於ㇾ初所ㇾ返進御撫物、今度於ㇾ人形折櫃者、留ㇾ陰陽師許ㇾ了、御單御鏡（納ㇾ弘蓋ㇾ裏等如ㇾ初）返進也、藏人先申ㇾ内侍ㇾ、内侍於ㇾ簾中ㇾ被ㇾ出之、成房進ㇾ簾中ㇾ云云、初度參勤無ㇾ爲、珍重珍重、秉燭之程退出、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年閏二月廿六日己未、今曉有ㇾ若宮祈始、大學助安部晴吉奉ㇾ仕七瀨祓、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年六月六日、炎旱渉ㇾ旬、仍今日爲ㇾ祈ㇾ雨、被ㇾ行ㇾ靈所七瀨御祓、由比濱國道朝臣、金洗澤池知輔朝臣、固瀨河親職、六連忠業、柚河泰貞、杜戸有道、江島龍穴信賢、此御祓關東今度始也、

〔吾妻鏡二十九〕文曆二年〇嘉禎元年十二月廿七日、被ㇾ行ㇾ靈所祭、

由比浦　大膳亮資俊
金洗澤　陰陽權大允晴茂
固瀨河　主計大夫慶資
六浦　前右京亮經昌
柚河　相州權守俊定
杜戸　雅樂大夫泰房
江島　備中大夫重氏

幕府七瀨祓

河臨祓

〔吾妻鏡四十四〕建長六年九月四日癸卯、降雨大風、巳剋休止、連日雨、國土損亡之間、被ㇾ行ㇾ止雨御祈、於ㇾ前濱有ㇾ七瀨祓、宣賢、爲親、廣資、晴憲、晴定、泰房、文元等奉仕之、各向ㇾ南海ㇾ列坐、東上行義、行方等莅ㇾ其所ㇾ奉仕行ㇾ之、仰七人中、文元上首也、而任ㇾ先例ㇾ可ㇾ召ㇾ具下座之由各訴申之間、不ㇾ列ㇾ座被ㇾ仰下ㇾ、仍文元寄ㇾ座下ㇾ西、相ㇾ隔一町ㇾ令ㇾ著ㇾ座云々、

〔伊呂波字類抄加諸社〕河臨祓（カリソン）以ㇾ御衣ㇾ祭之

〔侍中群要六〕祭祓事

凡臨時雜祭等、藏人奉ㇾ仰罷ㇾ向其所ㇾ令ㇾ奉仕ㇾ（如ㇾ御禊ㇾ御禊等之類也）

〔侍中群要七〕御祭等事

臨河御祓　靈所七瀨

〔天延二年記〕二月十三日、今日有ㇾ所々御祭祓等、於ㇾ東河ㇾ奉ㇾ仕河臨御祓、（保憲、使典雅、）

六月十二日、河臨御祓、長清（兵部）爲ㇾ使、（近習不ㇾ勤之、藏人催出之、）

〔明月記〕建永元年八月四日、參上、申時計退下、今日河臨御祓、長清（晴吉宿禰後式部）

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元元年八月十五日、春宮〇後深草御湯始幷御祈始、河臨御祓云々、

〔親元日記〕寬正六年七月廿八日癸酉、松尾御師卷數幷丹瓜二荷進之、河臨祭多田須河原（河井杜南東森ノキ）

〔親元日記〕寬正六年七月廿八日癸酉、松尾御師卷數幷丹瓜二荷進之、河臨祭多田須河原（河井杜南東森ノキ）

參向、（同直垂、於ㇾ彼所ㇾ御兩人著座、各被ㇾ歟ㇾ疊、）時宜終而直ニ御産所ニ江御參、御大刀（金）御進上、御撫物ハ千秋持、參之、在盛卿即參之、自ㇾ御産所ㇾ直ニ殿中ㇾ江御參御祓、（晩勘解由小路在盛卿）爲ㇾ代官ㇾ貴殿（自直垂大帷、）被ㇾ執ㇾ行ㇾ三位（親元朝臣、）

〔新撰字鏡〕禊、戸系反、去、上巳祭也、又云三月三日得ㇾ巳爲ㇾ上巳、上巳乃波良閇月、

〔運歩色葉集見〕巳日祓三月

〔書言字考節用集三神祇〕巳日禊（ミソギ　ハラヘ）

三月上巳禊

〔公事根源三月〕曲水宴

上巳のはらへとて、人みな東流の水上にてはらへするよし、漢書などにみえたり、

〔漢書九十七外戚〕孝武衛皇后、〇中略帝〇武帝祓禊霸上、〔孟康曰、祓除也、於禊水上自祓除、今三月上巳祓禊也、師古曰、祓音廢禊音系、〕

〔後漢書志禮儀四〕是月〇三月上巳、官民皆絜於東流水上、洗濯祓除去宿垢疢、爲大絜、絜者、言陽氣布暢萬物訖出、始絜之矣、

〔禁秘御抄下〕御祓

尋常如七瀨御祓上巳等、內侍進撫物、上簡傳之、撫御身給、使歸參之後著御直衣マヽアリ、

〔後水尾院當時年中行事三月〕三日

ふるき御ゆどのゝ上の日記には、みの日にわたらざる時、三月三日には御人形をなをして、御なでものゝ御ひとへそへて出るなどやうにあれど、此比はさしもみえず、巳の日計たてまつる也、慶長の比までは、賀安の兩家〇賀安倍茂進上せしかど、賀家は斷絶しぬ、今の陰陽頭幸德井は、賀家の庶流なれど、不堪の事おほし、陰陽頭は人形をたてまつらではかなはぬ物なれど、傳受なかりければ、せひなくて今は安家のみぞ進上す、人形は辰日進上して、此御所にてきぬをきせしむ、これ女中の沙汰なり、其樣練絹を方寸餘に裁して、角かけてを刀めより二つにをし折、とりかさねて結也、如此してその夜は御枕がみにおきて翌日巳の日の巳刻に申出せば出さるゝ也、これもちかき比までは、御なで物御ひとへそへて、臺盤所の妻戸より內侍出すなど、御ゆどのゝ上の日記にはあれど、今はさ程の事もなし、此月は巳の日ごとに人形なをる也、

〔類聚國史七十三歲時〕延曆十一年三月丁巳日〇三辛南園禊飲、命群臣賦詩、賜綿有差、　十二年三月辛巳、〇三禊于南園、令文人賦詩、五位已上及文人、賜祿有差、

〔長秋記〕大治四年三月三日辛巳、當巳日、仍三院臨口河有御禊、

〔建內記〕嘉吉元年三月八日、上巳祓也、如例在貞朝臣、昨日送人形著衣、副撫物、〔直垂上用〕今朝遣之祓了、撫物返給之也、千疋令下行了、　三年三月一日丁巳給在貞朝臣許、先以人形拂身體懸口氣、相副撫物、〔用直垂歟〕

〔執政所抄上三月〕巳日御祓事〔陰陽師進解物、已上次已亥也、〕

御　北政所　姬御前　內大臣殿

巳上藏人所侍所催、使政所催、

召仕丁赤衣

松出納召松也

〔長秋記〕大治五年三月三日乙巳、今日依上巳於耳敏川解除、但自〇源師時不向、唯送摩物、

〔玉蘂〕建曆元年三月五日丁巳、有上巳祓事、予前陰陽頭在宣朝臣、女房泰基朝臣、姬君幷若君圖書頭在親朝臣修之、自不臨河邊也、只遣御物許也、

〔殿居嚢年中行事〕二月四日、土御門家、以使者巳ノ日御祓獻之、　五日、土御門家使者、御暇拜領物、

〔大猷院殿御實紀四十〕寬永十六年二月廿六日、巳日の祓例のごとし、

〔大猷院殿御實紀五十六〕正保元年二月十二日、この日、土御門三位泰重卿、巳日の祓をさゝぐ、

〔百練抄十二順德〕承久二年三月三日癸巳、天下男女、向河濱修禊、相當上巳、希代事也、

〔空穗物語菊の宴〕やよひの十日のよひばかりに、はじめのみの日いできたれば大將殿には上巳のはらへしに、なにはへ、かたゝ〳〵をとこ君たちものこりすくなくおはします、百五十石ばかりのふねむつびわだぶきのふねぐして、こむ〳〵るりにさうぞかれ、おはきなるからいをうちつけ、ほそにおひて、ふろきいとをふときなはになひ、おほいなるはくえにて、ふねのてうどにつ

かひすべて、みすゞもなどもぬるものなどし
ぞくえらび、かたちをとゞのへて、くに〳〵の
もしてたてまつりたるに、一の御ふねに大宮
たち三人は、御かた〴〵なゝ所ながらたてま
かへ四人、やんごとなきをえらばれ、さうぞく
たてまつる、そこばくのみやとのゝ人、あるは
たり給に○中かくて御舟ぞもこぎよせて、御
ほどに、頭中將の御はらへのものどりぐして
かけてのせたる人、つけたる人、みなこうし
〔源氏物語十二須磨〕やよひのつゐたちにいできた
ぎし給べきと、なまざかしき人の聞ゆれば、海づらもゆかしくて出給ふ、いとおろそかにせんざ
やう○軼ばかりを引めぐらして、この國にか
ごとなき人がたのせてながすをみ給ふにも
ざりしおほ海のはらになかれきてひと
さるはれにいでゝ、いふよしなく見え給ふ、
〔吾妻鏡四十九〕正元二年○文應元年三月十四日辛巳、日色赤、將軍家中巳御祓、爲親朝臣奉仕之、薩摩七
郎左衞門尉祐能爲御使、
〔神祇提要十〕萬度解除次第千度百度同之
先向神事之靈壇　次鳥居作法如常　次進膝著下一揖前後梶如常　次著座一揖左右梶如常　次打鳴三
次大元仁岐神於安須陽日竪陰日橫　次大麻於取天二拜如常　次護身神法　次三種梶　次六根清淨

中巳祓

萬度祓

千度祓

祓一反出祓部一　次一氣元水梶　咒文天眞名井乃清久潔後元乃水於降志玉有　次酒水梶　陰陽逆順、三元九度、口傳陰入陽出、岐神印相、口傳
明言阿那天元天妙神變梶阿那地元地妙神通梶阿那人元人妙神力梶　次三天兩地印鎭魂梶　次拍手
次大元仁岐神於安須　次散米三投　要文爲寶瑞乃御玉於以天八尋殿於飾利泰印　次啓白隨二其時一隨二其事一作之無二定式一　次中臣祓　次大麻
次太諄辭祓手執二大麻一出祓部一　次勸請祭文出祭文部一　次三種大祓出祓部一　次一萬度用二榊葉一取レ數口傳誦之萬回訓謂二萬度一千回則謂二千度一百回則謂二百度一　次每レ及二十反一拍手小大二、　次祝詞隨二時新作一之無二定式一
於本仁安須　次十寶內縛招請竝鎭魂口　次揖　次沓揖　次八方拜　次退下
〔鹽尻十三〕千度萬度ノ祓上古ナシ　千度萬度の祓、上世ある事なし、後一條院の時、七度祓といふ事、野府記に見えたり、是ぞ數祓のはじめなるべし、安德天皇の前後より、千度萬度の祓修しけるにや、其世の古書に見えたり、度會延經語りし、
〔山槐記〕治承二年六月廿六日己丑、中宮○高倉后德子有二千度御祓一云々、是御座淨許也、
〔百練抄十一土御門〕建永元年十一月二日、今日於二院御所一有二千度御祓一、依二上皇○後鳥羽御目不豫也、
〔吾妻鏡二十五〕承久三年十二月三日壬午、讃岐中將室右京兆女懷孕之間、於二大倉亭廊一行二千度祓一、主計大夫知輔、少輔大夫泰貞、陰陽大允親職、右京亮重宗、漏剋博士只業各衣冠等勤レ之、進士判官代隆邦布衣陪

膳工藤右馬允同爲奉行云云、

〔吾妻鏡　五十二〕文永二年七月廿八日甲子、御産御祈、被行千度祓、晴茂、宣賢、業昌、晴長、晴秀、晴憲、晴宗、泰房、職宗、親定等候之、陪膳右近大夫將監時村（前黄狩衣紫奴袴）右馬助清時（織物狩衣蘇芳指貫）役送十人（各布衣）各白直垂爲手長、縫殿頭師連、備中前司行有（式部太郎左衛門尉元政輕服替俄奉之）等奉行、

〔吉田家日次記〕享徳三年九月三日癸卯、今日家君（○兼熙）吉田於吉田社被修千度御祓、辰剋各參社頭奉開御戸、始御祓於中門內也、東座前預家君（御衣冠）御衣同前大納言（布衣）氏人五辻少副（兼種）宿禰（淨衣）下總守兼音、布衣、以上北面、西座予（束帶）權預兼範宿禰（淨衣）禰宜兼有（布衣）權祝重光（衣冠、以上東上北面、此外祝兼村布衣祇候、）御祓了供臨時神供、予勤陪膳、權預以下社司等役送、有御神樂二連、先是以祓串四所神殿以下小神等悉奉祓清、社司等引之懸氣了、事訖閉御戸了、其後行直會、今日神事、家君御發願之旨趣者、越州竹屋烏羽兩庄一圓事、爲被畏申也、彌爲增神威也、

應永五年四月二日戊寅、今日於此齋屋爲鎭地千秋万歲祈禱、被修千度御祓、（有願目祈禱之時、八百座修之、所願成就之後、仍今日滿千度不闕也、）先奉押勘請文、日本書紀一部、同決釋三卷、古語拾遺、延喜式三卷、龜兆傳、龜經等被安之、已刻關白、家君（御衣冠）予（衣冠）大膳大夫兼世宿禰（布衣）權大副兼村（布衣）宮主兼之（布衣）等也、酉半剋事訖、四日庚辰、今日又有千度御祓（滿座）千如一昨日、子細見前文、九年四月十七日庚午、申剋著衣冠參吉田社（今朝沐浴、以鹽水行水、）至廿三日所參籠也、是去々月家君御不例之時有靈告等、于今無爲而彼時分依不慮之不淨不及祈謝、只心中之念誦許也、爲亦打續依穢疑、度々旬供不參、彼是爲謝申入、亦爲祈申御本復也、（○中略）末社司忠敦（淨衣）召具也、手水之後、參御前始千度御祓、忠敦相共修之、十八日辛未、辰一點浴鹽水著衣冠參御前修祓、今日亦供神供、行里神樂種々祈申之、終日解除無怠、十九日壬申、早朝浴鹽水著衣冠參御前修祓、廿日癸酉、早朝浴鹽水著衣冠參御前修祓、廿一日甲戌、辰半剋浴鹽水著衣冠參御前修祓、廿二日乙亥、早旦浴鹽水著衣冠參御前修祓、廿三日丙子、早旦浴

鹽水著衣冠參御前修祓、滿千度了、

〔忠富王記〕明應五年四月一日、自今日神祇官千度祓始行之、十二日、內侍所千度祓滿散祝著之至也、六月一日八神殿千度祓始行、

〔顯廣王記〕長寬三年六月五日、今日百座祓、

〔吉田家日次記〕應永七年三月二日丁卯、今曉予夢想有不淨之疑之間、修百度祓、九年二月一日甲寅、予、兼村、秀兼修百座祓、是爲家君（○兼敦）御療治、良藥和合之處、彼家人有觸穢事、後日聞及候間、急於件御藥者遣他處畢、雖然猶爲家中清淨所致解除也、三月一日甲辰、巳刻兼敦、兼村等於齋屋修百度祓、是今日神事依恐慮外之不淨不參社之間、且爲謝申、且爲清祓也、十一日、早旦浴鹽水修百度祓了、凡日々解除無怠、於行水者或湯或水、依時沙汰之、

〔吉田家日次記〕應永十年十月十三日丁巳、參本宮（○神祇官）遙拜異修祓（廿座以上八十座）所願成就祝著云々、

〔吉田家日次記〕應永十年十月十二日丙辰、著衣冠參本宮遙拜修祓（四十座七度祓）、

〔吉田家日次記〕應永十年十月十二日丙辰、參八神殿修七度祓（八十座四十座神籬祓）、捧小幣物、偏仰冥助之外無他、

〔吾妻鏡　二十三〕建保五年六月廿一日丁卯、依爲吉日、將軍家被始行御神雜祓、陰陽少允親職奉仕之、

右京兆御沙汰也、

〔大祓詞後釋上〕すべて近世に神道者といふものゝ、をわざを見るに、法師の佛をいつくわざをうらやみならひて行ふ事のみ多し、其中に此大祓の祝詞をよむことも、かの佛の經陀羅尼などいふ物をよむにならひて、或は神の御前に向ひてよみ、或は數百遍もよみ、或は五千度一萬度の祓などいふことと有て、これをよむを祓修行といひ、又此詞を常に中臣祓といひならへるから、祓といふ物を卽此詞の事と心得、又それにならひて、外にも某の祓某の祓とてよむ文の

祓禊之弊

世にこれかれあるは、みな祓といふことのさまをもわきまへざる後世人の造れるものにて、たゞ例のからめきたることをのみいひて、古の意詞にあらず、祓には殊によしなきことのみ也、

〔日本書紀二十五孝徳〕大化二年三月甲申詔曰、○中略復有亡夫婦若經十年及二十年、適人爲婦、幷未嫁之女、始適人時、於是妬斯夫婦、使被除多、復有爲妻被嫌離者、特由慙愧所嗤、强爲事瑕之婦、事一本作瑕居脇作柯、復有屢嫌己婦○嫌原脱今據一本補、好向官司請決、假使得明三證而俱顯陳、然後可諮、詎生浪訴、復有被役邊畔民、事了還鄉之日、忽然得疾、臥死路頭、於是路頭之家、乃謂之曰、何故使人死於余路、因留死者友伴、强使被除、由是兄雖臥死於路、其弟不收者多、復有百姓溺死於河、其弟不救者衆、復有被役之民、路頭炊飯、於是路頭之人、因留溺者友伴、强使被除、由是兄雖溺死於河、其弟不救者衆、復有百姓就他借甑炊飯、其甑觸物而覆、於是飯主乃使被家、乃謂之曰、何故任情炊飯余路、强使被除、復有百姓就他借甑炊飯、其甑觸物而覆、於是飯主乃使被除、如是等類、悉俗所染、今悉除斷、勿使復爲、復有百姓臨向京日、恐所乘馬疲瘦不行、以布二尋麻二束、送參河尾張兩國之人、雇令養飼、乃入于京、於還鄉日、送鍬一口、而參河人等不能養飼、翻令疲死、若是細馬、卽生貪愛、工作讒語、言被偸失、若是牝馬、孕於己家、便使被除、遂奪其馬、飛聞若是、故今立制、凡養馬於路傍國者、將被雇人、審告村首、方授酬物、其還鄉日、不須更報、如致疲損、不合得物、縱違斯詔、將科重罪、

〔書紀集解一〕按、凡解除必有贖物、後世傳遺風、若有犯諱人、必使解除、姦黠之民、貪其所贖觸物會事强使被除、其流弊爲害多、及孝徳天皇大化二年有制禁之、詳于紀中、

〔類聚三代格十二〕太政官符

一禁制諸家幷諸人被除神宴之日諸衙府舍人及放縱之輩求酒食責被物事

右同前格○據所起請偁、諸家諸人至于六月十二月、必有被除神宴事、絃歌醉舞、欲悦神靈、而諸衙府舍

祓具

人、幷放縱之輩、不緣主招、好備賓位、侵幕爭入、突門自臻、初來之時、似愛酒食、臨將歸却、更責被物、其求不給、忿詰罵辱、或亦託神言、咀恐喝主人、如是濫惡、逐年惟新、推彼意況、不異群盗、豪貴之家、尚無相憚、何況於无勢無告之輩哉、是而不糺、何云國憲、望請嚴仰所司、一切禁遏者、同宣奉勅依請○中略

以前條事、具件如右、

貞觀八年正月廿三日○又見代實錄三

〔日本書紀一神代〕一書曰、○中略已而科罪於素戔嗚尊、而責其被具、是以有手端吉棄物、足端凶棄物、亦以唾爲白和幣、以涕爲青和幣、用此解除、竟遂以神逐之理逐之、○中略被具此云波羅閇都母能、手端吉棄、此云多那須衢能余之岐羅咩母能、

〔伊勢物語下〕此男いかにせん、わがかゝる心やめ給へとほとけ神にも申けれど、いやまさりにのみ覺えつゝ、猶わりなく戀しうのみおぼえければ、おんやうしかんなぎよびて、戀せじといふはらへの具してなんいきける、

〔倭訓栞中編十九〕はらへぐさ　祓種なり、茅麻の類、又人形をもいふなり、

〔日本書紀一神代〕一書曰、是時天手力雄神、侍磐戸側、則引開之、日神之光、滿於六合、故諸神大喜、卽科素戔嗚尊千座置戸之解除、以手爪爲吉爪棄物、以足爪爲凶爪棄物、

〔釋日本紀七述義〕千座置戸

私記曰、問此何物哉、答、師說、座者是置物之名也、言置積祓物者、正是千處也、置戸者、是積置此千處之物、便爲其戸、令罪人出其中矣、故云置戸也、是卽令罪人出此等物也、出物○原脱也以下三字、據一本補、既多、故其隨身之物、悉皆出棄、無物之可取、故或拔髮或拔爪、今科上中下祓者、令其罪人出祓物者、儆此耳、

〔古語拾遺〕天照大神赫怒、入于天石窟閉磐戸而幽居焉、爾乃六合常闇、晝夜不分、群神愁迷、手足亡措、○中略仍歸罪過於素盞嗚神、而科之以千座置戸、令拔首髮及手足爪以贖之、仍解除其罪、遂降焉、

〔日本書紀二十九〕五年八月辛亥詔曰四方爲大解除用物則國別國造輸〔ハラヘツモノ〕祓柱馬一匹布一常以外郡司各刀一口鹿皮一張鐮一口刀子一口矢一具稻一束且每戸麻一條

〔江家次第六三月〕石清水臨時祭

御禊事〇中略出御著座〇中略供御贖物頭取米五位藏人取入形宮主入自仙華門進長橋北當河竇藏人頭傳取御麻進之自第四間進之御吻返給〔乍令持陪膳吻返宮主〕宮主著座使著座入自仙華門巡方帶魚袋舞人引御馬自瀧口入若不足者令陪從引之次宮主申祓詞畢退出

〔江家次第六四月〕平野祭

同臨時祭儀

早旦御湯殿依神事內藏寮進新御帷〇中略次獻御贖物頭五位藏人各取一本頭取之於青璅門內經簀子敷入自第四間南柱北邊供之暫不退次五位藏人持參居簀子及獻之頭取居之已取之有米次各退之間宮主入自仙華門跪於長橋北河竹南獻御麻頭跪取之經前路獻主上猶取木末主上一撫一吻返給之頭返給宮主給之〇中略次宮主奉仕祓詞到祓清之處以人形張取割之處解縄給畢宮主退出次頭藏人進撤御贖物准始可知

〔後拾遺和歌集十雜〕御祓がものゝなべをもちて侍けるを大ばん所より人のこひ侍ければつかはすとてなべにかきつけはべりける

おぼつかなつくもの神のためならばいくつのなべのかずはいるべき

藤原顯綱朝臣

〔伊呂波字類抄奈辛〕摩物

〔八雲御抄三下人事〕なで物

〔書言字考節用集三神祇〕撫物

人形

〔倭訓栞前編十奈〕なでもの　撫物と書り身を撫て祓ひ棄るの具なり

〔源氏物語五東屋〕いでさらば、つたへはてさせ給へかし、この御のがれ言葉こそ、思いづればゆゝしくとの給ても、また涙ぐみぬ、

みし人のかたみならば身にそへて戀しきせゝのなでものにせん、とれいのたはむれにいひなして、まぎらはし給ふ、

みそぎ河せゝにいださむなでものを身にそふかげとたれかたのまん

〔續千載和歌集十釋教〕鳥羽院御時御なで物の鏡を給て奏し侍ける　覺鍛上人

なす鏡うつしおこする姿をばまことにみ世の佛とぞみる

〔倭名類聚抄十三祭祀〕偶人　史記云土偶人木偶人偶音五狗反俗云人形

〔伊呂波字類抄加人倫〕人形カタシロ祭祀具也

〔八雲御抄三下人事〕人形

〔釋日本紀七述義〕千座置戸

問云祓具人形解縄散米其心如何　先師申云人形者所謂素戔嗚尊之濫觴拔手足之爪贖其罪身代之義也號贖物是也

〔藻鹽草十六人事〕人形　みくさ　なで物　不忌物　金の人形　みのしろ身の代也　草の人形　蠧にてつくるさ云云

〔儀式五〕二季晦日御贖儀六月十二月

神祇官預前受備其料物鐵偶人卅六枚金銀粧各十六枚無飾四枚木偶人廿四枚

〔延喜式一四時祭〕六月晦日大祓十二月准此已上東西文部所預

金銀塗人像各二枚

御贖　鐵人像二枚、
中宮御贖（東宮准此）　鐵人像二枚、
〔延喜式（二四時祭）〕每月晦日御麻（六月十二月不在此例）　鐵人像四枚
中宮晦日御麻（東宮准此）　鐵人像四枚
每月晦日御贖（中宮東宮准此、六月十二月不在此例）　金人像銀人像各卅二枚（東宮各八枚）
〔延喜式（八祓詞）〕六月晦大祓　十二月准之
東文忌寸部獻横刀（時呪西文部准此）
謹請皇天上帝、（○中略）捧以銀人、請除禍災、捧以金刀、請延帝祚、（○下略）
〔延喜式（三十木工四）〕御贖料
金銀人像一枚（長一尺、廣一寸、）料鐵四兩、金薄銀薄各三枚、長功工一人、夫一人、廿枚、中功十八枚、短功十六枚、
木人像（長八寸、廣八分、其面飾以金銀、）長功七十枚、中功六十枚、短功五十枚、
鐵偶人卅六枚（押金銀薄各十六枚、無飾四枚、）木偶人廿四枚、
右每月晦日御贖料、中宮亦同、東宮押金銀薄鐵偶人各八枚、
木偶人三百八十四枚（別卅八枚）
右十一月新嘗祭從一日迄八日御贖料、六月十二月神今食前八箇日料亦同、
〔源氏物語（十三）〕陰陽師めして、はらへさせ給、舟にことぐ〳〵しき人がたのせてながすをみ給にも、よそへられて、
〔源氏物語（四十九寄木）〕かの山里（○宇治）のわたりに、わざと寺なをはなくとも、むかしおぼゆる人がたをもつくり、ゑにもかきとめて、おこなひ侍らんとなん、思給へなりにたるとの給へば、のはれなる

葅靈

御ねがひに、又うたてみたらし河ちかきこゝちする人がたこそおもひやりいとをしう侍れ、
〔定家朝臣記〕天喜元年六月十五日、今日依仰參京極殿、令作御形代、長七尺許、以紙作比々奈、令著束帶幷冠、作御衣切、
〔夫木和歌抄（九夏）〕康保三年屏風六月はらへするに
夏草にはらへかくれば人がたのあさづつみとは露やおくらん　順
〔久安六年御百首〕夏
身はすてゝ人がたとだに思はぬをなにゝすがぬくみそぎなるらん　待賢門院堀川
〔倭名類聚抄（十三祭祀）〕葅靈　日本紀私記云、葅靈（久散比度加太）
〔箋注倭名類聚抄（五祭祀）〕葅靈見神功五年紀、然是出於韓人之詐策、猶漢高祖在平城、爲冒頓所圍、陳平造木偶人之類也、又孝德大化二年紀、詔禁厚葬云無藏金銀銅鐵、一以瓦器、合古塗車葅靈之義、亦擧西土古制、以示薄葬之義也、竝非祭祀具、源君引之非是、按京職式載元日質明掃除大祓葅靈、倭姫命世紀、乙若子命以麻神葅靈等、進倭姫命、而令祓解、蓋竝此所載之物、又按葅靈字、出禮記檀弓下篇注云、葅靈東茅爲人焉、謂之靈者神之類、
〔神名秘書〕垂仁天皇十四年乙巳（○中略）倭姫命向五十鈴河上之時、乃獻麻神葅靈、崇祭諸神、廿二年癸丑倭姫命向飯野下樋橋際、乃乙若子命、以麻神葅靈等、進倭姫命、而令祓解、
〔延喜式（四十左右京）〕凡六月十二月大祓預令掃除其處、亦兵士禁人往還、元日質明掃除葅靈、
〔堀河院御時百首和歌（夏）〕荒和祓　俊頼
さはべなるおさゞをかりに人にしていとひし身をもなづるけふ哉
〔夫木和歌抄（九夏）〕文治五年百首　前中納言定家卿
みそぎすとゑばし人なす麻のはも思へばおなじかりそめの世ぞ

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓十二月准之

天津菅曾乎本苅斷末苅切氏、八針掛取辟氏、

〔大祓詞後釋下〕須宜須賀といふ名は、此草もとより清淨きよし有て負る歟、さる故に祓にも用るにや、又は清と言の通ふ故歟、いづれにまれいふ名也、○中略さて又式に、大祓の用物を擧たる中に、此大中臣の取持菅曾も、必あるべきに無きは、此祓詞は古の文のまゝなる故に此事あるを、今京となりてのころは、この菅曾をとり持事は、既く止てなかりしにもあるべし、

〔新撰龜相記甲〕天津邵我蘇天上以レ菅、今以レ麻、

〔萬葉集三挽歌〕石田王卒之時丹生王作歌

名湯竹乃十緣皇子、狹丹頰相、吾大王者、○中略天有左佐羅能小野之七相菅、手取持、久堅乃天川原爾、出立而潔身而麻之乎、高山乃石穗乃上爾、伊坐都流香物、

〔萬葉集六雜歌〕神龜四年丁卯春正月諸王諸臣子等散禁於授刀寮時作歌

眞葛延春日之山者、○中略決卷毛、綾爾恐言卷毛、湯湯敷有跡、豫、兼而知者、千鳥鳴其佐保川丹、石二生菅根取而、之努布草、解除而益乎、往水丹、潔而益乎、○下略

〔類聚名義抄七〕御麻　ヲホヌサ

〔八雲御抄三上草〕麻　あさのは六月祓具

〔藻鹽草十四氣形〕幣　ぬさ　みぬさ　あさぬさ　たつぬさ　小ぬさ　大ぬさ引てあまたさよめるは、祓にはてぬれば、是は各引よせつゝなづる物也、さればもとこゝにさまられば人の奴なる、事を乞禱ぐとて出すよしなり、祓の奴佐も、其罪穢を除清め給へと禱ぐ意を以て出すなれば、神に獻りて禱ぐと意ばへ一ッなり、さて布佐は麻なり、○中略抑神に手向るも祓に出すも、其物は種々ある中に、殊に麻をしも名に負るは、あるが中に主とする一種に就てなり、卽麻と書くも此故ぞかし、

〔令義解二神祇〕凡六月十二月晦日、大祓謂祓者解除不祥也者、中臣上二祓麻、

〔儀式五〕大祓儀六月十二月並同○中略

神祇官頒二切麻一參議已上、史生、女官并諸司神部、

〔西宮記六月〕大祓　神祇官曳二大麻一

〔江家次第七六月〕大祓

神祇官頒二切麻一祝二詞、訖起座、次行二大麻一神祇官人以下執レ之、上卿以下座前引レ之、上卿舜大夫諸司料各異、西宮抄云、上卿料祓曳、

〔江家次第十四雜〕大嘗會御禊

宮主奏二解除詞一了退出、大炊官人散二五穀一、

神祇官引二大麻於公卿座一、

〔古今和歌集十四戀〕ある女のなりひらの朝臣を、ところさだめずありきすと思ひて、よみてつかはしける、

讀人志らず

おほぬさの引手あまたに成ぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

返し

なりひらの朝臣

おほぬさとなにこそたてれながれても終によるせは有てふ物を

〔奧儀抄下〕おほぬさの引手あまたにとまらねば思へどえこそたのまざりけれ

おほぬさは、はらへするに陰陽師のもたる、くしにさしたるをでなり、はらへはてぬれば、是をおのおの引よせつゝなづるものなれば、人のもとことによれ共、とゞまらですぐれば、引手あまたのなれば、神祇部三十二　祓禊

にとゝらねばとよめるなり、此返歌に、おほぬさと名にこそたてれながれてもつひによるせはありてふものを、とよめるは、かくとゞまるところなきやうなれども、河になが〳〵しつるときは、ながれとゞまるところなくやはあるとよめる也、あまたの所へかよへども、つひに君がもとへこそとゞまれといふこゝろなり、

〔能宣朝臣集〕六月はらへし侍るところ

みそぎする川のふちせに引ゐみをおほぬさなりと人やみるらん

〔年中行事歌合十八番　左　大祓六月晦日　大藏卿〇坊城長綱〕

夏引の麻の大ぬさとりそへて百官のみそぎすらしも

〔延喜式三臨時祭〕凡年中祭祓料所須簀千三百六十四隻者、大和國以神税交易、十月以前進之、

〇按ズルニ、祓ニ弓矢ヲ用ヰルコト、上文祓具ノ條、及ビ以祓罰人ノ條ニ出タリ、參看スベシ、

〔延喜式一四時祭〕六月晦日大祓十二月　馬六匹

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓十二月准之

天皇我朝廷仕奉留官官人等乎始氐、天下四方波、自今日始氐、罪止云布罪波不在止、高天原爾耳振立聞物止、馬牽立氐、今年六月晦日夕日之降乃大祓爾、祓給比清給事乎、諸聞食止宣、

〔祝詞考中〕馬は耳の獣にて耳とき故に、この詞を神たちの速聞給ふよしにて、祓に用る事、下の神賀詞に馬を擧て、耳の彌高爾云々と有るをむかへても知られ、〇下略

〔江家次第七六月〕大祓

陳祓物於路南、分置六所、馬在其南、北面記文云、馬六匹牽立朱雀門橋上、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡年中諸祭祓馬者、〇中略六月十二月晦祓各三匹、〇中略齋内親王遷野宮祓一匹、並覆奏、以放近都牧繫飼馬充、自餘所用、臨時聽處分、

〔空穂物語國讓上〕おとゝのだんのうへより、水いだしていしだゝみのもとまで、みづせき入て、瀧おとして、おは井川のごとゆく、すのこには、みすかけ御ゆかたてゝ、御びやうぶどもたてたり、そこに宮三所いで給、かうらむにおしかゝりて、みはしのまへにおとゞ宮たち四人、との〳〵のごたちこなたかなたにゐたり、おんやうのかみ御はらへ物してつかうまつる、むまどもゆふつけてひきたり、御そぬぎ給、一二宮からのやのかいねり一かさね、ひめ宮御ぐしうち、さかんのおとゞまろきろうのひとへがさね、をとこ宮たちぬぎ給、宮たち御はらへつかまつり侍ればよふけぬ、

〔儀式五大祓儀六月准同十二〕

三省勘目錄、訖候御麻、既到插祓稻、

〔江家次第七六月〕大祓

陳祓物於路南、〇略中又積置稻四五束許、

〔釋日本紀八述義〕日向國風土記曰、臼杵郡内知鋪郷、天津彦火瓊瓊杵尊、天降於日向之高千穗二上峯時、天暗冥晝夜不別、人物失道、物色難別、於茲有土蜘蛛、名曰大鉗小鉗、二人奏言、皇孫尊以御手、拔稻千穗爲籾、投散四方、必得開晴、于時如大鉗等所奏、搓千穗稻爲籾投散、卽天開晴日月照光、因曰高千穗二上峯、後人改號智鋪、

〇按ズルニ、祓ニ稻ヲ用フルコトハ、上文ノ如ク、瓊瓊杵尊ノ、千穗ノ稻ヲ投ゲ散シ給ヘルニ因レルモノナルベシ、

〔大祓執中抄下〕北山抄江家次第等に、積置稻四五束計とのり、稻を插すはいかなるよしぞと云に、御麻の流ゆく河道を、雲霧のさよひなく明らかならざめむとて也、

稻　散米

〔神仙傳七〕麻姑

始欲見蔡經母及婦姪、時弟婦新產數十日、麻姑望見乃知之曰、噫且止勿前、卽求少許米、得米便撒之擲地、視其米皆成眞珠矣、方平笑曰、姑故年少、吾老矣、了不喜復作此狡獪變化也、

〔儀式一〕大殿祭儀

神祇官以筥四合、一合納玉、一合納米、一合納切木綿、居八足案二脚、令神部四人舁之、〇中略中臣忌部御巫等、以酒瓶、次入仁壽殿、御巫一人進榮宸殿散米、一人至承明門散米、忌部執玉懸殿四角、次御巫等、散米酒切木綿於殿內四角、退出、中臣候仁壽殿南、忌部向巽微聲讀祝詞、訖至於浴殿懸玉於四角、次懸厠殿四角、御巫等散米酒、如初、自陰明門退出、次宮主引神部至炊殿懸木綿散米酒、〇又見延喜四時祭式

〔江家次第十四踐祚〕大嘗會御禊

宮主奏解除詞、了退出、大炊官人散五穀、

同儀皇后同儀

御禊了、大炊寮散五穀幷米、先是件五穀等置宮主座前、大炊官人散之〇中略次五穀類流之水或記云埋砂石、

〔梵舜日記〕寛永三年正月十六日、壽命院內儀へ、御表祓散米持遣也、次盛方院へ御表祓散米持遣也、

九月十六日、於庵宗源行事一座執行、次壽命院へ當月祓散米、令祈念遣候也、

〔空穗物語藤原の君〕おそろしきやなひつきて、ほと〳〵敷いなすかる、いちめなつりはらへせさせんとする時にの給、あたら物を、我たためにちりばかりのわざすな、はらへすともうちまきによねいるべし、もみにてたねなさはおほく成べし、

〔紫式部日記上〕おんやうじとて、世にあるかぎりめしあつめて、やほよろづの神もみ〳〵ふりたてぬはゐらじと見えきこゆ、〇中略〇藤原の道長の公達、宰相中將四位少將なをばさらにもいはず、

左宰相中將宮大夫なを、れいはけをはき人々さへ、御木丁のかみより、ともすればのぞきつゝ、はきたるめをもを見ゆるも、よろづはぢわすれたり、いたづきには、うちまきの雪のやうにふりかゝり、おしなべみたるさぬの、いかに見ぐるしかりけんとのちにぞをかしき、

〔紫式部日記釋一〕うちまきは散米なり、打まくもの故に、米をばやがてうちまきと後にはいふなるべし、さて御産室にうちまきすることは、師〇藤井高尚云く、中昔の頃、うぶやにうちまきすることは、陰陽師のなすわざにて、米をうちまけば邪鬼おそれてさりぞく故ぞ、さするはゐしきものゝさはりなく、産の平安ならんことを思ひてなり、

〔源氏物語三十七橫笛〕をとこ君もよりおはして、いかなるぞなどの給ふ、うちまきしちらしなどして、みだりがはしきに、ゆめのやはれもまぎれぬべし、

〔榮花物語八初花〕わかみやおはしませば、うちまきしのゝしるけはひす、

〔榮花物語十一嘉承花〕いかに〳〵と御こゝろをつくし、ねむじきこえさせ給はぬに、長和二年七月六日の夕かたより、御けしきゐるさまにおはしませば、御いのりのそうどもこゑをゐはせてのゝしる、加持まゐりうちまきしさわぐ、

〔山槐記〕治承二年十一月十二日辛未、寅刻自中宮召使走來告御產氣候之由、〇中略散米土器等押桶各六口、並置小庇、

〔玉藥〕承元三年五月廿五日丁巳、今日御湯殿始也、〇中略次小兒下湯、其儀先女房一人、〇中略又一人近衛殿、左大臣經宗公女、取御劒入白繒今日御產始尼勝造袋散米、御藥一裹、件藥之已上前行打蒔散米、〇下略押桶盃、

〔今昔物語二十七〕幼兒爲護枕上蒔米附血語第三十

今昔、或人方違ヘニ、下京邊ニ、ケル所ニ行タリケルニ、幼キ兒ヲ具シタリケルニ、其ノ家ニ本ヨリ靈有ケルヲ不知ラ、皆寢ニケリ、其ノ兒ノ枕上ニ火ヲ近ク燃シテ、傍ニ人二三人許寢タリケルニ、

乳母目ヲ悟シテ、兒ニ乳ヲ含メテ寢タル樣ニテ見ケレバ、夜半許ニ塗籠ノ戸ヲ細目ニ開テ、其ヨリ長五寸許ナル五位共ノ、目ノ裝束シタルガ馬ニ乘テ、十人許、次ギテ枕上ヨリ渡ケルヲ、此ノ乳母怖シト思ヒ乍ラ、打蒔ノ米ヲ多ラカニ掻飜テ打投タリケレバ、此ノ渡ル者共散ト散テ、其後彌怖シク思ケル程ニ、夜曉ニナリケレバ其枕上ヲ見ケレバ、其ノ投タル打蒔ノ米毎ニ、血ナム付タリケル、日來其ノ家ニ有ラムト思ケレドモ、此ノ事ヲ恐テ返リニケリ、然レバ幼キ兒共ノ邊ニハ必ズ打蒔ヲ可爲、此ヲ聞ク人皆云、亦乳母ノ心ヲ賢クテ打蒔ヲバシタル也トゾ、

〔宇治拾遺物語十〕これもいまはむかし、かつら川に身をなげんずる聖とて、まづ祇陀林寺にして、百日讀法おこなひければ、ちかき遠きもののぞも、道もさりあへずおがみにゆきちがふ、〇中略ゆく道にたちなみたる見物のものぞも、うちまきをおられのふるやうになぐ、道すがら聖、いかにかく目はなにいる、たへがたし、心ざしあらばかみふくろなどにいれて、我ゐたる所へおくれと時々いふ、

紙錢

〔倭名類聚抄十三祭祀〕紙錢　新樂府云、神之來兮風飄々、紙錢動兮錦繖搖、〔俗云ニ賀美勢遲、一云ニ勢遲賀太ニ〕

〔箋注倭名類聚抄五祭祀〕新樂府載在ニ白氏文集第三四卷ニ、此所引黑潭龍詩句、〇中略按陰陽寮式有ニ錢形ニ、蓋是今伊勢神宮河原祓用ニ錢切ニ歟、佛家祭ニ諸天ニ亦用ニ紙錢ニ、

〔神道名目類聚抄三祭器〕錢切　伊勢神宮祓修行ノ時、紙ヲキリタルヲ錢切ト云、米ヲ散供ト云ヨシ、神宮古記ニ見タリ、米ハ黑米ヲ撰テカケザルモノヲ用フ、

〔延喜式十六陰陽寮〕御本命祭

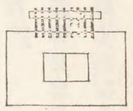
神座廿五前

紙七百五十張〔作ニ錢形ニ、二萬五千文、絹形二百五十匹ニ、馬形五十匹ニ料ニ、〕

〔內宮神宮流御祓勤仕之覺書〕

一錢切、八刀ニテ九十六ニ切ト云事、內宮神宮ニハアラズ、只能ホドニ切用ユト也、

一錢切箱ヲバ、八足机ノ上ニ橫ニ置キ、右ヘ蓋ヲ拔取也、如左置ヅ、



箱ニ上下ト前ニ書付ヲスル也、上ノ方ニ入タル米ヲ上米ト云フ、此米ハ不供米也、下ノ方ヘ祓ヲ修スル時米ヲ入ル也、

御祓修法式

一八足机ニ向テ、立テ一拜、蹲踞ニテ一拜シテ、末廣扇子ヲ我右膝ノ傍ニ置、次麻〔或一座被ニ〕ヲ取テ、謹請再拜ト左右左ト振ル、卽麻ヲ左手ニ移シ挾ミ、右手ニテ錢切箱ノ蓋ヲ拔キ、八針ト與箱ノ間ニ、八針ニ寄カケテ橫ニ置キ、錢切一枚一度〔下皆倣ニ之〕散米一粒一度ニ移シ、卽拍手一端、文言ザイコク、次麻ヲ右手ニ取、左手ヲ添初申、次ニ麻ヲ左手ニ挾ミ、錢切與米ヲ移シ拍手、麻ヲ右手ニ取テ、蓋ト錢切箱ノ間ニ寄カケテ置也、次跪テ中臣祓〔或略祓、或中略祓、或再略祓、或再々略祓、應ニ時用ニ〕、唱畢テ錢切與米ヲ移拍手、次何レノ祓ナリトモ〔又中略祓、再略祓等ノ祓、任ニ意而唱ニ〕、十度〔數ノ取ヤウ、一反ハ左指、十反ハ右指、百度ハ數取ニ〕、唱訖、每度錢切散米拍手、千度唱訖テ、錢切散米拍手、次蹲踞シテ、麻ヲ右手ニ取、左手ニ添テ申上、錢切散米拍手、次祈願拍手兩端〔無ニ文言ニ〕次末廣扇子ヲ取テ、蹲踞ナガラ一拜、卽立テ一拜シテ退座、

申上

謹請再拜々々

今獻所乃奉物者、銀錢切、金散供獻依天命乃堅富乃物乃代仁、受悅給止神每仁宣申、

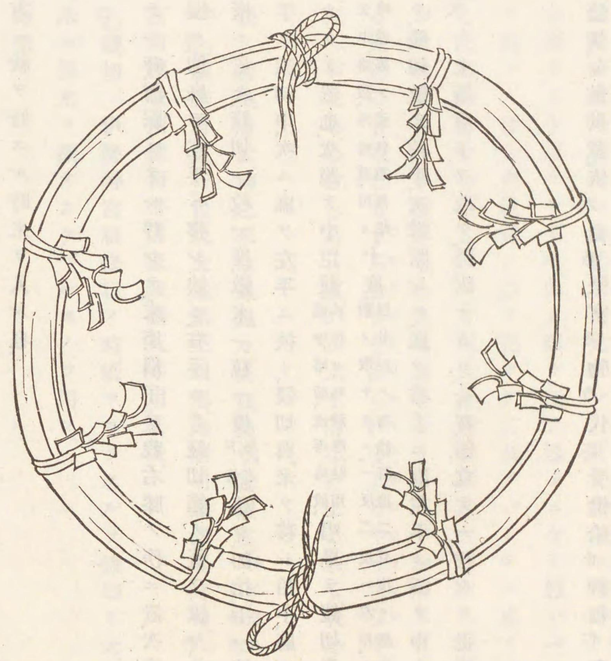
〔藻鹽草十四祓形〕祓　ちのわ〔茅輪なり、はらへ也、〕

〔釋日本紀七述義〕備後國風土記曰、疫隅國社、昔北海坐志武堵神、南海神之女子平與波比賣坐日暮、彼所蘇民將來二人在伎、兄蘇民將來甚貧窮、弟將來富饒屋倉一百在伎、爰堵神借ニ宿處ニ、惜而不借、兄

茅輪

〔神祇提要九〕

名越祓麻輪圖



蘇民將來借奉、卽以二粟柄一爲レ座、以二粟飯等一饗奉、饗奉既畢出坐、後 閒經年、率二八柱子一還來 天 詔久、我將奉レ之、爲報答曰、汝子孫其家 閒在哉 止 問給、蘇民將來答申久、己女子與二斯婦侍 止 申、卽詔久、以二茅輪一令レ著二於腰上一、隨二詔令一著、卽夜 閒蘇民將來與二女人二人一乎 置 天、皆悉許呂志保呂保志 天 伎、卽詔久、吾者速須佐雄能神也、後世仁 疫氣在者、汝蘇民將來之子孫 止 云 天、以二茅輪一著二腰上一詔、隨二詔令一著、卽家在人者將免 止 詔伎、

○按ズルニ、此ノ文ニ據ルニ、上古ハ茅輪ヲ腰ニ著ケシヲ、後ニ輪ヲ越ユルコトニナリタルモノナルベン、

〔外宮神事著略六月〕晦日名越祓 閏月有レバ閏月ヲ用

酉時許、荷用二人一、茅輪菰靈ヲ持テ、齋館ニ來リテ、菰ノ禰宜權官 共ニ直垂 齋館ニ來ル、一禰宜鋪設ニ蹲踞シ、南面シテ拜シ、菰靈ヲ持、荷用茅輪ヲ執、頭上ヨリ下シテ踰越セシムルコト三度、時ニ歌ヲ唱テ拜ス、又此ヲ菅貫祓トモ 略 謂テ畢テ茅輪ヲ三段ニ剪、菰靈ト共ニ豐川ニ流シ棄、

〔神祇提要九〕名越祓麻輪圖

又用二菅曾之輪一、徑六尺四寸、蓋用二天二十八宿一地三十六禽一之合數一、蓋輪者天地未分之象也、用レ之法、詳出二行事部名越次第一、

〔法性寺關白御集〕六月祓詩

世上久爲二流例態一、林鐘晦日禊除衆、○略 中 未レ知何物號二菅拔一、結レ草如レ輪令二首蒙一、○略 下

〔倭訓栞前編十二〕すがぬき　菅貫と書り、茅輪をいふ、輪二丈六尺、圍八寸、藁をもて造り、茅を心とし、紙をもて纏たる者也、內侍所の調進は茅のみを用といへり、

〔祭祀或問〕中臣祓私記曰、住吉六月晦日荒和祓ニ、眞菅ノ本末ヲ切ソロヘ、ソレヲ四取テ割、一ヲ二

菅拔

ニ割、四ニテ八破也、切様寸法アリ、此ヲ菅抜ト云、割時有ㇾ詠歌、八ワリニ取辟トハ是也、針ハワル也、
田裳見宿禰ヨリ津守氏代々傳受シテ、六月荒和祓ニ如ㇾ此仕マツル也、六月晦日大祓ノ儀式モ、今
ニ天下ニスグレテカタノ如ク嚴重ニ執行ヒ、禊事ヲ修ス、此伊弉諾尊橘ノ小戸潮瀬ノミソギヨ
リアラハレ出シ住吉神ナレバ、上古遺風今ニタユルコトナシ云云、

〔堀河院御時百首和歌　夏〕荒和祓

我妹子がうちたれがみの打なびきすがぬきかくる夏祓哉

源朝臣師頼卿

千年まで人なからめや六月のみたび菅ぬきいのる御祓に

藤原朝臣仲實

八百萬神もなごしになりぬらんけふすがぬきの御祓しつれば

阿闍梨隆源

〔釋日本紀七　述義〕千座置戸

重問云、祓具人形解繩散米其心如何、先師申云、〇中略解繩者、解ㇾ謝罪之義也、

〔神道名目類聚抄　三祭器〕解繩　トキナハ　左右ノ繩二筋ヲ案上ニ設、其制之ヲ略ス、祓ノ具ナリ、

〔倭訓栞　前編　二十四　波〕はらひ　祓除の修法に解繩一撫一吻等の事ありて、江次第に見ゆ、解繩は中臣祓の舶艫解放の意、

〔祝詞考　中〕文を意得ぬ人、麻を八方に引て、天の四方八面に譬といひ、又刑の繩を解捨るたとへとするなどいふことは、その意から國の文によりて、陰陽師などのせしわざならん、後には世にもさる事とおもふにや、江家次第抄　〇抄恐衍字にも書るはいかにぞや、上つ代のわざにあらざる也、

〔江家次第　六　四月〕平野祭　〇中略

宮主奉仕祓詞　到ㇾ祓清之處、以ㇾ人形令ㇾ吻、給ㇾ中臣祓ㇾ八張取割之處、解ㇾ繩給、畢宮主退出、

〔江家次第　十二事〕八省東廊大祓

祝師置ㇾ上卿幷辨座祓物、入ㇾ百部宮蓋、下部置ㇾ上官座祓物、祝師著座、臨ㇾ禊詞及ㇾ八張解繩了、禊了祝師奉ㇾ大麻、先上、次辨、乍ㇾ令ㇾ持ㇾ祝師ㇾ撫ㇾ一吻返給、

〔玉海〕承安三年正月七日庚子、今日修ㇾ祓、不ㇾ洗ㇾ手、仍陪從人、令ㇾ撫ㇾ大麻解繩、

文治三年四月二日癸酉、此日梅宮祭、〇中略次供ㇾ御贖物ㇾ陪膳資泰朝臣、役供仲盛、次陰陽師讀中臣祓、至ㇾ高天原解繩如ㇾ例、祓了資泰持ㇾ來大麻、撫了返給、

〔皇大神宮年中行事　六月〕十五日朝、正員禰宜一同、各神拜之後、乘馬祝部等引率、爲ㇾ奉ㇾ仕荒蠶御贄等、參ㇾ阿原木神崎〇中略次於ㇾ美佐河原東在ㇾ解繩神事、自ㇾ道北先於ㇾ西方ㇾ手水用西上南向水祝狩衣紙權長狩衣勤之、水紙當役所用意、次祝祓奉ㇾ振懸後著座、在鋪設東上南向、一座自東、自餘自西也、于時左繩右繩小〇小下恐脱ㇾ土字器居、同散供米等鉾懸居、于時各祓勤仕、仆繩以ㇾ左手一以ㇾ右一、口ニクハヘ解之、散供蒔廣、手兩端如ㇾ常、但可有ㇾ口傳、

隆季朝臣

〔久安六年御百首〕夏

おもふことあさぢのなはにときつけて清き川せに夏ばらへしつ

〔皇大神宮儀式帳〕御調荷前供奉行事

赤引生糸四十斤　神郡度會郡調先糸

右以ㇾ五月卅日ㇾ御調專當郡司、幷調書生、及卿長、服長等爲ㇾ大解除、忌慎侍、亦郡内諸百姓等人別私家解除清ㇾ氏、御調糸持、參ㇾ向大神宮司ㇾ、卽大神宮司卜定ㇾ氏、糸遣ㇾ令ㇾ編定、御調櫃入ㇾ氏、鹽湯持ㇾ氏清鹽水鹽湯

〔大神宮儀式解　二十〕鹽湯持ㇾ氏清ㇾ氏は志保由母天伎與米天とよむべし、鹽湯は堅鹽を湯に和てその物をそゝぎ清むるなり、鹽を用るは伊佐奈岐命、檍原にて身滌ませしによるならん、儀

垢離掻

式大嘗祭條、九月中旬云云、下旬至二京齋場一、官人幷國司持麻幷鹽湯、迎二南門一灑二御稻幷雜物一訖、中宮式、三月潔齋云云、宮主供奉御祓、（御麻並鹽湯案一常、奉宮式、凡四月上申奉平野祭云云、灌鹽湯、如前解除調度、）り、本宮にてはこゝに見ゆるをはじめ、江次第、公卿勅使條、内人二人、灑二鹽湯一、獻二大麻一、又年中行事二月九日祈年祭云々、御鹽湯、（小土器入二白鹽一、以二榊枝一獻之、）勅使中與記、正保四年九月十五日云云、於二同御門内一灑二御鹽湯一、長重父子入二白鹽一、於二土器一奉仕と見えたり、今もこれにたがはず、

〔儀式一〕平野祭（四月上申）

十一月

皇太子於二神院東門外一下馬、神祇官中臣（若無二中臣一者、卜部、）授（進以上、令レ供、）迎供二神麻灌鹽水一、訖入就二休息舍一、先是進一人率二執幣舍人一、（執幣者在レ前、進次レ之、）到二神院東門一、曳二神麻灌鹽水一、共到二祭場一、授二神祇官一訖、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀中

前祭一日、（略○中）神祇官中臣一人、率二神部等一、持二祓麻鹽湯一、（以爲レ湯、）灑二潔供神物幷雜物一、

〔古老口實傳〕御鹽湯本緣事（桃柏鹽三種、水合以爲レ湯也、以二榊柏葉枝等一拂二灑之一、）

〔獸肉鹽湯考〕鹽湯は、塩鹽を湯に和て、其物をそゝぎ清むるなり、鹽を用るは、伊佐奈伎命禊原にて身滌ぎませしによるならむ、信友云、鹽ヲ用ル由ハ、海ニテ身滌シ、又潮水ニテ物ヲ滌ギ清ムルニ便ナキ時、潮ニ代ヘテモノスルナルベシ、然ラバタヾ鹽水ニテアルベキヲ、湯ヲ用ルハ、鹽ハ焼テ製リタルモノナレバ、其火ノ穢アラン事ヲ清ムルナルベシ、

〔殿暦〕康和五年十一月十六日、戌刻許依二行幸一參内、爲二潔齋沐浴一、故殿不レ令二沐浴給一歟、雖レ然依二神事一恐レ沐浴、又著二裝束一後、シホゆをそゝぐ、

〔吉田家日次記〕應永八年二月七日丙寅、予今夕浴二鹽水一、雖レ爲二毎日之儀一、爲二明後日遙拜殊潔齋之一、

〔運歩色葉集古〕垢離　氷搔（カヽリ）

〔古事記傳六〕許理（於レ是川降の約まりたるなり、許理ハ離字を書ハ云にたらぬこゝなり、）と書り、無量義經に、水能洗二垢穢一と見えたり、されどこゝろは香の義、釋氏の香水より出たる詞なるべし、かくもかくるの略語にや、

〔後鳥羽院熊野御幸記〕建仁元年十月九日、次又過二今日御宿一、三四町計入二小宅宿所一、自レ上雖レ有二例假屋一、仍騷出入二此所一、（先遣如レ此事不レ憚之由被レ稱、父褒七十日許云云、）雖レ然臨時カク、是臨時之事也、十一日、參二切部王子一入宿所、（略○中）於二此宿所一鹽垢離カク、十二日入二畫養所一食了、參二御所一之間、御幸既出御、次參二八ヤ王子一、御幸入御之間、先陣參二幽立皇子一、（於二此濱一御二鹽垢離一、御所去レ有二御祓一云云、○中略）夜寒風吹レ枕、咳病忽發、心神甚惱、此宿所又以荒、又鹽垢離、昨今之間一度可レ有之由、先達命之、但猶遂二此事一、十六日、巳時計御幸、御共參二寶前一、卽入二御御所一訖卽退下、コリ訖著二奉幣之裝束一歸參、（略○中）咳病殊更發無二爲方一、心神如レ無、殆難二遂前途一、腹病、瘧瘡等競合、秉燭以後又コリ、（此事臨時依レ病無二衝也一）

〔古今著聞集一神祇〕いつの比の事にか、德大寺のおとゞ（實能○）熊野へ參給ひけり、さぬきの國ゟり給ひける比なりければ、かれより人夫おほくめしあつめて、多くあまりたりければ、少々返し下されける中に、ある人夫一人ゟきりになげき申けるは、たかき君の御德によりて、さいはひに熊野の御山拜奉らんことを悦つるに、あまさへ只なげて召供せさせ給へと奉行の人にいひけれども、さりとては餘りたれば、さのみ何のやうにせんぞといひければ、なく〳〵愁て、唯御功德に食ばかりを申あたへ給へ、いかにも宮づかへは仕候べしとねん比に申ければ、あはれみて具せられけり、實にもかひ〴〵しく、宿々にては、人もおきてねども、諸人がこりの水をひとりとくみければ、こりさをとなづけて、人々もあはれみけ

雜載

り、

〔公裁錄五〕伊勢參向手續之事

參詣初而之節、二見浦ニ而垢離を取、夫より參詣いたし候由世話に申習し候、〇下略

〔神代紀葦芽上頭注〕明和四年といふ比國々に流行せし事ありそは志摩國伊雜宮へ參りて大麻を

いたゞきて持來て祭りしなり、〇中略かの伊雜宮參りの下向といふ日には忌服のさはりなき限

りは、皆濱おりして清まはりて、其村の境まで出で、かの大麻を迎へ悦びて、〇中略種々あやしき

るしわりし事などいひあへりしが、〇下略

〔諸國會圖〕年中行事大成三下五月廿五日　富士垢離今日より六月二日に至る

今日より富士行者の山伏、毎日河邊に出て富士垢離を修して、富士權現を遙拜す、是則富士參詣

に同じきとぞ、男女疾病平愈を祈り、或は福をもとめ、諸の所願ある輩、此行人を憑て祈願すれば、

行人紙符を願主に授く、又願主自ら行人に雜りて垢離を修するもあり、又富士禪定する人は、一

七日垢離を修し別火して登山す、

〔東都歲事記二六月〕廿六日石尊垢離取　大山參詣の者、大川に出て垢離を取後禪定す、又重き病者

ある時は、近隣の者川にひたりて當社を祈る、手毎にわらべを持て、高聲に祈念し水中に投す、

流るゝを以てよしとし、たゞよふを以てあしとすとなん、崔下庵云、さんげ〳〵六こんざいしや

う、おしめにはつだいこんがうそうじ、大山大聖不動明王石尊大權現、大天狗小天狗、といふ文を

唱ふる事、さんげ〳〵は慚愧懺悔なり、ろくこんざいしやうは六根罪障なり、おしめにはつだい

は大峯八大なり、ことば〳〵く誤れども、信の心をもつて納受し給ふならん、この事中人以下のわ

ざにして、以上の人はなしといへり、

〔類聚符宣抄一〕調布拾玖端

右今月十三日外記廳解�almost 謝所供奉允一人、屬一人、陰陽師四人、生四人、幷十人祿應給如件、

仁壽四年十一月十五日　　大外記滋野朝臣安成奉

右大臣宣、宜以厨内宛之

〔宮主秘事口傳〕諸國清祓祭物雜事、用途者、宮主之恩祿也、仍有其實之時者、神宮之外三道、四道、卜合

之、申賜宣旨（官書下之）付雜掌訖、近年者、清祓遵行、无其實之間、不及申賜宣旨也、御卜奏、參陣之六位史（六月者左少史、十二月者左大史）書下宣旨之時、號料紙用途、六月者貳百匹、十二月者伍連取之、近年无清祓之實之間、

依无其益、不請取宣旨也、諸國清祓事、宮主令申達者、如例可請取宣旨也、以宣旨被下綸旨於武家、武

家仰守護人、令責渡者先規也、

〔空穗物語祭の使〕さかきさうにさして、一の車よりみかうのこおろしてまひいる御車につゞきてうながしいる、御さしきにおり給ひて、おほんはらへつかうまつりぬ、

〔源氏物語四夕顏〕まことにふし給ぬるまゝに、いといたくくるしがり給て、二三日に成ぬるに、むげによわるやうにし給ふ、内にもきこしめしなげくことかぎりなし、御いのりかた〴〵にひまなくのゝしる、まつりはらへずほうなどいひつくすべくもあらず、

〔源氏物語十澪標四〕けふはなにはに舟さしとめて、はらへをだにせんとてこぎわたりぬ、〇中略みやしろをたち給て、所々にせうえうをつくし給ふ、なにはの御はらへなど、ことになゝ瀨によそはしうつかうまつる、

〔今昔物語二十六〕飛驒國猿神止生贄語第八

今昔〇中略生贄〇行脚僧猿共ヲ家ノ内ニ引列テ、目ヲ嗔カシテ、猿ニ向テ云ク、己ガ年來神ト云虛名乘ヲシテ、年々一人ノ人ヲ食ヒ失ヒケル、コレ受ヨト云テ、弓箭ヲ番テ射トスレバ、猿叫テ手ヲ摺テ迷フ、〇中略生贄吉々己ガ命ヲバ不斷ジ、此ヨリ後若此邊ニ見エテ、人ノ爲ニ惡キ事ヲ至サバ、其時

ニ必ズ射殺シテントスルゾト云テ、杖ヲ以テ廿度許ヅヽ次第ニ打渡テ、郷ノ者皆呼集テ、彼社ニ遣テ、殘タル屋共皆壞集メテ、火ヲ付テ燒失ヒツ、猿ヲバ四乍祓負セテ追放ケリ、片塞キツヽ山深ク迯入テ其後敢テ不見ケリ、

〔萬葉集四相聞〕八代女王獻天皇歌

君爾因、言之繁乎、古郷之、明日香乃河爾潔身爲爾去、

〔萬葉集十一〕正述心緒

玉久世清河原、身祓爲、齋命、妹爲、

〔萬葉集十二〕悲別歌

時風、吹飯之濱爾、出居乍、贖命者、妹之爲社、

〔萬葉集十七〕造酒歌

奈加等美乃、敷刀能里等其等、伊比波良倍安賀布伊能知毛、多我多米爾奈禮、

右大伴宿禰家持作之

〔拾遺和歌集雜〕なにはにはらへしに、ある女まかりたりけるに、もとゐたしく侍けるをとこの、葦をかりてかやしきさまになりて道にあひて侍けるに、さりげなくてとしごろえあはざりつることなどいひつかはしたりければ、

君なくてあしかりけりと思ふにもいとゞ難波の浦ぞ住うき

神祇部三十三

大祓　御贖節折　六月祓　臨時大祓

名稱
儀式
大祓詞
文部祓刀及祓詞
式場鋪設
料物
賜祿
大祓例閏月例
御贖節折
二季御贖
中宮二季御贖
東宮二季御贖
節折名稱
節折儀

七二四
同
七二六
七二八
同
七三二
同
同
七三六
七三八
七三九
七四〇
同

節折例　七四五
中宮節折　七四六
東宮節折　同
節折雜載　七四七
每月御贖　
中宮每月御贖　七四九
東宮每月御贖　同
羅城御贖　同
附六月祓　
名稱　
作法　
六月祓例閏月例　七五〇
六月祓停止　同
神社六月祓　七五二
臣庶六月祓　同
雜載　七五六
附臨時大祓　
京中臨時大祓　七六四
諸國臨時大祓　同
　七七一
　七七三
　七七九

神祇部三十三

大祓　御贖節折　六月祓　臨時大祓圖

大祓ハ、每年六月十二月晦日、皇城ノ朱雀門ニテ行ハル、乃チ百官男女ヨリ始メテ、天下萬民ノ不知不識ノ間ニ犯セル所ノ、種々ノ罪穢ヲ除キ去ランガ爲ニ行ハルヽヲ以テ大祓ト云フ、今大寶ノ制、貞觀ノ儀式、延喜ノ式ニ據リテ考フルニ、此日宮中ニテハ、中臣御麻ヲ奉リ、東西文部祓刀ヲ奉リ、漢音ノ祓詞ヲ讀ム、大臣以下百官男女悉ク祓所ニ會シ、神祇官切麻ヲ五位以上ニ頒チ、中臣祓詞ヲ讀ミ、祓ヘ訖リテ後、六位以下ヲシテ大麻ヲ引カシム、其儀極メテ嚴ナリシガ、圓融天皇ノ朝ニ至リテハ、公卿ニシテ祓所ニ詣ル者一人モナク、內侍等モ亦參會セズ、是ヲ以テ右少辨ヲ以テ上卿代トシ、女史ヲ以テ內侍代トシテ僅ニ之ヲ行ヘリ、時ニ延喜ヲ距ルコト未ダ百年ヲ出デズシテ、而シテ其衰頽セルコト此ノ如シ、延テ嘉吉文安ノ頃マデハ、尙ホ其式ヲ存シタリシカドモ、應仁ノ大亂以後ハ、終ニ全ク廢絕シタリ、東山天皇ノ元祿四年ニ至リテ、再興セラレタレドモ纔ニ其式ヲ擧ゲタルノミニテ、舊制ノ如クナラズ、乃チ內侍所ノ西庭ニ於テ之ヲ行ヒ、吉田家其事ニ從ヒ、其名稱モ亦內侍所淸祓ト云ヒテ、大祓ト云ハズ、或說ニ淸祓ト稱スルモノナラント云ヘリ、或ハ然ラン、

此篇ニハ恒例二季ノ大祓ニ關スルモノヽミヲ收メ、其他御贖節折、六月祓、臨時大祓ノ如キ

ハ此篇ニ附セリ、又大嘗祭篇ニ、齋宮齋院ノ御禊大祓ハ、伊勢齋宮賀茂齋院ノ二篇ニ収メタリ、宜シク參看スベシ、

名稱

〔漢鹽草二時節〕大ばらへ（是名越のはらへなるべし、又六月祓共いふ也、みな同事也、就中六月祓の事、ごもよめり、是此はらへに、淺茅をもて輪を作りて、著たるてあさのはなどにてするぬさなりするぬさなり物をぬきすてこの輪をこゆる也、夕べ又はよるするぬさなり）

〔增補下學集上二時節〕大祓（ナホバラヒ）六月晦日

〔公事根源六月〕大祓

大ばらへといふは、百官ことごとく朱雀門にあつまりて祓をなし侍る也、六月十二月二たび有、天武天皇の御時よりはじまる、解除は觸穢などの時も有、神事を行時は、臨時にも常にもかれをも、この大祓は百官一同にあつまりて祓をする也、

儀式

〔令義解二神祇〕凡六月十二月晦日大祓（謂祓者解除不祥也）者、中臣上御祓麻、東西文部、（謂東西漢文直、漢文首也）上祓刀、讀祓詞、（謂文部漢音讀者也）下部爲解除、

〔儀式五〕大祓儀（六月十二月並同、但臨時大祓者不令申、刀禰數札直令進、）

其日午四刻、神祇宮內縫殿等官省寮候延政門外、百官會集祓處、（分置六處、但馬在其南方北向、）所司設座於朱雀門幷東西伎舍、大臣以下五位以上、壇上東方西北上重行、南階東第一間爲四位以下階第二間爲參議已上階、其女官亦在同壇上西方、隔以斑幔、（開西一扉、外記官史從此出入）中務式部兵部三省東伎舍西面北上、弾正西伎舍東面北上、祝詞座在路南西座前置軾布、未一刻外記已下各就座、自餘諸司屯立東伎舍東頭、于時式兵二省省掌以起上座就立座舍女東官頭亦唱就計座刀禰（式部先唱、兵部後唱、）訖彈正忠命疏亦令喚臺掌、疏稱唯仰史生喚臺掌、史生稱唯、喚臺掌二聲、臺掌稱唯出西舍前北向而立、忠命云、置版、臺掌稱唯退出臺掌捧版進置之、（舍前東去二許丈、當忠前北向、）次三省掌列趨置版、（舍東去六尺、式兵二省掌更出召計諸司諸衛、式部先召、後召訖、式部兵部版、訖退出立舍南、式兵二省掌更出召計諸司諸衛、式部先召、後召訖、式部兵部版、訖退出立舍南、）

部丞目錄云、令喚省掌、錄稱唯仰史生云、喚省掌、史生稱唯喚省掌二聲、省掌稱唯、次兵部次中務亦如之、訖三省省掌共列就版、式部丞命云、司司乎、刀禰數札（人別持刀數札）就式部版、貫首者申云、司司申久、刀禰數札進（止）申、丞命、進禮、諸司共稱唯、中分各授最後者、總執疊札置於錄前、還就本列、錄讀申札數云、司司申留刀禰數札若干枚申給（止）申、丞命云、縱、諸司共稱唯趨出、兵部次中務亦如之、三省勘目錄訖候御麻、既到插祓稻、于時辨大夫幷三省輔各一人一列、官史及三省丞錄一列、趨立庭中、（五位已上前列、六位已下後列、）辨大夫申云、大祓處爾參集（讀曰末爲字古那波禮留）刀禰數申給（止）申、次式部錄申目錄、次兵部次中務三省申畢、大臣宣云、常乃任爾任令祓辨已下共稱唯、（五位已上先稱、五位已下後稱、下同、）訖依次退復本座、式部丞命喚省掌如前、兵部亦同、二省省掌各就版、式部丞命云、刀禰令參進、省掌稱唯、兵部亦同、外記以下起座降立東舍南頭、式兵二省丞錄引文武官刀禰列立、（西面北上）彈正忠疏降立舍南頭（東面北上）立定神祇官頒切麻（參議已上史、五位已上史生、女官幷諸司神部、）訖中臣趨就座讀祝詞、稱聞食、刀禰皆稱唯、祓畢行大麻、次撤（○撤原作祓、據一本改、）五位已上切麻、既而散去、

〔延喜式十中務〕凡六月十二月晦日、於宮城南路大祓、大臣以下五位以上就朱雀門（若雨泥日、仰所司設橋於門東接地、）

〔延喜式四十一弾正〕凡二季大祓日、（六月十二月晦日）忠以下向祓所糺彈非違、

〔西宮記六月〕大祓（延木元年閏六月晦日有大祓）

上卿著朱雀門、（訖、議昇自東腋、晴昇自南東一階、著第五間、巽方置牀子、六間辨三省輔、西面北上、外記史三省在東舍、彈正在西舍、南橋下立馬、稻等具、）内侍著、（令持御贖物、在西中央壇上、）上卿料中、（間幕）神祇官置祓物、祝師著、（在中央壇上、）祝了神官撤祓物、祝師退、神官曳大麻祓曳、各退、

内藏祓 殿上人著
官祓 大辨已下著

〔江家次第 七六月〕大祓 六月十二月晦日、若有二閏月一其月行レ之、

近例只用二雨儀一

西廂式云未勘諸司會集雨儀昇自二東階一參議昇自二東第二階一著座、辨及三省輔昇自第一階著座、雨儀日上以下同用二門東掖一、借橋木工寮作レ之、

文武諸司屯二立東舍東頭一、記文云、諸司座設二東西仗舍南面一、左右檢非違使官人、就二東西仗舍南庭胡床一、近例內侍不レ來可レ准レ之、內侍來著、御贖物持來、祓馬牽立畢、

神祇官預二切麻一儀式云、參議以上央、五位以上史生、女官并諸司神部、記文云、上料入二荒筵一、中臣進之云云、祝師著座、近例此間數レ座讀二祝詞一、先讀二宣命一云云訖起座、次行二大麻一神祇官人以下執レ之、上卿以下座前引レ之、上卿大夫諸司料各異、西宮抄曰、上卿料祐曳、次撒二祓畢一、上卿以下退出、

〔神祇官年中行事 六月〕晦日〇中略今日朱雀門大祓、上卿向二朱雀門一行也、御祓詔戶師勤レ之、立稻成二遣本官下文一、松尾稻荷兩社之間、又賀茂上下也、一社辨勤レ之、

〔延喜式八祓詞〕六月晦大祓 十二月准レ之

集侍親王諸王諸臣百官人等諸聞食止宣、天皇朝廷爾仕奉留比禮挂伴男、手繦挂伴男、靫負伴男、劒佩伴男、伴男能八十伴男乎始氏、官官爾仕奉留人等乃過犯家牟雜雜罪乎、今年六月晦之大祓爾祓給比清給事乎諸聞食止宣、高天原爾神留坐皇親神漏岐神漏美乃命以氏、八百萬神等乎神集集賜比、神議議賜氏、我皇御孫之命波、豐葦原乃水穗之國乎安國止平久知所食止事依志奉伎、如此依志奉志國中爾、荒振神等乎波神問志爾問志賜、神掃掃賜比氏、語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止氏、天之磐座放、天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氏、天降依志奉支、如此久依左志奉志四方之國中登大倭日高見之國乎安國止定奉氏、下津磐根爾宮柱太敷立、高天原爾千木高知氏、皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉

氏、天之御蔭日之御蔭止隱座氏、安國止平氣久所知食武國中爾成出武天之益人等我過犯家牟雜雜罪事波、天津罪止、畔放溝埋、樋放、頻蒔、串刺、生剝、逆剝、屎戶、許許太久乃罪乎天津罪止法別氏、國津罪止、生膚斷、死膚斷、白人、胡久美、己母犯罪、己子犯罪、母與二子犯罪一、子與二母犯罪一、畜犯罪、昆虫乃災、高津神乃災、高津鳥災、畜仆志蟲物爲罪、許許太久乃罪出武、如此出波、天津宮事以氏、大中臣天津金木乎本打切末打斷氏、千座置座爾置足波氏、天津菅曾乎本苅斷末苅切氏、八針爾取辟氏、天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮、如此久乃良波天津神波、天磐門乎押披氏、天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氏、所聞食武、如此所聞國津神波、高山之末短山之末爾上坐氏、高山之伊穗理短山之伊穗理乎撥別氏、所聞食武、如此所聞食氏波皇御孫之命乃朝廷乎始氏、天下四方國波爾罪止云布罪波不在止、科戶之風乃天之八重雲乎吸放事之如久、朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事之如久、大津邊爾居大船乎、舳解放艫解放氏、大海原爾押放事之如久、彼方之繁木本乎、燒鎌乃敏鎌以氏、打掃事之如久、遺罪波不在止祓給比清給事乎、高山之末短山之末與理佐久那太理爾落多支都速川能瀨坐須瀨織津比咩止云神、大海原爾持出奈武、如此持出往波、荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會爾坐須速開都比咩止云神、持歌呑氏牟、如此久歌呑氏波氣吹戶坐須氣吹戶主止云神、根國底之國爾氣吹放氏牟、如此久氣吹放氏波、根國底之國爾坐速佐須良比咩登云神、持佐須良比失氏牟、如此久失氏波、天皇我朝廷爾仕奉留官官人等乎始氏、天下四方爾波自今日始氏、罪止云布罪波不在止、高天原爾耳振立聞物止馬牽立氏、今年六月晦日夕日之降乃大祓爾、祓給比清給事乎諸聞食止宣、四毛國ト部等大川道爾持退出氏祓却止宣、

〔大祓詞後釋〕此詞は西宮記左經記などにも、中臣祓詞と見え、大神宮年中行事には、中臣祓祭文とあり、祭文とは、中昔にかくさまに讀唱ふる詞のたぐひをば、すべて然いひしとおぼしくて、枕冊子に、大殿祭祝詞をも、宮の女の祭文といへり、〇中略さて此詞をたゞ中臣祓とのみいへるは、光明峯寺殿の玉藻に、國通讀申中臣祓とあり、其ころはやくいひしことなりけり、

文部祓刀及祓詞

〔令義解二神祇〕凡六月十二月晦日大祓者、〇中、東西文部謂東、漢文直、西、漢文首也、上祓刀、讀祓詞、謂文部漢音讀者也

〔祝詞講義〕東西文部上祓刀讀祓詞と有る、此二氏は諸蕃の種族なり、思ふに彼等が歸化し程より、其本國にて在ける祓事を內々行ひ居つらむ、其を朝廷にても、其本國の任にして免し行は令め給ひけむを、何時となく神代よりの儀式に添ふ事とは成れりけるなり、

〔延喜式三臨時祭〕凡東西文部等上大祓大刀者、取諸司主典已上者、

〔小野宮年中行事六月〕晦日東西文部奏祓刀事

內裏式雖載南殿儀、近代於御在所所被行之、十二月同之、

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓十二月准之

東文忌寸部獻横刀時呪西文部准此

謹請、皇天上帝三極大君、日月星辰八方諸神、司命司籍、左東王父、右西王母、五方五帝、四時四氣、捧以銀人、請除禍災、捧以金刀、請延帝祚、咒曰、東至扶桑、西至虞淵、南至炎光、北至溺水、千城百國精治、万歲万歲万歲、

式場錯設

〔古語拾遺〕至于淨御原朝〇天武改天下万姓、而分爲八等、〇中略其三曰宿禰、以賜齋部氏、命以小刀、其四曰忌寸、以爲秦漢二氏及百濟文氏等之姓、〇齋部、共預齋藏事、因以爲姓也、今東西文氏、獻祓大刀、蓋亦此之緣也、

〔續日本紀九聖武〕神龜三年十二月壬申、太政官處分、東文忌寸等、自今以後、令任辨官人、上大祓刀、

〔西宮記六月〕大祓

九卷式云、東文忌寸等、上大祓大刀者、自今以後、令任辨官史生已上之人、神龜三年十二月二十九日太政官處分

延曆六年六月三十日、右大臣宣、奉勅、自今以後、令任諸司主典已上者、上之、西文忌寸亦准此、〇又見神祇令集解

〔延喜式十式部〕六月十二月晦日大祓

其日所司陳列祓物、各有常儀、百官男女會集朱雀門、外記史中務式部兵部並坐東仗舍、彈正坐西仗舍、大臣已下五位已上坐壇上東方、南階東一間爲四位已下階、二間爲參議已上階、但雨泥日仰所司設橋於東方墻下、女官亦就同壇上西方、隔以斑幔、三省省掌各置版位、諸司就版進番上以上見參簿事見儀式、

〔延喜式三十掃部〕六月〇中略晦日大祓、朱雀門壇上設公卿及辨中務式部兵部幷女官座、左右仗舍六位已上座、但祝詞者在庭中、十二月亦同、

〔延喜式四十二左右京〕凡六月十二月大祓、預令掃除其處、亦兵士禁人往還、元日質明掃除薪灰、

〔法曹類林二百公務〕式部文云、六月十二月二晦、百官會集大祓儀、其日平旦、大藏木工掃部帳幄鋪設、於大伴壬生二門間大路各有常儀、神祇官主典馬寮陳祓物祓馬、亦各有儀、

〔江家次第七六月〕大祓六月十二月晦日、若有閏月、其月行之、

近例只用雨儀、

朱雀門西第一二間、曳幔設內侍座、東第三間、設日上座、西面儀式云、設參議以上座、近例參議一人行、或納言參著、希有例也第二間設辨大夫中務式部兵部三省輔座、西面北上東仗舍西面設外記史三省丞錄座、其後史生座、北面設官掌召使等座、南面設三省省掌座、並西面北上西仗舍東面設彈正忠疏座、其後史生座舍南面臺掌座、並東面若仗舍有汙穢物等者、諸司分坐門東西壇上、路南設祝師座、西面、兩儀數門南中央壇上、神部置軾布於其前、陳祓物於路南、分置六所、馬在其南、北面記文云、馬六匹牽立朱雀門橋上、又積置稻四五束許、

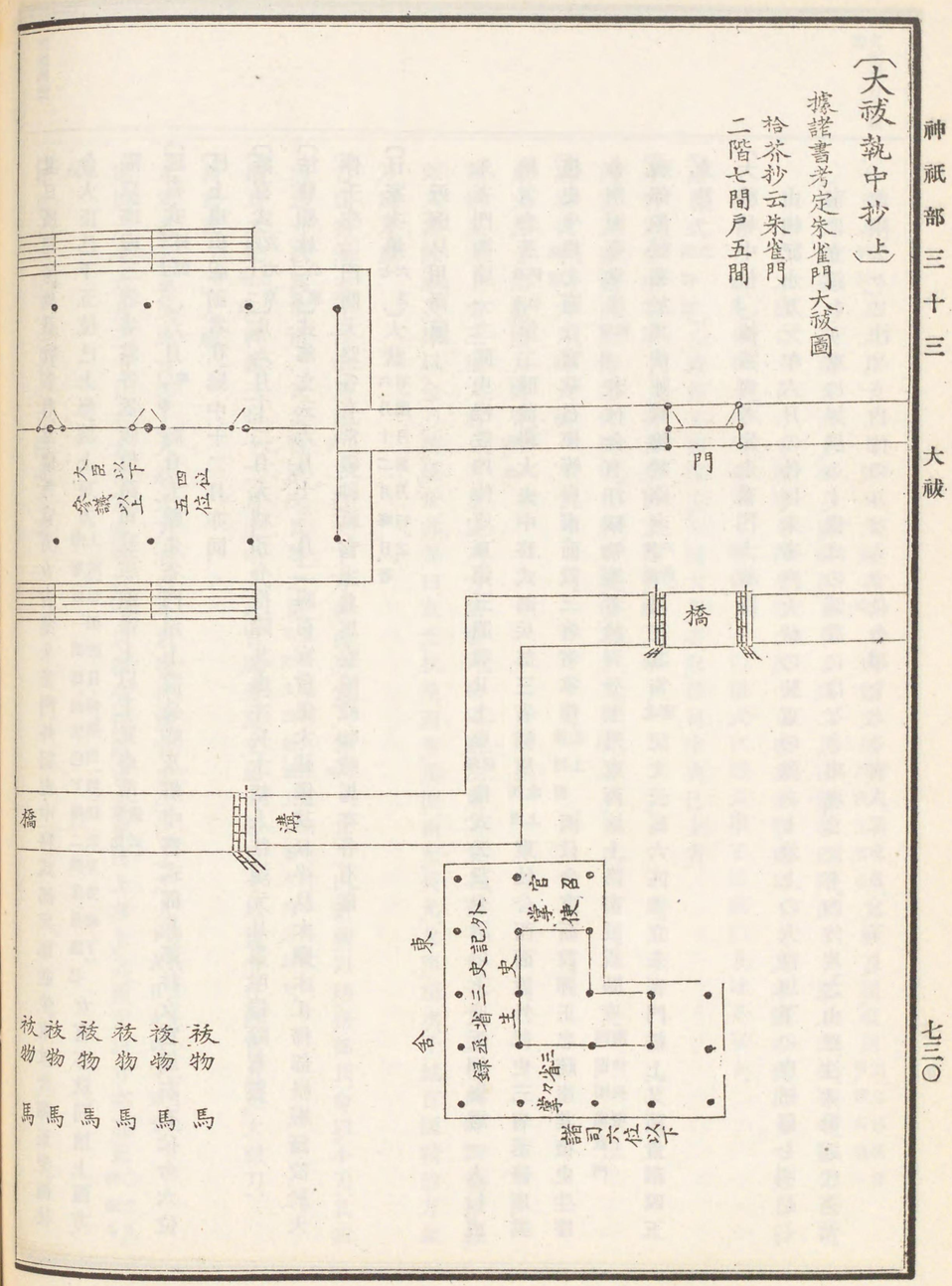
〔大祓執中抄〕據諸書考定朱雀門大祓圖

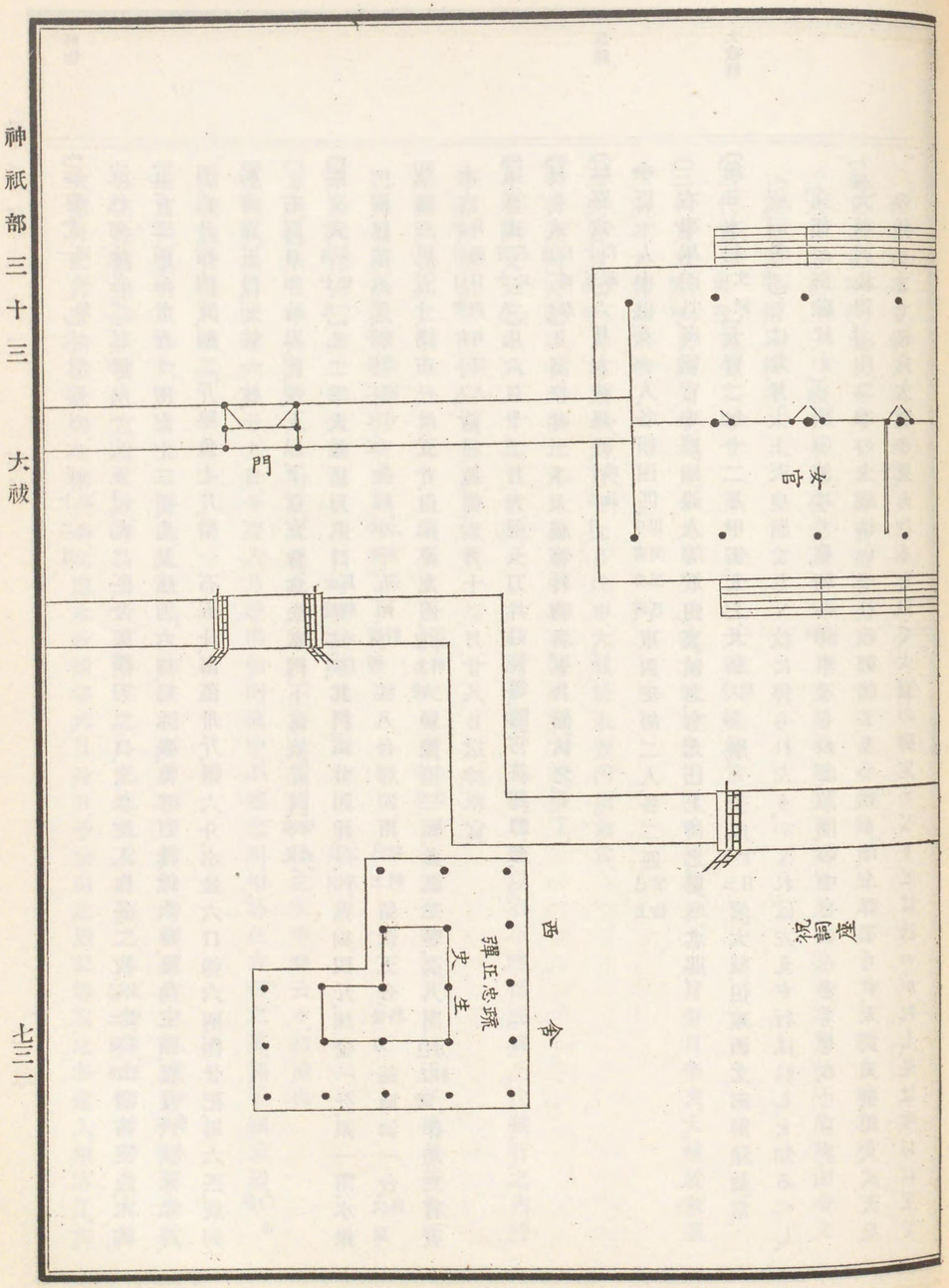
山槐記永万元年六月の件に、朱雀門大祓の裝束の圖あり、壇上の大臣以下の座紳幕を引廻し、南に立筵あり、東に屏風あり、儀式の鋪設にはなき事也、また有內侍座之由雖注次第近代全无此事云々と注せり、內侍のみならず仗舍人を始る官人なきさまなり、

〔大祓執中抄上〕

據諸書考定朱雀門大祓圖

拾芥抄云朱雀門
二階七間戶五間





料物

〔延喜式一四時祭〕六月晦日大祓十二月准之

五色薄絁各二尺、絣帛一丈五尺、絹二匹、金装横刀二口、金銀塗人像各二枚、已上東西文部所レ預　庸布三段、木綿一両、鹿革八條、各長二尺五寸、廣四寸、生絲小十五両、纏レ柄料漆八合、膠四両、已上料　猪膏五合、塗レ刀料　胡麻油一合、洗レ刷料　生絁一尺五寸、調布一尺五寸、白綿小九両、已上絞レ漆料　伊豫砥二顆、龍砥二顆、藁八圍、已上磨レ刀料　作功二百五十人、金装口別廿六人、烏装口別廿三人、請レ料造備、六月十二月廿八日送二神祇官一

〔延喜式四時祭〕凡六月十二月大祓大刀幷弓箭等、隨二官符一到即充、

〔延喜式三臨時祭〕凡諸祭幷二季大祓等料物者、五日備供之、

賜祿

〔延喜式十内藏五〕六月大祓賜祿十二月准レ此

中臣一人、中臣女一人、各絹四匹、中宮亦同、但男三匹、東西史部二人、各二匹、已上官物

右事畢明旦神祇官率二應レ賜祿人等一於二内裏一候之、寮允已上侍之、屬喚名賜、

大祓例

〔續日本紀二文武〕大寶二年十二月甲寅、太上天皇〇持統崩、壬戌〇三廢大祓、但東西文部解除如レ常、

〔祝詞考中〕こは此月太上天皇崩ましゝ故に停られたり、かゝればたえず行はれしを知るべし、

文部が解除は、から國の流にて、皇朝の神事ならねば、諒闇の中といへどもせさせらる、

〔大祓詞後釋上〕此二季の大祓は、いづれの御代よりか始りけん詳ならず、天武天皇紀文武天皇の始めまでに、此大祓の見えざるを以て、大寶の御定めなりとは決めがたし、是は年毎に定ま

れる事なる故に、記されざりしにもあるべし、

〔續日本紀八元正〕養老五年七月己酉、始令二文武百官率二妻女姉妹一會二於六月十二月晦大祓之處一、

〔大日本史神祇五續日本紀養老五年制〇中略〕全與二令制一同、可レ疑、豈男女悉會者、實始二于此時一、而令文追加之乎、附以備レ考、

〔三代實錄一清和〕天安二年十二月卅日丁巳、大祓大儺如常儀、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年六月廿九日癸丑晦、大祓於二朱雀門一、前例也、十二月卅日辛亥、大祓於朱雀門前、如レ常儀、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年六月廿九日戊申、大祓於朱雀門前一如常、

〔本朝世紀天慶二年六月廿九日己亥、中納言師國行二大祓事一了、

〔小右記〕天元五年六月廿九日己丑、今日大祓所、公卿一人不參、仍以二右小辨惟成一爲二上代一被レ行之、内侍等稱障不レ向二祓所一、仍以二女史一爲二内侍代一、

〔左經記〕寛仁二年六月廿九日庚申、著二朱雀門一行二大祓事一、上左兵衛督　三年十二月卅日壬子、晩景著二朱雀門一大祓所一依二上卿遲參一、入夜始レ事、上右兵衛督

〔永昌記〕保安三年十二月廿九日甲寅、今夜於二朱雀門一、大祓追儺如レ例、

〔玉海〕治承三年六月廿九日丙辰、大祓也、參議辨不レ參二朱雀門一、外記史又不參云々、勿論也、

〔建内記〕嘉吉元年六月廿九日、今夜六月祓事如レ例、穢中不審之間、相二尋在方卿一之處、無二子細一云云、〇中略

大祓被二付諸司一云云、

〔康富記〕嘉吉三年六月廿九日癸丑、大祓也、上卿正親町宰相中將持季卿、權右中辨俊秀藏人奉行等參行、

召使秀國爲二神祇官之宮主代一歟、内侍參否可レ尋レ注之、外記家久爲二分配之處一不レ參、自二上卿幷辨方一、大祓次第幷記錄事被レ借之間、次第一本、又應永卅四年六月卅日、予參向之忩記等寫レ之各進入兩方了、如

次第者、上卿南面、辨外記史等北上西面也、如此記者、上卿辨外記史西上南面一列也、内侍車在西方、向東、今夜之儀可奉尋之、

文安四年六月卅日庚寅、今夜大祓也、上卿中山宰相中將親通朝臣、左少辨敎秀、藏人左衛門權佐　少外記康顯、召使秀國、内侍等參行也、秀國勤宮主役云々、

〔季連宿禰記〕元祿四年六月廿九日癸未、今年二季大祓再興云々、今日於内侍所前有水無月祓、左兵衛督吉田行卿　兼連　著行之云々、是後自伊豫局所被語聞也、官方無其催、仍不知之、

〔基量卿記〕元祿四年六月廿九日、今日於内裏有清祓、兼連卿勤之、大祓之准據歟、關白〇近衛基熙　申沙汰云云、自今年再興由也、

〔續史愚抄　東山〕元祿四年六月廿九日癸未、於内侍所西庭有清祓、自今年每六十二月等晦、准大祓可被行者、關白基熙計申云、左兵衛督　兼連　奉仕、奉行藏人頭右中將定經朝臣、十二月三十日庚子、於内侍所西庭有清祓、自今年爲恒例儀、

〔季連宿禰記〕元祿五年六月廿九日丁未、大祓、近年再興也、然而内々之儀歟、官外記無其催、仍不知之、

六年六月卅日壬寅、今日禁中大祓之日也、其儀如例歟、官方無其催、仍不知之、凶事之後被稱大祓、仍當時憚此號歟、於禁中今日祓稱清祓之由或人語之、是今案歟、六月十二月二季之祓、如舊記稱大祓也、此二季祓近年再興也、自吉田家奉仕之云々、今日奉行職事等可尊記、

〔禁裏番衆所日記〕寶永六年六月三十日己巳、内侍所清祓、假殿　侍從二位　兼敬　奉仕、奉行藏人右少辨光榮、

〔續史愚抄　中御門〕寶永六年六月三十日己巳、内侍所清祓、假殿　侍從二位　兼敬　奉仕、奉行藏人右少辨光榮、

〔基量卿記〕元祿七年十二月廿九日、内裏清祓、兼連卿勤仕之、大祓代也、近年有此事、

〔續史愚抄　桃園〕延享四年六月廿九日戊子、内侍所清祓、侍從三位　兼雄　奉仕、奉行藏人左少辨說通、

〔續史愚抄　後櫻町〕寶曆十二年十二月三十日戊午、内侍所清祓權大副二位　兼雄　奉仕、奉行藏人左中辨俊臣、

〔小右記〕長和四年六月卅日戊寅、資平云、〇中略引見前例、昌泰四年閏六月晦日有大祓朱雀門者、是外記日記、延木廿年閏六月無外記日記、昌泰記書出授資平、閏六月一日己卯、資平云、〇中略昌泰四年閏六月晦日大祓事申相府、命云、昨日大外記文義申不知前例之由、仍推以仰可行來月之狀了、昌泰例已相合、甚以有感者、

〔日本紀略　後一條〕長元七年六月廿九日丁巳、大祓依凶會日延引、可用閏月之由被宣下了、

〔顯廣王記〕治承二年六月廿九日、無大祓、先例云云、閏六月閏月之年、以此月晦行大祓歟、

〔薩戒記〕應永卅二年六月卅日戊辰、今日無大祓、又前々六月祓無之、來月〇閏六月可有之也、

〔忠富王記〕明應十年六月廿一日傳奏以使者、閏六月有之年、以後六月荒和祓、寬正度武家御祓御沙汰、傳奏綱光公　陰陽師有季卿、武家奉行飯尾大和守也、閏六月卅日神祇官輪越之祝著、

御贖節折

二季ノ御贖ハ、大祓ノ日、天皇及ビ中宮東宮ノ御爲ニ、特ニ行フ御祓ナリ、今貞觀儀式延喜式ニ依リテ考フルニ、是日中臣先ヅ御麻ヲ上リ、事畢リテ後ニ、之ヲト部ニ賜フ、ト部執リテ祓所ニ至リテ解除ヲ行フ、次ニ東西ノ文部横刀ヲ上リ、次ニ、宮主進ミテ荒世ノ御服ヲ上リ、中臣ノ女、竹枝ヲ執リテ、御體ヲ量リ奉ルコト凡テ五度、次ニ中臣和世ノ御服ヲ上ル、其儀荒世ノ御服ノ如シ、

節折トハ、荒世和世ノ竹枝ヲ用キルニ由リテ稱スル所ニシテ世ハ假字ナリ、ハ竹節ヲ云フ、此稱江家次第ニ引ク所ノ清涼抄皇勅撰　村上天　ニ始メテ見エタリ、此書ニ依レバ、御麻ヲ以テ御體ヲ撫デ給ヒ、豆々志呂比ノ御服即チ荒世和世ノ御服ナルベシ及ビ横刀壺等ニ御息ヲ吐キ給フナリ、蓋シ荒ト

ハ悪祓ニ用キルノ謂ニシテ、和トハ善祓ニ用キル云フナルベシ、御贖訖リテ後、荒世ハト部ニ、和世ハ宮主ニ賜フ、

又毎月晦日御贖アリ、ツゴモリノ御祓ト云フ、但シ六月十二月ハ此例ニアラズ、又羅城御贖アリ、世毎ニ一タビ之ヲ行ハル、

又毎年六月十二月ノ、一日ヨリ八日ニ至ルマデ、又御贖アリ、而シテ其六月十二月ハ、月次祭神今食祭篇ニ、十一月ハ新嘗祭篇ニ收メタリ、就キテ看ルベシ、

二季御贖

〔儀式五〕二季晦日御贖儀　六月十二月

神祇官預前受備其料物、鐵偶人卅六枚（金銀粧各十六枚、無飾四枚）木偶人廿四枚、御輿形四具、挾幣帛木廿四枚、金粧横刀二口、五色薄絁各一丈一尺、絲三兩、安藝木綿二斤、凡木綿一斤、麻二斤、庸布二段、御衣二領、袴二腰、被二條（自餘物見鍬四口、米酒各二斗、堅魚二斤、腊四斤、海藻二斤、鹽四升、水盆坩埦各二口、匏二柄（徑各二分、長八尺）、柏廿把、小竹廿株（徑各二分、長八尺）、宮主一人卜部五人明衣料、布三端三丈六尺、其日卜部各著明衣、其一人執御麻、二人執荒世、二人執和世、二人執壺、宮主史生神部等、左右分頭前行、中臣官人次之、御麻次之、東西文部次之（各執横刀）、荒世次之、和世次之（並著木綿鬘）、宮内輔（若無輔丞替之）陳列御麻等、物候延政門外、大舍人叫門、闈司問阿誰、大舍人答云、宮内省輔姓名御麻奏、登御門候、闈司傳奏如常、輔入就版奏云、宮内省申久、御麻進止、神祇官姓名御門候止、申退出喚、中臣稱唯、率文部四國卜部入（宮主在其中）、候宜陽殿南頭、縫殿寮先以荒世和世御服率女孺參入、即内侍縫司掌縫以上供之傳取、令藏人供奉、訖縫殿寮退出（荒世賜卜部、和世賜宮主）、次中臣捧御麻進就版、勅曰、參來、稱唯、就階下、中臣女（簡氏女堪事者奏定）於殿上轉取供奉、訖授中臣、還本處、即授卜部一人、令向祓所、輔更入奏曰、宮内省申久、御贖物進止、神祇官姓名、大和河内乃忌部、四國卜部等率天候止、申、退出喚中臣、稱唯、東文部捧横刀入就版、勅曰、參來、稱唯、就階下、轉授中臣女、取奉御畢退出、次西文部進退如前儀、次中臣率宮主卜部、執荒世者、就階下、置於席上（掃部察數置於階下、縫殿寸上）、宮主被荒世、授中臣、中臣取授中臣女、即執量御體總五度、訖宮主取祝詞授後取卜部、宮主取坩授中臣、中臣轉授中臣女、執奉御、訖退授宮主、宮主取祝詞授後取卜部、荒世事畢退出、次中臣引和世、進退如荒世儀、其荒世者賜卜部、和世者賜宮主、訖皆退出、解除河上、

〔政事要略二十六〕多米宿禰本系帳云、天皇御躬爲國大歎然之時、供御大飯已不聞食、仍召氏人等令作御飯、特被詔勅小長田命作備御飯進御之日、平吉聞食、即垂詔僻、奉仕御飯甚有香美、平服聞食、故召小長田命者特賜嘉名、朕御多米負賜被詔定多米連也、爾時賜大歎政亦任御田之職、口天皇御贖之政掌以仕奉也、○略中同氏系圖云、志賀高穴大宮御宇若帶天皇○成務御世、小長田命以米入大籠而獻天皇也、因改令宗賜多米連姓爾時御命贖乃人平四方國造等獻支、

〔延喜式一四時祭〕御贖

鐵人像二枚、金裝横刀二口、五色薄絁各一丈一尺、絲三兩、安藝木綿二斤、凡木綿一斤、麻二斤、庸布二段、御衣二領、袴二腰、被二條（自餘物見鍬四口、米酒各二斗、堅魚二斤、腊四斤、海藻二斤、鹽四升、水盆坩埦各二口、匏二柄、柏廿把、小竹廿株（徑各二分、長八尺）、宮主一人卜部五人明衣料調布三端三丈六尺、右晦日〇六月十二月卜部各著明衣、其一人執御麻、二人執荒世、二人執和世、二人執壺、宮主史生神部等左右分頭前驅、次中臣官人、次御麻、次東西文部、各執横刀、次荒世、次和世、並著木綿鬘、進候延政門、大舍人叫門、宮内輔入奏（其詞見宮内式）、退出召中臣、稱唯、率文部四國卜部入（宮主在此中）、候於宜陽殿南頭、中臣率卜部執荒世者、就階下置於席上（掃部察數置於階下、縫殿寸上）、次中臣捧御麻進就版位、勅曰、參來、即稱唯、就階下、轉授中臣女、即執量御體總五度、訖宮主捧坩、中臣轉執授中臣女、執奉御、訖退授中臣、轉授宮主、宮主取祝詞授後取卜部、荒世事畢退出、次中臣引和世、進退如荒世儀、其荒世者賜卜部、和世者賜宮主、訖皆退出、解除河上、

〔政事要略二十六〕多米宿禰本系帳云、天皇御躬爲國大歎然之時、供御大飯已不聞食、仍召氏人等令作御飯、特被詔勅小長田命作備御飯進御之日、平吉聞食、即垂詔僻、奉仕御飯甚有香美、平服聞食、故召小長田命者特賜嘉名、朕御多米負賜被詔定多米連也、爾時賜大歎政亦任御田之職、口天皇御贖之政掌以仕奉也、○略中同氏系圖云、志賀高穴大宮御宇若帶天皇○成務御世、小長田命以米入大籠而獻天皇也、因改令宗賜多米連姓爾時御命贖乃人平四方國造等獻支、

〔延喜式一四時祭〕御贖

鐵人像二枚、金裝横刀二口、五色薄絁各一丈一尺、絲三兩、安藝木綿二斤、凡木綿一斤、麻二斤、庸布二段、御衣二領、袴二腰、被二條（自餘物見鍬四口、米酒各二斗、堅魚二斤、腊四斤、海藻二斤、鹽四升、水盆坩埦各二口、匏二柄、柏廿把、小竹廿株（徑各二分、長八尺）、宮主一人卜部五人明衣料調布三端三丈六尺、右晦日〇六月十二月卜部各著明衣、其一人執御麻、二人執荒世、二人執和世、二人執壺、宮主史生神部等左右分頭前驅、次中臣官人、次御麻、次東西文部、各執横刀、次荒世、次和世、並著木綿鬘、進候延政門、大舍人叫門、宮内輔入奏（其詞見宮内式）、退出召中臣、稱唯、率文部四國卜部入（宮主在此中）、候於宜陽殿南頭、中臣率卜部執荒世者、就階下置於席上（掃部察預數置於階下、縫殿寸上）、次中臣捧御麻進就版位、勅曰、參來、即稱唯、就階下、轉授中臣女、即執量御體總五度、訖宮主捧坩、中臣轉執授中臣女、執奉御、訖退授中臣、轉授宮主、宮主取祝詞授後取卜部、荒世事畢退出、次中臣引和世、進退如荒世儀、其荒世者賜卜部、和世者賜宮主、訖皆退出、解除河上、

〔政事要略二十六〕多米宿禰本系帳云、天皇御躬爲國大歎然之時、供御大飯已不聞食、仍召氏人等令作御飯、特被詔勅小長田命作備御飯進御之日、平吉聞食、即垂詔僻、奉仕御飯甚有香美、平服聞食、故召小長田命者特賜嘉名、朕御多米負賜被詔定多米連也、爾時賜大歎政亦任御田之職、口天皇御贖之政掌以仕奉也、○略中同氏系圖云、志賀高穴大宮御宇若帶天皇○成務御世、小長田命以米入大籠而獻天皇也、因改令宗賜多米連姓爾時御命贖乃人平四方國造等獻支、

〔延喜式一四時祭〕御贖

鐵人像二枚、金裝横刀二口、五色薄絁各一丈一尺、絲三兩、安藝木綿二斤、凡木綿一斤、麻二斤、庸布二段、御衣二領、袴二腰、被二條（自餘物見鍬四口、米酒各二斗、堅魚二斤、腊四斤、海藻二斤、鹽四升、水盆坩埦各二口、匏二柄、柏廿把、小竹廿株（徑各二分、長八尺）、宮主一人卜部五人明衣料調布三端三丈六尺、右晦日〇六月十二月卜部各著明衣、其一人執御麻、二人執荒世、二人執和世、二人執壺、宮主史生神部等左右分頭前驅、次中臣官人、次御麻、次東西文部、各執横刀、次荒世、次和世、並著木綿鬘、進候延政門、大舍人叫門、宮内輔入奏（其詞見宮内式）、退出召中臣、稱唯、率文部四國卜部入（宮主在此中）、候於宜陽殿南頭、中臣率卜部執荒世者、就階下置於席上（掃部察預數置於階下、縫殿寸上）、次中臣捧御麻進就版位、勅曰、參來、即稱唯、就階下、轉授中臣女、即執量御體總五度、訖宮主捧坩、中臣轉執授中臣女、執奉御、訖退授中臣、轉授宮主、宮主取祝詞授後取卜部、荒世事畢退出、次中臣引和世、進退如荒世儀、其荒世者賜卜部、和世者賜宮主、訖皆退出、解除河上、

〔政事要略二十六〕多米宿禰本系帳云、天皇御躬爲國大歎然之時、供御大飯已不聞食、仍召氏人等令作御飯、特被詔勅小長田命作備御飯進御之日、平吉聞食、即垂詔僻、奉仕御飯甚有香美、平服聞食、故召小長田命者特賜嘉名、朕御多米負賜被詔定多米連也、爾時賜大歎政亦任御田之職、口天皇御贖之政掌以仕奉也、○略中同氏系圖云、志賀高穴大宮御宇若帶天皇○成務御世、小長田命以米入大籠而獻天皇也、因改令宗賜多米連姓爾時御命贖乃人平四方國造等獻支、

〔延喜式一四時祭〕御贖

鐵人像二枚、金裝横刀二口、五色薄絁各一丈一尺、絲三兩、安藝木綿二斤、凡木綿一斤、麻二斤、庸布二段、御衣二領、袴二腰、被二條（自餘物見鍬四口、米酒各二斗、堅魚二斤、腊四斤、海藻二斤、鹽四升、水盆坩埦各二口、匏二柄、柏廿把、小竹廿株（徑各二分、長八尺）、宮主一人卜部五人明衣料調布三端三丈六尺、右晦日〇六月十二月卜部各著明衣、其一人執御麻、二人執荒世、二人執和世、二人執壺、宮主史生神部等左右分頭前驅、次中臣官人、次御麻、次東西文部、各執横刀、次荒世、次和世、並著木綿鬘、進候延政門、大舍人叫門、宮内輔入奏（其詞見宮内式）、退出召中臣、稱唯、率文部四國卜部入（宮主在此中）、候於宜陽殿南頭、中臣率卜部執荒世者、就階下置於席上（掃部察預數置於階下、縫殿寸上）、次中臣捧御麻進就版位、勅曰、參來、即稱唯、就階下、轉授中臣女、即執量御體總五度、訖宮主捧坩、中臣轉執授中臣女、執奉御、訖退授中臣、轉授宮主、宮主取祝詞授後取卜部、荒世事畢退出、次中臣引和世、進退如荒世儀、其荒世者賜卜部、和世者賜宮主、訖皆退出、解除河上、

出亦中臣引和世進退如荒世儀、其荒服者賜卜部、和服者賜宮主、訖皆退出、臨河解除而去、

〔延喜式三十一宮内〕凡六月十二月晦日、神祇官供奉御麻御贖、其日申時陳列御麻等物、省輔若丞進候延政門、大舍人叫門如常、闈司傳宣、訖輔入奏、其詞曰、宮内省申久、御麻進上、神祇官姓名御門候登申、中臣捧御麻進、中臣女於殿上轉取供奉、畢復本所、更輔入奏、其詞曰、宮内省申久、御贖進上、神祇官姓名、倭河内乃忌寸部四國乃卜部等率氏候登申、中臣等入行事如常、儀畢退出、〔餘月晦日奏進御麻儀亦同〕即輔已下史生已上參大祓所錄送刀禰數札二枚、〔一送中務省、一送式部省〕

〔延喜式十四變禮〕六月晦日御贖服〔十二月亦同、中宮准此〕

皂帛幞頭二條、〔別三尺四寸〕暴布袍二領、〔別三尺二尺〕

條、〔別長六尺五寸、廣九寸〕暴布被二條、〔別一端一丈三尺八寸〕綿廿屯、〔別十屯〕暴布帷二條、〔別二丈四尺六寸〕暴布袜二兩、〔別三尺、著帛絁、練絲二分、生絲一兩二分、〕櫛二枚、履二兩、〔備柳筥六合、大二合、小四合、〕紙六張、裹雜物葉薦二枚、木綿一兩、麻大一分、

大机二脚、

〔延喜式三臨時祭〕凡六月十二月晦日御贖料小竹者、月廿五日以前申辨官、令山城國採進之、

〔延喜式一四時祭〕供奉大祓御贖人等祿

中臣官一人絹四匹、中臣女絹四匹〔中宮准此〕東西文部二人各絹二匹、東宮中臣幷女各一人、並給坊物、

〔延喜式三十八掃部〕六月進御贖物、設簀一枚席一枚於南階下、十二月亦同、

〔本朝月令六月〕晦日神祇官奉荒世和世御贖物事

貞觀式云、晦日御贖金人銀人云云、紫帛二尺云云、今案停紫帛定紫弁汁染絹四尺、

〔儀式五〕二季晦日御贖儀　六月十二月

中宮中臣祓以上〔東宮准此、若不足者、取他司中臣氏、〕捧御麻入候職司、令内侍啓、中臣女奉御麻御贖、其奉荒世和世亦准此、

中宮二季御贖

〔延喜式四時祭〕中宮御贖〔東宮准此〕

鐵人像二枚、五色薄絁各一丈一尺、絲三兩、安藝木綿二斤、凡木綿一斤、麻二斤、庸布二段、御衣二領、裙二腰、〔東宮卷〕被二條、鍬四口、米酒各二斗、鰒二斤、堅魚海藻各二斤、腊四升、鹽四升、水盆坩各二口、坏二口、匏二柄、柏廿把、小竹廿株、宮主一人卜部五人、明衣料調布三端三丈六尺、〔但東宮凡木綿麻米酒鰒腊鹽柏等入種半減、自餘物同、〕

東宮二季御贖

〔延喜式一四時祭〕中宮御贖〔東宮准此〕

右晦日、〇略　中宮中臣祓已上一人、〔東宮准此、若不足者、取他司、〕捧御麻入候職司、令内侍啓、中臣女奉御麻御贖、其奉荒世和世亦准此儀、

〔延喜式十中宮〕凡六月晦日昏時、神祇官率卜部等候西廊殿南職亮若進一人、立東廂下、對内侍密啓曰、御麻又御贖進〔率登〕神祇官姓名候〔登申、内侍啓之、奉令、令召、事見神祇式、〕

〔儀式五〕二季晦日御贖儀　六月十二月　〇中略

東宮坊司入啓訖、出喚中臣、稱唯捧麻進就庭中、令云、參來、稱唯升自南階奉訖退出、令向祓所、亦中臣率宮主卜部、進置荒世和世於席上、中臣升階轉授中臣女奉之、餘如供御儀、其荒世和世者、縫殿寮預置階下席上、命婦率女孺取奉訖却安席上、縫殿寮退出如初、荒世賜卜部、和世賜宮主、

〔延喜式一四時祭〕中宮御贖〔東宮准此〕　〇中略

右晦日、〇略　東宮坊司入啓訖、出喚中臣、稱唯捧麻進就庭中、令曰、參來、稱唯昇自南階奉訖退出、授卜部一人、令向祓庭、亦官人率宮主進置荒世和世於席上、官人昇階轉授中臣女奉之、餘如供御儀、其荒服和服者、縫殿寮預置階下席上、命婦率女孺取奉訖却安席上、賜宮主卜部如前、

〔延喜式四春宮〕凡六月十二月晦日未刻主殿署樹斑幔於南庭東舖席一枚於南階下、神祇官縫殿寮官人以下辦備雜物、入候酉細殿南、于時東宮就座、縫殿官人持荒世服參入、喚繼二人、和世服從於其後、各置席上〔荒服東、和服西、〕退出、宣旨、率女孺三人出自殿南戸、宣旨進侍於東宮座、西面、女孺降自南階、一人

取ㇾ笏、二人取ㇾ荒世服ㇾ昇ㇾ殿授ㇾ宣、宣旨受ㇾ之、奉ㇾ觸ㇾ身體ㇾ返授、女孺受ㇾ之、降ㇾ自ㇾ席上、結ㇾ裏如ㇾ初、次供ㇾ和世服ㇾ其儀如ㇾ前、記宣旨以下退歸、縫殿寮及喚ㇾ織參入撤ㇾ之、進以上二人進ㇾ立庭中ㇾ、啓曰、御麻又御贖進ㇾ神祇官姓名候ㇾ申、令曰、喚、稱唯退出、揚ㇾ聲喚ㇾ神祇官ㇾ稱唯捧ㇾ麻、進ㇾ庭中ㇾ、令曰、參來、神祇官稱唯、昇ㇾ自ㇾ南階ㇾ供ㇾ之、記退出、次供ㇾ御贖物ㇾ事見ㇾ神祇官式ㇾ事畢給ㇾ祿、神祇官五位一人絁四匹、若六位二人絁二匹、十二月中臣女二人各二匹、進ㇾ之、

〔祝詞講義ㇾ〕神祇令に、中臣宣ㇾ祓詞ㇾ下部爲ㇾ解除ㇾ、御贖と記し、江家次第宮主秘事口傳抄等に節折と記せる此なり、公事根源抄、本朝月令、年中行事秘抄等にも出たり、此御贖はしも、天皇の大御解除にして、六月十二月晦日の御贖の外にも有る事にて、本朝月令に引る弘仁內藏式に、晦日御贖中宮東宮並同云々、右每月晦日御贖、依ㇾ件擬備進ㇾ闈司ㇾ と有り、此は每月の晦日の御贖なり、

〔名目抄恒例諸公事ㇾ〕節折

節折名稱

〔藻鹽草二時節ㇾ〕六月晦日よをり歌にもすなはちよなりとよめり

〔增補下學集上二時節ㇾ〕節折晦日

〔公事根源六月ㇾ〕節折

節折儀

節折をばよをりといふ、竹にて御たけの寸法をとりて其程に折あてかへばなり、

〔西宮記六月ㇾ〕御贖物事　雖ㇾ御物忌ㇾ神祇官不ㇾ籠當時參

當日晚景所司供奉、藏人催ㇾ神祇官ㇾ、召ㇾ文氏ㇾ、藏人主殿掃部縫殿等ㇾ、御ㇾ裝束於御殿時刻出御、中臣節折縫司宮主文人等候ㇾ、見ㇾ藏人式ㇾ、兩儀於庭南ㇾ、口問ㇾ供之官人候ㇾ廊下ㇾ、縫殿官人昇ㇾ豆々志余呂比御服ㇾ付ㇾ女官ㇾ、女官授ㇾ中臣女ㇾ、中臣女供ㇾ之、或云、內侍傳供云々、天皇著給氣息返給、中臣進ㇾ御麻ㇾ、付ㇾ中臣女ㇾ供ㇾ之、天皇自取摩ㇾ御體ㇾ返給、東西文人一々進ㇾ劒、付ㇾ中臣女ㇾ供、木工造、天皇著給御氣返賜、中臣宮主著座、神祇官及荒夜卜部等進置竹夜於庭中席上、中臣官人卜部等解了、授ㇾ中臣女ㇾ、女取供之、天皇起、與ㇾ女量ㇾ御體ㇾ中ㇾ、五度、先量ㇾ身長、次自ㇾ兩肩ㇾ至ㇾ御足ㇾ、次左右御手自ㇾ胸指ㇾ末、次量左右腰ㇾ至ㇾ御足ㇾ、次自ㇾ左右膝ㇾ至ㇾ足爪ㇾ、竹九枝、中

臣女每度取示ㇾ神官ㇾ、次卜部捧ㇾ壺授ㇾ中臣官人ㇾ、官人付ㇾ中臣女ㇾ供之、天皇放ㇾ御口氣於ㇾ壺ㇾ三度、中臣女傳ㇾ神宮ㇾ、宮主密祝了、次和世參入、如ㇾ荒世儀ㇾ、事了退出、

應和二年十二月廿九日、神祇官依ㇾ穢候ㇾ陣外ㇾ、依ㇾ仰參入、有ㇾ節折事ㇾ、東宮御服、不ㇾ奉ㇾ贖物ㇾ、

〔西宮記臨時ㇾ〕諸宣旨

節折中臣女氏舉、聰和元、六、廿、內侍宣仰ㇾ神祇官ㇾ、

〔江家次第七六月ㇾ〕晦日節折十二月准ㇾ之

縫殿寮奉ㇾ荒世和世御服事　神祇官奉ㇾ荒世和世御贖事

謂ㇾ之節折御裝束ㇾ

藏人式云、晦日諸司供ㇾ奉荒世和世御裝束、其儀掃部寮立ㇾ御屏風三帖東廂北第三間、謂ㇾ之二間北間ㇾ也、簾中西南北三方、其內鋪ㇾ小筵二枚、其上供ㇾ半疊南面同間、孫廂南北供之、同間孫廂北方立ㇾ御屏風ㇾ、其北節折座、南面逼北供之、節折中臣女座、同壁下地上鋪ㇾ美濃長筵ㇾ、其上置ㇾ半疊、南面逼北供之、同間孫廂北方立ㇾ御屏風ㇾ、其北御屏風前鋪ㇾ小筵ㇾ、爲ㇾ節折座、南廊小板敷鋪ㇾ小筵二枚、爲ㇾ縫殿女官座ㇾ、同壁下地上鋪ㇾ美濃長筵ㇾ、爲ㇾ神祇官人幷東西文部座ㇾ、東方欄外施ㇾ疎幔ㇾ、南行東折、引度同廊北簷ㇾ、但可ㇾ有ㇾ齋王座ㇾ、

又藏人式云、十二月晦日、諸司供ㇾ奉荒世和世御裝束ㇾ、一同ㇾ六月ㇾ、

清涼御記云、晦日御贖物事、內裏式文雖ㇾ載ㇾ南殿儀ㇾ、於ㇾ御在所ㇾ行之、十二月同ㇾ之、當日晚景所司供奉、藏人主殿掃部縫殿等ㇾ、裝ㇾ束於御殿ㇾ、時剋出御、先是節折藏人縫殿司齋主宮主東西文人等祇候、雨儀於ㇾ南一間廂南一間廊下ㇾ、縫殿寮官人昇ㇾ豆豆志余呂比御服ㇾ付ㇾ女官ㇾ、女官傳ㇾ授中臣女ㇾ、中臣女供之、內侍供之者、而今中臣女供之、天皇著給氣息、卽以返給、次神祇官中臣官人以ㇾ卜廂進、就ㇾ階下ㇾ付ㇾ中臣女供之、天皇親取摩ㇾ御體ㇾ卽返給、次東西文

人一々以劒、進就同階下、付中臣女令供之、（木工造之）天皇又著給御氣返給、次中臣官人宮主等著座、次神祇官及荒世卜部進置竹世於庭中席上、中臣官人卜部等解除、畢授中臣女、女取供之、天皇起給、與女量御體五度、先量身長、次量自兩肩至御足、次左右御手自臂中至指末、次量左右腰至御足、次自左右膝至足、凡竹九枝中臣女每度承取示神祇官、次卜部捧壺授中臣官人、官人付中臣女供之、天皇放口氣於壺內三度、訖中臣女傳神祇官、神祇官授宮主、宮主祝畢、（細在內裏儀式）次和世參入、如荒世儀、事畢相率退出、（件子）

相當御讀經之間時事

天曆元年六月卅日記云、諸司供奉荒世和世裝束、御前北階間（依御讀經供奉件間）先垂庇御簾、掃部寮立廻五尺御屏風三帖、敷小筵二枚、其上敷半疊一枚（南面）爲御座、主殿寮同間孫廂一間廻斑幕、其裏立屏風一帖（北西逼東）節折藏人座也、

又階北簀子上敷疊一枚、爲縫殿女孺座、又當砌下曳斑幕一帖（一行）其裏地上敷疊一枚、爲齋主座、北廊透垣前敷疊五枚、爲神祇官人等座、奉仕節折之事、所司撤御裝束、康保二年六月廿九日御記云、此日御讀經如昨、今夜於東庇第三間供節折事、依御讀經之所不堪裝束南第一間、仍於此間行之、

被定中臣女替事

應和元年六月廿九日御記云、藏人守仁奏、神祇官申、以大中臣清子令供奉御節折、藏人申同清子死闕文、仰以內侍宣令下、先例內侍仰神祇官、而今日不候、仍藏人以其宣傳仰、

有穢氣之時事

應和二年六月廿九日御記云、此夜神祇官供御贖如例、但依有主殿雜人觸穢入交宮中之疑、仰神祇官人不令參入、只神祇琴師大中臣高枝及宮主等參入、中宮東宮節折等、以同高枝令供奉、

相當御物忌之時事

同御記云、神祇官人中臣女幷縫殿官人等、雖當御物忌、以外宿人令供奉、昨日不令召候、藏人等懈怠也、遣使七箇寺誦經、物忌之間外宿人參入也、

天祿元年六月卅日、相當御物忌、而行事藏人遠度（五位）失不召仰諸司、召問宮主兼延申云、不可改他日、令候御簾之外、以女藏人等令傳奉云云、仍夜半行之云云、

右大辨相職朝臣以夜半行之云云、

西記云、雖御物忌、神官不籠、當時參入者、

或云、御物忌之時、召籠諸司令供之云云、而近來不然歟、御出之間皆消御灯樓火畢、先催具節折宮主文人縫殿女官等之後、可奏事由之、大祓之間可參也、延久二年六月晦日、御出以前皆消火畢、而依被仰暗之由、一灯樓許居御灯盃、御出之間又消畢、但灯盃居長押下、事畢後如本供奉御灯等、大舍人助時房時行事也、

雨濕儀御裝束如此、子細可見式文、

若相當御物忌兼可催籠事

一掃部寮　御屏風　御座布設

一主殿寮　幔

一神祇官　御贖物　官人等

一縫殿寮女官幷官人

一文人

一節折命婦

一宮主齋主不參用代官

但雖非御物忌時、兼各可令催仰也、先供御贖之後、相催具諸司等、可奏御裝束畢之由也、抑延久三

年十二月、四年六月、依勅定、改直御座敷（東面）今夜殿上幷大盤所料、令進人形菅抜等、（入柳筥、獻之、六月晦夜事歟、）兼仰御修法壇所等、暫可停御加持之事、畢後又可催也、

〔侍中群要十〕節折藏人事（女）

依神祇官解、以内侍宣、令仰下神祇官、

〔年中行事秘抄六月〕晦日節折事、（○中略）重服人無節折、

保安二年六月卅日、中宮雖獻撫物、返給無節折、

〔建武年中行事〕つごもりの夜御あが物まゐる、荒世和世の御ぞやうぞく、二間に御屏風たてゝ、御座をしく、御けいの御座のごとし、孫廂昆明池の障子の南の一間屏風をたつ、ともし火をたか燈臺にともす、出御のほどにはけつ、南の方はのこす、庭にとのもんれう幔をひきて、宮主御祓して、鏡かたな櫛などふせいの具足あり、節折の命婦竹を持て參りて、御たけよりはじめて、所々の寸法をとりていでゝ、宮主にきりあてがはせて、御はらへをつとむるなり、ことはてゝ祿を給ふ、

〔宮主秘事口傳〕卅日節折（謂之節折者、以篠量二五體之四肢一）

先主殿寮打幄（東南西）次左右有幔門、掃部寮裝御調度、御簾五寸許、以紙捻結上之、其内立御屏風（北、西北）其内敷小席二枚（東西行）其上供御半帖、東西立御屏風也、當于御所之間、南北行左右立之、其内（北方）敷薦爲命婦座、簀子敷同薦、爲女官等座、幄内敷半帖爲詔戸座、其西方敷薦一枚、爲中臣等座、次命婦參入、事具之後出御、次宮主參上御殿階下也、自西方幔門、引裾正笏參入、西方懸尻居沓、中臣官人參勤之時者、宮主東方可著也、次文人部（居住西京云云）進篠等、先一筋獻之、次宮主取傳女官、次女官取傳命婦、次命婦進主上、主上暫御身長返給命婦、次命婦授女官、次女官傳宮主、次宮主折懸之也、官人參入之時者、中臣可折懸也、（但宮主折懸例繁多也）次又獻二筋、自兩肩至御足合量之、次又二筋獻之、如先度、量左右御手自胸中至指末返給之、宮主折懸之、中臣令參入者、中臣可折懸也、但宮主折懸例繁多也、次又二筋獻之、

量自左右腰至御足、次量左右御膝至御足、宮主折懸之、如先度也、（已上五度量御體、一度）次獻鏡劒鈴等傳進、（裹紙一度進之）次返給之後、著庭座、讀祝詞、次讀畢又著階下、進篠如先也、是曉料也、次進鏡劒鈴等、如先、次宮主返給、次讀詔戸退出、

〔小右記〕天元五年六月廿九日己丑參內宿侍、今夜依例奉仕荒世和世御裝束、其儀如恒、

長和四年六月卅日戊寅、資平云、□□可有節折事乎、將來月〇（閏六月）晦歟、左相府命云、來月晦日可行歟者、答云、件事夏冬終月事也、初六月不可行、左相府命尤可然、引見前例、昌泰四年閏六月晦日有大祓朱雀門者、是外記日記、延木廿年閏六月無外記日記、昌泰記書出授資平、

〔百練抄十四（五）條〕仁治三年六月廿九日庚辰節折如例、雖天下穢中、任例不憚之、

〔吉續記〕文永四年六月廿九日節折也、藏人進士奉行、東庭立幔（於北）節折命婦座立屏風（妻戸腋也）此外無他事、

〔吉田家日次記〕永德三年六月卅日壬寅、戊下剋予（束帶不參內、節折近代略儀無極、）

先出御

次御贖物供之云々

次竹玉（荒世和世）九筋、節折命婦進之、

次竹玉九筋給宮主、□□□ノモトヨリ折之、（無實儀如形）

次又進之、又給之、如先度之後進之、

次又九筋給之、于時予申詔戸、其後退出、近代一向省略、宮主暦應以來當家非當職、兼遠宿禰相續之間、略之儀蒙々然也、然而命婦就示之、如形隨公事畢、近年兼遠宿禰子息等宮主之時、大略行嗣爲宮主代、參勤云云、不可然事也、

〔建內記〕嘉吉元年六月廿九日、節折如例、內匠寮役名法師名男沙汰進之、如例、雖穢中無相違被行之、

中宮節折

宮主不混神祇官令別家哉、

〔左經記〕長元元年六月卅日癸巳、宮夜折事如常、雖御服間唯供御贖之例所被行也、十二月卅日庚寅、入夜所司參入、任先例供奉節折御裝束、及深更宮主等參入、申行節折事、

〔長秋記〕大治五年六月廿九日己亥、自別當許送消息、○略○中於諸宮節折者、准御贖物例被行云々、

〔山槐記〕治承二年六月廿九日壬辰、無節折、○中略○閏月可行也、閏六月廿九日辛酉、中宮雖御懷妊節折如例云々、

〔吉記〕治承五年六月廿九日甲戌、中宮節折事、相尋權大進光綱之處、示送云、依長元元年例可被行之由雖有議定、保安二年中宮待賢門院雖獻撫物返給無節折幷六月被事云云、是依御重服也、仍今夜任彼吉例被停止之了、

壽永二年六月廿九日壬戌、今夜皇后宮節折、權大進定經奉行之、御單重給命婦云々、女房別行解除、是天仁仁安等例也、委細定經記錄也、

東宮節折

〔玉海〕建久二年六月廿九日丙午、宮御方節折事如例、少進兼時奉行云々、

〔吉續記〕文永五年六月廿九日、節折、藏人皇后宮權大進分配、與奪六位如常、

〔東宮年中行事六月〕つもごりのひあらよにごよの事

ぎやうじのくら人、みそようぞくをはるよしを申、つぎに御座にいでさせ給、このゆふべに、まづかみづかさくわむにんなをりて、御ぬのひだ御となぶらをけす、たゝしはしの方のところのひ、たよりにそたがひて、一かたけすべからず、つぎにぬひをのれう御ふくをたてまつる、よをりのみやうぶこれをとりて、御そむたいのはをはからひて、せんじにつけてたてまつりぬぐ、ことをはりてろくをたまふ、

簡折雜載

〔年中行事歌合〕三十五番　左持　節折十二月晦日　秀長朝臣

霜さやぐ竹のは風はあらたへのよをりの袖は猶や寒らん

左節折と申は、神祇官に十二月晦日御贖物奉なり、節折命婦と云物あり、あら妙にぎたへとて、二たび奉るにや、是は神代より始たる神服の心にて侍なり、

土御門內大臣○源道親

毎月御贖

〔新續古今和歌集三夏〕千五百番歌合に

みな月のけふくれ竹のよをりにぞ君が千とせの數はそへける　卅日

〔公事根源正月〕神祇官獻御贖物

是は毎月のつごもりにたてまつる、御麻をもおなじく供す、わが物は身のわざはひをはかふ物といふ心なり、人形を作て、身の代とする事おなじ心なるにや、古事記に仲哀天皇の豐浦の宮におはしまする時、はじめて御あが物を供ずとみえたり、又舊事本紀には、天富命麻をうゑ御ぬさをつくりて奉るよしをるせり、又毎月の御あが物は、後朱雀院の御時よりはじまるよし匡房卿記にみえたり、○又見師光年中行事

〔延喜式二四時祭〕毎月晦日御麻六月十二月不在此例

鐵人像四枚、安藝木綿一斤、麻一斤、庸布一丈四尺、鍬二口、酒米各二升、稻二束、饀堅魚海藻各一斤、腊二升、鹽一升、

右其日中臣率卜部進候延政門、亞著公服大祓版位、勅曰參來、稱唯昇就簀子敷、傳授內侍降候階下、內侍進奉訖授中臣、卽執退出、其中宮東宮奉儀同六月晦、

〔延喜式十三大舍人〕凡每晦日神祇官供御麻、舍人叫門、其詞曰、御麻事申給止宮內省輔姓名門候止申、

〔延喜式二四時祭〕每月晦日御贖中宮東宮准此、六月十二月不在此例、

金人像銀人像各卅二枚、東宮各八枚紫帛四尺、五色帛各五尺、絲一絇、調布一端、木綿麻黄蘗各一斤、米一斗、酒六升五合、鮭二隻、雜盛一籠、鹽二升、坏二口、瓮八口、東宮四口匏一柄、槲十把、食薦一枚、御輿形四具、插幣木各廿枚、

右御巫行事

〔西宮記正月〕晦日御巫奉御贖物自今月毎晦奉、御巫參上付女蔵人、進了返給、

〔延喜式臨時祭〕凡御贖物者、毎月十五日以前移於所司、廿七日受備供之、

〔延喜式三十宮内一〕凡神祇官年中所須、月別晦日御贖料、金人銀人各二百卅枚、鐵人廿八枚、缶蓋廿枚、各仰所司色別造備、隨請充之、中宮東宮並在此内、具見木工式、

〔延喜式三十四木工〕御贖料

金銀人像一枚長廣一尺、料鐵四兩、金薄銀薄各三枚、長功工一人、夫一人、廿枚、中功十八枚、短功十六枚、木人像長八寸、廣八分、其面飾以金銀、長功七十枚、中功六十枚、短功五十枚、

御輿形長九寸、廣四寸、高七寸、長功廿具、中功十八具、短功十五具、

鐵偶人卅六枚押金銀薄各十六枚、無飾四枚、木偶人廿四枚、御輿形四具、插幣木廿四枚、

右毎月晦日御贖料、中宮亦同、東宮押金銀薄鐵偶人各八枚、

〔延喜式十内藏〕凡毎月晦日御贖御輿形覆料、紫弃汁染絹四尺、行神祇官、中宮東宮並同、

晦日御贖中宮東宮幷同金人銀人十六枚、輿形四具、插幣木十六枚、以上木工寮、紫弃汁染絹四尺、輿轝料寮物、瓮四口、

官物

右毎月晦日御贖依件擬備進闕司、

〔延喜式二十民部三〕凡御贖幷中宮御贖及祭忌火庭火御竈神料雜物、神祇官所受、待彼官移文充之、春宮坊井齋院司所祭者、待中務省移充之、亦同、但陰陽寮所祭者、

〔日中行事〕代厄の御まつり、管領の陰陽師つとめむるなり、つごもりの御はらへ、大がいおなじ、藏人つかひをつとむ、

中宮毎月御贖

〔延喜式二四時祭〕毎月晦日御贖○中略中宮東宮准此、

鐵人像四枚、安藝木綿一斤、東宮十兩麻一斤、庸布一丈四尺、鍬二口、酒米各二升、稻二束、饅堅魚海藻各一斤、腊二斤、鹽一升、

右○中略中宮東宮奉儀同六月晦、

東宮毎月御贖

〔延喜式四十春宮三〕凡毎月神祇官進御麻御贖、亮若進一人、必用中臣氏、坊有介、持神麻、候西細殿南、東宮把笏著座、訖進戸卒、神祇官大中臣某麻呂候止申、令云召、進稱唯退出、立上聲召之、大中臣稱唯捧麻趍立、令云參來、稱唯昇自南階、供之、東宮取撫四度、訖退出、如御於北殿者、進迎引參入至中殿前進、更參入供、訖退出、

〔延喜式三臨時祭〕羅城御贖毎世一行、中宮准此、舊例宣旨命婦受取供之、訖退出授大中臣、受退出、訖御巫備御贖、候宣旨所、宣旨命婦率御巫參入供、訖退出、

羅城御贖

奴婢八人、馬八匹、鞍八具、絲帛卅匹、倭文八尺、常布八十常、木綿麻各八十斤、服八具、被八領、帷八條、幔頭八條、巾子八口、帶八條、履襪各八兩、鹿皮八張、鍬八十口、白米八石、酒八缶別受三斗、稻八百束、饅堅魚各八籠別受二四斤、雜腊八籠別受四六兩、海藻滑海藻各八籠別受四六斤、海松八籠、鹽八石、匏八柄、盞八十口、坩八口、槲八俵、薦八枚、食薦八枚、短帖一枚、簀一枚、

〔貞信公記〕承平二年十一月二日、羅城祭、可行去月廿三日、而所司稱用途不足不行、仍今日行、

六月祓

六月祓又名越祓トモ、夏祓トモ稱ス、上古ハ、六月十二月晦日、朝廷ニ於テ大祓ヲ行ハレ、又民

間ニ於テモ、一般ニ祓除ヲ行ヒシガ、後世十二月ノ祓除ハ遂ニ廢絶シテ、六月祓ノミ行ハルルコトヽナレリ、而シテ其祓ノ法ハ、菅或ハ茅ヲ以テ輪形ヲ作リテ之ヲ潜リ越ユルナリ、其輪ヲ茅ノ輪トモ菅貫トモ云フ、又水邊ニ出デヽ、麻木綿ナドヲ著ケタル五十籤ヲ立テヽ祓ヲ行フコトアリ、而シテ中世マデハ必シモ晦日ニハ限ラズ、六月中ハ何日ニテモ行ヒシモノヽ如シ、

名稱

〔八雲御抄三上時節〕六月祓　邪神をはらひなごむる祓ゆゑになでしと云也、河邊にいぐしたてゝおさのはなどにてする也、夕又夜する事なり、

〔八雲御抄三下人事〕なつばらへ　なごしのはらへ六月

〔下學集上時節〕名越之祓（ナゴシノハラヒ）六月盡也、夏秋交代之時候、而夏火秋金、火興金剋之災、故云名越之祓也、相剋、故越二夏之名一、擾二相剋之氣一、

〔書言字考節用集三神祇〕名越祓（ナゴシハラヒ）和儺（ナゴシ）荒和或作二夏越一

〔公事根源六月〕大祓　卅日

けふは家々に輪をこゆる事有

みな月のなごしのはらへする人はちとせのいのちのぶといふなり、此歌をとなふるとぞ申つたへ侍る、然るに法性寺關白記には、

思ふ事みなつきねとてゝおさの葉をきりにきりてもはらへつる哉、此うたを詠ずべしとみえたり、〇又見二年中行事歌合一

作法

〔後水尾院當時年中行事六月〕晦日、みくらみな月の輪を調進す、内侍所の刀自とり傳へて、臺盤所の臺盤の上におく、御引直衣めされて、朝餉の御座につかしめ給ふ、上臈一人例のひとへぎぬをいだきて御前にすゝむ、著座の後、かけ帶計をかく、中臈ひとへぎぬを著て、臺盤のもとにより、輪をとり、廂の葉さしたる竹をぬきて、廂の葉ばかりを輪にとりそへて、御前にもてまゐる、上臈とりて御座のうへにおく、廂のはを右の手にとらせまします、上らふ輪のはしをもたぐ、先左の御わしを踏入たまふ、次に御右、みな月のなごしのはらへする人は千とせの命のぶといふ也と云歌を御口のうちに唱たまふ、これらも俗にならふ事にや、されど後成恩寺關白の公事根元抄にも、此事かゝれたれば、いかさまむかしより、世俗に有ける事とみえたり、上らふもたげたる輪をおろしたてまつる、輪二つを越て御うしろざまに出おはします、此定に三反いらせまし〳〵て、御手にもたせ給たるあさの葉をおかる、上らふ輪にとりそへて撒す、中らふもとのごとく臺盤のうへにおく、次に入御、そののち臺盤のうへなる輪を女孺とりて御所にもて參る、女御なをもれば、御三間にて典侍いれまゐらす、其外の女中は御えもいる、入人もいるゝ人もひとへぎぬを著す、服者月のさはりの人なをはいらず、次第に入はてゝ後、輪を東のすのこにさし出して簾皆たる、六位藏人便宜の所より參りて輪のもとに候、内々のをとこ參、次第にすゝみ出藏人輪をもたげている、事をはりて藏人おりぞく、輪をば又とり入て下々へくだす、采女女官女孺御物し、局局の官にいたるまでみな入をはりぬ、御三間のたれたる簾ゐけ渡せば、御引なほしめさしまして御座につかしめたまふ、女中著座、上臈一列、御座の左方（西上南面）中臈一列に御簾にむかふ（南上西面）例のごとし、陪膳手長座を起て、先御盃、次に初獻（白瓜、茄子、）を供す、御さかづきまゐりて女中にとほる、次に二獻（唐瓜）を供して已後、男をめさる、公卿はすのこの疊につく、殿上人は公卿の座のうしろに候す、次に藏人瓜をもて出て、各一臺をたぶ、公卿は座ながら、殿上人は公卿の座の末にて、一人づゝ召出してたぶ、銚子出て御はし下る、おの〳〵これに應ず、此間藏人かはらけの物を公卿の座のまへにおく、御盃まゐりて、女中にとほる、下臈の酌常のごとし、最末の御しも給ひて後、いよ銚子と盃とを持て出、藏人なげしのもとまでずゝみよりて、これをとりて男にとほす、是又公卿は座ながら、殿上人は召出也、事はてゝ、公卿座をくだりて平伏、次に入御、女中起座、次に男退下、

〔正徳年中行事六月〕晦日　茅の輪　御藏小舎人山科民部大丞正六位上是を調進する也、茅がやにて作りたる大なる輪なり、天子これをくゞり通らせ給ふ也、御茅紙圖書寮より

〔友俊記〕六月晦日　暮がたになごし也、略　中くれつかたに茅の輪、ふとさ手に握るほどにして、なゝたつに折て、大方三尺ばかりの輪になる、御藏小舎人、山科の家より、毎年てふしんす、主上をはじめ女中、大麻さいのはをもちて、三度くゞりたまふ、歌、

みなつきのなごしのはらへする人はちとせのいのちのぶとこそきけ、右のうた三べんとなへてくゞる事なり、略　中輪をくゞるやう、右の手に、麻の葉をながさ一尺ばかりに二三本、紙につつみもちて、左のあしよりいり、右の足よりいづる、以上三度也とぞ、

〔桃華藥葉〕一可覺悟條々隨所見之

月障女房、六月祓、解解繩撫大麻無憚出菅貫者不存之、以衣裳代之、見元暦二年玉葉、天下觸穢時六月祓不憚之、穢氣雖觸禁中如神祇官御贖物自陣外供之有先例、

〔世俗淺深秘抄上〕六月晦日祓、不憚輕服除服以前猶有其例也、

〔日本紀略三村上〕天暦元年六月廿七日庚辰、太上皇○朱雀松崎川原便御陽成院五瀬院行六月祓、晩頭還院、

〔小右記〕寛弘二年六月廿八日甲辰、昨日左衛門府六月祓問番長二人、爲權佐允高朝臣致無禮仍彈決非違、

〔長秋記〕天永四年○永久元年六月十二日、上皇○白河御幸大炊殿、三條殿有沙事御祈、次御禊、陪膳基隆、陰陽師泰長使泰近引立神馬、宇筥如置、高名駿馬、事了乃還御仍渡御也、○中略

〔玉海〕元暦二年六月卅日辛巳、六月祓如例、但陪膳家司等、依故障不參、仍以盛房爲陪膳、辛爾之間、布衣不可例設、經泰可衣冠而同布衣不可然、先余○藤原方、余女房姫君居一所、同時祓之、余依病不洗

六月祓例

手、女房又有月障、然而解繩撫大麻無障、於菅貫者、有月障之人不及之、以衣裳代之、次大將方、中將方各召居所各別、陰陽師主稅介晴光也、

〔業資王記〕正治元年六月卅日庚寅、宮御方御祓也、陪膳前左馬權頭保季朝臣、四位殿上人、役送判官代有信六位

〔玉海〕正治二年六月三十日甲寅、今日女院御方六月祓、如恒例、院中之儀、陪膳長經朝臣、役送親房、陰陽師晴光朝臣也、晦御祓使宗行、昨今院司著薄色指貫衣冠參入、雖御祈始以前、恒例之事不可默止之故、被行件御祓等、殿富門院六月廿八日院號之例如此云々、資實所申也、

〔明月記〕建永元年六月廿九日晦、巳時參院、番今日御川崎家、女房料俄催出車、實宣有通朝臣例舍利講了出御、退出休息、昏私祓了、乘燭之程歸參、小時還御之後有御祓、親定朝臣陪膳、經時役送、其後少年等菅貫雜戲之後、出御馬場殿、過夜半入御名謁、

〔百練抄十六後深草〕寶治元年六月卅日、院六月祓也、奉仕御裝束、陪膳頭中將雅家朝臣、役送經俊、御隨身五人、立明役之、陰陽師雅樂頭在清朝臣奉仕御祓、

〔花園院御記〕元亨元年六月卅日壬申、今夜六月祓、資明奉行、亥刻著衣冠出寢殿、次第如例、從三位藤子仝、菅貫、舊例四位院司歟、然而近代如此、三年六月晦日庚寅、今夜六月祓、如例於寢殿有此事、女房褰簾、簾隆蔭朝臣爲陪膳、長光益送持參菅貫也、次陪膳垂庇御簾、先々多役送爲此役、而建長三年隆行爲陪膳之時、依仰如此云々、隆蔭所講也、從三位藤子奉仕菅貫如例、

〔建内記〕嘉吉元年六月廿九日、今夜六月祓事如例、穢中不審之間、相尋在方卿之處、無子細云云、仍菅貫等如例調遣之處、相副祓返渡之、越輪令祓之儀如常、表祝著耳、

〔薩戒記〕應永卅三年六月卅日壬辰、依當番參院、秉燭之後、有六月祓事、但上皇○後小松依御不例氣不出御、垂寢殿南面御簾、階間左右供掌燈、立八脚於前庭、陰陽頭在貞朝臣著座、奉仕御祓、藏人左少辨資親降自南階、相跪庭中取御祓、歸昇進階前、簾中女房取之獻之云々、此間陰陽師退下、次廳官於中門

廊南切妻獻御輪資親取之自同間進入事了被返出資親取之於本所返賜廳宮此後內內於御前男女入輪抑出御之時有御贖物四位別當勤陪膳於今日者臨期儀也吉田大納言家俊著布衣可爲內儀之由依仰不著衣冠奉行之亞相云今日儀先例不詳去去年被用此儀件時奉行日野新中納言盛光也不出御之時儀、我不勘得者、

〔御湯殿の上の日記〕文明九年六月廿九日、御湯する、今日宵の御輪西向にてわり、御所々々は御湯殿の上にて御越あり、

〔二水記〕永正十四年六月卅日、於議定所、主上女中男等入輪如恒、三獻參、

大永八年六月卅日、入夜參內輪御祓如常、男衆下官範久朝臣季遠憑以緒等許也、不候御前於御湯殿前緣賜天酒了、此事如何、先帝御宇予每年令參候了、悉以候御前御通也、御簾一間被上之了、如此事相違舊儀不可然歟、尤不審也、

〔忠富王記〕明應五年六月、輪事、乙穢之間本官輪掛酌仍陰陽家輪不苦云々、仍有宣卿ニ申合、輪代十匹遣之、召寄越者也、

〔禁裏番衆所日記〕寶永八年六月廿九日丁亥、入夜出御于臺盤所、有名越祓、

〔大江俊矩記〕享和元年六月廿九日甲戌、茅輪御塞之節、議奏被示如例、朝餉御座前小燈臺一基、臺盤所臺盤南北へ燈臺二基等、以上三基設之、即擧燭、議奏鷲尾前亞相前番有點檢、〇中略從此時渡廊ニ金燭一基出、非藏人沙汰

一亥刻前有御催、亥半刻計有召、參入人々、帥大納言葉室頼熙新中納言山科忠言二位中將久我通明通知朝臣、大江俊幹予等也、先俊幹參進南廂直置茅輪帥亞相以下次第參進入輪、通知朝臣退入之後、俊幹退來、予參進輪許、西方、即參議座前也、俊幹更進取麻入輪、予上下輪三度如例了俊幹退入、予亦退入、俊幹更進輪許、初予參進、數居掛膝行、退時亦准之、是極臈、申合進退所予參進同樣也、但有所役進退二者、件數居不懸膝、退先右手取麻、左手密々取裾端而取副麻、以左右手、如取麻此間俊幹上輪、予膝行入輪中、俊幹下、輪、予膝退出輪外、如此三度了置麻於本所、退入、俊幹返置輪於初所退入、件輪在參議座上也、

〔空穗物語 祭の使〕六月の比ほひにもなりぬ、〇中略兵部卿のみこも、おぼんはらへしにおなじきかはら川〇桂にいで給へるをよろこびて、おぼんむかへして、おなじ御まへにつきたまひぬ、かゝるほどに、春宮より藏人を御つかひにて、かくきこえ給へり、

うちはへてわれにつれなき君なればけふのみそぎもかひなかるらん

あて宮

あふ事のなごしのはらへ、ゝつる哉おほぬさならぬ人をみしとて、げふのみそぎは、神もみゝとゞめなんと聞えて、御使にをんなのよそひ、ひとくだり給、〇中略きの國より、

常よりもなごしの月のわびしきはいむてふことのなきにぞ有ける、と聞え給へるを、君たち見給ふを、侍從の君とりてみて、はしにかくかきつけて、あて宮に奉り給、

人はいさなごしの月だたのまれしせゞのみそぎにわするゝやとて、たてまつり給へと、たれだれ聞え給はす、

〔空穗物語 樓の上〕六月あつけれど、ろうのうへは、山たかき木どもの風いみじうすゞし、〇中略晦日に御はらへし給ひに、二所ながら御せんいかめしうて、かはらにいで給へり、

〔山槐記〕治承二年六月廿九日壬辰、無節折、諸家又無六月祓閏月可行也、在家或今夜祓云々、先例不同云々、閏有六月年々例、

大同元年閏在六月　貞觀元年同　延喜元年同　同廿年同　長和四年同　長元七年同

永保三年同　久安四年同

大同元年以後、迄于久安四年、閏在六月之歲大略如此歟、延喜元長和四長元七永保三久安四等之

閏月例

年、皆以閏月被所行之云々、然則八ヶ度之中、已於五ヶ度者、以閏月被行之歟、閏六月廿九日辛酉、今夜行六月祓、

〔薩戒記〕應永卅二年六月卅日戊辰、前々六月祓無之、來月可有之也、閏六月廿九日丁酉、六月祓如常、○中略

〔重房宿禰記〕寛文十二年閏六月卅日癸酉、六月祓、閏月之時者、用閏月云々、禁中名越祓、被用今夜云云、

六月祓停止

〔長秋記〕大治五年六月廿九日己亥、自別當許送消息院、○羽　六月祓可有否、件旨依不分明也、若天永度事記置哉、然者可註送者、於諸宮夜折者、准御贖物例被行云々、予答云、於夜折其由所見也、於御祓事、明日見日記等可令申者、卅日庚子、見寛德、延久、天永等記、諒闇年六月祓事無所見、於凡人不修之由見兩相府御日記、仍以此旨示別當許畢、六月祓停止、前例依無所見也、

神社六月祓

〔皇大神宮年中行事六月〕晦日輪越神事次第、各衣冠著、先一鳥居前河端岸上、以南爲上、西向列居例所、瀧祭西淵端、日陰相待列參、南上西向著座、于時宮家司布衲○衲一作麻木綿付、南方河端立置、於彼本取持之、御祓勤仕、散供米一升、木綿少、自長官下行、于時一同手兩端、其後件麻家司捧持、自一座奉振懸之後、於南方輪越、件輪出納一脚作進、自長官家司輪人形奉持北向候、于時一座皆不穿進寄、人形取持、家司向三度越、六月乃名越乃祓スル人波千年乃命延登古曾幾氣、度別申、其後人形唾懸、家司返渡禮、本座歸著、各同前越畢、出納內人兄部件輪給、於瀧祭松下、子良母良物忌父等越後各退出、若遲參之禰宜幷服氣禰宜直垂在之時、以出納送進於彼宿館、迄家子越之例也、但以家司沙汰爲禮、殊於上首者可爲家司歟、其後於宮廳宿館之庭、家子○子一本作司侍越之、出納勤之、其後於傍中間以下越之、其後出納長官里宿持參、女中公達以下幷家來僕從等越、但於女中公達者、家司越之、當月有閏之時者、件神事後晦日也、又洪水之時、於一鳥居前越之例也、今日神拜任心、

〔神祇提要八〕外宮年中御神事

六月晦日輪越

〔氏經卿神事記〕永享八年六月卅日、輪越神事、禰宜、子良、物忌、副嫗等越畢後、以出納內人被送館、服氣之館著直垂越、後家子權任經貞、經澄、氏生、氏綱、侍清晨等越、

文安六年六月廿九日、輪越神事、無橋之間、於一鳥居前可被越之處、俄祓所邊懸橋於例所越之、五、予、八、九、十、

文明十七年六月卅日、輪越神事、予、二、三、五、六、七、八、九、十、日照て雖河淺足立惡き間例所ニ行事不叶、仍於一鳥居之西越、次第如常、四守則月水女合、仍於館被越、次於予館家子被越家司役、一獻二瓶瓜輪切、其後里ニ出シ、女中以下家司役、下樣ハ出納、

〔寺社元要記八賀茂〕神事次第　年中行事

六月晦日、六月祓、御戸開時剋夜陰也、神供自一方調進之、裝束衣冠、馬場之座饗膳以下有之、

〔日次紀事六月〕晦日

上賀茂社　今夜上賀茂神事有音樂則修祓、地下人各脫出茅輪、又以枯麻條作木偶人撒之河水、下鴨社　今夜酉戌刻下鴨社司出河邊而修祓、

祇園執事　獻名越祓於禁裏、

貴布禰社　今日酉刻貴布禰社中於輪市明神之前修名越祓、

〔祭祀或問〕下鴨六月晦日名越神事　與伊勢內宮輪越神事大同小異、此亦神拜任心歟、皆貫輪事、各於私第修之、先年ハ於御手洗川邊雖勤之、前後ノ爭有之而及口論故、近年相止而如此內內ニテ修之畢、神拜ハ各勤之、元祿年中予○吉見幸和在京之日、所親見次第如左、

六月晦日申半刻、社家衣冠各出仕、本社及攝社ヱ獻御膳、西本社陽神四位五人禰宜方勤之三位一人東本社陰神四位五人禰宜方勤之三位一人計四位五位二人計各手繰供之上首神拜祝詞拍手御膳撤畢攝社神供神拜祝詞拍手鉾鉾奉仕人勤之撤之畢、

同日酉刻二三分過而、先ヅ挑灯二人上下著二人黄衣白杖四人次社家中各衣冠禰宜祝人數如右御手洗川南方列座、荒薦二行敷之、圓座其前設四足赤机一脚宛禰宜ハ北方祝ハ南方相向著座ス、篝火松明挑灯等有之、次衣冠社家一人幸浄衣著二三人御手洗川之井上神社ヱ供御膳神酒畢而此亦著圓座次各拍手二、次中臣祓各心中唱之後位袖之談也畢各拍手二、此時白張著二人下御手洗川所兼設四十九本串徑三尺餘ニ丸ク刻立長三尺五寸計女竹付木綿四手立川中ヲ悉ク抜テ流捨ツ、右畢而座揖咎揖退出シ、直ニ又本社ニ進拍手拜計、攝社社社ヱモ各預ノ社家拍手拜アリ、自夫川合社ヱモ各參詣神拜拍手畢テ各退下歸宅、

〔住吉社諸神事次第〕六月晦日荒和御祓、早旦御供備進、總官權官布衣氏人同神官衣冠列立南門如常、御供奉昇立之後參一御前兩官著座幣殿未作之間數之庭上數之縄氏人庭數之縄神官等參御殿御供備進、祝言禰宜申也、其後神寶等奉取出、二三四御供備進、畢五所御料、總官以下著座如例、御供畢退出、兩官連入住江殿、

於住江殿兩官東帯氏人布衣著也、巳刻申案内神人二人參也、先氏人等著座釣殿中曾利南總官以下參也著座下客殿前庭東上同東在廳著座、神官等下客殿東參候用床子權少祝酒面前杯入也、後祝言禰宜申也、次酒一獻後賦管取割天次第返給也、次立座列立下客殿東手水進也、自總官至氏人冠木綿進也、氏人役次參御前樂所發亂聲兩官幣殿北脇連候用床子神官等同南脇氏人庭上用床子神輿一基神馬奉寄禰宜參御前申再拜、御手於御奏雲樂自北門出西行自猪鼻南折經曾利橋出濱鳥居西邊各乘馬天行列、一至開口御宿院頓宮北脇社内氏人候設床子南脇神官等神馬神輿奉寄禰宜參申再拜、其後御輿奉昇入權少祝等役也神寶等取置也、次各著座北假屋橫座總官氏人東西二行東上著座、酒肴南座役、陪膳同座官役、陪膳著淨衣二獻之後自南座酒一瓶子肴進也、肴兼居置也、兩方假屋賦管役、陪膳面面取也、四取割二返給也、神官行御祓摺粉於母湯進也、巫女馬長田樂渡御前南行猿樂渡テ遊也、一之後退出酒一獻奉幣總官御參御前荒薦敷也、禰宜取次進幣總官御拜四度返給禰宜、宣命被讀上之事畢歸著假屋猿樂又參也遊也、酒肴給也、神官等參北假屋酒肴一獻笛吹拍子取東著座酒肴行也、其後連ニムトウ舞也、自神宮次舞樂左馬右樂萬歳樂甘州陵王延喜樂納曾利奉幣以後酒三獻近年四獻歟納曾利以後各參御前總官以下北脇神官南脇候也、東遊馬長有緣田樂口有也、次奉取出神寶御馬奉寄禰宜申再拜還御本宮自平橋西下馬於平橋北有御祓總官以下同東候數北上西向床子御祓畢自西門入御、經第三四御殿交自南中門入御、奉寄神輿神馬禰宜申再拜之後、神寶等奉納、次東遊馬長田樂等遊也、次著座上客殿橫座總官北座權官氏人下氏人等南座氏人下氏人等下橫座神官總官座後勘所司勾當以下南北二行著座摺粉於母湯等進、次酒一獻饗居也、立著、次一獻陪膳權少祝二獻畢撤也、各退出、

〔華實年浪草六月〕上難波御祓　攝州大坂東成郡高津宮在生玉北、中略社司出木津川修禊、座摩御祓　社說曰、攝州西成郡總社座摩大神宮、中略例祭六月廿二日夏越大祓神輿御旅所渡祭禮當日、本居市民思々ノ遷物ヲ出ス、社司西橫堀ノ川上ニ床ヲ構ヘ、氏子ノ形代ヲ流シ、禊ヲ修スト云々、

天滿御祓　當社在攝州大坂西成郡天滿、中略例祭六月廿五日、遷物車樂等水陸共渡畢神輿出于戎島之御旅所、行還川舟數萬艘灯群集、遊船亦無比類、要津第一之神事也、世云天滿祭是也

〔東都歳事記二〕六月晦日　夏越の祓閏月あれば閏月に行ふ　橋場神明宮社前の川邊に於て執行あり、諸人群集す、亥の半刻に終る、但

嶋住吉明神社　芝神明宮西上刻　神田明神社戌上刻　新川大神宮　鳥越明神社　五條天神宮下谷

飯田町世繼稻荷社（西刻）上　其外諸神社にあり、神前祝詞を奏し、神樂興行あり、神事終りて、參詣の輩茅の輪を越さしむ、河邊に隔りたる所には、盥に水をもりて身曾貴川に比するより、此日庶人紙を以て、衣類の形に切て撫ものとし、川へ投ず、

〔江戸名所圖會二〕住吉明神社　佃島にあり、（中略）毎歳六月晦日名越祓修行あり、

〔神祇提要八〕鹿島大神宮年中祭禮之次第

六月晦　名越之祓祭

〔鹿島志上〕名越祓　六月晦日の夕、茅もて龍蛇の形を輪につくり、大宮司茅の横刀を持、東に向ひたちて、かの茅の輪を、左足より踏込て、起ること三度、その時中臣の太祝詞事を宣なり、かねて座には荒薦を敷、鹽をちらせり、昔は諸神官内海に出て祓しけりとなん、今は大宮司家にてこの式をなし、御手洗川に出てみそぎせり、

〔氣多神社年中行事六月〕晦日

先當日辰ノ刻ニ、海濱御祓所ノ飾スル、當月ノ奉行裁許人夫役、濱ノ東陸ノ上ニハ神輿奉置所也、此ノ左右ニ茅輪二輪立ル、竹串四本ヲ以テ、輪ノ左右二本宛插立ル、此串ノ上ニ錦笠懸置、海濱ニ五色幣、青東黄中赤南白西黒北ニ立ル、五行ノ幣ノ北、南ノ海濱ニ、白和幣六十六本ヲ兩手ニ分、三十三本宛立置、

神官進神拜祈念、神輿海濱へ御幸、大門ヨリ行列ス、先先驅戈ヲ持、鼻赤熊覆著ク、次獅子、是供汚穢非常神事警固也、宮仕大鼓叩、平敷鼓叩、神子座音樂ス、神八幡矛弓矢持、中良大刀幣持、大床羽咋方鹿島方左右行列ナリ、神輿後ニ社僧、海濱ニ著到ス、三社ノ神輿ハ、東濱西向ニ舁輿丁奉昇テ安置、茅輪ノ本ヨリ羽咋方鹿島方ノ神官左右ニ列ス、大床中良ハ先乍立一揖著座、一揖二拜、護身神拍手一拜、名越祓ヨム、神人以下乍立列シテ居ル、次勾當海濱ニ進、五行幣ノ前ニテ乍立著座二拜拍手、齋庭ノ清祓ス、身曾岐也、誦畢テ拍手座揖沓揖本座ニ退、于時大行事中良ノ次並羽咋方鹿島方ノ中分ニ進、東向ニ一拜シテ退、于時大床中良祓畢、麻袋ヨリ手草ヲ取出シ、左右ノ手ニ持テ一拜、呪文云ク、六月ノ名越ノ祓スル人ハ千年ノ命ノブト云ナリ、又云、思フ事ミナツキチトテ麻ノ葉ヲ切ニキリテモ祓ツルカナ、トヨミテ、麻ヲ右ノ手ニ持テ身體ノ左右三反祓シテ、麻ヲ座前ニ棄テ一拜、護身神拍手座揖沓揖退、羽咋方ノ神官、南ノ茅輪ニ向テ、錦笠ヲ取持呪文錦笠ヲ冠リ輪ヲ潜ル、神官次第同ジ、鹿島方ノ神官、北ノ茅輪ニ向テ、錦笠ヲ冠リ潜ル、次第同ジ、神輿西向ノ座ヲ南ニ向、又東ニ向、又北ニ向テ神列シテ、如先還御、

〔日前宮文書〕大祓引付

上白冠職成事　大祓

寛正四年ミヅノトヒツジ卯月十六日より、新秀上白冠職成の御宮ごもりの事、廿九日に御祓をとゝのへ、一前三日心ざやうじんの事、卯月十四日にたゞのひうちにてゆをわかし、かみをあらひぎやうずいをす、おなじくくひ物を別火にす、又同十六日に、前荷藏（ゼンサイクラ）のぎやうずひの火きりにて火をきりて、きよきさかなにてゆをわかし、かみをあらひぎやうずひをす、これよりして身をきよくなすなり、やがてきよき物をきる、たてゑぼしをきて出たちて、御宮にこもる事二七日の間、火けをくはず、二七日といふに七せ祓あり、

上白冠職事　大祓之時

一旦朝に御冠時、あたらしきときぐし二、びんぐし一、おなじきかうがい、たけのつがみ五まいしはらなさのをしき二まい、あたらしき京のまちがたな一、こしこがたなともがん一羽、もしはかもてのこいの布一たん、てつおけ一、おなじきひしやく一、たらい一、御かふりめす、在所東のとゝの内、さたの間も、さよきまくをひくひとも、大夫とのかみをけづりてもとゆ

ひを取、と丶の御はしらにあて丶いやす、この時雁のちいる、やがて人母大夫殿御かふりをめさせらる、後にめしなをす時の在所、いみぞのなくをひく、いしやうきる在處おなじ、みいれのはかなにうゑのきぬなり、ゑやくをもつ、まづ社參申、そのゝち白酒殿のちやうへつく、酒二こんおう、そのゝち白冠のとのし兩人座しきをたつ、兩社中言に御へいあり、

一御へいのとりづき、兩はたい兩社中言ともにこれをとりつく、ひざごも兩はじこれをしく、やがて御はらいにすへに出、御さかき、次御ほこ、いづれもすゑ座より御ともする、まづ神人、次中らう、次のとのしの人母大夫ぞの、次上白冠、

一七瀨祓の次第、一番あらうち、在處ごとにひざごもをしく、六人のうち人のやくなり、二番めゑも月ののゝゑとのゝ祓所、三番ねぎがいけ、四番のうかは、五番ゑはすののゝゑ殿、六番めなうみがたに、七番めしはいらの祓、こゝにてとまる、又酒殿のちやうにて、さけ二こんあり、さて退出、

一七瀨はらいに入べき物の事、已上七てう、みてぐらのれう、內人うけ取、七所のさんない、已上七斗、ますは國の本斗なり、さかき一本、うち人取、ゑは一かはらけ、なうみかたにゝて入也、

一のうかふにて入物、ぬの一たん、かのかは一まい、こむしろ一まい、あらごも一まひ、これはのうかふにてのしき物、やくのあずこれをしく、にごり酒一へひし、これは七所にて入、まぐさのいね五は、すへ二そく、もしはもみ五升づゝ、たはら二にこれを入合、もみ一斗、おけ七、ひしやく七、おしき七、そくおけにはゑとぎさむまひを入るなり、大刀一ふり、祓料足、ひとも大夫殿かいれう二貫文とらるゝうちにて、たちはこなたへ返る也、弓一ちやう、やこし、おなじきゑびら、代にて二百文にてこれをうく、弓は本あひみ、ゑびらは新あひみ、やはおうちびとよりして、一す

おづゝとつく、所まで也、かまくは、代百文にてうく、うち人これをとる、七せはらいに入物の具足の事、六人のうち人のあずうけとりて、具足持の夫にこなたよりいだす、

一神官中の酒殿のちやうにての、さかなうを三しゆ、ゑやうじん一ゑゆ、神人のさかなうを二しゆ、しやうじん一しゆ、りんじのひきざかなはこなたはうだい、五升たる二荷、にごり酒そん一、近年さだむる所のきやうせんの代になして、せに四貫文、但いまは六貫文、そう中へ出す、このうちわさ座の分に二貫六百六十五文、ゆふ座分に一貫三百卅二文、これをのこす、のとのしはらいの主人のはかは、ゆふ座はあたらず、

一のうかふへのさつゑやう、餅九すへ廿一せん、此うちひとも大夫殿一せん、のとのし一せん、中方へ七せん、わず方へ十二せん、上ゑゆ二人のさかなは、うちのなます、ゑやうじん一しゆ、中らう神人のさかな、ゑやうじんなます二ゑゆ、たる一か、白酒これあり、かり屋の次第、北南へうつ、ざしきのきた座もて上とす、白冠ひだり座東なり、のとのしの下人の方へさかなます二せん、にごり酒これあり、

一火おろしの次第の事　座しき左座は白冠、右座はのとのし、こなたはすこし上る、酒一こんさかなとも四種、そのゝちにい所にて、火おろしのとはらひあり、祓に入物の次第、さんまひれうに白米一升、ひしやくのさけ、其後に又ざしきになをる、又四種にて酒三こんあり、三こんめには、はじ酒殿を座しきへよぶ、三こんめにこなたの一そくゑやくに立に物一あり、のとのしの下人の方へ、ゑやうじんなますうちみに物四種あり、火おろしのはらひ料足一貫文、さやうせんの代一貫文、かいれう二貫文、はじさかなのゝ四百文つゝ一貫二百文、

一祓のあしたゝ物の具足うけ取ために、六人のうち人きたる三種の御さいにて、すき斗一升もりの飯あり、二種さかなにてにごり酒をもる、其時さかきをもちてくる、

定

一大祓七瀬解除之時、爲神木御共上者隨兵之事、自今以後、一向可停止之由、衆中一同契約之上者、向後固守此法、敢以各不可令違反者也、仍定置處之狀如件、

正平十年乙未三月十五日　人母賴有　上白冠右保　人母氏秀　上白冠秀種

〔八幡宮本紀四〕當宮〇宇佐宮の祭禮神事は、他の社にかはり、禁裏の禮法にならひて是を執行せり、〇中略又御祓大會とて、六月晦日に祓執行の事有り、中比絶たりしが、天文年中再興す、其後又中絶せしを、延寶八年六月晦日に重て興行して、朝廷國家の安全を祈奉る、〇中略むかし此水無月の御祓には、一里北なる猫田と云所まで御幸あり、今も其跡殘れり、近代衰微の時より、猫田の御幸は絶て、本社の四五町ばかり北に假殿ありて、六月晦日に此所まで御幸あり、七月朔日還御なる、其所を御祓場と云、

臣庶六月祓

〔執政所抄下六月〕晦日御祓事

御禊身

八足供物　居茅輪、立小盤、供瓜茄子桃、　麻布綿　折敷供物　茅人形　解繩　散米　居坏

折敷一枚居之、在栗栖野高坏、

菅拔三所御料、各置折敷、居高坏三所御料同前、

已上旬出納爲例勤仕之、

陪膳四位　役家司職事

已上衣冠

御隨身丘明冠褐

件等役人所司催之

役下家司　衣冠　出納

進菅拔人形所々

藏人所　御臺盤所副別御料姫御前御臺盤所同之、　侍所　政所　御隨身所　君達

已上旬出納爲例備進之、

三所御祓事

藏人所　侍所　所司　勤催之、政所召仕丁

〔蜻蛉日記中之上〕六月になりぬ、〇中略かくながらや廿よ日になりぬる、〇中略心ものべがてら、はなづらのかたにはらへもせんとおもひて、からさきへとてものす、

〔永左記〕承曆五年〇永保元年六月卅日、今日祓事、依輕服間可行否之由、遣問有行道言等許之處、各答云、何憚候哉者、仍如例修之了、故殿延久六年六月晦日、依服間不被修祓之由所被注也、是依道平朝臣申云々、然而今日依陰陽師等申予修之、

〔玉海〕承安三年六月卅日辛卯、今日六月祓如恒、陪膳季長朝臣、衣冠俊行朝臣、同陰陽師漏刻博士安倍經明、御贖物二前、輪二具進之、女房余於一所有此事、有許六月祓如恒、陪膳光經朝臣、役送良盛、共衣冠也、御贖物三荷儲、予女房姫君、是依同宿也、侍從於女院御所有此事、是例事也、先先服薨之時憚之、而今夜依時晴申不憚之、

〔山槐記〕安元二年六月卅日癸卯、六月祓如恒、陪膳光經朝臣、役送國行、共衣冠也、陰陽常明至于昨日雖薨、當日不服者不可憚云々、仍不憚之、又輕服之人都可忌之云云、菅貫之時向南役人向北例也、

〔玉海〕治承三年六月廿九日丙辰、六月祓如常、陰陽師晴綱、時晴子陪膳行頼、役送信光、已上衣冠
壽永元年六月廿九日戊辰、抑余依重喪無六月祓、但女房姫君等有之、陪膳家司有障、仍大將少將等
方各有之、
元暦元年六月廿九日丙戌、六月祓如常、陪膳季長朝臣、役送國行、其衣冠也、陰陽師資成、服薗之人、祓
之時自不撫之、然而菅貫無憚云々、二年六月卅日辛巳、六月祓如例、但陪膳家司等依故障不參、仍
以盛房爲陪膳、卒爾之間、布衣不可例設、經泰可衣冠、而同布衣不可然、先余方、余女房姫君居一所、同
時祓之、余依病不洗手、女房又有月障、然而解解繩撫大麻無障於菅貫者有月障之人不及之、以衣裳
代之、次大將方、次中將方、各召居所各別、陰陽師資成、服薗之人、祓
文治二年六月廿九日乙亥、有六月祓事、余女房姫君等居一所、陪膳伊豫守季長朝臣、役供職事、男共等
也、依雨陰陽師在階隱、間出、事訖大將中將等方、各別有此事、四年六月卅日甲午、六月祓如例、余女
房姫君等居同所、寢殿南面陪膳光輔朝臣、就簾前進贖物、女房取之居前、陰陽師大舍人頭業俊朝臣、祓了
撫大麻、其後進菅貫了、輪三反各其事了返給了、
建久二年六月廿九日丙午、此夜六月祓如例、於寢殿南面有此事、陪膳光重朝臣、陰陽師宣平、奉行信
光、女房於簾中傳取贖物居余前、如例撫大麻了之後進菅貫、事了返給、女房候內裏、於西面車寄方有
此事、陪膳季長朝臣云々〇中略一條六月祓又如恒云云、今日雖凶會日、大將神事
祈早畢、加之式日事强不撰日之上、於六月祓者必可修之事也、先年故泰親朝臣云、夏者火也、秋者金
也、火能剋金、仍夏秋氣節相改之時、天氣相亂、人氣相反、人ハ成病、世ハ招災、因茲金火相剋之時、故修
解謝之法云云、是故人之傳無辨知之人之由所談說也、以之思之、萬人必可修歟、女房方神事祈未始
云云、然而存此理之故、夫婦之間各別之儀、不可然之上、女者三從之禮、陰德從陽、更不可停止之由示
大將之許了、何樣夫婦同居、更無各別之儀、彌勿論事歟、後聞大理成不審、大將答此旨云云、

〔明月記〕建久七年六月廿九日、荒和祓、不堪著如羅衣之間以衣合菅貫、今夜陰陽師資元門生云、姫者不菅
貫也、俗說云、六度管貫之如何、此各大謬說也、只如例祓雖向贖物不立之由稱之、仍今夜用此說云云、
〔三長記〕建永元年六月廿九日己卯、六月祓如例、若君御祓事、昨日申入道殿曰、於重輕服人者憚之而
依七歳以前無御服可被行御祓被仰云、可依先例、且又可問陰陽師、依問在宣朝臣之處、申云、無御著
服之儀可有御祓歟、但於先例者不分明、先例不勘得、以此旨可申沙汰之由仰、遣以經了、被行御祓了、
此事猶可勘先規、
〔園太暦〕觀應三年六月卅日、今日六月祓也、家中體雖不可說、憖如形也、催沙汰、就中陰陽師不堪貧弊
故障之間、遣輪於里第、令修祓、又進大麻也、戌刻出客坐、予如形狩衣直衣體也、女房又無之、仍光熙一
人布衣持參前物、實夏同著此處、其儀如例、但書一丞卽懸輪了、下家司宣直代ハ青侍也、
文和二年六月廿九日、今日六月祓、不及沙汰了、大麻幷輪於臥内修其儀了、　五年六月廿九日、今日六月祓出坐
丹州料足是又故障、仍不及沙汰了、大麻幷輪於臥内修其儀了、　五年六月廿九日、今日六月祓出坐
猶不合期之間、於常居密々管貫、不可然儀也、莫言之、
延文二年六月卅日、六月祓事、不及出坐、如形修之、菅貫許也、依抱清庵事、可有輕服者、談合泰尚朝
臣、雖暇日數中、除服輕服者菅貫了、公定卿可修哉否條、談泰尚朝臣、難計申、御沙汰了、

六月祓事

一重服人憚之條流例也
一輕服人除服以後雖爲日數中不憚之條、被注下之趣無相違、
一承德二年、大閤〇藤原師實幷關白殿〇藤原通師六月祓事、御除服以後之上者勿論歟、道言之所存誠無相
違歟、
一嘉應建春門院御祓、御除服之有無不見歟、定有御除服被行歟然者又勿論也、

一師遠家榮等之說、於重服人者可憚之條勿論也、姙者可憚候條、尤以不審也、近例一切不憚之、

一鹿食人禁否事、所見只今不分明、但於此邊七箇日以後不可有憚之由定之歟、然者彼祓日數以後無憚歟、

穢中禁否事

天永、保安、安貞例、粗先々見及之、所詮於穢中、大中臣祓（六月祓同前）或行之、或憚之、然者其例不同歟、

以上

一輕服人、除服以後不憚之條勿論也、雖爲暇日數中、令除服者何可有子細哉、

一重服人可憚之條勿論也、但同宿人更不可有憚歟、

喪家中雖不憚、穢事可有其沙汰哉、且葬籠中行之條、先規不審也、又出他所用菅貫之條、猶以不庶幾歟、但先例不分明、

以上

日本紀云、天照大神御孫皇孫命ヲ葦原ノ中津國ノ欲爲王、彼國ニ螢火光神及蠅聲邪鬼多シト云リ、縱如夏蚊、亂惡神ノ有也、是ヲハラヘナゴムトテ、六月祓ハスルナリ、

萬葉集和儺祓ト書テハ、ナゴシノハラヘト讀メリ、ナゴシト云ハ、タトヘバナゴムト云心歟、鬼ヲナゴムル心歟、

三年六月卅日、今日六月祓予輕服中也、然而暇日數過了、仍如例修了、今日六月祓事、常說重輕服無沙汰事歟、而去比見或記之處、

承德二年六月卅日、大閤幷關白（已上去四月十日、宇治僧正覺圓入滅、）六月七日關白除服、同廿五日大閤除服、今日有六月祓事、爲房問道言、道言申不憚之由、輕服人除後日數內不憚云々、

嘉應元年六月廿九日、建春門院六月祓、去四月知信朝臣子知任死去、先之時忠卿問師光、不憚之由申之云々、

重喪又忌之條常說也、而大外記師遠記說、六月祓重服幷妊者雖撫物不菅貫陰陽頭家榮說又同云云、就其實夏元來雖重服不著服之上、期月誰今日、然者今夜修祓之條尤大切歟、就是等所見、召大麻祓之、不召輪也、以今案如此所爲也、此事後日問泰尙入道、更無子細、且近衞家二代六月有事皆如此沙汰歟之旨申之、四年六月卅日、今日六月祓、予法體已後無沙汰、大納言方如形修之歟、予分輪已下、與奪女房幷小女了、

〔後深心院關白記〕應安五年六月廿九日乙巳、六月祓如例、陪膳以下皆布衣上結也、依神木（○春日在洛）也、六年六月卅日庚子、午刻以後時々雨降、六月祓如去年、於對屋北妻有此事、而時雨降之間、下家司出納等乍取松明差笠、

〔親長卿記〕明應三年六月廿九日、六月祓如常越輪了、出家之後可掛酌歟、但非黑衣之間不見先規之間先如此、

〔宣胤卿記〕文龜四年六月廿九日戊子、六月祓、菅貫輪亂後略之、右京職下保下司瓜五十沙汰之、（月日不定、以前六、今日右京職人夫一人來、今取茅草沙汰輪進、陰陽師所令祓、）

〔言繼卿記〕天文十三年六月三十日、輪祓如例、年一獻之時、日光院理性房等相伴了、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年六月廿九日、今日無六月祓、依觸穢也、天下諒闇之時不被行之由、及御沙汰云云、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年（○安貞元年）六月三十日丁丑、於御所寢殿南面、被行六月祓、晴賢奉仕之、石山侍從祕物役勤之、周防前司親實爲奉行云云、

〔吾妻鏡三十〕嘉禎元年六月卅日辛卯、來月依爲閏月、今夜可被行六月祓哉否事、爲藤內判官定員奉行、被尋問有穢幷陰陽道輩、河內入道等申云、如義解文者、可行于閏月事分明也、和歌云、ノチノミソ

カヲミソカトハセヨ、然者其上治承四年、建久八年、建保四年、皆被行于閏月云云、諸人一同之、資俊申云、兩月行之例存之云云、然而就多分義、不被行云云、

〔後撰和歌集四夏〕みな月ふたつゐりけるとし　よみ人しらず

たなばたは天のかはらをなゝかへりのちのみそかをみそぎに〇本作一はせよ

〔吾妻鏡三十八〕寶治元年六月卅日辛亥、今日御所中、不被行六月祓、依去五日戰觸穢也、

〔年中恒例記〕六月晦日

御湯參、御湯にみたらしの川藻入也、晦日夜傳奏祇候候て御輪に入被申、麻の葉を左の御手にもたれ候て、御むしろの上にて三度輪に入被申候也、御輪の祓在春朝臣、御輪調進之役人齋藤將監、仍庭上に祇候候て、御八足竝御輪取わつかひ申也、於內儀御祝參也、御劔役人祇候御左、

〔殿中申次記〕六月晦日

一御輪如例年

〔成氏年中行事六月〕晦日夜、御撫物被遣、御使如例、次名越ノ御祓、同茅輪、陰陽頭調進、輪ヲバ御一家中被越申也、閏月アル年ハ閏月ニ輪ヲバ可有御越、

〔殿居嚢年中行事六月晦日　名越、土御門二位殿より御祓大麻被差上之、閏月有之節は閏月晦日也、土御門家使者、御暇拜領物有之、

〔柳營年中行事六月〕晦日　如例年名越之御祓

土御門使何之某、銀五枚被下之、當番之御奏者番申渡候樣、御用番御差圖有之申渡、御納戸表ニ而頂戴之、

〔駿府政事錄〕慶長十九年六月晦日、如例土御門獻麻輪及黃昏名越御祓アリ、

〔大猷院殿御實紀十七〕寛永八年六月廿九日、名越の祓例のごとし、

〔大猷院殿御實紀二十〕寛永九年六月晦日、土御門左衞門佐泰重より夏祓を奉る、

〔嚴有院殿御實紀三〕承應元年六月廿九日、名越の祓行はる、黒木書院上段に御著座ありて、酒井雅樂頭忠清は大輪をとり、御側內藤出雲守忠由小輪をとり、御左の方へめぐり、小姓松平美濃守信興とともに、插花を御髮にはさみ奉る、この時四方臺に洗米入て御前に置、立ながら輪の中より洗米をとらせ給ひ、上下左右へなき給ひて奥に入らせたまふ、

〔寛文錄〕二年六月廿九日、土御門福壽丸ヨリ、名越之御祓進上之、巳上刻出御御頂戴、三年六月廿九日、午刻黒書院出御、時酒井雅樂頭長袴ニ而名越御祓披露、土御門ヨリ被獻之、十二年閏六月晦日、土御門家使者番ニ而名越御祓進上之、未刻御黒書院出御御頂戴之、

〔常憲院殿御實紀三〕天和元年六月晦日、土御門兵部少輔泰福より夏祓を獻る、

〔惇信院殿御實紀三〕延享三年六月三十日、土御門三位泰連卿より使して、夏越の祓を獻ず、

〔濱松中納言物語一上〕六月つごもりに、だいりよりみなみに、おほきなる川ながれたり、その河のなをちやうかといふ、三のみこ、中納言ぐし給ひて、御はらへし、すゝみ給、おもしろきことかぎりなし、〇中略中納言のかゝるにもなぎれず、おぼさるれば、いとすゞしき水のほとりに、つらづゑをつきて、つく〳〵となながめいりたるに、かたちのにるものなくきよげなるを、人々めでたしとみるに、みこもめをつけて、御覽じてゐ給へる所にたちより給ひて、

こひしさをみそげや神のうけねばやかでか心え給へる、わが心のうちぞとおそろしきまで心はづかしければ、

みそぎ河かはせの神にことふれてなだこそしらねこひの心を

〔兵範記〕仁平三年六月廿九日丁亥、女院無御祓之御遁世以後例也、

〔古今六帖六帖夏〕なごしのはらへ

貫之

此川にはらへてながすことのはは波の花にぞたぐふべらなる

〔後撰和歌集夏〕六月祓しに川原にまかり出て月のあかきを見て　よみ人しらず

加茂川のみなそこすみて照月をゆきて見んとや夏ばらへする

〔信明集〕六月

水上にはらへてながすあさの葉をおりなかくしそせゞの白波

〔源順集〕六月祓

ねぎごとをきかずあらぶる神だにもけふはなごしと人はゝらなん　藤原長能

〔拾遺和歌集夏〕題ゝらず

さばへなすあらぶる神もおしなべてけふはなごしのはらへなりけり　藤原行輔朝臣

〔新拾遺和歌集夏〕百首歌奉りし時夏祓

よるせなき身をこそかこて思ことなほ大ぬさに夏祓して　新院御製

〔續後拾遺和歌集夏〕六月祓をよませ給うける

みそぎ河ながれてはやく過る日のけふみなつきは夜も更にけり　前大僧正杲守

〔新續古今和歌集夏〕夏祓をよめる

里人は今夜こゆてふみわ川の清きながれにみそぎすらしも

〔法性寺關白御集〕六月祓

世上人爲流例態、林鐘晦日禊除衆、詠無他詠千年頽期有定期、六月風、苦地燎幽迎夜處、石湍水冷欲秋中、未知何物號管抜、結草如輪令首蒙、〇又見本朝無題詩

〔本朝無題詩〕六月祓

三伏夏關景已頽、祓隨習俗久傳哉、禊除臨水蔭煙樹、祭禮占庭居綠苔、仙算千年祈不盡、妖氣萬里拂無來、涼風颯々夜深至、不耐自然感緒催、

炎蒸夏節欲闌程、祓却妖邪動感情、祭禮定期煩暑盡、禊除臨水晩涼生、古風猶在林蘿影、前事不忘石瀨聲、何只令辰奉上巳、今宵勝蹟久相呈、　同人

臨時大祓

臨時大祓ハ、觸穢、疾病、災變等、スベテ祓フベキ事アル時之ヲ行フ、京中ニテハ建禮門前、又ハ朱雀門前、及ビ八省東廊等ニ於テ行ハル、

諸國大祓ハ、祓フベキ事アル時、使ヲ天下諸國ニ遣ハシ、國造郡司等ヨリ各、祓物ヲ出サシメテ解除セシムルナリ、此他大嘗祭ノ前後、齋宮齋院ノ卜定、群行等ノ時、臨時大祓アリ、各、其篇ニ出セリ、

京中臨時大祓

〔延喜式三十大藏〕凡臨時大祓所、立五丈幄二宇、七丈幄一宇、五丈一宇設參議已上一人座、一宇設辨官座、七丈一宇諸司立祓、

〔延喜式三十八掃部〕凡臨時大祓日設公卿幷辨外記史史生官掌召使及祝詞等座、

〔玉勝間十二〕大祓臨時のは建禮門にて有といふ事

師の祝詞考大祓の解に、臨時の大祓は、建禮門にてゝあること、三代實錄に見えたりといはれたるを、おのれ後釋に、かの三代實錄なるは、內裏の穢なるによりてこそ、建禮門にては行れたるなれ、おしなべては、臨時のも朱雀門にて有しも也といへりしも誤也、後に史どもを見るに、內裏の穢にはあらざるをりも、建禮門にて行はれて、おほかた臨時のは、いつもかの門前にて行ばるゝ例なること、三代實錄四十一の卷に見えたり、

〔江家次第十二神事〕八省東廊大祓（廊東北角北三間東八間引大幔）廊東面北第三間鋪上卿座（中帖緣端）座前置筥、幷鋪膝突、第四間鋪辨座、（黃端半帖）有下臈第六七間鋪外記

史座（貞觀端長鑑無下數）上卿座北引切斑幔、史座南引切大幔、其中爲彈正等座、（二省北廊東第二三間引大幔爲神祇官人座、）去御東三許丈（當修明門裏）鋪祝師座、其前置祓物等、上卿參著（昇自昭訓門階東面）依雨儀無出立（辨以下若先參者、上卿參問訓門內、）辨以下著座、（辨東面）祝師置上官座祓物、祝師著座、臨祝詞及八張解繩了、祝了祝師奉大麻（先上、次辨、乍令持祝師、）一撫一吻返給了、退出無出立、

〔祝詞講義〕中古の書に、八省院東廊大祓と云事あり、此は建禮門大祓雨儀の時に東廊を用られたるを、中古內裏燒亡て、建禮門の未建る時なゞに在し事なり、又此八省東廊大祓も、八省院燒亡の後は、又建禮門にて行はれたるなり、

〔續日本紀二文武〕大寶二年三月己卯、鎭大安殿大祓、

〔續日本紀十聖武〕天平元年二月己卯、遣左大辨正四位上石川朝臣石足等、就長屋王弟從四位上鈴鹿王宅、宣勅曰、長屋王昆弟姉妹子孫及妾等合緣坐者、不問男女咸皆赦除、是日百官大祓、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年八月辛卯、大祓、以伊勢美濃等國風雨之災也、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜七年五月乙卯、大祓、以災變屢見也、

〔日本紀略淳和〕天長七年九月乙亥、於建禮門前大祓、依掖庭犬死也、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年五月丙申、會諸司於朱雀門大祓、爲除後太上天皇〇淳和之服也、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年七月辛丑、修嵯峨太上天皇周忌齋會、〇略中公卿率百官祓于朱雀門、始就吉禮也、

〔文德實錄〕〔一〕嘉祥三年四月癸丑、帝出除百官吉服、大祓於朱雀門前、

〔文德實錄〕〔二〕天安二年四月辛丑、於冷泉院南路大祓、爲遣諸名神社奉幣帛帛之使、五月戊子、無雲而雷、遲明有星〇皇原作日據一本改入月魄中、己丑、是日於南大庭大祓、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月十日丁卯、是日始奉天下諸社神寶、仍大祓於建禮門前、二月卅日丙辰、大祓於建禮門前、以明日可發奉幣八幡大菩薩使也、四月廿一日丙午、大祓於建禮門前、以觸穢之人入於御在所也、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年六月十日丁未、大祓於建禮門前、以宮內省有馬死穢、十一月廿日甲申、先是少主鈴從八位上美和眞人清江言、鼠嚙內印盤褥至、是神祇官卜云、觸穢之人供神事仍成祟由、是大祓於建禮門前、以攘妖祥焉、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年正月廿七日庚寅、於御在所及建禮門朱雀門大祓事、以攘災疫也、二月二日乙未、大祓於朱雀門前、以觸死穢人入禁中也、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年閏三月廿二日丁卯、會百官大祓於會昌門前、以應天門火也、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年九月廿九日辛未、晦日大祓於朱雀門前、以配流罪人也、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年五月廿九日丁卯晦、六月十一日可修月次神今食之祭、而宮城京邑、病苦死喪者衆、仍大祓於朱雀門前、

〔三代實錄十五清和〕貞觀十年二月十三日丁丑、始造應天門、大祓於會昌門前、乃下斧斤焉、

〔三代實錄四十陽成〕〔一〕元慶六年四月廿二日甲午、於朱雀門前修大祓、以去八日大膳職人死、十日大藏省人死、平野、松尾、賀茂等祭停止故也、臨時大祓於建禮門前行之、因穢不可用大藏省幄、仍用朱雀門也、

〔扶桑略記二十三裏書〕寬平十年〇昌泰元年六月十四日壬子、於建禮門有大祓、依京中諸國疫癘盛幷仁王會事也、

〔貞信公記〕延喜十二年六月十一日、依內裏穢停止神事大祓、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十五年十月十六日癸卯、巳一點、於紫宸殿大庭建禮門朱雀門等三所有大祓事、爲除鮑瘡、又依仁壽三年貞觀五年例也、

〔貞信公記〕承平元年十二月十七日、除法皇〇宇多心喪、大祓行、

天慶元年六月十一日、延二祭（神今食）一月次由大祓行之、依二觸穢一也、

天曆元年八月十五日丙申、南殿前建禮門朱雀門等前行二大祓一、

〔日本紀略（四村上）〕天德三年六月十一日乙酉、月次祭神今食依二穢延引一、仍於二建禮門一有二大祓一、件穢去月奉幣伊勢使歸京之間、於二途中一觸穢之故也、四年六月一日己巳、於二建禮門一大祓、依二宮中頓死之穢一也、十一日己卯、停月次祭神今食、以二內裏有一死穢一也、於二建禮門一大祓、十一月廿八日甲子、內裏木作始也、先於二建禮門一大祓、

〔天延二年記〕天延二年八月廿八日、鉋瘡大祓云々、

〔小右記〕天元五年四月十五日丙子、傳聞內裏有二犬死穢一云々、廿三日甲申、今日有二大祓事一、賀茂祭間、內裏有レ穢之時、前例被レ行二大祓一云々、上達部不二參入一、仍以二右中辨一爲二上代一被レ行云々、

〔日本紀略（七圓融）〕永觀元年四月九日甲午、八省院東廊有二大祓一、依レ可レ有二造宮一也、

〔日本紀略十一條〕長德二年五月廿日己未、有二大祓事一、依二左遷一也、

○按ズルニ、左遷トハ、蓋シ內大臣藤原伊周ノ、太宰權帥ニ貶セラレタルヲ指セルナリ、

〔日本紀略一條〕長保元年十一月三日壬午、大祓、依二內裏作事一也、於二八省院東廊一行之、

〔左經記〕寬仁三年九月四日丁巳、右大辨被レ著二建禮門一大祓所、是明日依レ被レ立二遷宮神寶使一也、

萬壽二年八月卅日己卯、風聞大藏卿（善）左少辨爲於二八省東廊一行二大祓一、是去七月大炊寮廳屋失火、仍所レ被レ行也（須二早行一之、而世間相次有二大事一、仍于レ今延引也、）九月十一日庚寅、依二伊勢奉幣延引（尚侍御穢近來二大內一也）左大辨（宰）左少辨史外記已下諸司等、於二建禮門前一行二大祓一云々、

〔日本紀略十四後一條〕長元元年二月廿九日甲午、於二建禮門一大祓、依レ入二道禪（藤原道長）下一〇喪御心喪了也、

〔左經記〕長元元年二月廿九日甲午、今日申刻、於二清涼殿東庭一、令レ解二御心喪服一給由有二御禊一、御禊了、內藏官人宮主相共令レ持二純色御衣一、行二河原一、令レ棄云々、又於二建禮門前一被レ行二大祓一云々、（上大藏卿、辨右中辨、同依レ令レ解二御心喪一服給也、）

〔日本紀略十四後一條〕長元元年十二月十日庚午、御卜、依二內裏穢一、神祇官人候二左衛門陣一、於二八省院東廊一大祓、三年正月十七日辛未、今日豐樂院殿壇上美女一人被レ殺害、二月廿四日丁未、大祓、依二豐樂院女死穢一也、（後日被レ行之例、外記內々勘覽二關白一也、）者、予仰了、伴大祓、過內穢卽可レ行之由、先日有二仰一、仍仰二右府一了、而其事未レ被レ仰下一云云、取レ案內於二右府一、返報云、慥不レ承、今依二此告仰一、左中辨經長者、小時外記賴資令レ申云、今日可レ有二例幣延引之大祓一、而宰相不レ候、相催之間日已欲レ暮、以辨被レ行之例略存之、以二此由一可レ申二關白一者、予傳申、依レ請者、卽仰了、左中辨經長著二行云々、於二八省一行之一

〔本朝世紀〕康治二年五月廿八日甲申、於二三所一有二大祓事一、依二天下疱瘡事一也、權中納言藤季成卿定二日時一、今日甲申、時戌二內裏一、（權中納言藤季成卿、左中辨藤資信朝臣、大外記清原景親、）建禮門、（參議藤清隆卿、權右中辨藤隆季、中原賴季、朱雀門、清隆卿、少外記惟宗忠棄、）

〔兵範記〕仁安二年十月六日庚子、參二殿下一、今日大祓幷內侍所御祈事等申子細也、又申二請大祓日時一、〇中略次參內（經二大炊北行一）覲候二殿上一、晩頭中納言實房參議成賴卿參著仗座、下官奉レ仰仰二納言一云、依二五條殿火事一、可レ令レ行二大祓一、申日時、卽被レ仰下官一、下官著床子座、召二史廣盛一仰之、廣盛仰二陰陽寮一召二勘文一持來、下官披見了獻二上卿一、上卿召二外記一、筥入之、次召二下官一、被二內覽奏聞一、（內覽依二申請一也、仍奏聞訖、）了、奏了返給、上卿仰云、依二勘文一行之、卽被二下一下宮一、下宮下二史一、此間上卿返出、次藤宰相參二日華門一、武德修明門等、被レ著二八省東廊一、

〔千恒宿禰記〕天文五年正月廿九日、諒闇終大祓也云云、至二戌時一、禁中有二御禊儀一、

〔基量卿記〕延寶七年六月三日、大祓之所、可レ爲二南門外一事、先例御靈或八賀茂川、或二條邊等一而被レ行